
変わる世界

オピオイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

変わる世界

【Nコード】

N5308K

【作者名】

オピオイド

【あらすじ】

これは同時に連載している『いつもの日々に戻るまで』『いつもの日々に至るまで』『カモメは遙か水平線を見る』と同じ世界で同じ時間軸で進行する、もう一つの物語です。

『いつもの日々に戻るまで』『いつもの日々に至るまで』で書かれなかった裏の話や世界観の話や、補完するための短編を掲載していきます！！

不定期更新中

自覚する世界

パンツ!!

ガラン、ガラン、ガラン。

「ん？」

大きな音を感じた彼女は後ろで結んだ髪を感じながら、コップを磨いていた手を止めた。

音の出たところを見るとドアを激しく閉めたのだろう、揺れるカウベルを背に一人の少年が肩で息をしながら入り口でへたり込んでいた。

学生服の背中と男にしては艶のある特徴的な栗毛、それで喫茶店『トラスト』の店長『雉元 灯』はその少年が誰かすぐに思い立った。

「…誠一せいちか。そんなに息を切らして、どうしたんだい？」

「はっはっ、あつ灯さん。水ください…。」

溜息をひとつ吐くと灯はシンクの横に常備している氷を入れた水差しから注ぎ渡す。

彼はそれをとるやいなや一気に喉に流し込んだ。

ゴクリゴクリと鳴る喉を見ながら灯はまた美味しそうに飲むなど思いつつ、息を吐く。

「ぶはー、死ぬかと思った。」

「それでどうしたんだい？いつも見かける拓海君は一緒じゃないのかな？」

アハハと乾いた笑いをあげながら、誠一と呼ばれた少年はカウンタ

ーに着き否定するように手を振った。

「いつも一緒じゃないんで。」

「そうなのかい？ 君たちは男同士の関係って言う噂が流れているが？」

「デマです！！ 誰ですかそんなデマを流したのは！？」

「ん？ 桂の奴だが？」

灯が何でもない様に言うと誠は机に突っ伏した。

「灯さんそれ、かなり広まってるよ…ははは。」

「まあ、そんな事よりどうした？ 顔を真っ青にして走り込んで来て、何があっただんだい？」

「そんな事って…ええつと、今さっきの事なんですが…。」

さっきまでの勢いを無くしながら彼は事情を話していく。

聞いた内容を纏めると話している人間の常識を疑うような、おかしい話だった。

「あー、まとめると。いつもの学校の帰り桜中町の交差点の真ん中で突然立ち止まった見慣れない制服を着た女の子が居た。そこに迫り来る車。君の持ち前の正義感で助けようとしたのだが、その彼女を庇って君は車に轢かれてしまったと？」

現状を簡単に纏めた灯に、その通りとコクコクと誠一が頷く。

だが、内容は彼にとっては正解だろうが明らかにおかしい事がある。

「で？ 車に轢かれた君は何で無事なんだい？」

そう、身代わりとなって轢かれているのであればただじゃすまない

のだ。

しかし、目の前の彼は傷もなくピンピンとしているどころじゃなく、学生服にはほつれもなく汚れぐらいしかない。

「そうなんですよ、俺それを聞きたくて…どうなっちゃったんですかね俺の身体。」

「君なあ…。」

灯は一つ溜息を吐くと可哀相な目で誠一を見る。

「常識的に考えてみる、そんな訳はないだろう?。」

「ですよー」

「まあ、普通に考えると助けに入った君はギリギリ避け切れなくて車と接触、アスファルトに叩き付けられるも奇跡的に怪我もなかったって事だろう?。」

灯にやんわりと説かれ誠一は心なしに落ち着いた表情を浮かべる。

「まあ、今日は病院に行くかも帰るんだな。喫茶店としては何も注文もなしに冷やだけで帰るのは問題だね。」

「ははっすみません。…なんか、今日は精神的にきついんで…又来了。」

そう言って誠一は、少しスッキリした声で席を立ち、一礼をして帰った。

「あーら。いいの?多分あの子本当に轢かれてるわよ?。」

誠一が帰った直後、静かな店内に声が響く。

カウンターの隅でそれまで寝そべっていた客が首だけを動かして灯

に話しかけていた。

無造作に纏めた黒く長い髪と黒縁メガネ、少しヨレヨレの服を着た何処と無くだらしなさを感じさせる女である。

灯が目だけを通して見ると言葉の軽さとは裏腹にレンズ越しの目は真剣だった。

「こればかりは、仕方があるまい？知らない事がいい時だってある。」

「そうかしら？知らせて上げた方が良かったと思うけど？」

「まどか円、お前『視た』な？」

円と呼ばれた女性の返答に灯の視線は厳しくなる。

「やーね。視ようと思ってて視たんじゃないって。視たのは彼の事故現場よ。」

「事故現場だと？」

「そつ。凄かったわよー女の子を突き飛ばして助ける誠ちゃん、でも彼は突き飛ばす力で精一杯。避けきれずに真正面にドーン。でも、吹き飛ばされたのは車。誠ちゃんは一傷で生還。誰の目から見ても明らかにおかしい。どう思います？所長さん？」

そこまで聞くと灯は苦虫を噛み潰したような表情を作る。

「これも私達の…。」

「そうでもないんじゃない？ある意味あなたが彼を救ったようなものよ？まあ偶然だけど、彼が『第一段階』突破したおかげだけだね…。」

「皮肉か。しかしな…。」

「そうね、少し調査が必要かも。彼が元からなのかそれとも…。」

店内から人の声が消える。

残るのは少し寂しげな音楽のみ。

ゆっくりとした音楽と共に日はゆっくりと傾いて、夜の闇が帳を落としていく。

「罪か。」

呟いた声が小さく消えた。

拳士の世界

日本の南西部に高見原と言う都市がある。

その都市はあらゆる方面から注目を集める都市だった。

十数年前までは森の中にある隠し里のような小さな村だった。

しかし、現在は電車や地下鉄まで完備されている人口が100万人を超えた政令指定都市に認定されているのだ。

十数年でここまでの大都市に成長するのは噂にならないはずは無い。しかも、それに拍車をかけるモノがこの都市にはあった。

この都市の最大の特徴をその名前は表していた、『森林都市』の異名である。

開発工事の時点で森の開拓を最小限にして都市開発をした、森と同居する都市それがこの高見原である。

高見原市 桜区石上町 『石上神社』公園

午後21時00分

広大な土地に広がる高見原市の中央にある巨大な中洲。
その中洲の沿岸部は大きな岩山になっていた。

岩山の上には神社があり、神社の境内と公園が合わさった様な広場で彼『水上^{みなかみ}誠一^{せいいち}』は一心不乱に身体を動かしていた。

「フツ！フツ！フツ！」

切る様な吐息と共に拳が闇を貫き、踏み込む足が大地を抉っていた。
演舞を髣髴させる手付きと杭打ち機を連想させるような足運びが特徴だった。

誠一は妙なモヤモヤとした思いを振り切るように拳を振るう。

「フツ！フツ！フツ！」

拳の運びは簡単だった。

しかし簡単な動きだが身体にかかる負担は果てしなく大きかった。その証拠に止め処も無く流れる汗が誠一の頬を伝う。

腕を回転させるように打ち下ろし、逆の手で打ち、そしてもう一度最初に打った手を同じ方の足と共に打ち出す。

その逆を行い何度も反復する、それだけ。

「フツ！フツ！フツ！」

誠一は考える、今日起こった事を。

いつも友達と集まる喫茶店のマスターの灯には、やんわりと説き伏せられていたが納得はしていない。

実の所、彼は車がぶつかる瞬間から喫茶店に駆け込むまでの事をしつかりと覚えていた。

桜中町の交差点に彼女は居た。

この辺では見たことの無い濃紺の学生服、ショートカット髪から見える項が綺麗だったので少し見蕩れていた。

その所為だった彼女の異変に気づいたのは、信号が変わったのにも拘らず彼女は動かずに居た。

誠一は気付いた、理由は解らないが彼女は動けないで居ると。

だから誠一は、走って彼女をやや突き飛ばすように押し、…そこからは喫茶店で話した通りだった。

納得していないのは自分の身体の事もだが、それ以上に納得できてないのは突き飛ばしたときに見た彼女の表情。

「…何で驚いてたんだろう？」

彼女は驚いていた、少し釣り目がちな彼女の目が強張るように開かれたのがとても印象的で意外だった。

「誰が驚いてたの？」

「おうわっ。」

突然背中から声がかかり誠一は手を止めて振り返る。

「思惟さん。来てたんですか？」

「来てたわよー、今日も頑張ってるわね。感心感心。」

声の先、神社本殿の縁の下。

そこには杯を片手に出来上がった酔っ払い…もとい、笑顔を振りまく小柄な女性が居た。

彼女の名前は『時枝ときえだ 思惟しゐ』。

この神社のある岩山の麓に鍼灸院を構える女性院長であり、誠一に『名も無き拳術』を教える師匠でもある。

「頑張つて感心だけど、どうしたの？一つの技ばかりで先に進まないで。悩んでる？」

「はあ…。」

酔っ払っているようだが、さすがに師匠である分その目は鋭かった。拳一つの打ち方でも何かを感じたらしい。

むしろ聞かれた誠一は誠一の方で少し困っていた。

彼自身としては今日見た事、感じた事を話したかった。

相談したい事は山々だが、つい数時間前に灯に『それは気が動転してみた妄想』と判断された矢先、それは憚れた。

むしろ少し恥ずかしかった。

「…まあ、良いわ話したかったら教えてね。」

「すみません。」

「そんな時にいくら練習しても身に付かないわ…今日はもう帰りなさい。」

「すみません、と謝罪の言葉を重ね誠一は消沈した表情で一礼し踵を返す。」

「先生、一つ良いですか？」

「なあに？」

「先生の技で車に轢かれて大丈夫な技つてありますか？」

誠一が振り向くと思惟は杯を傾けていた。

酒を飲みきると、思惟はその年とは裏腹で可愛らしい顔に似合わない不敵な笑みで返した。

「一般常識で考えて見なさい。」

「ですよー。」

さも当然とばかりに言い放たれた言葉に誠一は苦笑いしながら去っていく。

外灯が灯った仄暗い境内を眺めながら、思惟は再び杯に酒を注ぎ、あおった。

「世界全体の一般常識だけどね。あなたの知らない事実ではあるわねえ、誠一君。」

あおった後の思惟の顔は、少し皮肉げな笑顔だった。

剣と杖

高見原の噂は大抵、若者達の噂話がインターネットの中だけに限定される。

曰く、何かしらの政治的判断で発展した『謀略都市』

曰く、何かしらのオカルト現象が多発する『オカルト都市』

曰く、森林都市ゆえに犯罪率が異常に高い高い『犯罪都市』

などなど、噂に事欠かない都市だ。

真実と嘘が織り交ざった様な噂が数多く飛び交っているのが今現在の現状。

しかし、問題はこの話は情報が自由なインターネット上でしか成り立たないと言う事だ。

だからこそ…

高見原市桜区楼閣町 路地裏

午後22時

緑に囲まれた街、高見原。

それ故に、この街は闇がほかの都市に比べてとても深い。

蔭や剪定されていながらも無秩序に生い茂る木々が街のあらゆる場所を覆い隠しているのが主な原因だ。

そんな要因があるために、この地は犯罪率が他の都市と比べ群を抜

いて高い。

路地裏に入ればそれは顕著に現れる。

木々の生い茂るデットスペースにたむろす少年達。

暗がりから何かを勧めてくる、やくざ風の男達。

木々の匂い立ち込める中に混じる、タバコと香水の香りがいつそう
暗い雰囲気をもし出す。

こんなのが当たり前の日常、これが高見原の闇だ。

その薄暗い闇の中一人の少女が悠然と歩いている。

デニムのパンツ、茶色のカットソーと？ネックのニット、黒い無地の帽子を被った少女。

私服で解らないが、帽子から覗く釣り目がちな眼は夕方『水上 誠一』が助けた少女だった。

明らかな危険を理解しているのだろうか？と聞かれたらしていないのではと疑われる程に悠然と歩いていた。

しかし、実際のところ彼女はそんな些細な事は気にしていない。

彼女の頭には夕方の少年のことで一杯だった。

『あいつは何だったのだろうか？ 私を襲った奴とは違うみたいだし…でもあいつも能力者だ。励起法なんて儀式使えるのは能力者しか居ないし…だったら私の能力が阻害されたのも…。』

この世界には能力者という者が存在する。

常識を凌駕した技を使う人を超えたモノ。

彼女もその一人だ。

名前は折紙おりがみ 彩高見原あやから少し離れた街から来た少女である。

彼女はとある目的の為に、ある噂を聞いてやってきたのだ。

しかし、彼女の目的は調べようとした矢先に何者かに邪魔された。

そう、夕方に起きた交差点の一件だ。

彼女は病気や怪我どころか意図して交差点で留まって居たわけでは

ない、何者かの能力もしくは『儀式』と呼ばれる業で金縛りにあっていたのだった。

相手は自分が能力者と知ってか知らずか仕掛けてきた。

『いや、違う。あれは無差別に仕掛けたわけじゃない。私達、能力者に対しての罠だ。』

自身の経験からか、そのような痕跡を見つけたかは解らないが、彼女には妙な確信があった。

『車が私目掛けて突っ込んで来た…怪我をしたらそのまま、避けられたら敵対の能力者ってとこかな？だとしたら、私を助けたあいつが危ないかも…。』

「なあ、お姉さん。」

考えながら歩く少女に声をかける少年の声。

ちらと見るとたむろしていた少年達が、下卑た笑いを顔に貼り付けて近づいてきていた。

その中の一人、茶髪にピアスをした少年が声をかけてきていた。

「ちつと俺らとあそばねえ？」

なれなれしく肩に手をかける少年。

普通の少女ならば、恐れるか嫌悪感をあらわに嫌がるだろう。

しかし彼らの目の前の少女はそんな生易しいものではなかった。

フッ

何か抜けるような音と共に少女の姿がかき消え、肩に手をかけた少

年が宙を舞う。

「えっ!？」

間拔けな声と共に少年が大地に沈む。

それを見ていた少年達は驚き、呆然としていた。
数瞬、彼らは止まっていた。

「情けない。」

空白を破るように少女の声が路地裏に響く。

「これならば『偽神』と言うのも納得がいくわね。『神域』が弱い上に感知も荒い、出来るのは励起法ぐらいか。まさに大量生産品いや粗悪品に近いわね。」

瞬間、『粗悪品』の言葉で少年達は一気に激高した。
おそらくは彼らにとって、逆鱗に触れるような事だったのだろう。
いつもの彼らであればすぐにでも殴りかかっていた。
しかし彼らは襲い掛かることも飛び掛る事もない。

ニイツ

そんな擬音語が当て嵌まる様に彩の笑顔に押されていた。
笑顔と猛禽類を彷彿させる眼差しを恐れた少年達は思わず後ずさる。
しかし、少年達はすぐに違和感を覚える。
彼女の目は数瞬前と違い自分達を見ていない。
それどころか、自分達の後ろを見ていた。
見た目と反した威圧感を感じさせる少女の視線の先を、少年達は申し合わせた様に振り返った。

そして彼等は振り返った事を後悔した。

「うっ嘘だろ。」

「桜坂の剣士か!？」

「こんな所まできやがった!」

そこに居たのは腰に黒い木刀、白のスラックスとワイシャツに漆黒のレインコートを羽織った人物がいた。

身長は160位の細身、目深に被ったフードから流れる黒髪とささやかに主張する胸の膨らみが女性だと伝えている。

しかし、そんな情報は少年達にとって、どうでも良かった。

彼女の黒の装いと木刀が問題だった。

高見原にはいくつもの噂がある。

自分の子供を探し夜な夜な徘徊する怪人の噂。

深夜マンホールから顔をもたげる巨大蛇の噂。

人を喰う化け物の噂、そんな都市伝説が高見原にはいくつもある。

その中でもライトで有名な物が『桜坂の剣士』の噂だ。

噂の内容はありきたりな勧善懲悪な話。

簡潔に説明すれば、正義を行う謎の怪人の話。

夜な夜な現れては、悪事を働く悪人達を再起不能にしていく物騒な噂である。

それは普通に生活している人間にとっては有り難いことであるので、噂の中でも『そんな人がいたらいいよねー』で済まされる話だ。

普通の人間であれば。

裏路地にたむろす健全と言い難い少年達にとっては違った。

実際に彼等は見えて来ているのだ『再起不能』あつた人間に。それ故の恐怖。

しかし、そんな少年達の横を擦り抜け桜坂の剣士に相對する人間が

いた。

「見付けたわよ。『霧島の剣士』。」

不敵な笑みを浮かべた彩である。

彼女は悠然と少年達と剣士の間に立ち塞がると背中に背負っていた細長い袋を手にとる。

「黒の『霧衣』を着てるって事は実戦に出てる実働部隊の人間。私
はあんたに聞きたい事があつて此処まで来た・・・白の『霧衣』を
来た長身の男を知らない？」

そこからは劇的だった。

何の反応も見せなかった桜坂の剣士から気迫が漏れ出し、腰の木刀
を抜き放ち下段に構えたのだ。

「問答無用？いや話すつもりはない訳ね・・・いいわ、だんまりのその
口、無理矢理でも開かせる。」

そついいながら彩は袋から鉄で拵えた杖を取り出し右手で構える。

「守部神道流…参る。」

識る者

この世界には能力者と言う異能力を使う者がいる。

古い文献や神話、御伽噺おとぎばなしなどでしか出てこないそんな存在。

海外で言えば水を操り海を割るや、日本国内で言えば手を氷柱や剣に変えたなどと言う嘘か本当かわからない逸話などばかりだ。

だが、それは表側に出ていないだけでその存在は確固としてあるのが世界の闇の部分での現状だ。

例えば正史として表に出ている有名どころでいえば、ヨーロッパの魔女狩りや日本で言えば比叡山の焼き討ちなどもその一つだと闇の世界の『学府』では語り継がれている。

表向きでは政治的な方法であったと後年で伝えられているので、知る者は少ない。

しかし、その事件の原因は普通の人間であれば容易に想像が付くだろう。

時の権力者達は人智を凌駕した異能者達を恐れたのだ。

考えても見て欲しい、たった一人で軍隊を壊滅できる人間やどんなに守りを固めていても誰にも気付かれず突破出来る存在がいればどうなるかだ。

そのような事もあって、彼らは人智を凌駕した技を使い奇跡を起こしながらも人類から隠れ生きている。

例えば人里を離れ、人に紛れ、権力の下に使われたり、コミュニケーションを作り密やかに暮らしたり。

…彼らはその様にして生きていた。

だが、彼ら能力者に転機が起こる。

それは世界の存亡をかけるほどの転機だった。

彩の一種の名乗り上げの様なものに、黒のレインコートの人物は困ったように呻き呟いた。

「霧島神道流、推して参る。」

唐突に始まる戦闘。

しかし周囲の人間（少年達）には一瞬、何が起ったかわからなかった。

中でも一番、その戦いから遠く彩に投げ飛ばされた少年はその目によく理解していた。

『なんだあれ。俺の力でも霞んで見える程度ってどんなスピードだよ！？』

少年、いや少年達は能力者だ。

特に投げ飛ばされた少年は一番の古株で、能力の事は同じようにつるむ連中の中でも良く解っているほうだ。

数年前のとある騒動で能力を研究する研究所から抜け出す前まで、能力者としての知識と経験を持っているからなおさらだった。

能力者の最大の特徴は三系統に分かれる事。

一に識者、三系統のうち最高の察知能力、識る者。三千世界を見通す知者。

二に導士、操る者、遍くモノを操作し奇跡を呼び起こす。

三に法師、世界の深奥を知る者、人智を超えた奇跡を作り上げる。

そんな伝承を研究者の一人から、口伝で伝えられていた事を少年は思い出していた。

少年の戸惑いはしょうがない事でもある。

何せ二人の戦いは、理解できない……いや正確には目視することが難しい。

少女二人はある一定の間合い（約一メートル強）まで近づいたきり動いておらず、二人の手元が霞んだ様に動いた次の瞬間には鈍い音が響くだけだからだ。

しかし少年一人だけその状況がおぼろげながら理解できていた。

『桜坂の剣士』が木刀を振りぬいた瞬間、ついさっき自分達からんだ少女が持っている杖を使い弾いているのだ。

『励起法で強化した目で漸くってどんなスピードだよ！？』

少年は内心で叫び声をあげそうなのを押し留めながら、背中に流れる冷たい汗を感じていた。

彼の叫び続く。

『励起法』それは能力者のみが使えるとされる特殊な身体強化法である。

これは小説や漫画で聞くような気功法や強化法とは、一線を画する術法だ。

解りやすく説明するのであれば、漫画や小説の強化法は気や魔力などを体に纏わせてくや通してくなどの方法をとっていると考えて欲しい。

しかし、励起法は違う。

使った人間の『生命の質』と言う物を劇的にまで底上げし、人間という枠組みを外して次のステージに持っていく。

故に励起法は術者の『生命の質』や術の進度により極端な効果が生

み出される。

しかしその励起法で底上げた目ですらも見えない、いやかるうじて見えるのであれば逆に叫びたくもなるだろう。

しばらくして、そんな常軌を逸した少女たち二人の交錯が止まる。意外な事に二人の攻防は、剣士の剣を杖がしつかと受け止めているところで止まっていた。

「たいしたスピードと反射神経ね、だけど…」

ニヤリと笑った彩は木刀を受け止めた点を支点として、杖を回転させながら踏み込む。

「技の練度としては私が数段上よ!!」

「っ!!」

踏み込んだスピードをそのままに、剣士の木刀を持つ手をつかみ懷に入った彩が肘と手首を極めた状態で一気に投げ飛ばす。

しかし剣士もさる者。

おそらくは自分で飛んだのだろう、勢いよく飛び空中で反転しながら着地。

剣士は着地をそのままに後ろに大きく飛んで間合いをあけた。

「簡単に決めさせてはくれない…か。」

お互い隙がなかった、彩は技で勝っているが剣士は身体的な総合面で勝っていた。

このままでは勝つどころか相手との地力の差で押し切られてしまう。そう考えた彩は自分の勝率を上げるべく、不確定因子を取り除くことにする。

「…ねえ、あんた名前は？…フウン『寛 宣夫』って言うのね。」

最初に見せた不敵な笑みを变えずに彩は、投げ飛ばした少年のほうへと視線を動かさずに話しかけた。

話しかけられた少年の方は驚愕する。

面識もない少女から、いきなり名前を呼ばれたのだ少年の心の裡はうち驚きを通り越して直ぐにでも逃げ出したいぐらいの恐怖が広がった。

「怖がらなくても大丈夫。あんた能力者でしょ？戦える？」

「無理…今さっきまでの俺だったらわかんねーけどあんたらの戦い見たら無理、ぜってー無理。たぶん…いや確実に一瞬で決着がつく。」

恐怖を押さえつけながらも答えた言葉は、いつわり無い彼のー宣夫のー感想だった。

少し離れたこの距離で霞む位なのだ、あの二人の間合いに入ったら何もさせてもらえずに再起不能にされる。

そんな確信があった。

「ふうん。自分の実力はわきまえてるんだ。いいわ、ここは何とかしとくから早く逃げなさい。正直邪魔なのよ、あんた達。」

「…解った、あんたに色々聞きたいけど今はそうさせてもらう。お前ら早く行くぞ。」

少年達は二人の少女が形成する純粋な武力の空間から逃げるように退散していく。

「さて、続きと行こうじゃない？」

少年達が居なくなるのを傍目で見届けながら彩は剣士に牽制とばかりに殺気を叩きつける。

「…以前、聞いた事がある。他人の行動や考えを読む『サトリ』。」

おそらく少年の驚愕の表情と名前を名指しで言ったことから推測をつけたのだろう。

ヒントを出しすぎたかと内心舌打ちしながら彩は口を開く。

「へえ、よく知っているじゃない。だったら解っているわよね？私達、能力者の能力を阻害する『神器』たるその『霧衣』。剥ぎ取って私の能力『モーション・エモーション』で、あんたから必要な情報を搾り取らせてもらっわ。」

決着をつけようと彩が一気に間合いを詰めるべく杖を前に構えたまま飛び込んだ。

しかし、その結果は肩透し。

彩が飛び込んだ場所に剣士がいないのだ。

見回し気配を探ると、そこは路地の壁。

何も足をかける場所のない、建物の壁（二階相当）に剣士はしゃがんでへばり付いていた。

「それは、遠慮する…。」

「待ちなさい！！」

「さよなら。」

それだけを言い残すと黒いレインコートの剣士が一瞬で霞み消える。

「チツ、運足『雷』^{いかづち}まで使えるか…あれは追うのには骨が折れる…。

」

瞬間で消えた剣士の追撃を早々に諦め、少し落胆した表情で彩は杖をしまうと再び暗い路地を歩き去る。
彼女は考える。

『しかし、目的への手がかりは得た。後は…。』

彼女は来た時と同じく考え事をしながら、街に群生する緑の闇に紛れた。

小さな世界の中で

「オイ、聞いたか？」

時間は昼時、購買に行つてパンを買いに行くか学食に行くかと悩んで時だった。

それは席から立った瞬間背中に重みがかかり首に回された腕と共に聞いた台詞。

誠一は、またかと思いながら腕の持ち主へと鬱陶しそうに振り返る。

「桂：お前な、いやいい。お前に何か言うこと自体が無駄だと思う。」

「酷いな誠一君、いつもお得な情報を回している俺にその態度はな
いんじゃないか？」

「お前の持つてくる情報はデマしかないし、性質が悪い。」

誠一の首に腕を巻きつける男、『七瀬 桂二』。

茶色に染めた短髪・たれ目、口元にはいつも笑顔を浮かべ胸元を開けた軽薄そうな格好をした男だ。

誠一とは中学一年の時に席が隣だった時からの友達。

最初の出会いからなぜか誠一を気に入っていて、それから一緒に遊ぶ仲間の一人でもある。

仲は良い、気も合うので誠一はそんなに嫌ってはいないのだが彼には一つ妙な癖があった。

「なーに言つてんだ？この自称『高見原の情報屋』の情報に嘘偽りはねえってば。」

極度の噂好きなのだ。

桂の話す内容のほとんどは、高見原に流れる荒唐無稽な噂で構成されている。

例えば、あの学生に人気だった店が潰れるとか、もう一人の友達の拓海が小学校の頃に好きだった女の子が誰と付き合ったとかそういうものだ。

それ位ならば、身近なゴシップとして少しは楽しめたるのは誠一としては正直なところだった。

しかし、最近は少し問題があった。

彼の話す噂話が少々、きな臭く・都市伝説まがいになってきたのだ。先日の『人食い蛇人間が、獲物を求め深夜の街を徘徊する』や『自分の死んだ子供を捜す幽霊女』『霧を纏った殺人鬼』の話やら気味の悪いものばかり。

だからこそ、誠一は少し辟易していた。

「いやさ、今回はちよーっと違うんだな？」

「何だよ、飯食いたいから早くしてくれ。」

「三組の篠崎知ってるよな？」

「篠崎？もしかして…この間告白した拓海が派手に玉砕した、あの篠崎か？」

『美波拓海』は誠一と桂二の共通の友人である。

中学校三年生の頃に誠一達の学校に転校してきた有名画家の息子で、学校内でも大きなサイズのトレンチコートを一年中着ていると言う変人と呼ばれる人間だ。

その彼が先月の始めに告白して派手に玉砕し三人で遊びまわったのは二人の記憶にも新しかった。

「ああ、その篠崎だ。」

「どうかしたのか？」

「昨日から家に帰っていないらしい。それで篠崎のグループの奴ら

がその行方を探し回っているらしいぜ。」

「拓海は知ってるのか？」

「知ってる。むしろ、もう動き出してるらしいぜ。」

誠一にとって三組の篠崎を含むグループはよく知っていると言う程ではなかったが、彼らの学校では結構有名なグループなので拓海の手が無くたとしても知ってはいた。

特に拓海が告白した篠崎莉奈しのさき りなは、儂い美人と言う感じで誠一の学年ではマドンナ的な存在。

その上、血の繋がらない男と一緒に住んでいると言うどこぞのゲームのような状況が、青い春を満喫する青年の話題には色々刺激的らしい。

「んで？ 俺にそんな話を持て来たって事は？」

「御察しの通り、拓海からの伝言『手伝え』ってさ。お前、夕方から深夜にかけて練習に行くだろ？ その時にでも良いから見付けたら連絡くれってさ。」

「はいよ、まったく振られたんだからすっぱり忘れろってんだ。」

「そう言っただけだよ…。」

なんとなく予想通りだった話に誠一は、溜息交じりに頷いた。

それと同時に誠一の胸の中で妙な胸騒ぎがした。

嵐の前のような、焦りと高揚感が入り混じった何か。

そんな何かに駆り立てられている誠一を気にせず、桂二は絡めた腕を解く。

「まっ、俺からの連絡はそれだけ。んじやなー。」

「飯はどうするんだ、桂？」

「今日は外。」

「またか…。」

桂二の言う外とは、大体が喫茶店『トラスト』で軽食を食べながら昼からの授業をさばる事だった。

彼の成績を考えると、誠一としてはどうなのかと思うところだった。

「何だよ誠一、相変わらず真面目だなー。」

「んだよ、わりーか？」

「いや、お前らしくて良いなって事だ。そして俺も俺らしくって事だ。」

ハアと一つ溜息を吐くと誠一は、それ以上言う事をやめた。

桂二とのこの様な会話は何度もやっているので無駄だと理解しているからだ。

この男には将来の不安とかないかと悩んでいた時だった。

「なあ、桂。お前いつか言ったよな？俺に集められない情報はないって。」

「ああ、言っただ。それがどうした？」

「あのさ、とある人物を探してほしいんだ。」

誠一の言う人物とは、先日助けた少女の行方だった。

先日助けた者の、なぜか釈然としないものを抱えた誠一は一度会って話してみたいと思ったのだ。

「ん？昨日お前が助けた女の子な…解ったよ。」

「ああ、って一寸待て…今スルーしそうになったけど、何故さも当然のように知ってたんだ？」

「くくく、俺に知らないことはないんだよ。」

「怖いわー!!」

正直な所、ここで桂二に問い詰めたい誠一であつたがある意味では彼の情報収集能力の高さを表れてもあるのでグツと我慢する。

「まあ、いい。その所は今度キチツと聞かしてもらおう、その代わりちゃんと調べてくれよ?」

「解つたよ。他ならぬ親友からの依頼だキチツとこなさせて貰うさ。んじゃ俺は行くわ。」

「ああ、灯さんによろしく言っておいてくれ。」

後ろ手に腕をヒラヒラさせながら桂二は教室のドアから出て行つたのを見送ると、誠一は教室の時計を見た。

「購買のパンもつないな…学食にするか。」

学食のメニューを考えながら誠一は、言い知れない何かを感じ溜息をもう一つ吐いた。

外話 波打ち際の残響（前書き）

この話は本編『いつもの日々に戻るまで』の次話、次々話とリンクしています。

外話 波打ち際の残響

この町は異常なまでに神社が多い。

高見原の地図に神社の場所を書き込むと解るが、一キロ間隔に神社が最低でも一つある。

市内の神社の数を私自身が数えた訳では無いが、この町の秘密を探る人間の話に寄ると大小合わせて約150。

明らかに、この数は異常らしい。

他にも異常な理由はあるが今回の話には一切関係ないので、追い追いつき話すと言う事で割愛させていただく。

兎も角、こんな町なので、この町は不思議な話に事欠かない。今回のお話も、そんな感じ。

高見原市海見区、海岸公園。

平日の昼。

向こうに見える一際大きな観覧車が寂しそうに男には見えた。

きつと遠くから聞こえる遊園地の音と、人も疎らな公園に吹く強い風が拍車をかけているのだろう。

白い石畳の公園と交じり合う白い砂浜、海岸公園と言うだけあって砂浜と連なって白い石畳と一体化している。

そんな公園の波打ち際に近いベンチで、今風のファッションに身を包んだ一人の男が、海を見ながら黄昏れていた。

日も暮れても無いのに。

「ハア……。」

見るからに落ち込んでいる。

まあ、それはしょうがないと言える。

男は先程派手に振られているから。

「たく、何だよ。男がいるなら言えよなあ。こっちは進級課題の作品製作放つといて来たのによ。」

話は簡単、先日告白した相手と芸大の製作課題をそっちのけで遊園地に行く約束をした当日、彼女が男連れで来ただけの話。要するに弄ばれたのである。

しかし、男が落ち込んで居る原因は別だった。振られ慣れている男にとっては、これ位は痛くも無い、問題は。

「でも、あそこで遊園地のチケットを『二人で行けよ』ってタダでやっちまうなんて・・・俺もお人よしと言うか、馬鹿だ・・・。」

自己嫌悪。

更に言うなら、チケットをあげた時の彼女の嬉しそうな顔を見れただけでも良かったなんて思ったのが追い撃ちをかけている。

「俺そんなに、あいつの事好きだったのか？」

怒る所と悩む所を大きく外れている気もするが、そんな男に海岸公園の目玉と言えるオブジェが目に入った。

「あそこで振られたら、まだ諦め付いたかもしれないなあ。」

自分の女々しさを感じつつ、思わず愚痴をこぼしてしまう。

そのオブジェは巷で噂の『別離の境界』と言われるモノだった。

本当は有名建築士に依頼して作って貰った『残響の迷宮』と呼ばれるオブジェなのだが、ここで仲を拗らせたり陰悪にしたりとするカップルが多い為にそう呼ばれている。

男は何もする事が無いのと、いつまでもウジウジしているのも嫌だったので取り敢えず近づく事にした。

「少しは気が晴れるだろ。」

だが、そのオブジェは人の心を和ませる様なモノでは無かった。白い壁。

言い表すとそうだ。

大小合わせて数十の白い壁が、思い思いの方向を見るように立ち並んでいる。

大きさは大きいモノは縦5メートル四方の正方形の壁から、小さいモノは家のドアの大きさの長方形までだ。

大きさ故か、形状故か、それは妙な圧迫感を与えてくる。

「スゲー。」

近付くと解る、白い壁は何の装飾もされていない唯の一枚の厚いコンクリートの壁だ。

かといって感想は他に何も無い訳では無い。

その白さが潔癖を表し、大きさが荘厳を醸し出し何とも言えない雰囲気を出している。

いやそれだけじゃあ無い、男にはそれが解った。

少し離れるとそれが良く解る。

壁に日が当たり陰を作る、その陰が他のオブジェにかかり全体を見る事により白と黒のコントラストを作っていた。

離れて見る男には、その光景に驚きを感じていた。

あのオブジェのある空間は非現実的な空間になっている、無造作に乱立しているのでは無く、まさに計算された尽くされた創られた異界。

「俺も、あんな作品造れるかな。」

芸大でインテリアを勉強する男にとって、オブジェは強烈な印象を与えたのだろう、感嘆の声が溜息交じりとなっていた。

「あんたはこんな悪意に満ちた物を作りたいのか？」
「うおっ！！！」

いつの間にかに男の傍に少年が居た。

時代遅れの上にワンサイズ大きい目の灰色のトレンチコートを着た少年。

少年は髪の毛をオールバックにして眠そうな目で男を見ていた。

「あんた、何時からそこに！？」

「？ 最初から居たよ、あんたがぶつぶつ言いながら後ろ向きに歩いて来たのには驚いたけど、もしかして気付いてなかった？」
「あゝ。」

男は全然気付いてなかった。

「はは、ゴメンな。俺、集中すると周りが見えなくて。」

「いいよ、スケッチしているときに一寸邪魔になっただけだ。そんなに迷惑はしていないから。それより、あんな悪意の塊みたいなモノを本当に作りたいの？」

「へ？」

どういふ事が男には今一良く解らなかった。

「むっ、感受性が強い人間だったら解ると思ったんだけどなあ。」

更に難解な話を続ける少年。

だが解る事もある、目の前の少年は明らかに自分の事を馬鹿にしている。

この作品の事を言っているのだろう、『その作品の本質を解らないぐらいの貧相な感覚しかないのか?』と言われている。

そう男は思った。

先程の自分を弄んだ二人より猛烈に腹が立った、いや先程の爆発しなかった怒りが返って来たかのようなうだ。

男は青年の胸倉を乱暴に掴んだ。

「本当に困ったな。気付いてないのではなく、残響に憑かれているみたいだ。」

「ああ、何だつてよ!!」

「今聞かせてあげるよ、潮騒の残響に隠れた雑音の残響を。」

少年は男の両耳を両手で優しく塞いだ。

ゆっくり見開かれる男の目、その耳には潮騒が聞こえていた、そしてそれに隠れる様な囁く声で何十何百何千もの人間が囁くかのような潮騒が聞こえる。

総てがお前を馬鹿にしている。
怒れと。

総てがお前を傷付けようとしている。
恐れろと。

総てがお前を否定している。
哀しめ。

総てがお前が劣っていると言っている。

試験…それから

打ち込んだ拳は跳ね上げられ誠一の師である時枝ときえだ 思惟しいの背中が、
下から突き上げるように誠一の胸を打った。

「ガッ!？」

誠一は胸を貫く衝撃に、止まりそうになる身体を叱咤しつつ拳を正中線に戻し身体の急所を隠す。

「甘い。」

3メートル近く吹き飛ばされながら誠一は、胸に走る激痛に耐えながら腰を落とし構える。

それに対して誠一のおおよそ目の前3メートルにいる思惟は、手を顎に当てながら満足そうに頷いていた。

「私の誘いに無策で打ち込んだ事は減点。けれど、軽く打った私の『水震』がその程度で終わっているのは、まあ及第点という所かな?」

『軽く打った』で3メートル近く、『その程度』でこの威力の何処から突っ込んで良いのか解らないと、今まで何度も繰り返してきた声に出来ない呟きを飲み込み、息を整えて身体に巡る『意志』を統一させる。

高見原市 桜区石上町 『石上神社』公園
午後20時30分

身体に入ったダメージが大分消えてきた所で思惟を見ると、彼女は笑っていた。
蔑むとかそういう様な笑い顔ではなくて、何処かしら満足そうな笑み。

「ふふふ、そうそう。身体の意味を統一させ、身体が持つ己の力の方向性を作り上げなさい。それが氣法術の上位法術『励起』よ。無意識でも出来る様になってきたわね、練り上げ方がごく自然に出てくる。」

満足そうに笑う思惟に、誠一は少し嬉しくなってくる。
誠一が思惟から武術の手解きを受けて六年近くになる。

一番最初は憧れであった。
当時、小学生だった誠一が『ある事件』に巻き込まれた時、瞬く間に犯人グループを倒した思惟を見てから『自分も強くなりたい』そう思ってからである。

その光景を見た誠一は、弟子はとらないと言って頑固に断っていた思惟を粘りに粘り半年に渡って頭を下げて入門。

それから三年基本のみを毎日何百回と繰り返し身体を作り上げ、そしてさらに三年身体に技術を叩き込み今特殊な練功まで至った。
憧れの目標に近づいたとは思わないが、形にはなってきたと誠一は嬉しくなってきた。

「私が教えることは大体一通り教えたわね。後は基礎練習と『励起』」

を中心にやれば自ずと力がつくわ…さて。」

途端、誠一の浮き足立った足に震えが走る。

いや、足だけではなく背筋が一瞬にして凍りついたような冷たささえも感じていた。

思惟を見ると身体の側面をこちらに向けて立っている。

ただそれだけなのに空気を介し今にも押しつぶされそうな、とんでもない圧迫感を感じさせていた。

これが思惟さんの『励起』かと誠一は、負けない様に腹に力を入れ耐える。

「少し本気を出すわ。打ち込んできなさい上手く出来たら空手で言うところの免許皆伝とはいかないけど、師範代ぐらいだと認めてあげる。」

いきなりのテスト、突然だった。

こう言う事は何日も前に言っておくべきなんじゃないのかと誠一は内心悲鳴を上げながらも、『励起』を行い身体のギアを一段階あげる。

いきなりの事で不満もあるし、本気の思惟を見たこともないので彼女の力の一片を見られるので喜ばしくもとても恐怖心もある。

それ以上に誠一は自分が今どれだけのものなのかを、確認するにはよかった。

だから…。

「胸を借りるつもりでいきます。」

「…ん？意外と肝が据わってるわね？」

「今までどれだけ自分が思惟さんの技を受けてるかわかってます？でも、それ以上に俺が何処まで強くなったか知りたいし…貴女に見てもらいたい。」

「解ったわ、きなさい。」

そこまで言われたら女……じゃなくって師匠冥利に尽きるわと緩む口元を見せないように思惟は、ゆっくりと誠一へと歩き出す。

誠一から見て約1メートル20、それ位の距離からゆっくりと彼を中心にして左回りに回り始める。

正中線が一切ぶれず、緩急が一切ない流れるような足運び、体術『流水』。

誠一も使う徹底的に自分の身体に叩き込まれた動きの完成系に、誠一は初めて技の恐ろしさに気付く。

左拳を出して構える自分の構えに対し、自分を中心に左回りに移動されると攻撃にしる防御にしるやり難いのだ。

しかし、そんなことは言ってられない。

思惟の動きのタイミングに合わせて拳を打ち込む。

「フツ!!」

撃つのは左拳、それも牽制とかではなく一撃で終わらせる程の勢いをつけたものだ。

作戦はなにも無い、ただ誠一の今持てる全てを籠めた一撃。

思惟と誠一の間では技量は大きく差がある。

それが思惟がいくら手を抜いていたとしても、それは天と地ほど間が開いている筈だと誠一は考えていた。

だからこそその小手先も技などない、全力の一撃。

己が師に見てもらった今最高の一撃を。

「!!」

しかし、そんな真摯な一撃すらも思惟は簡単に受け流してしまう。やや下方に打ち込んだ拳を下に流される。

それを感じるより早く、誠一は防御など考えない二撃目を放つ。
下に受け流された力をそのままに、足に流し踏み込む…それからの
集約した中段撃ち。

「グッ!？」

「やめ…気が変わった。」

しかし、二撃目も簡単に受け流された今度は上へ、下から一撃が来ると誠一が身構えた瞬間。

突然、気の抜けた様に思惟が誠一の脇腹へと手を当てている状態で止めたのだ。

「ちよっ…思惟さん!？」

「少し早かったみたいね。また次回しましょう。」

それを言ったつきり思惟は取り付く島も無く、日本酒の入った徳利片手に神社の本殿のいつものスペースの方へと戻って行ってしまった。

正直な話、誠一としては肩透かしを食らったと言うより狐に抓まれたと言うのが正確だろうか。

文句を言おうとも、思惟は何故か不機嫌に酒を飲んでいる。

無駄だと悟り誠一は肩を落としながら、暫く休み誠一は家への道を帰って行った。

「おやおや…いいんですか？」

誠一が帰り暫くした後。

神社の本殿の縁側で、徳利片手に手酌で酒を飲んでいた思惟は突然掛けられた声に動じず酒を飲み続ける。

黙って飲み続ける思惟に、痺れを切らしたように神社の奥の森から人影が現れる。

森の闇に溶ける様な漆黒のスーツ、長い黒髪を一つにまとめ黒い髭を蓄えた壮年の男性。

その目は苛ついているのか少し揺らめいている。

「あなたは私達が途中から観察していることに気付き、彼に打ち込むはずの手を止めたのは知っています。しかし、何故彼を……！」

男性が何かに気付き突然飛び退る。

飛び退いた男がいたであろうその場所から少し離れた木には、3本の鉄の棒が深々と刺さっていた。

おそらくは思惟が投げたであろうソレは、ノーモーションでいつ投げたかも解らない恐ろしい早業。

「神速の呪釘打ち、本家の忍者より早いとは……いやはや一度見ていなければ死んでいました。」

鉄の棒―男曰く釘―が刺さった木に寄りかかりながら、男は冷や汗をあからさまに拭きなが口上を述べる。

「しかしながら、私とあなたは初対面だ。ここは自己紹介といきましょう、私の名前は各務雲進能力者狩部隊『ハウンド』の主任をしています、よろしく。」

外話 準備（前書き）

今回の話は前話「試験…それから」の裏話です。
読まれなくても話は続きますが読まれた方が『変わる世界』『いつもの日々に戻る前』共々、面白いと思います。
それでは本編をどうぞ！！

外話 準備

「私に、そんな仕事を回すと？」
「いかにも、『崩壊のマエストロ』フランベルジェに対しての依頼だ。」

某日 午後12時 高見原市 楼閣町 レストラン『シャンゼリゼ』2階テラス席

雲一つない、透き通る様な碧一色の晴天。

字面はとても気持ち良さそうに感じるが実際そんな天気は、高見原にとってはあまり関係ない。

殆どが森で囲まれた、この町においては日の光は、どんなに鋭い日差しだとしても柔らかな木漏れ日にしかないからだ。

しかしながら、晴天であれば森の緑が光を受け深呼吸するため、町の中は清々しい空気に包まれる。

ある一画を除きだが。

高見原の中でも特に緑が深い中洲の中心部、最も発展した繁華街『楼閣町』の一画にあるレストラン『シャンゼリゼ』。

その二階にあるテラス席では、男二人が険悪な雰囲気顔で顔を付き合わせていた。

片方は黒髪に黒色のスーツを着た壮年にかかった位の男、長い髪を頭の後ろでくくり髭をたくわえている。

それと対称的なのはテーブルを挟んだ男だ。

赤みを帯びた金髪に、ライトグレイのスーツを着た青年。

彼はいつもであれば爽やかさを湛えているであろう碧い目を、憎々しげな色に変えていた。

彼は今、とてつもなく怒っていた。

「もう一度聞くぞ。雲進^{うんしん}こんな仕事を私に受けろと？」

そう言いながら青年は、手に持っていた書類をたたき付ける様に雲進と呼んだ男に返した。

テーブルに拡がる書類。

そこに書かれていたのは、様々な人間の顔写真付きのリストだった。壮年の男『各務^{かがみ}雲進^{うんしん}』は、溜息混じりに書類をかき集めると困った様に口を開く。

「やれやれ、ヨーロッパの貴族様は気位が高い。」

「そう言う問題ではないだろう？ 明らかな犯罪、あからさまな汚れ仕事。そんな仕事に私を使うとはどう言う事だと聞いているんだ。」

そう言う問題だよ、お坊ちゃん一体お前は何を聞いているんだ？ と心に留め雲進は再び溜息を吐く。

「それで？ フランベルジエ様は何が気に食わないのです？」

「うむ、よく聞いてくれた。私としては貴様らモモヤマの手先になるのは一向に構わん。しかしだ、何故今回の標的に限って『コレ』なのだ？」

フランベルジエが指差すのは書類に羅列されたリストの一番最初の人物だった。

写真の人物は学生服を着た、明らかに何処にでもいる様な平凡そうな顔付き少年少女達だった。

フランベルジェは明らかに気に食わないと言う顔で話を続ける。

「貴様らとの契約。お前も知らん筈ではなかるう？」

「知っていますよ。あなたとの契約は二つ『この日本の何処かにいるであろう、あなたの兄弟探す』と『強い敵と戦わせる』でしたよね？それが？」

フランベルジェその名は裏社会において、名の通った通称。

見た目の若さや育ちの良さに反し特に荒事に關しては、ヨーロッパにおいての二つ名『崩壊のマエストロ』と共に畏怖の対象である。そのフランベルジェが今回、雲進の所属する組織に雇われる時に出した条件はその二つだった。

「ならば、何故私にこんな雑魚を相手させる？こんな自覚する前で『励起法』も知らん奴らは量産品に相手させれば良かるう？」

「そうはいかんですよ。いくら相手が雑魚に見えても、『能力者』相手に普通の『人間あがり』は負担が大きい。しかも、この少年は何かしらの武術をやっているらしいのです。ま、その師匠の方は私が行くんですが…。」

そう言いながら雲進は、別に分けてあつた書類の一枚を取り出しフランベルジェに渡す。

「…時枝思惟？誰だこの小娘は？」

「解らなくて当たり前です。私も初め遠目から見て目を疑いましたから。護天八卦の時枝：ヨーロッパの方ではインビンジブルと呼ばれた人間です。」

「何だと！？」

インビンジブル。

その名はフランベルジェのみならず、世界中で恐れられ『透明』『無敵』を意味する言葉を持つ殺し屋の名前である。

「…ムウ。」

流石のフランベルジェとて相手が悪いと黙らざるを得ない。

西欧においては最強を自負するフランベルジェだが、『世界最強』の意味する『45 Pyramid』にいるインビンジブルに勝てるとは思わなかったのだ。

しかし、それでスゴスゴと引き下がる程フランベルジェのプライドは小さくない。

「…では、私はこの小僧に当たる。」

「ふむ、インビンジブルの弟子ですか。…人員をいくらか回しますか？」

「いい、今回は私一人で行く。インビンジブルの弟子だ、どんな力を持っているか解らん。それに、見るこの記述を。」

そうフランベルジェが言いながら、リストの記述の一文を指差す。

「…能力者捕縛用の『儀式決界』に掛かった外来の能力者を助けに入り、時速70キロで走る車と衝突…無傷ですか。」

「そうだ、こいつは恐らくは使えるぞ『励起法』を。」

コツコツと顔写真を指で叩きながら、フランベルジェ不敵な笑みを浮かべながら言う。

「参りましたね。励起法が使えると難易度が格段に跳ね上がる。量産品では蹴散らされる。」

「そう言う事だ。そんな状態であれば、私以外は足手まといだ。」

ヤレヤレとまた溜息を吐きながら雲進はリストを分配していく。

「では、フランベルジェ貴方はこの少年『水上誠一』を捕獲、私が『時枝思惟』との交渉。他の人員には『船津 東哉』の監視と『篠崎 莉奈』の探索に回す事にしましょう。」

狩る者、狩られる者（6月7日加筆）

森の町、高見原は都市開発における当初のスローガン『自然融和』のお陰で、緑は切っても切り離せないものだ。

しかし切っても切り離せないと言っても、町に広がる緑にも虫食いの如く穴がある。

それは、ビルであり、家であり、そして道である。

高見原の一番の特色は町の中心に広がる巨大な中洲。

その形は、北を頂点にし南に広がる様な三角形の形をしている。

南側に広がる三角形の底辺には緑が覆う岩山があり、その頂点には岩長神社や公園がある。

公園から放射状に伸びる緑の切れ目、人の手が入った道その一本に彼はいた。

緑の切れ目から覗く月、誠一は胸に留まり続けるわだかまりを抱えながら歩く。

習いはじめてから数年、ようやく何かしらのモノになりそうだったのに肩透かしを食らわされたら普通はそうなるだろう。

しかし、誠一はそれだけじゃない気がしはじめていた。

最初は思惟が気分が変わり、いきなり止めたと思っていた。

だが、数年来の付き合いであり師弟関係が続けてきた誠一は、奇妙な違和感を感じていたのだ。

「……」

生い茂る緑を切り裂く道を歩く誠一は、思惟が気が変わった時を思いだし深く考え込む。

あの時、何かしらの違和感を誠一は感じていた。

彼女の拳動はおかしくなかったか？

言葉は？表情は？

今日の彼女は何がおかしいと誠一は半ば確信めいた様に感じていた。そして、誠一が違和感に気付いたその時。

「正解。」

それを肯定する声がかけられた。

「えっ？」

声の聞こえた方を見ると誠一は一瞬ほうける。

そこには黒ずくめの人物がいた。

黒のスラックスに黒のジャケット、目深に被っている無地のキャップにいたっても黒と言う念のいれよう。

左手の脇には黒塗りの棒を挟み見た目は不審者だが、誠一にとって問題はそこではなかった。

「君は……」

「話は後！！構えなさい！！」

「あ、えっ？」

キャップの鰐下から覗くやや釣り目がちの瞳、二日前に交差点で誠一が助けた少女だった。

疑問を解消するべく行方を探していた少女が目の前に現れ話し掛けようとした誠一だったが、それはにべもなく構えろと言っ言葉のみ言われる。

「えっと、何だかよく解らないんだけど？」

「気付かないの？周辺の気配を感じ取ってみなさい」

誠一は状況が全然飲み込めなかった。しかし、悲しいかな誠一は思

惟との練習の癖で言われた通り拳を作り構えてしまう。
そして、馬鹿正直に誠一は気配を探るように息をひそめる。

「っ！！静かすぎる！？」

誠一は先程考え込んでいた思惟の違和感を思い出しながら、今の状況が臆げながら理解してきた。

「思惟さんはこれを感じて視線を！！」

そう、思惟の持つ違和感の正体は視線が修行をつけている誠一ではなく、その周辺の森にいつていた。
それと今の状況を照らし合わせると一つの推論がでる。

「あの時から監視されていた！？」

「そうよ。こいつら、…4、6、12…三人一組の4チームって所か」

「囲まれてる？」

「正解」

思わず口にしていた言葉を、いつの間にか近付いていた少女が横に並びながら継いでいた。

「…っなんで！？」

誠一は歯を強く噛み締めながら、唸るように呟いた。

先程から膨らみつつける違和感と、周囲の静かさのギャップが誠一に否応なしに現実を突き付ける。

だからこそ、今おかれている自分の状況に誠一は悪態をつく。

「思ったほど慌てないのね？」

「師匠と回った修行の旅…荒事に慣れたくなかったさ」

「…それはご愁傷様、それよりも…出てきたわよ」

少女の言葉通り、誠一のいる道路の両隣にある建物のある緑の隙間から10人程の人影が森の闇から滲み出る様に現れる。

その姿は誠一の隣に立つ少女の様に全身が黒で統一されている。

しかし、その黒尽めの集団は少女とは違う。

黒を基調とした迷彩柄の服にポケットが多くつけたタクティカルベスト、頭には顔を隠す様なフェイスガード付きのヘルメットをつけていた。

明らかに堅気の人間じゃないと誠一は断定し腹をくくる。

「…来るわ、準備はいい？」

隣に立った少女から誠一は波を感じた。

海岸の波打ち際で感じるような、ゆったりとしながらも力強い波の感覚。

それは彼にとって馴染みのあるモノで自分でも使った業。

「励起!？」

「学術府の辰学院辺りじゃ『励起法』とか言われてるけどね、古い武術辺りだったら何処にでもある身体強化法よ。それよりも、来るわ相手も励起法を使ってくるから励起法を使った方がいいわよ？」

「なあ、一つ聞いていいか？」

今の状況での疑問、誠一には色々と聞きたい事があった。

少女は一体何者なのだろうか？

自分は何故襲われているのだろうか？

襲ってくる周りの奴らは一体なんかのか？

疑問に対する不満は尽きることなくグルグルと誠一の胸を回っていた。

しかし、状況はそれを許しそうにないと理解した誠一は喉まで出そうになったがソレを飲み込み聞いた。

「君、名前は？」

とりあえず隣に立つ少女は敵ではないと思い、誠一は名前を聞く。

「彩、折紙 彩よ」

炎の剣

励起法の恐ろしさは、誠一が思惟から『奥伝』を習い始めてから初めて聞いた。

実際の所は、奥伝にほんの少し触りしか聞いていない。

だから、誠一は励起法はよく見る漫画にある『身体を丈夫』にしたりと身体を強くする気功の一種だと思っていた。

その身に受けるまで。

「がつつ!!」

「馬鹿つ!!」

それは隙だった。

構えからの合理的な隙ではなく、励起法の真の威力を知らない心の隙。

その代償は相手の攻撃を許し、正面からの先制を打たれるという形となった。

正面からの正拳、空手より喧嘩に近い拳を誠一は胸をかするよう回避けたはずだった。

誠一としてはギリギリで避け、ややカウンター気味に顎をうち上げるつもりだった。

しかし、結果は大違いだった。

かすただけ。そう、拳の甲が胸の上を滑る様に行くはずだったが、その拳には誠一の予想を大幅に超える力が込められていた。

相手は黒ずくめの戦闘服で容姿や性別は解らないが、自分と体格が変わらないその人物が放った異常とも言える攻撃に堪えながらの様に弾け飛んだ。

そして、彩の罵声が飛ぶ。

それはそうだろう、弾け飛んだ場所が彩の居る方向なのだから。マズイと誠一が思うより先に一瞬の浮遊感の後、身体が一回転して着地していた。

「…え？」

急激な視点の移動とその結果、誠一は一瞬ほうけた。

そのお陰か彼は更に目を疑う光景を見た。

恐らくは彩の方へと飛ばされた誠一を、本人に衝撃が来ないように捌いて着地させたのは彼女自身の技だろうと推測出来る。

簡単に言うが、咄嗟にとったその動きは訓練を十分に積んだ熟練のアスリートでも無理な動きだ。

だが捌いた隙に二人の黒ずくめの戦闘員が体ごと彩に突っ込んで来る。

彩の動きを止める為の体当たりぎみのタックル、恐らくは彩の方が捕まえ易いとふんだのだろう。

誠一を捌いて出来た隙をついた避けきれないはずの攻撃、しかし黒ずくめの彼らの思惑は外れる。

彩はほんの一步、そう早くも遅くもない極普通の速さで一歩前へ出たのだ。

たったそれだけで彩は囲んでいた二人の間を、簡単に擦り抜けたのだ。

「馬鹿な…」

誰が呟いたのか解らないが、その声は驚愕で凍り付く誠一と襲撃者の間に響いた。

「…ちよつと、私一人でやらせる気？」

「すっスマン」

襲撃者越しに睨みつけてくる彩に怯えながら、誠一は再び拳を握り未だに意識を飛ばしている襲撃者の一人に打ち込んだ。

「……」

しかし、相手も襲撃者として訓練しているので、拳が届く前に軽いバックステップを続け避けつつける。

「フツ!!」

だが誠一も逃がすつもりは毛頭もない、六年にも渡り続けた修練と最近スムーズに出来はじめた励起法で身体を強化し爆発のごとき踏み込み拳を打ち込んだ。

「グッ!」

マスクに阻まれたくぐもった苦しそうな呻き声と共に、先程の誠一のように吹き飛んで近くの茂みに消えていく。

「……?」

見た感じは上手く決まったように見えたが、誠一の手には手応えがなかった。

恐らくは自分で飛び衝撃と打点をずらしたのだろうと予測した誠一が気付けば、相手はもう近くにはおらず周りで囲んでいた襲撃者達も少し間を空けて囲んでいる。

「……?」

「さっきのは様子見、今みたいなのは簡単な挨拶みたいなものよ」
いつの間にか再び誠一の横にいた彩が、呟きの様な小さな声で彼に囁いていた。

思惟さんと同じ事を言つと心の中で呟きながら、誠一は『励起法』の深度を深めて行く。

「っ！？励起法の深度を深めてる？乗ってきた？」

「何の為に俺が襲われているか解らないし、君が助けてくれているかも解らない。けどさ」

誠一は息を整え拳を強く握る。

それから最近当たり前になってきた励起法の手順、身体にある流れを感じ取り、息と同時にそれを動かし流れを早める。

「俺、六年これをやつて来た」

拳を視線の先に挙げる誠一は、身体の中を流れに沿って動かし、細胞の一つ一つまで感じ取る。

「最初は理不尽な事に対する恐れだった。だから俺は、それから克服出来る様に力を手に入れようと修練してきたんだ。」

流れより出た力を細胞一つ一つへ流し込み、細胞を形作る分子一つ一つを最大限にまで強力するイメージで誠一は、身体をもう一段階次のステージへと持つて行く。

「だから、俺は負けたくないんだ。今日の前にある理不尽を打ち砕く……」

「…男の子って事かな？」

「その意気やよし!!」

その時だった。

黒ずくめの囲いが開き、一人の男が現れる。

その男は周囲の黒ずくめ達とは違いマスクはしていない。

服装は対照的な覚める様な『紅い』スーツを着た赤みを帯びた金髪に碧眼の青年だった。

「武骨な剣の様なその精神はとても好ましい。武士道と言うやつかな？」

青年はユツクリと歩き、誠一達の前約4メートルで立ち止まる。

「チツ間合いギリギリ外だ」

彩が舌打ちしながら呟く。

それは誠一にとっても同じ、一足飛びでギリギリ避けられるであろう間合いだった。

「さて、自己紹介と行こう。と言っても私の名前は明かせない。だから、通り名で我慢して頂こう」

男は左手を水平に腹にあて、左足を軽く引いてお辞儀をする。

「Hallo, Jungs und Mädchen（はじめまして、少年と少女）Mein Name ist feltenebeschau（私の通り名はフランベルジェ）」

炎の剣（後書き）

申し訳ありません、大学のレポート課題でこちらの執筆は遅れております。

楽しみにされている方達には申し訳ありませんが落とす訳には行かないので察していただけると嬉しいです。

外話 樹海にて 前編（前書き）

この話は『いつもの日々に戻るまで』の『五里霧中』の話の前後あ
たりの話です。

読まなくても本編とは関係ありませんが、読まれていると面白く読
めるとは思います。

ではどうぞ!!

外話 樹海にて 前編

富士の樹海と聞いて思い浮かぶのはどんな噂だろうか？

誰に聞いても大体同じ返事が返ってくるのが『自殺の名所』だろう。

P M 1 7 : 0 0 富士の樹海。洞バス停前

富士の樹海の観光名所といえば溶岩洞穴が有名だろう。

その昔、富士山が噴火した時に流れた溶岩流、その上に森が出来たのが富士の樹海。

その富士山の溶岩が固まったときに出来たのが、溶岩洞穴だ。

洞穴の中はとても複雑で人の体内のようと思われ人穴とも言われている。

そんな洞穴を観光する為に、樹海に敷かれた道へ入る駐車場の一つが此処だ。

この入り口は今では廃れた場所で、滅多に人が訪れない。

それ故にこの場所は自殺する人間が最後に立ち寄る場所として有名だった。

その場所に一人の女性が軽自動車を乗り付けてフラリとやってきた。車から出た足取りは重く、目は少し虚ろで焦点を結んでいない。

女は弱弱しく車のドアを閉めると、鍵も掛けずにゆっくりと樹海の道へと迷わず歩いていく。

俯きがちの顔を少し上げて見れば、女の目には自殺防止の看板が目に入る。

『命は親から頂いた大切なもの もう一度静かに両親や兄弟、子供の事も考えて見ましよう。一人で悩まずまず相談してみてください』

そんな文字が目に入るが、女の心には何も響かない。

自分を見直して冷静になってもらいたい、そんな言葉で心が変わるなら自分は今頃……と女が思っている時、声を掛ける者がいた。

「こんにちは、お姉さん」

女以外いなかったはずだったので、彼女は大きく驚いた。

それはもう飛び上がるほどの。

女が振り返ると、そこには年若い青年が立っていた。

少し黒が入った金髪に碧い目、スラックスにワイシャツと言った何とも年齢が断定できない格好をしていた。

特徴的なのがその表情、目を細めてやや日本人のような欧風の顔つきで優しそうに笑っていた。

全体的な雰囲気としては少年の様な雰囲気を醸し出している。

「こっ こんにちは」

思わずどもりながらも女は返事を返す。

緊張した為に口が上手く回らなかったのだ。

突然の登場や自分が今から行う事への後ろめたさもあったが、それ以上に目の前の人物から感じる静かで何故か『嵐の前』を感じさせる様な存在感に彼女は怯んでしまった。

そんな彼女の態度に何かしらの満足がいたのか、男は笑顔をさらに深める。

「ねえ、お姉さん。 こんな時間にこんな所で何処に行くの？」

「え、えと。 あなたには関係ないわ」

「ふーん、 まあいいけど」

男は簡単に引き下がる。

とても不自然だが女には丁度いい。

今から行う事は、自分がこんな人間になってから始めて決めた事で誰にも邪魔されなくなかったのだ。

そんな女の決意も男には関係なく、彼は踵を返し離れていく。

「ああ、そうそうお姉さん。一つ聞きたいんだけど？」

「なあに？」

女も同じように踵を返し樹海へと入る道へと踏み入れ様としたとき声がまたかかる。

今度は驚かない、女には何となく声がかかる気がしていたのだ。しかし、次の発言に驚く。

「もし、あなたの気が変わったら僕の物にならない？」

雰囲気と優しい声色にそぐわない言葉を彼女は聞いた気がした。彼女が思わず振り向いて男を見ると、こちらをニコニコと笑いながら見ていたためやはり空耳じゃないかと思い始めていた。

「空耳じゃないよ、お姉さん。例えばさ、今からお姉さんがその道に入る。そして何かをしようとするじゃない？ その時にその『事』をする気が変わったら僕の物にならない？ って事」

男は顔に似合わずすごい事を言つてのける。

さらに困惑したのは女だった。

明らかに自分のし様としている事が見抜かれている。

慌てて走り、やや足をもつれさせながら樹海へと入っていく。

「私はやるんだ。今度こそ…やるんだ」

少し息を切らしながら樹海へと踏み入っていく。

男は森へと消えていく女性を変わらない笑顔で見送りながらポケットの中から携帯電話を取り出し電話を掛ける。

「ターゲットが森へと入った。気付かれない様に追え…ああ、4から6まではA装備で囲むように。ああ、処理の事は気にしないでいい…一杯あるだろう？ そこらじゅうに」

電話を掛ける男の顔は、先ほどの笑顔とは違う精悍かつやや邪悪さを持ち合わせた笑顔だった。

「今からそっちにいく、装備を用意しておいてくれ」

そこまで言うと男は携帯をポケットにしまつと背伸びを一回して歩を進めた。

外話 樹海にて 中篇（前書き）

今回は残酷なシーンもしくは少しグロい表現があるので苦手な方は『戻る』ボタンで回れ右お願いします。

外話 樹海にて 中篇

女は樹海の中で逃げていた。

先ほど駐車場で出会った男ではなく、今現在彼女を追いつけている男どもだ。

「くくく、ねーちゃん。何処に行くのかなあ？」

下卑た複数の笑い声と足跡が、暗い樹海の闇の中から近づいてくる音を彼女は聞いた。

懐中電灯の光が迫る、女は光から逃げる様に森にある窪みに身を隠した。

「出ておいで、お嬢ちゃん。俺らがぜくんぶ有効活用してやるからよ」

「そうそう上から下まですべてだ、上も下も前も後ろも全部だあ」

「目も心臓も肝臓も肺も腎臓も、ヒッヒッヒッヒッヒッヒッ！」

コワイコワイコワイと女は耳を塞ぎ目をつぶり、窪みに蹲る。

暫くすれば通り過ぎたのか、男達の声と足音が遠ざかっていく。

女は音が聞こえなくなると、辺りを見回すように顔を上げた。

周囲には誰もいないそう確認してから女は立ち上がるうとしたが、立ち上がる事が出来ない。

完全に腰を抜かしていた。

ここに居てもいいが、あの男達がまた戻ってくる前に此処から離れたい、そう考えていると窪みの奥に薄ぼんやりとだが穴を見つける。人一人ほどが入れそうな溶岩洞窟だ。

抜けた腰の代わりに腕だけの力で女は洞窟へと入り蹲る。

「どうして、こうなったんだろう？」

女はほんの一時間前のことを思い出した。

女は樹海の遊歩道を歩いていた。

富士の裾野の樹海と言えばオドロオドロしいイメージがあるが実はそうではない。

とても気持ちのいい木漏れ日が差す遊歩道だったりする。

しかしながら、それはあくまでも昼間に限ってた。

時刻は18:00近く、空は薄暗く回りは闇に染まっていた。

「うん、ここら辺でいいや」

女はおもむろに道から外れる。

道から少し外れるだけでそこは別の世界へと変貌する。

舗装されていない溶岩で固められた起伏のある原生林。

転びでもしたら良くて傷だらけ、悪くて死んでしまいそうな硬くてゴツゴツとした森はとても危険だ。

そんな場所に、視界も閉ざされ始める時間帯に入るのは自殺行為だ。

いや彼女自身、自殺志願者だからむしろ望む所だろう。

女には嫌な過去があった。

いや、嫌な人生が続いているといっても良いだろう。

容姿は平凡、何処にでも居るような顔。

性格は引っ込み思案で、口下手。

友達づきあいも下手で、変な所で壁を作ってしまう大学でも良く苛められていた。

何でもない平凡な人生どころか、落ち込んでいる人生。

だがしかし女には一つ特技があった。

それは相手の『欲しいものを知る』能力。

手順は簡単でただ知りたい相手を見ようと思って見るだけでいい、そうすると相手の欲しいモノが相手の声となって聞こえるのだ。

子供のころは重宝していた、相手の欲しいものを知りサプライズプレゼントといってたまにやれば相手はとても喜んでくれたのだ。

しかし、問題は大人になって行く頃からだった。

中学の頃、女には好きな男が出来た。

学年は一つ上のバスケットボール部のエースと噂される少年。

女は一目見てすぐに好きになった、一目惚れだ。

それから女の地獄がはじまった。

不用意に『能力』を使ってしまったのだ。

健全な中学生男子、思春期真っ只中で有り余った体力を運動で解消しているような人間が欲しがるものなんて高が知れている。

そして、それを知ってしまったのだ。

幻滅どころではない、一度好きになり自分の中で美しい存在まで格上げしていたのだ。

それは女の心に嫌悪感と恐怖心を植えつけるのに十分だった。

それから最悪だ。

他人にいつも嫌悪感と恐怖心を持つ事となり、自然と友達と疎遠に。口数も減り顔は俯きがちになり、彼女は次第に苛められてきた。

それから数年が過ぎ、彼女は一つの事を思い立つ、いや思ってしまった

自分はどれだけ人に振り回されて来たんだろう？

自分が決めたことなんてあるのだろうか？

そう思ったらもう駄目だった。

女の心は落ち込み、何もする気がなくなる、『鬱』という病気になっていた。

多くの人間のたどる道は大抵同じ、周りの人間や家族が支えるしかない。

しかし彼女の間違った決心は、思ったよりも早い行動を起こさせた。それが、この樹海に来た理由。

睡眠薬を大量に飲み、誰も踏み入らない樹海の奥で静かに死のうと思ったのだ。

しかし、睡眠薬を飲もうとした段階で横槍が入る。

ジャラジャラとアクセサリーを幾つもつけたチンピラのような男達が突然現れて、女の睡眠薬を奪い去ったのだ。

「なっ誰？」

「困る、困るんだよ…こんな死に方は一番ね？」

飲もうとした睡眠薬を目の前に掲げ下卑た笑いでこちらを見てくる、宵闇の暗さがあいまって気持ち悪く恐ろしい。

「こんなので死なれたら商品価値が下がりがねないんだ？ 睡眠薬としての生理作用的には問題ないんだけど、買い手の問題ってのもあるんだ。イメージが悪いわかるよねえ？」

クククと笑う男に女は後ずさる。

男達は迷いのない躊躇いのない動きで女を囲もうとする。その時、女は自分の『能力』で男達を見て知ってしまう。

「嫌、自分で静かに死ぬならまだ納得できた。犯されて、生きたまま解剖されて売られるのは嫌……」

女は洞窟の中でイヤイヤと頭を振り、外界からの全てを遮断するように頭を抱え込む。

「何で、何でこうなるの？ 私何も悪い事してないのに、どうして？」

「何でって？ そういう運命なんじゃねーのか？」

唐突に声が聞こえると同時に女の髪が掴まれ洞穴から引きずり出される。

「いやああああ！！！！」

「みーつけた。おい、少々時間が食ったさっさとやるぞ」

男の一人に乱暴に引きずり出され、抵抗も出来ずに女は引きずられる。

ガリガリと削れる背中 of 痛みを感じながら、女は諦めと共に呟いた。

「どうして？」

「悪い事もしなくてもよい事もしないだろう？ だからさ、おねーさん？」

響く声、女が声の方向へと頭だけを動かして見ると、そこには樹海の入り口で出会った男だった。

外話 樹海にて 後編（前書き）

今回も残酷な表現が入ってます。

苦手な方は戻るボタンで回れ右してください。
それでは本編をどうぞ。

外話 樹海にて 後編

「お前何者だ？」

「この様な状況で名乗ると思います？ 藍征会光仁組の吉澤さん？」

駐車場で出会った男は会った時の少年の様な無邪気な雰囲気は一切なく、自身溢れる不敵な笑みを浮かべていた。

黒のロングコートを羽織り、その下には濃紺のフォーマルスーツに似た軍服を着込んでいた。

「確かにだが……てめえ、どこで俺の名前を知った？」

「いやいや、臓器売買シンジケートで飛ぶ鳥を落とす勢いの吉澤さんの顔は有名ですから」

「タヌキめ」

吉澤と呼ばれた男は、しかめっつらで言い捨てる。

彼の言うことはあながち間違いではない。

吉澤と言う男は、日本に置ける自殺者で行方不明者の相関に目をつけていた。

日本に置ける年間行方不明者の数はおおよそ10万人ちかく、しかもそれは警察に受理されただけでそれ以上いるとされている。

では、逆に自殺者数と言えばどのくらいか？と言えば二万から三万だ。

そこで吉澤は気付いた、自殺者数の統計は行方不明者数で発見された人間がほとんどなのではないかと言うことに。

逆に考えれば、行方不明者が自殺者と言う形で発見されれば自殺者数が増える可能性が高いと言うことだ。

であれば、自殺者を生きている時に捕まえ、売れる場所を切り取り売る事が出来れば買い手が多いんじゃないかと吉澤は考えた。

それは吉澤の思惑通り売れた、新鮮な臓器が届くのだ売れないはずがない。

そしてそれは商売を始めた吉澤の名を、裏の世界に売るには充分だった。

だがしかし、吉澤は一つだけ気をつけている事があった。

「俺は一度も顔をシンジケートの会合以外に出した覚えはねえ」

そうなのだ、シンジケートの会合以外では吉澤は下の者はおるか顔すらだしていない、外注から発送まで総てネットワーク上での話なる。

だからこそ、名前はともかく顔と監征会光仁組の組み合わせは繋がらない筈なのだ。

しかし、目の前の男は簡単に言い当てた。

それを警戒し、吉澤は女の髪を掴んでいた手を離し、ベルトに挟んでいた拳銃を取り出し構えた。

「おい、手前えら。こいつ捕まえろ、こいつの背後調べて潰すぞ……？　おい？」

拳銃で動きを封じている内に男を捕まえるつもりだったのだろう、吉澤は後に居る手下の男二人に指示を出す。だが、いつになっても二人は動き出さない。不審に思った吉澤は振り返った。

「飯田？　吉井？　手前えらどこに行った？」

振り返ったがそこには誰も居ない、居るはずの手下二人どころかひきずって来た女すら居ない。

まるで最初から居ないかのように、吉澤の声のみが響く。

「…ククク」

獣の唸り声に似た含み笑いに吉澤が見れば、男が顔を手で押さえて笑いをこらえていた。

「てめえ何がおかしい!!」

「いえいえ、天下の光仁組の吉澤さんが手下二人が居なくなっただけで不安げに声をあげる…これを笑わずにいると？ 無理な話つてもんですよ？」

「…ふざけんな!!」

不安とないまぜになった怒りに任せたまま吉澤は、拳銃の引き金を引き絞る。

銃声は三発、身体を中心・頭と心臓に一発づつ。

教本通りの撃ち方、距離はおおよそ五メートル外すはズがない。

吉澤は殺ったと確信し笑う。

しかし、その瞬間

「甘い」

吉澤の左側頭部に衝撃が抜ける。

一瞬意識が飛び、何が起きたか解らない吉澤。

右手の拳銃は叩き落とされ、両肩に何かが乗っている感覚しか頭にしか入らない。

そして、吉澤は次に来た両肩に走る強烈な衝撃で意識を落とした。

「相変わらず、えげつないっすね隊長？」

「何がだ？」

吉澤の身体が有り得ない形に折り畳まれ、崩れ落ちたあと何も無い空間から男と同じ服を着た数人の男達が現れる。中には担がれた消えた吉澤の部下や女性もいた。

「突然の登場、相手の素姓を待機中のあいつらの部下から聞いておきアツサリとばらし動揺と恐怖の種を仕込む。更に相手に気付かれ無いように一人にして挑発、発砲をさせた上に強襲。拳銃を踏み潰すシャイニングウイザードから肩に乗り震脚、背骨の複雑螺旋骨折初めて見ましたよ…丁寧に関手の心を砕いて再起不能まで破壊…相手が外道とはいえ鬼ですね」

「…人間を無理矢理売り物にする外道には充分だ」

「隊長…充実してますね」

隊長と呼ばれた男に、後から現れた男が苦笑い気味に尋ねる。

答えた隊長の表情は、充実感に溢れた笑顔だった。

「俺らの力は理不尽な暴力に対する力だ！！」

「良い感じで纏めないで下さい」

「えげつない事の片棒担いでいるのはどいつだ？」

「あーすみません。んで、奴らはどう処理します？」

適当に答える隊長に突っ込む男だが、鋭い切り返しに話を変える。その変えた先は、気絶した二人の男と不自然に崩れ落ちた吉澤だった。

「さっき捕まえたワゴン車の奴らにやらせろ、流石に臓器が届かな

いと困る人間が居るだろう？」

「マジで鬼っすね」

「因果応報知ってるか？ 奴らのやった事はそのまま帰ってくる。自分の罪は自分で償うべきさ」

そこまで隊長は言つと目線で下がらせる、そしてまだ倒れ伏す女性に向き合つた。

「ねえ、お姉さん？」

「はっハイ！？」

明らかに今さっきまでの隊長と比べると、何かを抑えた雰囲気だ。そのギャップと整つた隊長の顔に先程までの生命の危機、女には『とある感情』が芽生えていた。

それは『吊橋効果』と 言われている。

「俺のモノになれ」

「はい」

それを去りながら見る先程の男は、相変わらずだと呟きながら樹海の夜に消える。

深夜の樹海、アスファルトの道を歩く隊長は、月に照らされながら電話で会話をしていた。

「あんたの情報通りだ。奴らの日本に置ける験体ルートはこれで総て潰した、ああそつだ」

先程までの戦闘服ではなく、深緑のパンツに黒のインナーにグレーのジャケットを羽織っている。

携帯を持つ逆の手にある水の入っているペットボトルをあおる。

「後は、海外のルートを虱潰しにすればいいが…ああ、いくらなんでも無理がある。出来るのは潜入している奴に期待だ。…俺か？それはどうかかな？」

男は愉しそうに話ながら歩く、先程までの戦闘なんて関係ないように。

「まあ、詳しい話は明日の夜に。オヤスミ、灯さん」

手慣れた動きで男は携帯を切り畳むとポケットにいれ、背伸びをする。

「さて、明日は高見原か…忙しいなあ！！」

男は見上げる先は十六夜の月が浮かんでいた。

外話 樹海にて 後編（後書き）

この話は『いつもの日々に戻るまで』に続きます

拳士 対 戦士

「…驚いた、名乗る奴とは思わなかったわ」

「本名ではないですが、出会った人に名乗るのは礼儀だと思うので
すよ Fr" a u l e i n（お嬢さん）」

「…ウザイ。後、年は変わらないはずだからお嬢さん呼ばわりする
な」

誠一の隣から心底嫌そうな声上がる。

実際、誠一からみても正直ウザイので気持ちは解る。

しかし、そんな彩の声とは裏腹に発せられる励起法の波動はユック
リと強まっている。

「…!!」

それは明らかに彩が目の中の男を警戒している証でもあり、誠一に
は衝撃的な事だ。

先程の彩の修練を積んだ動きを見て解る尋常ではない彼女の実力。
その彼女が警戒するレベルが目の中の、フランベルジェだ。

「…なああいつ強いのか？」

「さあね、名前と噂だけよ。話を聞くだけなら名づての掃除屋らし
いわ」

「掃除屋？」

「問題を解決したり、イザコザを解消したりとかね？ まあ、そこ
のフランベルジェと言う男は武力専門の掃除屋らしいけれどね？」

本来、裏の世界の掃除屋ともなれば何かしらの表に出せない不祥事
を秘密裏に処理する、その道のプロ。

しかも、その中の武力専門ともなればフランベルジェと呼ばれる男の力量はどれ程なのか計り知れない。

その為か、彩は隙を作らない様に気を張り詰め、励起法の深度を深めていた。

しかし、そんな彩の臨戦体制を無駄にする影が彼女の前に出た。

「ちょっと、何考えてるの？」

「俺にやらせてくれないか？」

「正気？」

「やりたい事がある」

前に出た誠一の背中を見ながら、彼の考えている事はきつとくだらなく短絡的な事だと彩は考える。

それはとても正解に近い。

「目の前の理不尽をブツ潰す！！」

「馬鹿な事言わないの、あんたの力量じゃ」

「…違うんだよ彩さん。俺は決めたんだ、自分の目の前で起こる理不尽をすべて潰すって」

「潰すってまた曖昧な…」

「それにね、女の子の後で戦うなんて嫌だ」

それが一番の本音かと彩は溜め息を付きながら一步足を退き、誠一と背中合わせになるように立つ。

「…わかったわ、任せたわ。そのかわり励起法の深度を深めなさい、じゃないと…死ぬわよ」

その言葉に誠一は無言で頷くと腰を落とし、深く身体を探る様に励起法の深度を深めた。

その誠一を満足げに笑って見ているのは敵である筈のフランベルジェだった。

「何がおかしい!!」

「いや何、少し嬉しくてね。私の事を正確に評価し、なおかつそれを素直に受け止めて戦う準備を行う…いいね」

クククとフランベルジェが愉しそうに笑う。

何か嫌な予感を彷彿とさせる笑顔を浮かべながらフランベルジェはユツクリと腰を落とす。

「私はね、強くなりたいんだ。最強の一角とも言われている兄に勝ちたいんだ。だから、悪いと思っているが…貴様らは私の経験の糧となれ!」

突如膨れ上がる殺気と同時に、フランベルジェが低い位置から飛び込む様に間合いを詰めてきた。

攻撃方法はおそらく組技、ヨーロッパ辺りで活躍していたと聞く限りではレスリング…汎用性を考えれば総合格闘技だろう。

動きを制限されそうなスーツを着ているので、予想も出来ない攻撃方法だ。

しかし誠一は慌てない。

誠一が思惟に師事してから六年、様々な技を教えて貰っていると思われがちだが実際は違っている。

誠一が教わったのは基礎の動きと、基礎の技のみである。その中で、誠一は一つの動きと一つの技を組み合わせる。

「!!」

フランベルジェは見た。

低い位置からのフランベルジェのタックルより、さらに低い位置から放たれる拳を。

「くつつ!!」

腰を極限まで落とした低い位置からショートアッパーの一撃と予想外の衝撃にフランベルジェは、ガードした腕に走る痛みにくぐもった呻き声をあげる。

先制の一撃は誠一だった。

しかし敵はさるもの、ヨーロッパにおいて名を知られるフランベルジェもただではやられない。

「ぐつつ!!」

誠一の放った技（運足『地龍』と拳技『小龍』の組合せ）と同時にフランベルジェは蹴りを放っていた。

普通ならば打ち込まれ、体勢を崩された状態での蹴りは余り威力はない。

しかし、効果は軽く蹴ったソレは絶大な威力を持っていた。

二人は驚きに満ちた表情でお互い同じ様にフランベルジェは右腕、誠一は右脇腹を押さえうずくまる。

フランベルジェは歯を食いしばりながら考える。

（何だ今の一撃は、あんな体勢で異常に重く鋭い一撃…手が痺れて動かんか、少し相手を甘く見ていたか。それと…何故効かない？）

（今のは蹴りか！？ あんな体制からの蹴りが、こんなに痛い…肋骨に痛みが走る。励起法の守りも相手に寄るのか？）

お互い疑問だらけの思考、一瞬だがお互いの動きが止まる。だが空白の時間はすぐに破られる。

実戦経験の差だろうか、フランベルジェがいち早く痺れる手を無理矢理動かし誠一の腰に腕を絡み付かせる。

「もらった!!」

これに誠一は慌てる。

息をしても響く肋骨の痛みに、動きが鈍っている時に捕まる。

それと先程の予想外の攻撃に警戒している為だ。

しかし、その時だった。

「…っ!!」

誠一の身体に異変が起きる。

いや、誠一の自分自身に対する認識が変わっていた。

それは、励起法の起動に近い感覚。

しかしそれは身体の筋繊維一つ血管、神経まで感じ、身体の生物としての全てを引き上げる励起法の感覚とは違った感覚であった。

その感覚の先は、身体の中に存在する『水』。

「何だと!! 何故だ!!」

フランベルジェの驚愕の声とは他所に、誠一は今の状況を正確に把握していた。

どういう原理かは解らないが、密着するフランベルジェから恐ろしいまでの『振動』を感じ、自分の身体の中の『水』がそれを和らげ受け流しているのだ。

先程の肋骨の激しい痛みは、多分この『振動』が原因かと誠一は当たりをつける。

「ならば!!」

しかし誠一が完全に理解するよりも先にフランベルジェが低い声で叫ぶと、『振動』が一段階ギアをあげていく。

「くつつあああああああああ！！」

密着された状態で、この攻撃はマズイと本能で感じた誠一はこの状態で打てる技を無意識で選択して…打った。

外話 高見原中央駅（前書き）

この話は毎度の事ながら『いつもの日々に戻るまで』の次話に繋がる話です。

世界観を深めて読みたい方はお進みください。

外話 高見原中央駅

森林都市や犯罪都市などと、ネットワークの海の中ではまこと密やかに噂されている地。

そんな場所高見原の一つに、オカルト都市と言う名前が出ている。そう言われるだけあって、この町には怪現象や心霊現象の目撃証言の類が多く、噂話が溢れている。

中でも有名な物は高見原七不思議と呼ばれている。

『桜坂の剣士』 『地獄列車』 『我が子を探す女』 『岩長神社の神隠し』 『人が消える坂』 『人食いお化け』 『行くと必ず恋人が別れるオブジェ』 『地獄へ続く洞穴』 の七つが今の所の七不思議だ。

七不思議は時代によって変わるので、全てが同じではないが今現在の主流はこれだ。

高見原の殆どは森で覆われている森林都市だ。

そうなったのは高見原村から高見原市になるとき、なるだけ森の緑はそのままにと言う開発方針が決まったお蔭だ。

その時、都市開発の時に問題になったのが、使える土地の狭さだ。例えば高見原の都市機能が大きくなり人口が増えた場合、普通ならばビルを建て上へ上へと広げ開発するのだが、森林都市と名を売っていた為に日照の事を考えて、あまり高いビルが建てれないと言う弊害が生まれるのだ。

だから当時の高見原開発の特徴は地下を中心に行ったらしい。その結果が高見原の地下には網目状になった地下トンネル道路と地

下鉄が存在している。

高見原市営地下鉄中央線 高見原

深夜 1:00

深夜の地下鉄はとても静かだ。

町の人間の九割近くが使っている地下鉄とはいえ、今の時間が時間なので地下鉄のホームは閑散としていた。

終電も近く、人はまばらだ。

そんな中、一人の男が酒気交じりの息を吐きながらホームのベンチでくだを巻いていた。

「クソッ、クソッ、クソッ…なんでだよ、部長の奴…俺の企画を何で通さないんだよ…」

男はブツブツと呟きながら両手を握ったり開いたりと動かしていた。ホームの一番端のためか、それとも男の異様な雰囲気のためか彼の周りには人は居ない。

「クソッ、クソッ、クソッ…俺の方が面白いのに、あんな奴の企画を通すなんて…」

俯き爪を噛み男はギリギリと歯軋りを立てる。

酒の力を借りているせいか男の言動は怒りを吐き出すように何度も何度も呟いていた。

そんな男の目の前に電車が止まる。

「高見原…高見原です。お降りの方はゆっくりとお願いします。こ

れは最終電車になります…お気をつけください…！！ 次の停車駅は…」

俯きがちの男は最終電車のアナウンスが聞こえない。

ブツブツと呟いているばかりで、全然気付いていなかった。

そうこうしている内に、電車のドアが閉まりゆっくりとスピードを上げて暗いトンネルへと消えていく。

男が最終電車を乗り過ごしたのを気付いたのは、それからきっかり五分後の事だった。

「チツ、ついてねえ…」

舌打ちを一つして男はベンチに寝そべる。

どうやら男は、このまま寝て始発で帰るつもりらしい。

横たわる男、それに気を利かせた様に構内の電気が落ち暗くなる。

所々に灯る非常等の明かりが浮かび上がるような緑色を主張しているため、完全な闇ではないのを男は満足して目を閉じた。

「…ん？」

唐突に男は目覚める。

軋る様な金属音が男の耳に届いたからだ。

「んあ？」

酒でむくむ目蓋をこすりながら男は身体を起こす。

照明はまだ暗いままで灯ってはいない、しかしこの音は何だと頭にまで響く音に頭をしかめながら男が頭を横に向けると音が唐突に止

まる。

何だ？と男が目を凝らせば、黒塗りの列車がホームに入ってきていた。

どうやら先程の音は列車の止まった音らしい。

それよりも男の注意は目の前の物、不気味な漆黒の列車…男の酔った頭でも解る。

非常灯の淡い光ごしでもとても不気味な雰囲気醸し出していた。

「……………」

「…ん？ 何だ？」

男は気付く。

どこかで何かが聞こえてくる。

周りを見渡すが音を発する物はない、それどころか先程の列車のとまる音が治まったために逆に静寂を感じる。

「……………」

また音が聞こえる。

いや違うと男が耳を澄ませば声が聞こえた。

「……………」

目を閉じ耳を澄ませば……どうやら声が聞こえたのは目の前の列車らしい。

ゆっくりと男は好奇心のみで止まった列車に近づく。

「……………」

近づけばとてもよく解る、どうやら目の前の列車はコンテナのようだ。

男はコンテナに耳をつけ澄ました。

「
た
す
け
て
」

それからの男はどうやったかは覚えていない。

おぼろげに覚えている事は酔った足をもつれさせながら逃げた事だけだった。

理解

「……………」

誠一はベッドの上で目を醒ました。

よく見知った机に本棚、天井の近くの壁掛けの時計や枕元の携帯電話、話用充電器におかれた誠一の携帯電話。

「…？」

多分ここはよく見知った自分の部屋だと寝ぼけた頭で理解はしていたが、此処に帰って来るまでの過程の記憶が誠一の頭からスッポリ抜けていた。

「…えっと、思惟さんの鍛練の後に……………」

「やっと思きた？」

思い出そうとした時、扉から一人の少女が現れる。

デニムのパンツにホワイト系のカットソーを着た少女、特徴的な釣り目がちの目元を見れば昨日誠一と一緒に戦った彼女だった。

「…君は」

「改めてはじめましてね、私の名前は彩。折紙 彩よ」

誠一が何かを尋ねる前に自分は『折紙 彩』と名乗る少女は、誠一が起き上がったベッドの横に椅子を引き寄せ座りながら自己紹介を始めた。

その行動に慌てた誠一は慌てて座りなおそうと身体を捻った瞬間、

背中に激痛が走りベットに逆戻りする。

「無理しない事。何をやったか知らないけど身体がボロボロよ？昨日あなたが恐らくだけど相打ちで倒れた後の事は教えるから、身体の治療能力を上げる励起法をしながら寝ながら聞いていなさい」

ユツクリと身体を横たわれさせられながら、誠一は思い出した。

「そうだ俺、昨日襲われて。フランベルジェって言う奴と争いになつてから…あれ？ あいつに組まれてからの記憶がない？」

「そこよ。あなたは昨日あいつと組んだ後に凄い音をたててから、あなた達二人とも崩れ落ちたのよ」

言われて誠一はようやく思い出す。

あの時、組まれて嫌な予感を感じた誠一は、組んできたフランベルジェを振りほどくべく思惟から『禁じ手』として教えられていた『崩震』を無意識で打っていた。

「何か心当たりあるの？」

「うん。多分、まだ打てるだけの身体が出来てないから『禁じ手』にされてた『崩震』を打った反動だと思う」

『崩震』とは、『励起法』によって強化された身体全体の筋肉を使い密着状態で体当たりをかける技である。

そして、この技には欠点が一つあった。

身体全体の筋肉を使う為、身体にかかる反動を相殺しきれないのだ。

「まあ、身体が出来ていてなおかつ身体運用が上手く出来ていれば反動が少なくすむらしいんだけどさ。…まだ未熟だった」

「しかたがないわよ。あの時は持ち得るモノでしか戦うしかなかった

たんだしね。それに相手が『崩壊のマエストロ』と言われている能力者だから」

少し反省しながら話す誠一に彩は、氣遣う様に話し掛ける。
誠一はそこで気になる単語を聞く。

「…能力者？」

「そうよ。あれ？ 言ってなかったっけ？」

「言っても言わないも、俺と君は会って話したのは昨日が初めてだし」

そうだった？と笑いごまかす彩は、慌てて説明しだした。

曰く、世界には能力者と呼ばれる、奇跡の如き技を使う人種がいると言う。

能力者には大別して三種類のタイプに分かれる。

一つは特殊感覚器系『識者』タイプ、このタイプは感覚器と名がついている通り人を超えた知覚を持つ。

二つ目は特定認識物及び特定操作系『導士』タイプ、このタイプは特定物（水や珪素など）や特定操作（分解や結合など）の操作に長ける。

最後は空間内絶対支配系『法師』タイプ、このタイプは認識できる領域を絶対支配し他の能力者を凌駕する『神域結界』を形成、能力者の意のままに世界を操作する。

誠一はそこまで聞いて、疑問の言葉をあげる。

「…それじゃあ、あのフランベルジェって奴も能力者って奴か…俺よく無事だったな。いや、あんまり無事じゃないか」

「…？　なんか認識に齟齬があるみたいだけど、あんたも能力者よ」

「え？……ええええええええ！！！」

思っても見なかった返答に誠一は、身体が動かないので驚き目を見開く。

「…なんつ、なにゆえ？」

「驚くところはそこ？」
「と言うか、知らなかったの？」

「知らなかったどころか初耳だよ、と言うか確かなのか？」

「確か何も、あなた**励起法**を使ってるのが証左。**励起法**は能力者にしか使えないの」

「マジで?」

「マジよ、大真面目」

なんだそりゃと溜め息をつきながら誠一は考える。

あのフランベルジェと対立し捕まった時。

時、誠一の感覚は加速した様に感じ身体を流れる水の分子を事細か

に感じ取れていた。

「まさか…」

誠一は感覚が彼自身の意志によって加速する、身体に含まれる水・
・いや酸素原子一つ水素原子二つならば分子・・をすべて感じ取れる。

励起法とは別の視界や感覚。

誠一は自分の感覚が教えてくれる能力の運用通りに使う。

「ヤッパリ」

誠一は痛みなく身体を持ち上げれていた。

その様子を黙って見ていた彩は、不思議そうな顔で誠一に尋ねる。

「何が？」

「俺の能力がわかったんだ。あと、あいつのフランベルジェの能力」

立ち上がり身体を滑らかに動かしながら、自分の動きを確認する様に見ながら誠一は答える。

「俺の能力はどういう原理かは解んないけど『水の分子操作』だと思っ
思う。その証拠に身体の中の水分子を操作して、自分の身体を動か
してる。自分の身体を筋肉で動かしてないのに動く…何か気持ち悪
い」

「それは良かったわね」

「それとフランベルジェの能力は多分『振動を介した物質分解だ』。

…俺の水分子操作で振動を散らしたせいで、あいつの能力を減殺し
たんだ…なんか解つ…」

「ねえっ！！！」

熱中して話していた誠一は、彩の声で気付く。
頬を少し紅く染めた彼女の視線がよそを見ていた。

「……？」

「身体が動くなら服着なさいよ」

そこで誠一は初めて気付く、自分の身体は所々湿布や包帯を巻かれて裸同然だった。

副話 八年前の高見原（前書き）

この話は『変わる世界』における外伝の話になりますが、本編と深く関わるので『副話』とさせていただきます。

副話 八年前の高見原

高見原某所 深夜2時20分

そこは紅で埋め尽くされていた。

ひび割れた壁、水蒸気を吹き出す壁を伝う数多のパイプ。

それらを轟々と燃え上がる炎が舐める様に揺れ動いていた。

天井にも這った様に張り巡らせたパイプは崩れ落ち、照明は割れてスパークをあげている。

床は血でまみれ、多くの死体が転がっていた。

まさに地獄絵図と言った様相の場所に二人の男女が立っていた。

一人は長い黒髪の女性、美人の部類に入るだろう目元が少し釣り目がちな所が特徴的の白衣の女性。

女性は頭から血を流しながら、一人の女の子を抱えていた。

もう一人は長身の男性。

180cm近くの背の高さで全身を白銀のレインコートで身を包み、顔をフードで覆い隠している。

二人は炎の中で相對していた。

女性は炎の中、揺らぐ空気越しに白銀のレインコートのフードの中にある眼を見詰めて口を開く。

「ごめんなさい。私、あなたに辛い選択をさせる」

女性は涙を堪えるように、顔を歪める。

「でも、それでも私は!!」

「もういい、それ以上言うな。解りきっていた事だ、解っていて君はその道を選んだんだ」

レインコートを着た男は頭を振り、良く通る低い声で呟くように言う。

「君は君の道を選んだ様に、私は私の宿命通りに動くだけだ…」
「……」

その言葉を受け、女性は悲しそうに目を閉じた。

パキ

「しかし、それと私達の関係は無関係だ。そうだろう、奈緒美さん？」

男はそこまで言う顔にまでかかったフードを取り去る。

あらわれたのは、無精髭を生やし鷹の様な鋭い目をした青年だった。

「…葵、あなたは、それでいいの？」

パキ

「それでもだ。これでも現状は理解している。君の残された時間が

ない事も、助けたい人間を私に託そうとしている事も」

パキパキ

「知っテイるのね？」

そう言いながら奈緒美と呼ばれた女は、血に塗れた頬に手を当てた。そこには人の肌にはあるまじき亀裂の様な輝があり、乾いて剥がれ落ちていくかの様な肌の下からは爬虫類の鱗が覗かせていた。

それは彼女の頬のみであらず、顎から首筋にかけてや少女を抱える腕にも見えた。

「その姿をみれば、口伝を伝えてきた旧家の者ならば検討がつく。それに…『俺』は知っている。君も知っているはずだ」

「そう、そうだったワネ。霧島の人間以前に貴方ハソう言う存在ダツタわね」

奈緒美は変わりつつある声帯のせいか、発音が段々おかしくなっていた。

その声はやはり爬虫類が鳴らす喉の音の様に掠れつつある。

それを感じ取り、葵と呼ばれた男は口許を軽く歪めた。

「時間がないな」

「ええ、今私の『能力』はアレのせいで反転して別物になっチャツてるから解析デキないケレド、おソラくは後10分も経たずにワタシは…」

「…話の流れを切つて、すまないが葵、時間だ」

その時だった。

二人の会話を切るように、第三者の声がかかる。

「アナタはナナギさん？生きてイタのですか？」

「ああ、お久しぶりだ『折紙 奈緒美』。以前、世話になった君に、この事態で会えたのは何とも不思議なものだ」

声の出所は二人の間、そこには炎の揺らめきとは別の『空間の揺らぎ』とも言える様なものからだった。

その揺らぎの中から、水面から浮かび上がるように一人の男が現れる。

空間の揺らぎから現れた男も、葵と同じくウィンドブレイカーのフードで顔を隠していた。

唯一違うのは露出している筈の顔の下半分が、白い仮面で覆い隠されている。

「妹の件で君には感謝している」

「イイエ私は何もデキナカタ。ダカラ、ワタシはアナタに…」

「…いいさ、今さらだ。あの時、君の口添えがなければ妹も…」

「サナガラ今のワタシは因果応報表わシテいるデスね」

自嘲気味に笑う奈緒美に葵は顔をしかめ、ナナギと呼ばれた男は肩を落とす。

「何でもかんでも背負うな奈緒美、これは最早お前だけの問題ではない」

「そうだ、七風の言い分に私も賛同する。確かに君の行った事は褒められたものではない。だけど、君の行動で助かった者も居る。それを忘れないでくれ」

二人の言葉を受けて奈緒美は変質する頭を必死に奮い立たせ、アリガトウと呟く。

彼女は少し、ほんの少しだけ救われた。

そんな気になったのは一瞬。

彼女の身体は限界を迎える。

ユックリと、ほんのユックリとだが皮膚の下が胎動し始めたのだ。

「奈緒美さん!!」

「ワタ、ワタはワタシはイイ。それよりもコノコを…」

奈緒美の身体や、顔が崩れはじめる。

足はユックリと沈み込むように曲がり、顔が潰れていく。

そんな状態で骨が抜けたような腕を使い彼女は、抱えていた少女を前に出した。

「…七風、頼む」

それを見た葵は視線だけを動かし傍らに立つ七風に、少女を安全な場所に連れていく事を頼む。

「お前達は友達何だろう？ 私がやらなくてもいいのか？」

「七風…いらぬ気遣いだ、気持ちだけ貰っておく」

「そうか。ならば霧島、私からも頼むよ彼女を」

奈緒美から少女を受け取った七風は、返す足で葵に聞いた。

しかし、その答えは決意に満ちた答え。

答えを返した葵を理解したのか、七風は似たように応え少女を抱えたまま来た時と同じように空間の揺らぎに消えていく。

それを見届けると葵は再びフードを深く被る。

「奈緒美さん…覚悟はいいですか？」

そう言うとき、葵は、レインコートの腰元に手を入れて抜いた。右手に持たれていたのは、二尺五寸の反りを持つ鉄の塊。

「グッグガガガッ」

突如として叫びはじめる奈緒美、それに動揺も見せずに対峙する葵。

「まだ理性がある内に、あなたが人である内に」

奈緒美の身体が急激に崩れはじめる。

手足は鱗を持つ軟体動物の様な姿になり、身体の至る所からは白衣を突き破りピンク色の触手が周囲の死体を喰いはじめる。

顔の皮膚は鱗にまみれ、死体を吸収している為か俯き加減の身体が徐々に膨張を始めていた。

彼女の全てが化け物へと変わっていく。

そんな中、一つだけ変わらぬ物があった。

彼女の理性の光が残る瞳だけ。

「だから、あなたを斬るよ。…行くよ、奈緒美さん」

膨張を続け巨大になっていく奈緒美の瞳を見詰めて葵は呟く。

「霧島神道流、霧島葵。参る」

協力（前書き）

お久しぶりです!!

ようやくテスト期間が終わり書く時間がとれました。

急いで書いたので誤字脱字があるかもしれません。

その場合は御連絡下さい。

では本編の方をどうぞ!!

協力

「…えっと。話をまとめると、八年前行方不明になったお姉さんの手掛かりを求めて高見原に来たと？」

顔を真っ赤に染めたまま彩は、視線を外したままコクンと頷いた。あまりの事に気まぎれになった彩が、話を変えるべく話しはじめた身の上話。

気まぎれなのは誠一も一緒に、顔を壁の方へ向け受け答えをしていた。実の所、顔が真っ赤なので顔を合わせづらいのは誠一も一緒だった。りする。

高見原市岩戸町三丁目 『児童養護施設・森ノ宮』 103号室

気まぎれな雰囲気の中、誠一は似たような話を最近聞いたなと頭を捻る。

行方不明とかそういう話…と誠一が考え込むとふと腐れ縁の七瀬桂二の顔が思い出される。

「ああ、そっか。七瀬から似た話を聞いたっけ」

「似た話？」

「いや、似た話と言うか行方不明ってのが共通点の話を、良く聞くん。最近じゃ隣のクラスだったかな？ 篠崎って女の子がこの間から行方不明って聞くけど…なあ、まさかと思うけど…」

誠一の言う通り、最近の高見原において行方不明事件が多発していた。

噂好きの自称情報屋の友人がいる誠一にはそんな話しがよく耳に入る。

そんな中で昨日の襲撃。

一つの予想が、誠一の頭に浮かび上がる。

「最近の行方不明事件の原因ってあいつらなのかな？」

「確証は無いから断定は出来ないけど、可能性は高いと思う…」

「そっか…」

「…何？ 今流行りの『桜坂の剣士』みたくな悪人を潰してまわるつもり？」

神妙な顔をした誠一に彩は皮肉げに聞くと、違うよと頭を振る。

「なあ、聞きたいんだけどさ。能力ってなんなんだ？」

「ん〜能力か。日本では能力とか、神通力や超能力とかいうんだけど。この国が世界に誇る『辰学院』の話じゃあ概念的には西欧の『ギフト』に近い遺伝的脳疾患らしいわよ」

『辰学院』世界に数箇所ある『世界的な最高学府』の一つ。
そこにある『脳科学研究室』において提出されたレポート。

「遺伝的脳疾患？」

「辰学院から出回った『重金レポート』によるとサヴァン能力を現させるサヴァン症候群の発展系と言われているわ」

「サヴァン症候群？」

「聞いた事ない？ 一瞬にして目で見たモノを記憶して絵で再現出来たり、何十万桁の計算を一瞬で計算出来るとか？」

そんな話を誠一は確か誰かから聞いたなと、臆げに思い出す。

「聞いた事がある。でもそれって漫画の話じゃないのか？」

「違うわよ、本当に存在する病の話。話によると大量の本を一回読んだだけで記憶して、ページ数から内容を一言一句間違えずに答える所か逆から読んだ男が見付かったのが最初と言われているわ」

「それは凄いな。そんな事が出来るなら、人生楽しいんだろうな」

「そうとも限らないわ。サヴァン症候群、病って言ったでしよう？この病には別の障害が出るのよ『知的障害』や『自閉症』がね」

そうサヴァン症候群とは賢人病とも呼ばれ、一種の天才を作る病でもある。

しかし、天才になる代償を支払うように、大部分の人間は脳に障害を負うのだ。

その話から誠一は続ける。

「あれ？ 君が言うには能力者はサヴァン症候群なんだろう、だったら俺も自閉症？」

「あなたね、自閉症の人の家族から怒られるわよ？ 言ったでしょ？ サヴァン症候群の発展系だって。重金レポートによると能力者を発現する能力遺伝子とサヴァン症候群を発現する遺伝子が似通っているらしいわ。けれど能力者とサヴァン症候群の違いはいくつもあるわ、自閉症にならない・発現する能力の次元が違つとかね？」

「うー何か頭が痛くなつてきた。要するに、一番最初に言つた『能力者はサヴァン症候群の発展系』つてのでいいんだな？」

概ね間違つてはいないので彩は頷く。

しかしながら能力者や超能力やら、フィクションのファンタジースFの様相をていしていたが思った以上に科学的な話になって誠一は驚いていた。

そして誠一が、一番気掛かりだった事に結び付く。

「遺伝的って事は、俺の親も似た能力を持っているって事かな？」
「おそらくね。大体の能力者の親子は似たような能力を…」

そこで彩はハタと気付く。

彼の、自分の居る場所の名前を。

「ここ児童養護施設とか銘打ってるけど、ぶっちゃけ孤児院なんだよな。でさ俺、前から思ってた。何で自分には親がないんだろう？ 何故捨てられたんだろうって。自分のルーツについていつも考えてた。そんな悩みを持っていた俺に昨日の戦いや君の話。聞いて思った。これは予想だけど能力者ってのがキーワードで、全て繋がるかもしれない。だから…」

誠一はベッドの上のにのせた自分の手を見る。

彼はいつの間にか拳を握っていた。

昔から持つ怒りにも似た衝動や、それを打破するべく欲した力。今考えれば誠一が何かを欲し、得る為だったかもしれない。

「だから、俺は君に協力したい。俺の目的『理不尽を打ち破る』と『自分のルーツを知りたい』に対して一番の近道だと思うから…頼む」

そう言いながら誠一は頭を下げる。

それを見て彩は少し顔を曇ら俯いた。

「…」

「俺の技量から言えば君にとって足手まといかもしれない…けど！」

「…ない…」

「…ん？」

「あーもう。そんな事聞いたら断れないじゃない!!」

だんまりと俯いていた彩に誠一は断られそうだと思い、更にたたみ掛けるように懇願するが結果は真逆。

「別にいいわよ。こんな広い上に入り組んでいる町、一人で探せるとは思えないから…」

言いながら彩は手を差し出す。

「だから、よろしく」

「…！ ああ！！ よろしく」

鍛練

戦い駆け引きの基本と言えば、見る事だ。

正確に言えば相手の攻撃を瞬時に理解する事。

そうすれば相手の攻撃に対して、上手く対処する事が出来る。

それは…。

「くっ当たらない!？」

「当たり前よ。私の能力『モーション エモーション』の真骨頂は相手の感情や行動を読み取り、瞬時に相手の行動の先を読む未来予測系能力。君の動きは見切ったわ」

「ヒデエ、何という出来レース」

「無駄口叩いてると、危ないわよ!！」

瞬間、誠一の身体から力が抜ける。

誠一の感覚を借りれば、身体力が吸い取られるような感じ。

組み手をしていた彩の手元を見れば、誠一の手首を極めている。

「…アダダダ!？」

「学習しないわね。能力者の戦いの基本は高速戦闘。気を削いだら、そこで終わりよ。だからちゃんと相手を見据えなさい!！」

極めた手首をそのままに、彩は立ち位置を変え誠一を芝生に倒すと組み伏せる。

「守部神道流『地縛り』…解った？ 気を抜くと直ぐに死んじやうわよ……………」

「グッ……………」

「……………」

後ろ手に肩を極められ芝生に組み敷けられ、誠一は身動きすらとれない。

しかし、誠一のうめき声は何処かしら喜色めいたモノだった。

奇妙に思った彩は、自分自身の能力で誠一の感情を見た。

途端、彩は顔を赤らめて極めている手と別の手で誠一の後頭部を殴り付ける。

「バカッ！！ スケベ、あんたね！！」

「アダッ痛い痛い、だって腕につ」

「訓練中に不埒な事考えるなー！！」

原因は極めていた誠一の腕に、彩の胸が当たっていたからである。

「『ささやかな膨らみながら柔らかい』って、どう言う事よー！！」

「ちよっ彩さん、イダダッ謝るから励起法で殴るのヤメー」

それとなく平和な一時である。

高見原市桜区東川端公園 午後2時

高見原の中央にはデンと大きな中洲がある。

その全長は小さな町であれば、一つ二つスッポリと入る位の巨大さだ。

大きな中洲の北東端にある川に面した場所に、誠一と彩は居た。

二人は背中合わせに座り、誠一は後頭部をさすりながら彩はソッポを向きながら佇んでいる。

「彩さん、ゴメンって。なんつーか、男の性でして自分としては許して欲しいなーと」

「……………」

ヤレヤレ失敗したなと誠一は溜め息混じりの息を吐くと、ここ三週間位の事を思い返す。

この町には住んでいる人間には解らない異常がある。

一つは事件が起こっても中々表にでない、これの良い例が先日の襲撃だ。

この間あれだけ暴れたにもかかわらず、テレビどころか新聞にすら載らない。

念の為に噂好きの友達兼情報屋の七瀬桂二に確認をとったところ、そんな噂すら聞いた事がないそうだ。

二つ目に、この町の能力者の数と場所の特異性だ。

これが発覚したのは、彩の『この町では能力が使い難い』と言う事から始まった。

彩の話に因れば、能力の基本は世界を形成しそれを通して発現する事らしい。

識者であれば自分自身の内面世界と言うフィルターを通して解析する。

導士や法師であれば自分の外に展開した世界を使い発現するのだ。

しかし、これらの世界（神域結界と言う名称がある）には弱点がある。

神域結界同士で干渉しあって、神域結界の展開範囲や能力の出力に影響を与えてしまう。

それが『この町では能力が使い難い』の発言に繋がるのだ。

この町では能力者の密度が高く、神域結界が張りつらいらしい。

そして、三つ目がこの町の始まり。

「もう、良いわよ。そう言うのが男つてのは知ってるし」

思考に埋没する誠一が、彩からかけられた声で帰ってくる。
振り向けば少し頬を朱くした彩が、こちらを向いていた。

「でも、スマン」

「良いわよ……そんなふうに見られたのが初めてだから、恥ずかしかっただけ……だからほら、貴方が友達から預かったものを見せて」

そう言われるままに、誠一は傍らに置いていたナップサックから書類ケースを取り出し、中から紙束を渡した。

「『桃山財閥に関するレポート』か、本格的ね」

三つ目は人口千にも満たない小さな村を、十年そこらで人口百万人の政令指定都市に変えた桃山財閥と言う企業の事である。

誠一は七瀬に頼み、桃山財閥の事について調べて貰っていたのだ。

「やっぱり、このレポート凄いわ。知りたい事がしっかり書いてある。君は読んだ？」

「一応目は通したよ。だけど良く解らない」

「もうっ、良いわ少しだけ説明してあげる」

彩は呆れながら話を続ける。

レポートに書かれていたのは桃山財閥が、この町を開発するにあたって開発した順番だった。

「研究所？」

「そう、この町の始まりは海原区にある研究所から始まってるらしいわ。それから第1〜8研究所まで増やしてそれに伴い……やっぱりおかしい」

「おかしい？」

「研究所の設置目的よ。ほら、ここの記述見て」

肩を寄せて彩の持つレポートを覗くと『高見原における微生物による次世代バイオプラントの研究』と書いてある。

何故と首を傾げる誠一を尻目に、彩は話を続ける。

「最近の噂なんだけど聞いた事はない？ 『超能力が使える薬』」

副話 彼等の知らない場所で 前編（前書き）

この話は、『変わる世界』『いつもの日々に戻るまで』の裏話のよ
うな物です。

本編とはあまり関係ないので読んでも読まれなくても同じように楽
しめますが、世界観が良く解るのでより楽しむには読まれてくださ
い。

では、どうぞ

副話 彼等の知らない場所で 前編

福岡県某所 コンテナ置場

潮混じりの波風が吹く、港に近い深夜のコンテナ置場。

普段ならば強く吹く海風が起こす風の音や搬入用の機材の音、遠くから響く船の汽笛の音が聞こえてくる暗く静かな場所のはずだ。

しかし、今この時は違った。

鳴り響くのは雷鳴のごとき銃声と、銃口から吐き出されるマズルフラッシュで周囲は照らされる。

積み上げられたコンテナの一つが開かれ、数人の男達が黒光りする銃を乱射しながら立て籠もる。

それを囲むように立ちはだかるのは、統一された黒い戦闘服と頭をスッポリ覆い隠すヘルメットを被った集団だった。

「2から4までは二人一組で当たれ、呪紋儀式で処理した盾は普通の銃弾は通さん安心しろ。訓練通りにやればいい、等間隔で押し潰せ。注意するのは中の物資を崩さん事だ」

飛び交う銃弾、次々と倒れ伏す人間を眺めながらコンテナに背を預け指示をだしているのは、金髪に碧い目をした青年いわずと知れた三剣風文。

彼等は裏の世界で『風天』『暴風』の名で馳せる三剣風文と、その彼が率いる『第三隊』の見習い隊員であった。

『第三隊』

だれがそう呼ぶようになったかは知らないが、裏の世界でその名は恐怖の対象だ。

統率された無駄のない集団戦と、疾風迅雷の如き戦闘時間の短さが売りの第三隊。

だが恐怖の対象になるのは別の理由からだ。

それは作戦成功率九割超の高さ、主に標的になる裏の世界の人間にとっては恐ろしい事この上ない。

しかし、この場にいるのは見習い。

「吉岡、前に出過ぎだ。根古谷みたいに慎重になりすぎるのも問題だが突っ走るな。飯島…少しポイントがずれ込むな、本隊に戻ったら再訓練だ…いいな？」

溜め息混じりで指示を飛ばすと風文は、戦場から目を離さないように思考に埋没する。

今回の彼等の目的は『とあるターゲット』の包囲殲滅を兼ね、実戦経験を積む事だった。

しかしながらと風文は最近の新人の集中力のなさとアクの強さに辟易する。

指示した通りに動かないので隊列が乱れる、集中力がないから精確さに欠ける。

指示通りに動けないならば仲間の誰かが死ぬ、集中力が欠ければ作戦成功率が下がりこれまた死人がでる。

事態は少々問題で、隊の指揮にも関わってくる。

こりゃ教導隊の方から再訓練しなきゃならんか、と風文が思考を締めたその時だった。

「何だ？」

コンテナが形作る通路の闇から、同じ装備で今戦っている戦闘員とは纏う雰囲気が違う人影が染み出る様に現れた。

「封鎖している場所に侵入者です」

「排除しろ」

簡潔な報告に風文は簡潔に命令を下す。

しかし報告に來た人影は、どうすれば良いかと少し戸惑いがち話を続ける。

「いえ、それが……時枝さんと日向さんです」

「…何？」

思いもよらぬ人物の名前があがり、風文の声のトーンが少し上がった。

途端、声に続ける様に闇の奥から喧騒が近付いてくる。

「思惟さん、今は作戦行動中です。お話は後で伺いますので!!」

「あんたの主と一緒にでこつちも色々忙しいのよ。会える時に会わないと次は何処で捕まえられるか解らない、解る？ 理解したら、どきなさいフレイヤ」

「しっ思惟さん!？」 確かに私は直接会って言いたい事があるって言いましたけど、そーいう事ではなくて!？ アアア、ごめんなさいフレイヤさん」

風文が喧騒に目を向けると、身体の小さな作務衣姿の侵入者を抑える長身の金髪女性と、それを慌てながら見ているスーッ姿の女性。何と言っていいか解らない力オスな光景に、風文は戦闘の事を一瞬忘れ声をかける。

「……………何してるんだ？」

「隊長！！ すいません、止めたのですが思惟さんが聞いてもらえず……………」

「風文！？ ようやく見付けたわよ、覚悟しなさい！！」

「ああつ、仕事中にすみませんつつ」

「良いから。おまえ等、落ち着け」

思い思い自分勝手に喋る三人に、風文はコメカミを押さえながら制止をかける。

「……………聞きたいんだが、何しに来た？」

「えっと、それは……………」

「最近の高見原についてあんたに聞きたい事があつたからよ！！」

スーッ姿の女性『日向 明日香』の言葉を遮るように、作務衣姿の時枝 思惟『が前にでて吠える。』

明日香はそれを怒るでもなく肯定するように、思惟の後ろでウンウンと頷いた。

「高見原について……………なんの事だ？」

「惚けるな風文。昔っから、あんたが何も知らない顔をしてる時は大概たくらんでいる……………さつさと言った方が身のためよ」

「失礼な、誰がいつ企んだって？」

「高校の時の『影の生徒会事件』や『学生シンジケート壊滅事件』を始めとした数々の事件を忘れたとは言わせないわよ？」

「何の事やら？」

唐突に始まる二人の言い合い。

話の内容から、二人は学生時代からの知り合いらしい。
言い合いながらもお互いに気負いや遠慮もない親しい話し方から、

二人の関係は古くからの友人の関係なのだろうと推測できる。
そんな愉しむように言い合いをする二人を、フレイヤと明日香は呆
れ返る様に見ていた。

「フレイヤさん、あの二人って」

「以前聞いた話によれば中高とわたつての同級生らしいです。隊長
は腐れ縁だと言っていました。私はそうは思いません」
「そうね」

フフフと笑い会う二人。

もう一組の二人とは温度差を感じる。

副話 彼等の知らない場所で 中編

「あんた解ってるの？ 私があの時どんだけ被害を被ったか？」

「だから、あの時も言った通り相手の勘違いだ」

「どこをどう間違ったら私が影の総裁になるのよ！？ 普通に考えれば内容おかしいでしょ？ あれからしばらく、友達を始めとして皆怯えて近寄って来なかったのよ、本当にありえないわよ！！」

「まあ、それは俺のミスかもしれんが、俺に責任追及はお門違いだ。まさか、あんな中二病な設定を信じるとは思わなかったんだ」

「ちよつとまでー！！ あんた噂を流布するためにどんな話を流したのよー！！」

銃の撃ち合いをしている傍らで、鼻先を突き合わせ今すぐにでも噛み付きそうな二人の言い合いは続く。

戦場の傍らにしては、話の内容は少々マヌケだが本人達はいたって真面目だ。

そんな二人を見ていた二組の瞳の持ち主が、同時に肩を落とす。

「……話を聞きに來ただけなのに、何でこうなるのかな？」

「少し放って置きましょう。あの御二方はいつもあんな感じですよ。それはともかく……失礼ですが日向さん。こちらの作戦場所はどのようにお知りに？」

この第三隊は思いの外、規律が厳しい。

とある企業の私設軍隊なのだが、その中の規律は本物の軍隊並に厳しい。

特に情報関係の規律はそれ以上に厳しく、情報漏洩の場合は状況にもよるがほとんど執行部により肅正されるという徹底ぶりだ。

そこまで厳しい隊の中で、この作戦場所を知られたのはフレイヤに

とって不思議でしょうがなかった。
しかし、返って来た返答は意外なモノであった。

「えっと、本来ならば私が紫門さんに聞く予定だったんです。ところが紫門さん急に仕事が入ったらしくて、仕方がなく思惟さんを紹介してもらったんです」

その人物の名前をフレイヤは良く知っていた。

『七風紫門』

風文の友人にして潜入工作を主とする第四隊、そこに属する世界でトップクラスの工作員だ。

しかし、それでも疑問は尽きない。

紫門であっても情報を漏らすはずもない、『情報の大切さ』そんな事は彼ならば知って当たり前のはずだ。

「では、紫門さんから？」

「んー違うかな。思惟さんが電話かけて簡単に教えて貰ってた」

「簡単っ？ それは…？」

規律の厳しい第三隊において『簡単に教える』輩がいる、または情報を簡単に知る事が出来る存在がいる。

どちらにしても第三隊の纏め役の一人のフレイヤにとっては、とても頭の痛い事である。

あっけらかんと返す明日香にフレイヤは、焦燥に焼かれる気持ちを声に出さないように問い掛けた。

しかし、その返答はフレイヤの想像と違った名前を出した。

「…えっと、たしか天中さん…だったかな？」

「天中つまさか、名前は？」

「確か、観星って…」

「マスター!!」

「解ってる!! チッここでそれか!! 観星の奴、なんてタイミングだっ!!」

明日香が名前を告げた途端、フレイヤや風文が弾ける様に動き出した。

「ルーキーどもは掃射しながら撤退準備!! 何かあったら逐一報告しろ。フレイヤ特殊発令だ、結界班に周囲4Kmを封鎖する様に通達!!」

「了解。バックアップはどうしますか?」

「必要ない!! 待っていたら全滅だ。ここの戦力だけで片をつける。問題は取り逃がす事だ、急げ!!」

二人は互いの頭についているヘッドセットに、半ば怒鳴る様に指示を出し始める。

その様子を見た明日香はあきまでノンビリとした雰囲気崩さず、腰を引きながら近くで溜息をついていた思惟に疑問を投げ掛けた。

「私何か変な事言っただけでしょうか?」

「変な事はいつてないわ。問題は貴女が教えた名前」

「名前…ですか?」

「そうよ。話は少しそれるけど、この世界には神が現存しているって信じる?」

そう、この世界には神が現存している。

世界のあらゆる場所を見通し、あらゆる奇跡を行使できる神が。

その神は時間と空間、因果律すらも超越し操作出来る最高神。

しかし、その神は自分からは動かず世界の危機の時にしか動かない。神という立場故だ。

「そんな存在がいるんですか？」

「…ええ、ごく一部の旧家と日本古来からの執行機関の『八方塞』
ぐらいしか知らない事実よ」

「でも、何で今そんな……っ!？」

「気付いた？ 貴女の言った名前がこの世界においての主神、あまのみ天御
なかほし中星よ」

「……………本当？」

「本気」

ええ〜と、あくまでもノンビリとした姿勢で慌て始める明日香に思
惟は事態の深刻さがやっとなつたかと溜め息吐く。

問題なのは時間や空間、因果律を超越し操作出来ると言つ事。

それと主神の持つ『危機の時にしか動かない』と言つ二点。

裏を返せば、今までは起こる事態が偶然から起きる不確定な未来だ
つた。

しかし、今の話から確定された世界の危機が関与する未来へと変わ
つたのだ。

主神が動くと言つ事は、大なり小なりと何かしらの世界の危機があ
ると言つ事。

しかも、その渦中の場所は此処だとくればどんなノンビリ屋でも慌
てる。

その時だった。

「……………っ!」

「風文じゃないけどよりもよってよね」

強烈な悪寒が思惟と明日香の背に同時に走った。
能力者の持つ超感覚に引つ掛かった怖気に、二人はその方向へと振り向く。

「明日香……………」

「……………解ってます、励起法最大深度……………」

二人の視線は先程まで戦闘が行われていたコンテナの一角に目を向けていた。

「ひつつたつ助けて」

「ギヤアアア！！」

暗く闇に包まれたコンテナの中からは、助けを呼ぶ声や断末魔の様な悲鳴が続けて聞こえる。

何かをすり潰す音、咀嚼する音……………そして、闇からそれは現れた。

黒いスラックスをはいた人の足……………そこまでは普通だった。

闇から現れるにつれて全身がハッキリとしてくる。

中から膨らんで破れたボロボロのシャツ、もはや最初の色すらも解らなくなっている程に血まみれになっていた。

問題はここから、破れたシャツの合間から見えるのは人ではありえない獣の様な黒い体毛。

そして顔が現れる。

「……………なにあれ」

その言葉を呟いたのは一体だれだろう。

コンテナの闇から現れた顔は人の顔ではなかった。
黒く獰猛な狼の顔。

「ルーキーは今すぐ撤退しろ！！ 第二種暴走体『フェンリル』だ
！！」

風文の怒声だけがやけに鳴り響いた。

副話 彼らの知らない場所で 後編

「思惟さん！！ あれは何ですか！？」

「能力者モドキの成れの果て」

皮膚がひりつく様な圧迫感。

大気をビリビリと震わせる鳴き声と共に、その白い――フェンリルと呼ばれた――ケモノは爆撃されたと間違う程の踏み込みで思惟と明日香に攻撃をしかけた。

しかし、瞬間移動さながらの攻撃にも拘わらず、二人は危なげもなく跳躍して避けていた。

「能力者モドキって？」

「あーっ説明は後っ！！ 来るわよ！！」

明日香が見れば、フェンリルは彼女の方を見て喉を鳴らして今にも飛び掛からんとしていた。

「ええっ何で私！？」

フェンリルは四肢を屈め胸を地につくように身体を引き絞ると、先程と同様に爆発的な突進を明日香に仕掛けていた。

今度のタイミングは明日香にとっては少々シビアなタイミングで、辛うじて身体をねじり相手の攻撃を掠らせながら倒れ込むように避ける。

しかしフェンリルの攻撃は終わらない、相手も身体をねじる様に方向転換をして再度突撃する姿勢をとっていた。

「ヤバ」

明日香が気付いた時にはもう遅かった。

励起法によって強化された明日香の目に、限界まで開かれた禍禍しい牙が生えた口がスローモーションで映る。

死ぬと明日香が思った瞬間、フェンリルの横っ面に何かが飛来して激突したかの様に弾け飛んだ。

「……釘？」

軽く死を覚悟していた矢先の出来事に、明日香は呆然としながら何かが飛来してきた方向を見る。

そこには何かを投げたかの様に手を伸ばした思惟がいた。

「明日香！！早くこっちに来なさい！！」

怒鳴る思惟に、明日香は母親に怒られたかの様に身を肩をすくめると慌てて彼女の下に駆け寄った。

「ごめんなさい」

「全く、能力者ならば自衛の為に少しは身体を鍛えなさい。まあ…それよりも、風文！！あんた少しは助けるか何かしなさい！！」

明日香とフェンリルの間に入りながら、思惟は目だけを動かし風文に怒る。

明日香もつられて見れば、そこには変わらずコンテナに背を預ける風文の姿があった。

「ハハハッ、明日香君は以前うちに体験入隊した事があったから、今の實力を見たくて放ってみた」

「命に関わりそうなのを放っておくなー！！」

怒りながら思惟は手を閃かせ何かを投擲し、フェンリル牽制する。思惟の後ろにたつ励起法を最深度まで行っていた明日香には、その動きは良く見えていた。

手品の様に思惟の手に現れる五寸（約6cm）程で先の尖った金属の棒を、手首のスナップと腕の振りのみで投げている。

「いやいや、实力を見たかったのは明日香君だけではなくてね」

「私もって事か」

「君の神速の呪釘、衰えてなくなってなによりだよ」

そこでもうやく風文は、重い腰を上げたかのようにコンテナに預けた背を戻す。

「さて、聞くべき事は聞いた。知るべき事は知った。時間も稼いでもらった後は、目の前の障害を排除するだけだ……フレイヤー！」

あんた全部解っててやってるんじゃないでしょうねと、思惟は誰にも聞こえない程の声で忌ま忌ましげに呟いて明日香と共に跳び退いた。

フェンリルが飛び掛かってきた訳ではない、両者の間を分ける様に光の塊が降り注いだのだ。

フェンリルは光の塊が降ってきた方向を仰ぎ見る。

積まれたコンテナの上に立つ金髪の女性。

何時もはポニーテールにしている長い金髪を一つにまとめ、七分丈の黒い戦闘服を上下に身に纏っている。

もつとも目につくのは赤い剣と黄色い槍の刺繍をされた手袋と、猫の柄の入ったブーツだ。

「フレイヤ、合図と共にサンダージャベリンを撃ち続ける」

「Aye, Sir」

風文の指示と共にフレイヤは、黄色い槍の刺繍の描かれた手袋をした手を天に掲げた。

瞬間、バチバチバチと激しく弾ける音と共に、白く輝く光の塊が数十個フレイヤの周りに浮かぶ。

弾ける音と光を背負い、風文はフェンリルに数歩歩み寄る。

「さて、名もなきケモノよ。いや元は人だったから名はあるかもしれないが、死に逝くモノに名前は聞かんよ」

風文が手を挙げ振り下ろすと同時に、フレイヤも右手を振り下ろす。その途端、光の束は陸上競技の槍投げの槍の形になりフェンリルに降り注ぐ。

しかし光の槍はフェンリルには届かない。

風文が手を振り下ろすその寸前、フェンリルは天に向かい高らかに遠吠えをあげた。

するとどうだろう、フェンリルに放たれた光の槍は悉く散らされるか掻き消される。

「磁界操作系の能力者か。フレイヤのプラズマ操作と相性が悪いな………だが!!」

撃つても散らされるがフレイヤは命令通りに光の槍を撃ち続ける。その光景は機銃で掃射しているかのよう。

「やはり、磁界操作中は動くのは難しいようだな。終わらせてもらう……」

音はしなかった。

励起法で最大限まで強化していた明日香の目には映らなかった。
言い表すならば一瞬。

「三剣神道流 奥義 三の風」

思惟には見えていた。

フェンリルの爆発的な突進とは対極の流れる様な踏み込みからの疾風の如き三連撃が、いつの間にか風文の手に握られていた刀によって行われていた。

明日香は目をしばたかせる。

彼女にとって風文の姿が一瞬消えたかと思えば、フェンリルと立ち位置が替わっていたからだ。

遠吠えは、いつの間にか止んでいた。

フェンリルの首がユツクリと落ち、胴体は十字に分かれ崩れ落ちる。

「フレイムソード」

それを見たフレイヤはコンテナから飛び降り、左腕を横に振り抜く。フレイヤの声に合わせる様に、剣の形をした光の塊がゴウと過ぎ去りフェンリルの骸を炎が包む。

「相変わらずね。あなたも腕前が変わらずで安心したわ」

「なんだ、さっきのお返しかな？」

「何よ、友の心遣いは素直に受け取りないつもり？」

「有り難く受け取っておくさ」

風文は思惟と軽口を叩きながら明日香へと近付く。

明日香の目前にまで来た風文は、ニッコリあからさまな営業スマイルを浮かべる。

「さて、用件を聞こうか明日香君」

その笑顔を見て明日香はスッゴイ胡散臭いと思った。

副話 彼らの知らない場所で 後編（後書き）

これでこの副話は終わりです。

少々尻切れトンボ気味ですがご容赦をー

尾行

コツコツコツと、普通ならば音が少なからず響くであろう人の疎らな住宅街と繁華街を繋ぐ裏道。

家と道を分けるのは規則正しく並んだ立木、コンクリートの壁には蔦が這い特有の硬質な壁を覆い隠すように緑が包む。

この様にこの町は普通の町と違い異常なまでに緑が多いため、小さな物音はすべて周りの緑に吸い込まれてとても静かだ。

若い女性や小さな子供にとっては、不安になる事うけあいの雰囲気。しかし、誠一にとっては好都合。

目の前を歩く三十代くらいのサラリーマン風の男について歩く誠一は、そう思いながら気を引き締めた。

事の発端は誠一が悪友の桂二に頼んだ『桃山財閥に関するレポート』だ。

八年前から行方不明になっている『折紙 彩』の姉『折紙 おりがみ 奈緒美 なおみ』最後に見かけたのが勤めていた研究所が、桃山財閥が運営する研究所だった。

彩はレポートの一部を取り出し指差す。

「この第三研究所で姉さんは仕事してたの。私も一回行つたのを覚えてるから間違いないわ。私、今でも覚えてる。姉さん『私の仕事は人々皆が幸せになる為の薬を作ってる』って。あなたも私も、いつか幸せになるのっていつもの言ってた」

「薬？ でも、このレポートじゃバイオプラントって」

「あながち間違いじゃないわ。姉さんの分子生物学を専攻してたら

しいから…」

「それって、どう言う？」

「微生物学や遺伝子工学にも手を出してらしいから、バイオプラン
トって言うのも間違いじゃないと思う。でも、何かおかしい」

彩は俯きがちになり、レポートを睨みつける。

そこでアレ？ と誠一が気付く。

「何で『超能力が使える薬』？」

そう、ついさつき言っていた『超能力が使える薬』との関連性が、
一向に繋がらないのだ。

「…ああ。そうね、その説明からだったわ。誠一君この間、能力
者の話をしたわよね？ 能力者の歴史、覚えてる？」

「確か、旧くから存在する人に近く人と混じりあった、人にあらず
るモノだっけ？」

「そうね。混じりあった人…それって普通の人にとってどう見える
と思う？」

「どうって、そりゃあ…」

今まで一般人のつもりで生きてきた誠一にとって、それは簡単に理
解できる。

目の前の彩の代わりに、車に轢かれた自分。

その時、自分の身に起こった事に対しての感想それがすべてだろう
と、誠一は思った通りに口に出した。

「化け物」と。

それに対して彩はそうねと返す。

「私もそう言われてたわ…」

「…なんか、色々とゴメン」

「いいわ、散々言われつづけた事よ。私みたいな精神感應系能力者は言葉にしなくても解る、当たり前前の反応…、そんな顔しないで…」と話続けていい？」

悲しそうな顔と空元気の声をあげる彩にそう言われては、誠一は何も言えなかった。

いずれにせよ能力者と自覚したての自分には何も言えない。

そう彼はいずれと思いつつ、彼女の話聞くべく居住まいを正す。

「昔から能力者と呼ばれた人種は迫害されてきた。有名なところでヨーロッパの魔女狩りとか…ね。そんな能力者の現状から私達を救う為に、姉さんはそんな理想を持ったんじゃないかなと思う。その為にまず始めた事を考えると…」

「能力者に関係する知識って事か？」

コクンと彩が頷く。

彩の言う通りの人物であれば、考えられる話だった。

おそらく彩の姉は能力者の能力発動の成り立ちから、能力を封じ込める何かしらの手段を求めたのだろう。

「姉さんの理想、それと対極にある薬。私達、能力者からすれば解る『能力』に関係するであろう薬。私は逆に怪しいと思う」

「そう？」

「違うかもしれない。でも、何か引つ掛かる…私の能力者としての勘、確証なんかないけど調べたいの。だから、誠一くん…」

「何言ってるのさ。この間、協力するって言っただろ？ 能力で心を読んでもいい」

二人は笑い合う。

一人は心配させない様に、もう一人は戸惑いながらぎこちなく笑う。それからの二人の行動は速い。

やりたい事が解り目標が決まった二人が、まず始めたのが『超能力が使える薬』の出所を洗い出す事だった。

始まりは薬の真偽、そしてその薬がこの街にどのように浸透しているのか。

二人はこれもまた、桂二に話を聞いてみた方が早いと感じ聞いてみた。

しかし、桂二の返答は今までの彼からすれば意外なものだった。

『薬が存在するのは確かだが、浸透具合がよく解らない』との事。今までの確な情報を教えてくれた彼にしては、珍しいと誠一は思った。

その事が顔に出ていたのか、もしくはこのままでは自称『情報屋』の看板が傷付くと考えたのか解らないが桂二は何故情報が少ないのかを教えてくれた。

『蔓延しているだろう場所が、閉鎖された所なんだよ』

そう電話越しに語られた言葉は苦々しいものだった。

宗教団体『神の真理』。

最近、高見原で少しづつ信者を増やしてる新興宗教で、誠一も聞いた事がある少し胡散臭い宗教団体。

胡散臭いと言えばどんな宗教もそうなのだが、この宗教は掲げる教義がまた胡散臭い。

『神との対話こそが唯一の救い。神が見せる世界こそが絶対の真理』とうたう彼等の教義を、高見原駅前のロータリー広場で見たときは興味がない誠一でも辟易したものだった。

そんな宗教団体の中で薬が蔓延しているのかと誠一は考えていると、

それを察したのか桂二が補足を加える。

『別に無秩序に蔓延している訳じゃないぜ。教団の連中が神に通じるためのイニシエーション（通過儀礼）の儀式に使っているって話だ。服用して超能力が使えるなら、奴らにとっては文字通り神の奇跡なんだろうさ。ただ、俺にもその薬の出所は解らない』

桂二に聞けた話はそこまでだった。

しかし、それはとても有意義な情報。

少なくとも『薬のある場所』と『薬の事を知っている人間がいる場所』が特定出来たのだ。

後は彩の能力『モーション・エモーション』の出番である。

能力者同士ならば相手の心を読むのに問題があるが、普通の人間は別で末端の教団員から情報を引き出せばいい。

そして今、誠一が後をつけているのが、彩が心を読んで手に入れた情報から割り出した教団内の人間と不自然な接触を行っている外部の人間。

「……………ここは？」

そしてついた先は意外な場所だった。

高見原商業地 海原区海神町高見原タワー

意外な遭遇

「意外と早かったな」

人も疎らになった深夜の高見原タワー前。

物影から呆然と高見原タワーを見上げる誠一の背に、不意に声がかけられる。

ここ数日の彩との訓練の成果で、励起法で一瞬にして身体能力をトップギアまで引き上げると振り向きざまに掌底を打ち込もうとして止める。

「桂、お前……」

「よつ誠一、学校ぶり」

そこには何時も通り、胸元を開いた軽薄な格好をした茶髪の男が笑顔で立っていた。

軽くでも当たれば普通の人間であれば即死するであろう一撃を食らわすところだったと、誠一は安堵の息を吐きながら肩の力を抜く。もう少しで悪友に簡単に殺されそうになっていた当の本人は、そんな事も知ってか知らずかケロリと笑っている。

やっぱり打ち込むべきだったかと内思いながら、誠一は目の前の悪友に問い掛ける。

「お前、何でここに？」

「何でとは酷いな。お前から聞かれた事を更に精確に教えてやる為に、追加調査をしていた、こ・の・俺に」

桂二の言い分としては、どうやら前回聞かれた『超能力が使える薬』について精確に教えてやれなかった事が、『自称情報屋』としてい

たくプライドが傷付いたらしい。

「このままでは俺の沽券に関わると思っ、此処まで出ばった訳だ」

「お前、意外とマメだな」

「ふっ今になって俺の魅力に気が付くとは、惚れんなよ」

「惚れるか阿呆」

何時も通りの学校の日常を彷彿とさせる会話に、誠一は肩の力と警戒心が霧散しそうになる。

流石にこの状況で気を抜くのはマズイので、誠一は気を引き締め直して桂二に問い掛けた。

「ハア… お前の情報網の凄さは解ったけど、そんだけ知っているなら今どれだけ危険かわかってるか？」

「解ってるさ」

「どこがだよ」

「能力者… だろ？」

その単語を聞いた途端、誠一は顔が強張るのを感じた。

気付きたての能力者で、つい最近まで一般人であり能力者の迫害の歴史を彩から聞いていた誠一としては隠しておきたかった事柄。

普通の力を持たない人間にとっては理解出来ないであろう異質な力。恐れるのは当然であろう力を持ち、世の中の理不尽さに立ちはだかろうと決めた誠一にとっては恐れられると言うことは彼自身辛い事だろう。

しかし、

「だったら、お前がいるなら俺は大丈夫じゃねえ？」

「… はあ？」

恐れとはまったく逆の、あっけらかんとした断定気味の物言いに誠一は肩透かしを喰らったかの様にアングリと口を開き桂二の顔をマジマジと見てしまう。

「どういう意味だそりゃ？」

「意味ってお前…付き合い長いんだから、それくらい分かれよな？ 例えばだ…ここら辺に頻繁に目撃されている能力者を狩っている連中がいるんだが、そいつらの構成員の殆どが能力者の上に励起法を伝える訳だ。フツーの人間の俺としては、そんなのにガチでやり合えない。そこで、お前が登場して……」

「マテ、マテ、マテ。…なんかちよつと待て。こんがらがってきた、少し整理させる」

誠一はいきなりの展開に混乱する。

それは仕方がない事かもしれない。

桂二が言った通り、長い付き合いの悪友から最近知り得た情報が簡単に出てきたのだ。

しかも、話の内容から考えるに相手は誠一が能力者と言う事を前提に話している。

「…どこから突っ込めば良いか解らん。ただ言いたいのは、お前は俺の事」

「ああ、知ってるぜ。ヨーロッパの方で有名な武闘派の能力者『フランベルジェ』と相打ちながら倒した能力者って…ん？」

その時だった。

何かに気付いたかのように桂二の視線が動く。

誠一が釣られてみれば、高見原タワーの方から何かしら崩れ落ちる様な地響きが聞こえる。

「こりゃあ何か起こったな」

「何か？」

「わかんねえよ。ただ高見原タワーの方が慌ただしくなってるやがる。この間の地下鉄の落盤事故、で奴ら躍起になってるからな。奴に流した情報の結果から考えると、一番確率が低い予想か？ んっあれは……」

「……？ おい、桂二。お前何を言ってるんだ？」

「わらい誠一。用が出来た、後頼む」

「ちよつと待………つつつ！！」

突然呟きだし、訳が解らなくなった悪友が何かを見つけたかのように走り出す様を見て誠一は慌てて止めようとした。しかし、それは叶わない。

自分を見る視線に気付いたからだ。

（………1、2、5。マズイ……最低六人に囲まれている、と思う）

自分が置かれている状況が解らない事に悪態をつきたくなりながら、誠一は再び励起法の深度を限界まで下げ身体能力を極限まで引き上げた。

その瞬間、周りの気配に変化が起こる。

（しまった！！）

そこで誠一は自分の失敗に気付く、励起法を行うべきではない事に周りを囲んでいるであろう人物は、自分が能力者である事に気付いていない筈だったのだ。

しかし、今励起法を最大深度で行ってしまった事により気付かれました。

（励起法は最小深度で行うべきだっ。なんて迂闊）

要らぬ戦闘を呼び込んだ事に齒嚙みしながらも、先に居なくなった桂二が逃げやすくなったかもしれないと気付いた誠一は頭を戦闘に切り換える。

（お前が居るから、俺は大丈夫か……いいさ、桂二。今はお前の言う通りにしてやるさ）

そう誰にも聞こえない声で呟くと、誠一は腰を落とし構えた。

覚醒

キィィと金属を思わせる甲高い音が、高見原タワーの広場に鳴り響く。

それと同時に、自分が居る空間に違和感を誠一は感じた。

（これは彩さんが言ってた！？）

この世界には、表に出回っていない技術がある。

軍事的な技術や、一般人の生活に余り関係ないモノは自然と隠れるものだ。

しかし、それとは一線を画する技術形態がある。

『儀式』と言う技術。

有り体に言えば『発端と帰結する現象は解るのに機序が解らない技術』の総称らしい。

（詳しくは同作者名の『神遊び唄』の『学園都市』を参照してください）

彩に説明された時は今一解らなかった誠一は、彼女の真剣な説明から『能力者に関する多分凄い技術』ぐらいにしか考えて居ない。

その考え方はあながち的外れではなかった、彩自体も概論は知っているだけで細かい理論は余りの難解さでサッパリだからだ。

だがしかし、今必要なのはその技術が起こす結果であり、先程の金属音を皮切りに周囲に少しながらもあった人の気配が消えていった事。

誠一は知らないが、これは『忌避の鐘』と言う儀式道具を使い人払いを行っていた。

前回の帰り道で誠一が襲われた時にも使われたのだが、今回は事前に教えられた知識のお陰で気付けた。

（前回と似たパターンならば…）

完全に囲い込まれる前にと、誠一は近くにあるビルを背に立つ。タイミングを図った様に、パラパラと人が誠一の周りに集まりだす。集まり出した人間を観察すれば雰囲気は前回と同じだが、服装が違々と誠一は気付く。

前回は黒い戦闘に適した服を着ていた一団だったが、今回は青を基調とした制服……いわゆる警備員の服装。

「貴様、ここで何をしている？」

観察し考え込む誠一に、一団の中から一人の男が前に出て来る。

「別に、散歩していただけさ」

「こんな夜遅くにか？」

「今時の高校生ぐらいなら普通だぜ、オッサン」

軽口を叩きながら誠一は様子を見る。

挑発紛いの言葉を聞いても相手は何も動じない、周りの取り巻きも露とも揺れない。

むしろプレッシャーが緩やかに高まり、誠一は押し潰されそうな感覚に陥り焦る。

その焦りを感じたのか、目の前の男はニヤリと嗤う。

「どうかしたかね？ 『水上 誠一』君？」

「……………っ。名前をっ」

「知っているよ。君はフランベルジェを相打ちながらも倒したので有名だからね。しかし運が良い、侵入者を追っていたら望みの相手に出会えるとは。」

言いながら男は腰を落とし拳を胸の高さまで挙げ、身体を半身にして構える。

男の発言に戸惑いながら、男の構えに誠一は既視感を覚える。

「『ハウンド』の隊員から聞いていた…偶然だがお前と俺は同じ『護天八龍』の流れをくむらしい」

壁を背にする誠一を中心に、半円を描くように警備員姿の集団が彼を囲んでいた。

目の前の男の用件は大体解った、周りはいつの間にかに囲まれて誠一は逃げられない事を悟る。

「オッサン、侵入者とか言ってたけど仕事はどうした？」

「なに気にするな。私達は基本的に『武』の為に他を犠牲にして、こんな仕事に就いた輩が多い。私もそうだがお前さんの様な『猛者』と戦う為ならば、羨ましがれる事はあっても咎める者はいない。さあ、軽口はここまでにして………始めようか」

会話はここまでにと断ち切る様に、相手の男から裂帛の気配と共に励起法の深さを物語る力を誠一は感じた。

「…フンッ!!」

初手は相手、試金石とばかりに打った拳。

誠一は腕をあげて、あえて受け止める。

「っ!？」

「むっ!!」

ボスンと人の身体から発したとは思えない音が広場に響く。

相手は拳から感じる手応えに目を剥き、誠一は受けた衝撃の少なさと自分の感じた感覚に戸惑う。

（何だ今の感覚は！？）

相手の励起法から威力を予想しながら受けた拳は、思いの外弱かった。

受けた時の音と足にかかった重みから考えれば、人一人吹っ飛ぶ位の威力だったはずだった。

あれ位の威力ならば思惟から喰らった掌底はダンプカーの衝突だと、誠一は目の前の男を見ながら考える。

男は跳び退り訝しげな表情を浮かべていた。

「何だ、お前…聞いた時は『パーツ』共と似た能力かと思っていたが…手応えが…」

それは誠一も思っていた。

彼自身、未だに能力の性質は解るのだがどのような使い方をするモノか解っていない。

前回フランベルジェと戦った時の話を、彩に話した際に『水が関係する事かもしれない』と示唆していたが未だに判明しきれてないのが現状。

しかし、頭の片隅にあった『水』のイメージがある感覚を誠一の脳に伝えていた。

それは水を自分の思い通りに動かす感覚。

しかも、自分の身体の筋肉や力の流れに沿ってある感覚。

（これは、まさか。俺の能力は…）

今までの感覚、今の直感。

誠一は一つの仮説を導き出した。

「よしっ！！ 今度はこっちからだ！！」

誠一にとって、仮説はほぼ確信に近かった。

今思えば自分の師の思惟は、総て知っていたのかも知れない。

思惟とは違う流派の套路や戦いの技法を、教えて貰っていたのはこのためだったかもしれない。

「カアアアッ！！」

「うおっ！！」

踏み込みと同時に掌底を打ち込む『打龍』、受け止められたのを確認するより早く踏み込みの足とは逆の膝をで脇腹を打つ『龍尾』。

「ハアアアア！！」

しかし、それらは総て牽制。

次の全力の一撃を打ち込む為の布石。

後ろ足を打ち鳴らす様な踏み込み、励起法で最大限まで強化したソレはアスファルトの地面をえぐりながら爆弾の様な推進力を与え身体を前に出す。

同時に身体を相手の身体深くまで潜り込ませ、推進力を総て変換するように肩で打ちあげる。

「……………」

再び広場に響く音。

今度は誠一が跳び退いた。

「護天八極『崩龍』……」

誠一の呟きと同時に男は声もなく崩れ落ちた。

導き導く者（前書き）

今回の話はぶっちゃけ『いつもの日々に至るまで』へと続く話にもなっています。

話が複雑化してきました、ここらで時系列を作った方が良いでしょうか？

では本編をどうぞ

導き導く者

革靴であればカツカツカツと規則正しい音をたてるであろう足どりは、普段ならば几帳面さや生真面目さを感じさせる。
が、足音の主の表情を見れば今は怒りしか感じさせなかった。

深夜12時00分 高見原市海原区海神町 24hファミレス『Mrs. Patricia』

そう誠一は苛立っていた。

あの後、男が隊長格だったのか勝ち目がないと悟ったのかは解らないが、儀式による人払いの音と包囲が消えていた。

それこそ倒した男や戦った痕跡も跡形もなく。

余りの引き際の良さに、さっきの戦いは夢かと誠一が錯覚するほどだ。

誠一が自身の感覚を確かめるべく、頬を抓っている時にその連絡はきた。

ポケットに入れていた携帯電話が、一通のメールを知らせていた。

『一度、海原区を出て戻ってこい。海神町のパーティで待っている。』

桂二

メールを開いて見れば誠一からの連絡だった。

名前を相手に知られているならば、監視をされている可能性がある。そう思った誠一は、桂二の回りくどい指示に納得しながらそれに従う。

そこまでは良かった。

「いや、そんな事ないって。俺が好きなのは詩織ちゃんだけだつて……この間の人？ ああ、姉さんだよ。ほら、歳が違ったし彼女婚約指輪しとただろう？ 俺は歳上駄目なんだって……そうそう、だからさゝ少し金を……」

「何処の詐欺師だっ！！」

「ゴガッツプ」

人の疎らな深夜のファミレスに入って、最初に聞こえた会話に怒りと共に拳で後頭部を殴ったのは間違いではないだろう。

「……つてえ、何をする誠一」

「それは俺の台詞だ、人が戦って遠回りして来てみたら何の会話をしている何の！！」

「いや知り合いの詩織ちゃんに融資の相談を……」

「典型的なヒモの会話だ、今は！！」

まったく溜息を吐きながら誠一は、桂二と同じボックス席の対面に男が座っている事に気付く。

テーブルに突っ伏す頭、無造作に伸ばした黒髪。

起き上がった頭から見えた目が合うと、そこには誠一の学校では有名な顔があった。

「……確かりアルギアルゲー、」

「何だそれ」

「なんでもない」

思わず友達同士での通称を口走りそうになり口をつぐむ誠一。

そう、彼は誠一の通う学校内の男子生徒限定での有名人なのだ。

苗字の違う血の繋がらない美人の妹『篠崎莉奈』と屋根一つ下で暮らしている事と、学校では名の通った年上系の女子剣道部の主将『

香住屋齋』。

更には、高見原学園のミス天然キャラに選ばれた（高見原学園男子生徒有志の秘密ランキングらしい）『蒼羽天子』と男子生徒の人気上位三人が、彼の近くにいてグループを作っているのだ。

その状況から周りは彼の事をこう呼ぶ『リアルギャルゲー野郎』と。と、そこまで目の前の人物を思い起こしている又何故この場にいるのかと疑問が浮かぶ。

彼とは例の妹に告白して玉砕したあげく、この間の林間学校で難癖付けた親友の一人がいるのであながち無関係ではない。

だがしかし、この場の戦闘後のこの状況ではそぐわない。

と言う状況だと考えながら桂二の隣に座ると、隣から爆弾発言を聞いた。

「こいつも能力者だ」

「ちよっ!!」

「おい、桂二って………ん？」

いきなりの暴露に慌てる誠一。

しかし慌てたのは誠一だけではなく、対面に座る彼もだった。

「まさか、お前の今さっきの用事ってコイツか？」

「御名答」。以前から、チヨイと情報を回しててなあ」

桂二の話を纏めるところだった。

どうやら目の前の人物『船津東哉』は、失踪した例の妹を日夜探し回っているらしい。

妹が失踪した原因はどうやら何らかの『能力』の発現を見られたらしく、それをかしの不思議な力に関連していると踏んだ彼は桂二に頼んで高見原で噂される『七不思議』を調べる事にしたい。

そして、その結果…。

「あー、お前はその地下研究所から脱出して来た？」

「あっああ」

「それで逃げる時に追っ手を振り切る為に、出入口を能力で破壊したと？」

「ああ、うん。…何か不都合な事でもあったか？」

不都合も何も…と力無く呟くと、今度は誠一がテーブルに突っ伏す。

「俺の努力が……」

「水の泡ってヤツだ」

「言っな」

どうやら彼が出て来た場所は、誠一が今から調べようとしていた場所。

それを出掛かりに潰されてたら脱力感に包まれるのは当たり前だろう。

誠一はここ二・三週間の苦勞を思い返していると、ふと前に座る男から視線を感じた。

「…なんだ？」

意志の籠った目とでも言えば良いのだろうか、何かを決断する様な雰囲気。

誠一は何事だと訝しげに見ようとした瞬間、彼は頭をいきなり下げた。

「頼む！！俺に戦い方を教えてくれ！！」

突然の事に誠一は何と言って良いか解らない。

状況も解らずただ流される気もない誠一は、ナンダコレと隣に座る悪友へと視線を移した。

「簡単に説明するとだ。こいつは今までの事で自分の力不足を感じて何とかしたいんだと」

「で、戦い方って事か」

何となく誠一は共感した。

自分の無力さや力のなさは、自分自身も感じた事だ。

犯罪に巻き込まれた時や求めても力がなくて得られない時、誠一は何度も感じていた。

自分の時は思惟と言う師事出来る人がいたが、目の前の人物はどうだろう。

ましてや能力者の背景や今の高見原の状況を考えて、戦い方を知るのは必要だと誠一は考えた所で一つの提案を出した。

「俺は、人に教える程の力量じゃない。下手に教えると教えた奴を殺す羽目になりかねないから師匠に禁じられてる…だから、」

「それでも！！教えて欲しいんだ。この間、教えてくれた人は『自分が知ってるのは護身術程度だから』って言われた。他の能力者の知り合いはいないんだ」

「最後まで話を聞け」

頭を上げずに噛み付かんばかりに言っただけ来るのをピシヤリと押し止めると、誠一は喋れなかった言葉を継いだ。

「修業に付き合ってたのはどうだろう」

「修業？」

「そう、教える事は出来ない。だけど修業に俺の組み手相手とかだつたら教えてる訳じゃない」

そこまで言つと、彼はようやく頭をあげる。
再び頭を下げる。

「頼む」

「頼まれた。それじゃあ、ヨロシク水上誠一だ」
「俺は東哉、船津東哉。よろしく頼む」

吐露（前書き）

こちらは今年最後の更新になります。
皆様、良いお年を！

吐露

「ふうん」

自分達の苦勞が水の泡になったと彩に言った誠一は、返ってきた返事が淡泊さを伴っていて拍子抜けした。

「何？ 私の反応が予想外？」

「俺がガツクリとしたから彩さんもするかと思ってたんだ」

「いいえ、逆よ。」

「逆？」

深夜2時 高見原市岩戸町三丁目 『児童養護施設・森ノ宮』 10
4号室

児童養護施設・森ノ宮は個人が経営する施設としてはとても広い。

無駄に広い。

何故かと言えば、この町の始まりから原因がある。

十数年前、高見原が市ではなく村で、森の様な町ではなく森の中にある村だった頃。

突然、桃山財閥と言う企業が森の一部を買い取り工場や研究所を建てた。

桃山財閥とは日本に古くからある企業で、太平洋戦争を乗り切った大企業として有名だった。

しかし、この話は高見原『村』だけではなく、日本の各界においても意外だったらしい。

建てるのは良いが、色んな意味でデメリットが多過ぎるのだ。例えば土地の値段と言う意味では安いだろう。

しかし、場所が当時日本の秘境と呼ばれた高見原。

まずは工場を建てるために道を作り、森を切り開く。

その労力にかかる金額が幾らになるか、途方もない金額になるのは火を見るより明らかだ。

当時の経済誌にも『有名企業の無謀な賭け』と叩かれる程の事。

しかし事態はおかしな方向へ行く。

国が『自然と融和する街』のテストケースとして、高見原を開発すると言いだした。

これが何を起こすか？

日本中の企業が利権を狙い殺到し始めたのだ。

その後の結果は今の高見原を見ればお分かり頂けるだろう。

人口が千人に満たない小さな村が、今では百万人を超える政令指定都市になっているのだ。

そしてそれに伴う人口増加と弊害。

問題は今は割愛させて貰う、結果としてこの孤児院は建てられた。

高見原の発展期に建てられた為に無駄に広い上に『空室』がある。

彩はそこに目を付け、誠一の隣の部屋が空いているのを良いことにいつの間にか住み着いていた。

『これじゃ俺も変わんないな。東哉の奴をリアルギャルゲー野郎と
か言えない…』

隣の部屋にいる非日常を連れて来た美少女、以前友達から借りたライトノベル見たいだと誠一は感じた。

「私が美少女と言うのは置いといて」

「ちょっとー！！！！俺の心をアッサリと読まんでください！！俺のプライバシーは！？」

「読心系の能力者の前では無い」

「ヒドッ」

打ち捨てられたかのようになだれる誠一は、ニツコリと笑いながら言う彩にサドだと思いながら口に出すのをやめた。

幾ら相手が読心系の能力者でも、口は災いの元なのだ。

「ん、偉い偉い」

「…また、いいです。話を戻しましょうよ」

「解ったわ。とりあえず進めましょう…逆と言ったのは理由があったからよ。その理由は目的地の場所」

「場所？」

「そ、話から聞けば地下施設っぽいじゃない？ 入るのは簡単そうで良いけど、どうやって出る？」

「あ」

誠一は高見原タワー前でどうやって入ろうかを考えていたが、出る事を考えていなかった。

確かに侵入するのは良いが出る時、この場合は逃げる時はかなり危険だ。

何せ相手のフィールド、誠一達にとってはアウェーだ。

例え色々な準備をして行っても、罠があつたら一たまりも無い。

そう考えると東哉は運がとても良かったのだろうと、誠一は思った。

「確かに彼は運が良かったと思うわ。だからこそ、彼の話には重要な情報があるわ」

「重要な情報？」

「そう。一つは相手の規模、少なくとも銃を警備員に配備出来る程。

二つ、多くの科学者が何らかの研究をしている事。三つ、研究の一つに能力者を作る実験がある…これは確定。これらと今まで私達が聞いたり調べた結果…」

「裏にいるのは桃山財閥って事か」

誠一が継いだ言葉に、彩はそうねと複雑そうに返す。

前述した通り、この街の始まりは桃山財閥の開発から始まり同財閥の主導で進んだ。

つまり、それだけ大きな地下施設を造れる資本がある上に、造る事が出来るのは開発の初期だと推測出来る。

しかも『能力者を造る』研究、多分…話を聞いている内に彩は気付いたのだろう。

自分の姉が、その研究に手を染めている事に。

しかも話の流れとして、その『研究』は彩や別の能力者達の為。

複雑そうな表情の裏には、おそらく嵐の様に感情が渦巻いているのだろう。

そこまで考えると誠一は彩に聞いた。

「彩さん……どうする？」

正直、彩には時間が必要だと誠一は思ったからだ。

しかし、そこまで聞いて誠一は彩の目を見て驚いた。

「…まだよ」

見れば彩の吊り目がちの瞳には、光りがある。

そしてその目は、全てを見透かす様に誠一の目を見ていた。

「心配してくれるのは嬉しいわ。けど、私は知りたいの。………姉さんが居なくなる前、姉さんと喧嘩したの」

彩はふと誠一から目をそらす。

「キツカケは忘れるくらい、ささいな喧嘩だったわ。姉妹だけあって同じ読心能力を持ってた。そのせいで姉さんに癪癢を起こして、喧嘩したの。居なくなる最後にかわした言葉は『姉さんは私の事を考えていないんだ』って、笑っちゃうわよね同じ能力だから心の底まで読めるのに考えていないはずは無いのに」

「彩さん、もういいよ」

誠一は見て居られなくなった。

心を知る読心能力者が内心を吐露する、その怖さや苦しさはある意味『読めない人間』以上なんじゃないかと誠一は思ったからだ。

しかし彩は止めない、首を振り言葉を続ける。

「姉さんの最後に見た顔は泣き笑いだった。解ってなかったのは私。同じ能力だから、同じ悩みを苦しみを持つてるはずなのに私は……だから、私は見付けたい。姉さんに会って『ごめんなさい』って言うの」

彩の表情も泣き笑いだった。

笑い顔は彼女自身の人に対する優しさ何だと誠一は気付いた途端、彩を抱きしめていた。

「っ……!!」

「彩さん、少しだけこうしてよう」

くぐもった泣き声が部屋の壁に吸い込まれる。

しばらくして目元を赤く腫らした彩の隣に座る誠一は、少しだけ彼女に安心していた。

実のところ誠一は、彩の能力が『心を読む能力』と聞いて恐れていた。

人間誰しも心なんて、読まれたくないのは当然だからだ。

しかし、彼女とここ数ヶ月行動する事で慣れたらしい。

彼女はむやみやたらに人の心を読まないし、だいたい誠一が心を読まれるのは自身の不徳のなすところだったりする。

しかし彩は、大概の事は笑って許してくれるし誤って読んだ時は謝っている。

そんな事が積み重なって、誠一自身が彩に心を許していると言うのもあるかもしれない。

お互いが信頼しあう関係。

そのせいか彼等は何となく居心地が良かった。

「なあ彩さん。続けるのは良いけど、どうする？」

そんな一時から今を見る言葉をかけたのは誠一からだった。

少し不満げに口を尖らした彩は、それ以上は何も言わないとばかりに顔を引き締め言葉を継ぐ。

「確かに何をしていいか解らないわ。ところが、もう一つ当てがあるの」

「当て？」

「姉さんが居なくなる前に、姉さんと親しくなった人が一人いるの。一度だけあった人なんだけど、不思議な格好をしてたわ。雨も降ってないのに白銀のレインコートを羽織った長身の男の人」

「白銀のレインコート…それって」

「そう、桜坂の剣士」

外話 サイファ学園都市 前編

サイファ学園都市、と言う街が日本の南西部の沿岸にある。

大平洋に面した人口五万に満たない地方の工場都市を、『サイファグループ』と言う新進気鋭の若き社長がのし上げた企業が手を加えて出来上がった都市。

この都市は他の学園都市と違い、少々異彩を放っている。

普通の学園都市であれば、地域の商業や工業と連携し都市を発展させる研究をする。

それが学術都市だ。

しかし、この学園都市はそれだけではない斬新な特色がある。

それは『技術・専門職育成コース』だ。

『大工』などのマイナーな伝統的な技術が介在するモノから、『医師』や『弁護士』など国家資格が必要な専門職。

技術や専門的な知識を持つ人間を育てる、いわゆる人材育成から始まる学術都市である。

その学園都市の西部、『要人警護・警備専門コース』の実技区画へと続く廊下を二人の女性が歩いていた。

「まったく、アイツは相変わらず人を振り回す」

「いつも隊長がスミマセン」

白で統一された廊下。

そこを二人の女性が歩いていた。

濃厚の作務衣を着た背の低い女性が、プリプリと怒りながら歩いている。

それを宥めるように隣を歩くスラッとした背の高い金髪の女性が、

苦笑混じりに謝罪を口にする。

「アンタのせいじゃないでしょ？ フレイア」

「いえ、そう言う訳にはいきませんよ思惟さん」

謝罪に対して思惟しゐと呼ばれた女性は責任を負う人間が違うと言うが、フレイアと呼ばれた金髪の女性はヤンワリと言いきった。

「主に対して大した忠誠心ね。頭が下がるわ」

しかし、思惟の一言でフレイアの歩みが止まる。

「…知ってらっしゃたのですか？」

「ん？ ああ、貴女が人形だって事ね。最初からよ。貴女ね、私を何だと思ってるの？ 流れを司る『八大龍王』の石柱よ。貴女の身体を『能力』で見れば、人とは明らかに違う『流れ』がいくつもあったから、すぐに解ったわ」

「そうですか…」

思惟は能力者の中でも、最も多い『識者』に分類される能力者である。

彼女の能力はいたって解りやすく、『流れを見る』能力だ。

先程の言葉通りならば思惟はフレイアの身体の流れを読み、フレイアの正体行き着いたらしい。

「でもよく解りましたね。私の身体は神代の時代に製作されてはいませんが、『あの』重金教授が驚く程に人体に似せられた身体なんですよ？」

「…以前、人形と戦った事があるのよ。同系統じゃないけど、能力で見た『流れ』が似ていたから解ったわ。それより、ここ？」

その時、二人の足が止まる。
彼女達の前には、スライド式の分厚い金属の扉が立ちはだかっていた。

「この先が室内演習場ね？ 素材は解らないけど、複合型の『儀式』で数倍にまで強度を上げてる。やけに物々しいわね」

「用途は演習だけじゃないんですよ」

言いながらフレイアは、扉のテンキーに10桁のパスコードを打ち込み操作を始める。

最後にエンターキーを打つと表示画面に剣と金鎧を交差させたサイファグループのロゴマークが表れ、ブシュと圧縮空気の抜ける音と共に扉が動き出す。

「へえ、街一つが入ってるんだ」

「ハイ。敷地面積30000平方メートル、深さ約10メートル。地下に街が丸々一つ入ってます」

扉が開いた先はエレベーター。

そのエレベーターはガラス張りで出来ていて、そこからは見晴らしよく総てを見渡せれた。

四方を厚いコンクリートで囲まれた、地下に埋めた巨大な箱。

天井に備え付けられた強力なライトが箱の中に作られた街を照らし出している。

ユツクリと降るエレベーター、その町並みを見ながら思惟はしきりに感心して見ていた。

その横ではフレイアが淡々と演習場の説明をしている。

「この街はシェルターにもなっているんです。まあ、平時はこの様

にっ
」

その時、ズウン響く身体を貫くような振動が二人を震わした。

「……………フレイア？」

「……………ハイ」

「……………ここは今どこが使用してるの？」

「たしか、今の時間は警視庁からSATとブリテンのSASと、第三隊の表側の顔『サイファセキュリティサービス』の合同演習となつていますが……………」

思惟はフレイアの言葉を聞きながら、爆発音があつたであろう場所に目を移す。

そこでは火事があつたのであろうか、煙がモウモウと立ち込めていた。

それだけでは情報が入らないと感じた思惟は瞬時に『能力』を使い煙の立ち込めている場所を見直す。

「馬鹿でかい神域結界が二つ展開されてる……………規模から考えると

『法師』が二人……………フレイア？」

「今調べてます……！」

思惟が振り向けばフレイアは、慌ただしくエレベーターに備え付けられたコンソールに携帯端末を繋げ何かを調べていた。

「……………！！ 出ました、第四隊の七風紫門……………あー」

「あー」

結果が出るやいなや、二人は何かに納得するかのように肩を落とす。最近の一連の流れと演習場と言う場所、そして何より三剣風文と言

う人物の性格を考えれば火を見るより明らかな結果が出る。

「…隊長」

「あの馬鹿また悪い病気が再発したわね」

三剣風文。

裏の世界において最強の『第三隊』の総括にして、サイファグループの警備部門『サイファセキュリティサービス』の警備室長。

一見、好青年に見える彼には一つ困った嗜好を持つ。

『戦闘狂』

外話 サイファ学園都市 中編

「何だこれ」

警視庁特殊部隊（Special Assault Team 通称 SAT）の分隊長の都築は、意識を保ちながら痛む身体をコンクリートの壁に預けながら呆然と呟いた。

ただの合同演習の命令だった筈なのに。

今さらながらそう思いながら、辞令が降り上司に『温い』と直談判をしに行った都築は自分を呪う。

合同演習。

他国の特殊部隊等の演習は公にはならないが、それ自体はよくある話だ。

しかし、今回は別の部隊が入ってきた。

『サイファセキュリティサービス』と言う企業お抱えの部隊。

常日頃から過酷な訓練を行ってきた都築にとっては、ハッキリ言って邪魔だった。

強くなりこの国の安全を護る、向上心あふれる彼の理想の坎に障ったのだ。

定年で去ったり、天下り警官が集まって出来た志のない軟弱な奴らとしか都築は考えていなかった。

そんな奴らと合同演習と聞いて、彼は怒りに任せて上役に噛み付いた。

『なぜ民間の警備会社風情が間に入るのか』と。

それに対する上役の回答は、『何事も経験だ。井の中の蛙の君には、特に良い経験になるだろう』と何とも人を喰った様な言い方だった。上役は宥めたつもりかもしれない。

しかし都築にとっては逆効果、国の市民の生活を護るのは自分達というプライドに障ったとも言っ。

だが鼻息が荒くサイファ学園都市に來た都築は、自信のプライドが呆気なく碎ける音を聞く。

それが冒頭に続く。

ズウンズウンと連続した重く身体をの芯を響かせる音。

雷が爆ぜる様な音にも似て、戦場の様相を醸し出していた。

それがこの合同演習場で死屍累々と倒れ伏している全員が共通して思っている事だった。

「本当に何だこれは……」

「これが能力者同士の、しかもドUBLEレベルの戦いだよMr・ツツキ」

都築が呻く様に紡いだ言葉を誰かが継ぐ。

都築が目だけを横にやると、そこにはヘルメットから覗く碧い目が彼を見ていた。

都市迷彩を着込んだ大柄でガツシリとした体格が都築と同様にコンクリートに背中を預けている。

「あんたは確か」

「こんな格好で申し訳ないがS A Sのリーガルだ」

都築が思い出したのは、演習前に顔合わせをしたS A Sの方の小隊長。

彼自身もさることながら、彼の周りの隊員の練度を見て都築は唖ってしまったのも思い出す。

しかし、今はそんな問題ではない。

彼のいった言葉が問題なのだ。

都築自身を知る能力者とは超能力者のようなもの。

世間一般では公にはされていないが、東京などの大都市では不可解な事件の裏に居るであろう存在。

SATの中では有名な話で、それを専門にする部署も出来ているくらいだ。

しかし…

「能力者だと？ 馬鹿なこんな」

「驚くのも無理が無いさ。軍部にいる私とて聞きはするが見るのはこれが初めてと言う事だけだ」

リーガルがふと目を移すと、それに釣られるように都築もその目線の先を見た。

そこには嵐のような戦いがあつた。

「ったく。そう突っかかるな紫門」

「やかましいわ。自重しない貴様が悪い！！」

やや疲れ気味な言葉を吐きながら風文は、満面の笑顔で太刀を袈裟懸けに振り下ろす。

普通の人間の動体視力であれば捉えきれない異常な剣速。

しかし、それを二刀をもって危なげも無く受け流す男——七風紫門——がいた。

濃紺のウィンドブレーカーを羽織り、表情が見えないくらいフードを目深にかぶり左手を逆手に右手を順手に直刀を持ち嵐の様に打ち込まれる風文の剣撃を悉くいなしていた。

袈裟切りを受け流し、切り払いを打ち落とし、切り上げをほんの少しの踏み込みで避ける。

それが世間話のようなトーンと共に喋りながら…常人から見ればハッキリ言って異常な戦いだ。

「自重といってもな。俺は俺らしく振舞っているに過ぎないんだがな？」

「貴様、自重という意味を知っているか？」

「知っているぞ？ 言動を慎み、軽はずみな事をしない事だ」

「アホか貴様！！ もしくは解つてて言つてんのか、ああ！？」

世間話と言うより掛け合い漫才の様相になりながら、二人の戦いは巧手を交代しながらも続く。

風文の烈風の如き横薙ぎを、紫門は大きく腰を落とし体勢を低く保ちやり過ごしクルリと魔法の様に右手の直刀を逆手に変え叩きつける様に振り下ろす。

それを予見してたかの様に、返す刀を一瞬だけ地に着く下段に構え振り上げる。

「む」

「ぐ」

風文の狙いとしては昇り風（三剣の使う剣術において、切り上げの総称）からの嵐（『おろし』上から吹き付ける風を指す。これも打ち下ろしの総称）で牽制で体勢を崩して、旋風（相手を中心にして回るような歩法からの攻撃の総称）を叩き込むつもりであった。しかし、その思惑は紫門の思ったより激しい切り下ろしによって、

衝撃波を伴うぐらいの激しい音と共にお互いはじかれるように吹き飛ぶ。

風文はアスファルトで固められた床を削りながら後ろへ、紫門はアーチを描くように空中へ投げ出されながらお互いに体勢を整えた。追撃をかけるべく風文は紫門が落ちて来るであろう場所を見るが、影も形も無い。

風文が視線を上げると、そこには『壁を走る』紫門。

「チッ。どの神道流に共通する歩法『神足通』か」

風文も演習場内に建てられたビルへと向かうと、同じように壁を走り出す。

『神道流』と言えば、宗教で言う所の神道を思い出すだろう。

しかし、風文の言う『神道流』はそう言うものではなく『武術』と言う意味でのモノだ。

だが純粹な『武術』の『神道流』と言うのが正解か、と言われても微妙に違う。

それは日本最古の剣術『香取神道流』とは一線を描き、正確に言えば『能力者』が使う『武術』体系の大本が『神道流』なのだ。

考えてみると良いだろう、『武術』の中で人智を凌駕した身体能力を急激に跳ね上げる『神威（励起法の事）』があるだろうか？

衝撃波を発するほどの戦い、壁を普通に駆け回る、肉眼で追い切れない動きを出す事が出来るだろうか？

答えは自ずと解る、風文の言う『神道流』とは能力者が使う武術体系だと。

「貴様の戦いは全てを巻き込む！！ その二つ名『風天神』の名の通り嵐となつて関係ないモノもな！！」

「ハッ、甘いわ紫門。すでに賽は投げられてる、俺の意思なぞなくとも戦いは戦禍は広がる」

「それでは何故人を集める！！ この間お前が頼んできた莉奈と言う少女はどうするつもりだ！！」

二人は同時に壁を蹴り、空中で近接戦闘の間合いに入り互いに切りかかり弾け飛ぶ。

「『能力者』とはそう言うものだ。紫門貴様もわからんでもないだろうが！！ 古くはヨーロッパの魔女狩りや日本の比叡山の焼討ち能力者とは常に災禍と共にある。身を守る術をを学ばせるのは当たり前だろうが」

「ハッ、そうやって手下や仲間を増やすのが貴様の常套手段だろうが！！」

「当然だ」

「少しは否定しろ！！！！！！！！」

二人とも地に落ち、紫門は再び踏み込み風文は詰められた分の間合いを離す。

風文が太刀を持たない右手が剣指（指を剣に見立て立てる。風文の場合は人差し指と中指のみを立てている）を形作っているのを見た瞬間、紫門が慌てて横へと跳んだ。

「うおっ おおお！！」

「マイガッ！！」

紫門が横へと跳んだのと、風文の右手が振り上げられたのは同時だった。

瞬間、風文の手より放たれたのは衝撃波を伴う風の刃。

刃は大地を引き裂きながら壁にもたれ掛かる都築とリーガルの間を抜け、彼らの間に深々と爪あとを残す。

「三剣神道流『烈風』か」

「いかにも…さて、もう少し付き合ってもらっぞってえ!!」

風文が今までとは違う軽く腰を落とした構えを取ろうとした瞬間、彼は顔を後ろにそらした。

顔の前を通り過ぎる黒い小さな鉄塊、その軌跡を見ればコンクリートの壁に深々と刺さる鉄釘が見えただろう。

しかし、風文はそれを見ずにその釘が飛んできた方を見た。

「思惟か」

「思惟かじゃないわ…まったく、あんたは相変わらずね。はあ、
『はっほうふさいがり八方塞』の緊急招集」

そこに居たのは、目元だけを開け黒いノックペリとした仮面を被った思惟が立っていた。

風文はそれを聞くとヤレヤレと肩を落とす。

「紫門ここでお終いだ。フレイア、後始末を頼む」

「了解しました。行つてらっしゃいませ」

右手を胸に当てながら深々と礼をしながら、納得行かない顔をした紫門を引き連れるように去っていく風文を見送るフレイア。それを座ったまま都築とリーガルは見ていた。

「ミスタ都築。世界は広く遠い…そう思わないか？」

「ああ、そうだな」

外話 サイファ学園都市 後編

雲一つない漆黒の空、天に浮かぶ月。
中天に浮かぶ真円の蒼月は、津々と高見原の地を優しく照らしていた。

森林都市と呼ばれる高見原だが、近代的な高層ビルもある。

その証拠に上空から見た高見原は、緑の絨毯に所々ほつれビルが突き出ている。

特にビルが集中しているのは高見原の中央、巨大な中洲の山側にあるなだらかな丘。

場所の名前は高見原市桜区楼閣町。

ここは高見原一の繁華街だ。

高見原市桜区楼閣町 桜花ビル15階 ダイニングバー 『つきのもり月乃森』

高見原の真ん中には、巨大な中洲がある。

大きな三角形の中洲、その山側の頂点には海側の底辺にある険しい岩山とは違い、なだらかな丘。

丘の真ん中には神社があり、そこを中心に繁華街が広がっている。

その丘の中腹に近い場所に立つ、ビル群の中の一つにそれはあった。黒のミラーガラス張りビル。

その最上階の一室に『月乃森』はある。

ドアを開けると、そこは高見原よろしく薄暗い緑に包まれている。

蒼い月の光を連想させる様な淡い照明と、本物の植物をパーテーションに使い店内は鬱蒼としながらも静かな森をイメージさせる。

その中の一画、数個のグラスキャンダルに照らされたテーブルを囲み彼等は静かに密会を行っていた。

「しかし、敵地で『八方塞』の会合を行うとは大胆だな碎破」
「色々と都合が良かったんですよ」

透き通った氷が浮いた琥珀色の液体が入ったグラスを傾けながら、
風文は誰となく呟く様に喋る。

それに対するのは、彼の左側に座る人物。

薄暗い闇にボウツと浮かび上がる程の真白い顔。

体調不良等で浮かべる青白い顔と違い、まさに言葉通りの真っ白。

髪も睫毛も唇もベージュのスーツから覗く肌も総て白く唯一、風文
を見る瞳のみが赤色と言うアルビノ（遺伝学において色素の遺伝子
に異常がある事を指す）の男。

サイファグループのトップにして、『八方塞』と言う組織の長それが彼だ。

「風文も知つての通り、この高見原の地のほとんどの植物が固有種
『珠木』だ。この特殊な植物は能力者の『神域結界』を阻害する働
きがある」

「ヘイヘイ、細目総務部長に言われんでも解ってますよ」

「貴様ッ！解つてないみたいだから説明しただけだ」

「ハッ、そりゃあどーも。情報部統括役は何でも知ってるなあ！！」

碎破の後に言葉を継ぐのは、彼の左側に座りカクテルを飲む男。

頭を七三に分け灰色のスーツを着た、体格の大きな小肥りの中年。

彼の名は細目公一、サイファグループの総務と裏では情報部門を取り纏めている。

どうやら彼と風文は犬猿の仲らしく、細目は歯軋りが聞こえる程に
歯を剥き出しにし風文はどこ吹く風と酒を傾けている。

そんな二人の間に入るの一人の老人。

「こりや二人ともいい加減にせんかい、折角の酒がまずうなるわい。こつ言つ乙な席じゃ、ゆつくり酒の味を愉しむもんじゃぞ」

碎破の正面に座る白髪と白い髭をたくわえた好々爺然とした大柄な老人は、盃に注がれた日本酒を呑むとしたり顔で語る。

「むっ……」

「ふんっ……多々良老の言う通り、酒の味を愉しむとするか」

お互いに視線を反らしながらも、不機嫌な顔ながらも二人の険はなりをひそめる。

そんな二人を見ながら多々良老は溜め息を吐く。

「この二人は……どうして仲が悪いかのう。神鉄造りの過程でもこうはならんぞ？」

「老、二人が同じ固相と言う前提が間違っていると思いますか？」

「いやいや紫門よ、水と油ならば両親媒性の物質があれば混ざり合うじゃろ？」

「誰かが間に入れば混ざり合うと？」

「科学も人も同じ世界の法則に支配されとる、そう大して変わらんと言つ事じゃて」

溜め息に対するのは多々良の右側に座る男。

大柄でも小柄でもない中肉中背の黒髪の青年、整った顔ながらもあまり記憶に残らない顔をした男――七咫紫門――が多々良に合いの手を入れていた。

「と言う事で紫門、お主間に入らんか？」

「勘弁してください」

「そうそう、無理よ。あの二人は金気と木気、互いに相容れない相

剋關係ってやつ」

紫門の逆隣りの小柄な女性が、多々良の日本酒を強奪しながら話に割り込む。

周りに居る大柄な人物達から比較すれば、とても小さな身体だろう。しかし、作務衣に包まれたその態度は、周りに立ち込める能力者特有の圧迫感をものともせず極自然。

彼女の名は『時枝 思惟』水上誠一の師匠。

「こりや思惟、儂の酒をつ」

「また頼めば良いじゃない？ …… いい味ねえコレ」

「だからといって、酒を強奪していい理由にはならないぞ思惟」

「浄あんた相変わらずガツガチに硬いわ。助手の良子さん困らせてない？」

「余計な心配だと返しておこう」

気ままに振る舞う思惟を諷めるのは、思惟の隣に座る灰色のスーツを着こなす紳士。

長身でしなやかさを彷彿させる鍛え上げた身体に似合わず、理知的な輝きと伶俐な表情を持つ中年は、教え子達に振る舞う様に思惟に語る。

彼の名は『重金おもがね 浄じょう』、サイファ学園都市の大学部で教鞭をとる若き教授である。

話がテーブルを中心にして一回りした、と碎破が考えた頃。彼は白い顔を引き締め号令をかける。

「八方塞の諸君、定例会議を始めよう。各々方、神域結界を最大に

して頂きたい」

その場にいる全員意識を統一し、世界が書き換わる――

――Sound only――

「風文、計画の方はどうだ？」

「予定表通りだ。ただ『鳥籠』計画の方はスケジュールの約八割で遅れて気味だ」

「原因は？」

「人数が多すぎる。今はフレイアが手伝ってくれているが、俺一人では総て教えきれないのもある。自転車操業さながらだな」

「間に合うのか？」

「間に合わせる」

「解った。細目はどうだ」

「私の方は順調です。しかし、以前の予想通り芝川組系列の暴力団の取り込みは無理そうなので、対立関係を取りそうです」

「対処は？」

「あたしが行こうか？」

「思惟……頼めますか？」

「闇の事は闇の住人に頼みなさい。細目、後でリストアップして頂戴。総て始末するから」

「インビンジブルの再びか……了解だ、一両日中で用意しよう」

「では、次だ。紫門さん？」

「こちらもう少し難航している。思いの外、相手のガードが硬い。以前の作戦の影響だろう」

「ああ、不安の種作戦か。あれは大当たりだったからなあ」

「相手の中枢に不和や嘘の種をばらまいて、疑心暗鬼で同士討ちさ

せる。相変わらず風文の立てた作戦って、どっちが悪人が解らなくなるわよね」

「褒めるなよ」

「褒めてない」

「それはともかく、その影響で相手側の膿が出て結束が強まったのは違うない」

「……仕方がない。紫門さんは現状維持で続行で。多々良老？」

「神器の生産は上手くいっておるがの……」

「何か問題が？」

「それは私から話そう、多々良老の問題は私の方が原因だ」

「教授がですか？ 研究がうまくいっていないのですか？」

「以前からの問題点『共鳴器』と『儀式』の連動が、ここに来て浮き彫りになった」

「では？」

「浄の研究が進まなければ、神器の強化はしばらく無理だと言う事じゃわい」

「そうですか、解りました。サイファの方からは資金援助は惜しみませんので、なるだけ急いで下さい」

「解った」

「……さて、今回の会合で一人足りないのですが、誰か知っているか？」

「確かに……あいつ何処に行ったのかしら？」

「んー恋する乙女は目の付け所が違うな」

「風文！？」

「思惟の嬢ちゃん……風文の坊主が言わんでも、みんな知っておるわい」

「ええっ！？」

「まあ、あれだけ頬を染めたり熱烈な視線送っていたら俺が言わんでも気づくわ。一度振られてるんだから諦めれば……」

「風文！！ あんたねえ！！」

「スマン、口が滑った…とまあ謝ったついでに実は、俺の頼みで霧島の奴はアフガニスタンの山奥に行って貰っている」

「風文さん？ 計画の一貫ですか？」

「そうだ、場所が場所だからな。俺が行くと山の形が変わる上に焦土と化しかねん」

「解りました。では後で今回の会合の話を伝えておいてください…」

……さて報告の方は終わりました。では、本題にいきましょう。我等、世界の安定を続行するべく『災厄』総てを払い封じ込める『八方塞』の次の議題は………」

桜坂にて

桜坂の剣士。

時代錯誤な雰囲気醸し出すその名称は、時代劇等の大衆芸能の話ではなく高見原に流れる噂話の一つだ。

いつも通り噂話に詳しい桂二に聞けば、誠一の期待通りの情報を得られるだろうが今回は必要がなかった。

なぜなら、この噂話は高見原の噂の中では、最もポピュラーかつ真偽はどうであれ詳細が多い話だからだ。

「だからと言って、簡単に遭遇出来るわけではないよなあ」

桜坂の繁華街を照らすネオンを眺めながら、誠一は一人こちる。

午後8時 高見原市桜区桜坂 産屋通り

あれから二週間、誠一は桜坂に『よく』現れると言われる『桜坂の剣士』を見つくれるべく学校帰りに通っていた。

桜坂の剣士。

始めの噂話は、不良グループの壊滅の話だった。

高見原工業高と言えば、有名な不良グループが数多く存在する高校で、警察と言えども簡単に介入できない程の無法地帯。

その中でも30人規模の有名なチームが突然壊滅した。

ここまでならばチーム同士の争いや抗争でなっただけだと思いが事實は違う。

実際はたった一人の人物に、再起不能まで叩きのめされたと言う。これがただの噂話ならばよかったのだが、本当にチームが壊滅して

全員病院送りになっている事実。

それから桜坂の剣士の噂話は始まる。

ある時は、麻薬の売人グループを全滅させたり。

ある時は、危険な裏通りの犯罪者を一掃し、はたまたある時はヤクザの事務局を物理的に潰したりと大活躍の噂話。

「全くもって、正義の味方みたいだ」

誠一は桂二に頼み込み作成してもらった『被害者』の一覧を見ながら、ペットボトルのお茶を飲み干す。

そこには見るも見事な『犯罪歴』のオンパレード。

「恐喝に暴行、強姦と窃盗。違法薬物売買、銃器の違法所持に殺人犯……全部倒してる」

桜坂の剣士のターゲットは、総て犯罪者。

しかも共通するのが、『司法に裁かれていない犯罪者』。

この意味するところは誠一には解らないが、彩が言うには『これだけの犯罪者を的確に討ちつづけるには、背後に暇人かつ酔狂な組織がある』んじゃないかだそうだ。

そんな考察を続け今誠一達二人が出来る事と言えば、目撃情報が一番多い『桜坂』を中心に探しつづける事だった。

とは言え。

「二週間張ってて、姿形も見えないって……辛いなあ」

それも仕方が無い事だったりする。

桜坂の剣士の噂が広まり、一番最初に恐れたのはなんだと言われれば犯罪者だ。

悪であれば犯罪者であれば断罪の刃を躊躇なく振り下ろす。

そんな都市伝説じみたモノが、事実上存在するとしれたらどうなるか。

正解は鳴りを潜めるか、蜘蛛の子を散らす様に逃げ出すかだ。

その証拠に高見原の中で一番犯罪が多い桜区の犯罪率は、全盛期の半分まで下がった。

誠一は頼んでもないのに、そこまで書いてくれた桂二のレポートを読みながら『そりゃそーだ』と心の中で呟いた。

誠一自体も学校の友達から又聞きした時に、寒さを覚えた。

誠一の友達の話によると、とある用事で桜区の裏通りを歩いてる時に、チーマーの一団から恐喝を受けたらしい。

全身を赤で統一した集団に囲まれ、絡まれた。

友人は恐怖におののき、これからの自分の未来に絶望感を感じたらしい。

しかし、その絶望感は別の恐怖に塗り替えられる。

取り囲むチーマーの一角が、音もなく崩れ落ちたのだ。

突然の事に騒ぐチーマー達。

しかし、それで終りでは無かった。

周囲は混乱の増埒に包まれる、その状況を作り出した相手が見付からない。

次々に崩れ落ちるチーマー達、伝播する恐慌に友人は頭を抱え目を閉じてうずくまったらしい。

それから数分間（友人の体感時間だろうが誠一は数秒ぐらいだと考えている）経った後、友人は顔を上げた。

その時見たのが死屍累々と倒れるチーマー達の真ん中に立つ『白銀のレインコート』を着て、右手に白木の木刀を持つ人物だそうだ。

正直なところ誠一は何があったかは、良く解らないが彼に解る事もある。

それは相手はとてつもなく強敵だと言う事だ。

今までの相手と言えば、思惟の様な技巧派やフランベルジェのパワータイプだった。

しかし今回は違う、誠一が彩から聞いて確認したのは『霧島』はス
ピードを重視した『高速戦闘』が得意とする事。

今からの展開しだいでは戦闘になるかもしれない状況では、厄介な
問題点だと誠一は頭を痛める。

「んーまあ、そんな懸念も出会えるまでだけ……ん？」

溜め息混じりに背中を伸ばしていると、ビルの屋上に白い影。

いや、白銀のナニカがビルの屋上から屋上へと飛ぶ様に走っていた。

「チツ盲点だった、上か!!」

何で二週間近く見付からないのか。

その原因によやく誠一は気付く。

当初、桜坂の剣士は路地裏を移動して、ターゲットを狩っていると
考えていた。

しかし実際は違った、友人の話や噂話から考えれば簡単に解ること。

「なんてことない、桜坂の剣士は上からきていたんだ」

突然に現れる剣士。

当然だ、人間普通は頭の上に注意なんてしない。

ましてこの街は森林都市、頭の上の半分は枝葉で覆われて注意力な
んてほとんどない。

今は考えるより動く事だ、と誠一は考え励起法で身体能力をトップ
ギアまで一気に引き上げ一目のない路地裏に入りビルの壁を蹴る。

「上を走るなら俺もっ!!」

誠一は足場のない左右のビル壁を、テンポよく蹴り五階程の高さを

あっという間に駆け上がる。

「どこだ！？………凄い」

森に空のほとんどを塞がれていた道路とは違い、五階程の高さは空がよく見える。

急いで周りを見回せば、誠一は満月に照らされ現れた景色に目を奪われる。

眼下には広大に広がる緑の絨毯、そこから伸びるビル。

月の光に照らされたそれは、幻想的な雰囲気醸し出し誠一の意識を一瞬だけ奪った。

「っじゃない。見てる場合じゃ」

慌てて周りを見れば、緑の絨毯を滑るように走る白銀のレインコート。

誠一は後を追うべく屋上の手すりを強く蹴った。

それぞれの事情

カタカタとキーボードを打つ音だけが暗闇に響く部屋。

ディスプレイに照らされ闇に浮かび上がる男、七瀬桂二は常に浮かべている笑顔は鳴りを潜め苦虫を噛み潰した表情をしていた。

「しかし、それでは今いる人員だけでは捌ききれないですが……………」

喋り方もいつもの様な軽い口調ではなく、とても畏まった丁寧語であつた。

喋りかけているのはだれだろうかと思えば、桂二の耳にかけてあるヘッドセットから話し声が漏れ微かに聞こえてきている。

「はい、そうです。予想外の拡がりを見せていて……………はい。『偽神薬』の流通ルートの八割を確認した迄は良かったのですが、最後の最後にルートが重なり、どうやら複数のルートを見付けて更に枝分かれを……………了解。視野にいれて引き続き調査を進めます……………」

丁度そこで通信が切れたのか、桂二はヘッドセットを外すとキーボードの上に放り出し椅子の背もたれに勢いよく体重を預けた。

「……………つたく。趣味の範囲だけの話がどうしてこうなつたかね」

桂二は二年ほど前までは、ただの噂話が大好きな少年だった。

西に噂があれば情報収集に向かい、東に不穏な噂話があれば飛び込むべく体当たりで話を聞き、北に噂話の好きな女性がいれば口説き倒した事だつてある。

まあ中学生の時に40代の女性…とは、やり過ぎだったと今では桂二は反省しているが……………。

そんな彼の転機となったのが一年前、とある噂話の裏付けをとる為に偶然見てしまった何かの取引現場。

噂話は良く聞く『ありがちな』シユチエーションだが、実際見てみればあまりの緊張感で桂二は動けなくなってしまうた。

今では問題なく隠れられるが、当時は何も知らない少年だった桂二は物音を出し足をもつれさせた。

「ホントにアレだ。転換期？ いや、分水嶺ってヤツ？」

案の定、見事に捕まった。

今では良く知る能力者の能力でゝとかではなく、能力者でも何でもない噂話好きの一般人の桂二は、頭に拳銃を突き付けられ身体を恐怖に震わせながら組み敷けられた。

そこからはお決まりのパターンで、縛られた後で『何処の手の者だ』とか『誰からの指示だ』などの暴行からの尋問。

あの時は『ああ、噂で聞いていたけど本当なんだ』と、桂二は感心しながら現実逃避を行っていた。

そんな時である、殴られ血で真っ赤に染まり朦朧とした頭に『音が響いた。』

今でも桂二は鮮明に思い出す。

縛られた桂二の反対側、暗がりから響く音。

いや、正確に言えば歌声だ。

澄み渡るや鈴を転がすや陶酔するや美しいや綺麗や、そんな総てを頭すどんな修飾語でも表現できない『声』。

歌いながら現れた突然の闖入者に対応出来ない男達、もとより動けない桂二は呆然と見ていた。

完全にその場は闖入者のオンステージになっていた。

その場の全身が棒立ちになっていた、それに気付いた男達の反応は少々遅かった。

闖入者の歌がオペラの、いやイタリアのカンツォーネの様にクライ

マックスに差し掛かったその時。

桂二を捕まえた男達が、口鼻や耳から血を流しながら崩れ落ちた。

「いやー今さらながら、厨二っぽいわ。あれで感動して涙するなんて」

ヘッドセットを人差し指で回しながら、桂二は自嘲する。

その光景に恐ろしい以前に美しい何て考えて、感動した挙げ句に涙まで流したのだから。

まあ、種明かしをすれば取引現場を監視していた別口の『能力者』に助けて貰った『だけ』。

桂二はそこからその助けてくれた人のツテから、この裏の世界に足を踏み入れる事となった。

「……………ん？」

そんな昔話を思い出しながら今後の方針を考えていると、ディスプレイに「緊急通達」の文字がポップアップされていた。

慌ててクリックし彼が持つ20桁のIDとパスワードを入力すると、桂二は顔色を変える。

「チッ怪人が変態か知らんが、冗談キツイぜ。これ以上増えられたら処理仕切れん……………」

そのディスプレイには、こう書いていた。

「第三隊 高見原分隊に緊急度C連絡 先日の高見原タワー地下の爆発事故と同時期に起きた事件に能力者を見たと情報があり確認を急がれたし。人物の詳細は全身タイツに……………」

高見原桜区とある袋小路の空地

笥^{かけい} 宣夫は自分の不運を呪っていた。

思うにケチの付き始めは、先月出会ってしまった噂の剣士だろうと彼は考える。

いや、産まれてこの方良いことなんてありやしねえと、ぼやきながら彼は目前に突き付けられた木刀の切っ先を見つめる。

笥宣夫は孤児だった。

話によれば、寒い冬の日孤児院の前に捨てられていたらしい。らしいと言うのは孤児院の仲間や周りの人が話をしていたのを聞いていたからだ。

そのせいか、思春期の彼はとても荒れていた。

目についた人に総てに喧嘩を売ったり、犯罪紛いの事をしていた。家族のいない寂しさや足元の不安定さ、そんな感情が漠然と感じていたせいだと宣夫は考えていた。

そんな荒れた日々、彼の前に一人の男が現れる。

黒髪に黒いスーツと全身を黒で固め、髭をたくわえ長い髪を後で束ねた紳士然とした中年。

宣夫は反射的に殴り掛かり、一瞬にして取り押さえられる。

『貴方、自分の秘密を知りたくないですか？』

今でもあの時の、あの黒い男台詞は忘れられない。

「ウヒイツッ！！！！」

ゴウツと目の前を、木刀の切っ先が迫る。

考え中に攻撃を仕掛けられた宣夫は、横っ跳びにかわす。

危ないっと言う間もなく、返す刀が彼の胸を狙い迫って来る。

タイミングをあわせ水泳の飛び込みの要領で木刀をかわし、地面に着地と同時に転がり剣士との距離をとる。

用心とばかりに更に駆け、距離を空け剣士を見れば黒いレインコートのフードに隠れて表情は見えないが、どうやら驚いているのだろう。

漆黒に光るフードの奥から除く瞳が大きく開いていた。

「へっ。無理矢理に覚えさせられた体術が、こんな時に役立つなんてな」

何て皮肉だと、声にならない言葉を紡ぎながら、宣夫は励起法の深度を慎重に下げながら逃げる算段を考える。

『…確か、第一研究所じゃあこんな時は……………』

更に間を空けるべく、励起法で強化された足で大地を蹴る。

しかし桜坂の剣士も黙って逃走を許しはしない、地面をスライドするように間を一瞬で詰める。

「うええっ思った通り速い!!」

相手は目の前、見れば下段に構えた木刀が跳ね上がる寸前。

宣夫は腕一本を覚悟しながら防御するべく、頭を抱え脇を締め身体を固めた。

「??」

しかし衝撃は無い。

怪訝に思い、構えた腕の隙間から窺えば必殺だった間合いを空け剣

士は仰ぎ見る様に宣夫の後よりやや上を見ていた。

「私の熱い情熱が言っている！！ その思いにそって正義を成せと！！」

思わぬ声に振り向き、宣夫は固まった。

二階建ての店舗の屋上。

そこに仁王立ちする赤い全身タイツの男、ハッキリ言ってこんな時間に見れば……いや、こんな時間でもなくとも変態である。

「赤き情熱と正義の使者！！ パッションレッド！！」

宣夫と剣士はその時だけは心が一緒だった。

『変態が増えた』

護天八龍

「はあっ変態がいる？」

高速で木々の間を縫う様に走り抜ける桜坂の剣士を追って、同じ様に走り抜けようとした誠一だったが思うように行かなかったのかグングンと離されて見失っていた。

そんな中、誠一のポケットの中の携帯電話が着信を知らせる。

木々を跳び移る足を止めずに携帯電話を確認すれば、そこには見知った名前が載っていた。

挨拶も疎かに出た桂二の第一声に対しての台詞が冒頭にあたる。

『確かに変態だが、ただの変態じゃあない能力者の変態だ』

「なんだそれ？」

『この間の高見原タワーでの話を覚えているか？』

「ああ、船津の奴が地下研究所に入り込んだ時か」

そう言うとき誠一の頭には、毎朝の修業に付き合っている男の顔が思い浮かぶ。

『そうだ、実はあの時も一つ騒動があっただけだ。ハウンドと言う部隊をお前知ってるだろう？』

知ってるも何も先々月に襲われたと思いながら誠一は、ああと返す。

『そのハウンドの分隊の一つが壊滅したらしい』

「お前どこから、そんな情報を……」

『深く考えるな秘密だ。それよりだハウンドは能力者を狩る部隊と

言うのは知っているだろう、簡単に言えば返り討ちにあつたらしい」
「って事はその変態」

『ああ十中八九、能力者だろう』

また面倒な事が増えたと誠一は舌打ちをするが、電話越しの桂二はまあ待てと抑える。

『なあ誠一、能力者の世界人口ってどれくらいか知ってるか？』

「そりゃあ、お前………ん？」

言われて誠一は気付く、能力者のなんたるかは大体解ってはいるが、どれくらいかは解らない。
むしろ姿形、素性を隠す気質を持つ能力者の正確な人数は解るのだろうかと疑問も付き纏う。

「解らない」

『だろうな。ふふっ聞いて驚くなよ世界人口の約0.1%だ』

「そんな多いのか!？」

世界人口の約0.1%。

字面で見れば少なく見えるだろうが、69億の0.1%数字で言えば約69百万。

『ふふ、やっぱり驚いたな。俺も最初聞いた時は驚いたからな。だけど、この数字は潜在能力者を入れた数字になる』

「潜在能力者？」

『能力者でありながら能力者と自覚がなくて能力を使えない、もしくは使わない奴らと能力が開花していない奴らだ。能力者が自覚しないパターンが一番多いと聞く』

「なんだそりゃ」

『んじゃ逆に聞くぞ、誠一。お前はいつ能力者と自覚した？』

「……………それは……………ああ、そう言う事か」

誠一は逆に聞かれて納得した。

思えば誠一自身が能力者と自覚したのは彩に言われてからだだったが、その前から妙な事は色々あった。

車に轢かれて無傷だったり、相手の能力を受けて何となく理解したりと。

それは自分の能力があつたからだ。

しかも、『自身の水分を操る』能力があつたから。

これが別の能力や識者の能力者だったらどうだろう？

能力者は産まれてからずっと能力者だ。

識者であれば他人と違うモノが見える聞こえるは『当たり前』で、気付く事なく不意打ちで死んでいた。

「当たり前過ぎて気付かないのか」

『その通り。能力者の約八割は識者で視覚系だから余計だ。まあ、ここまででは予断だ。問題は能力者の数が思った以上に多いと言う現実だ。昔から示唆はされてきたんだ、そーいう変態が出てくることは』

「絶対数から考えると、そんな奴らが出てくる可能性はあるって事か」

『正解、特にこの国はそうだ。平和が故に争いを求め、その正当な使い方を示したい願いを持つ者が出てきやすい』

「なんだそりゃ」

『この国の子供が見るモノはなんだ？ 解りやすいや勧善懲悪のヒーロー物の特撮やアニメだ』

どんな理由だ。

そのとんでもな理由に誠一は跳び移る枝を踏み外しそうになる。

『その確率が高いって事さ。その証拠にお前が追ってる桜坂の剣士もそんな類だぞ?』

「マジか?」

『マジもマジマジ。今まで桜坂の剣士に狩られた人間の約七割は能力者だ。まあ、そう言う事で気を付けろよ? 片やヒーロー気取りの変態能力者、片や世を乱す奴らや能力者を狩る能力者………同時に現れたら目も当てられん事態だ』

「……………桂二、どうやら目も当てられない事態みたいだ」
『は?』

足を止めて枝葉の隙間から眼下を見れば、話に聞いていた白銀のレインコートを着て木刀を振るう剣士と赤だか銀だか解らない全身タイツの人物が戦っているのが誠一の目に映る。

耳をすませばなにやら爆発音まで聞こえて来る。

状況は桜坂の剣士が不利。

『おっおい誠一、お前今何処にいる!?!』

「すまん桂二、急がなければいけない状況らしい」

『ちよつとまで、場所くらい言っ………』

おもむろに携帯電話を切ると誠一は、背負ったバックから彩から渡された物を取り出す。

戦闘になるならこれを使い、と言われて渡された物。

最初は何の冗談だと言って突っ返した物だが、『能力者戦闘についての伝統らしい』と言いながら持たされた。

まさか使う羽目になるとは言いながら、誠一は『ソレ』を被った。

ソレは龍を模した仮面だった。

顔の上半分を覆う黒い龍の仮面。

見る人が見れば解る東洋の水龍。

誠一は仮面を被り、ペルソナを心に纏う。

「護天八龍 水龍参る」

情熱の赤

ズンと重く響く音と、砂煙が裏路地の終着の袋小路にハラハラと舞う。

何事かと宣夫が目をやると、彼は体中に巡る脱力感と戦いながら警戒をする。

「また増えたよ」

「やかましい、好きでやってんじゃない!!」

宣夫が思わず呟いた言葉だったが、どうやら聞こえていたらしい、ヤケクソ気味に返される。

増えた闖入者。

黒革のアウトターにジーンズのパンツ、シンプルな組み合わせの服装をした中肉中背の青年。

特筆するべくは青年の被っている仮面だ。

顔の上半分を覆う蜥蜴の黒い仮面。

「いや、角がついてるから龍か？」

鹿のような角が耳の後の辺りから伸びていた。

爬虫類の頭に鹿の角、それは東洋の龍。

いや、そんな事は問題じゃないと宣夫は頭を切り替える。

こんな場所の異常な状況に『わざわざ』飛び込んできた闖入者。

宣夫としては切り抜けないといけないこの状況において、この闖入者は状況を治めるのか、もしくは混乱させるのかを見極めなければならない。

相手の立ち位置しだいでは敵対するかもしれない今では余計気が抜けないのだ。

いつでも動けるように励起法を維持しつつ、宣夫は周囲を注意深く見る。

見れば全身タイツの変態と桜坂の剣士も警戒したのか、今までの戦いを止めて闖入者を見ていた。

いや、全身タイツの変態は何故かソワソワとしながら見ている。

あれは恐らく闖入者が名乗りをあげるのを楽しみにしているのだろうと、宣夫は脱力感と抗いながら確信した。

龍の仮面の青年と同じ様に着けているプロレスラー風のマスクの口元が、楽しそうに笑ってるから間違いはない。

それをあの龍の青年も気付いているのだろう、頭を軽く押さえている。

「あーうー。…まああれだ、こっちの事情でその剣士に聞きたい事があるんだ……だから、少し介入させてもらう。………護天八龍が一、水龍参る」

別に名乗りをあげる必要なんてないのにと、宣夫は心で呟きながら闖入者は意外とお人よしだと判断する。

そうこう言いながら龍の青年は、腰を深く落とす。

「………嘘だろおい。また高レベルの能力者かよ」

その宣夫の呟きを肯定するかのように、激しい崩壊音と消える龍の青年。

今回、宣夫には見えていた。

大地が陥没するほどの踏み込みと共に、全身タイツの変態の前に瞬間移動もかくやのスピードで迫る。

「ふっ！！」

「はあああ！！！」

水龍の放つ中段の掌底、それを驚くべき事に変態ことパッションレッドは腹で受け止めた。

『励起法』それは人と言う枠を超える能力者特有の技だ。

しかし実際はそれは常人にとつては脅威どころの話ではない。

誠一が車に轢かれて傷一つなく、慌てながらも平然としていたのを皆さんは覚えているだろうか？

彼は車と言っていたが、実際はワゴン車に猛スピードで轢かれている。

皆さんならば解るだろう、2t近い重量の物体がスピードをあげてぶつかった時の威力を。

そう、人や超人どころか生物の域を軽く越えているのである。

そんな能力者が、しっかりとした武術と戦闘を覚えて攻撃を仕掛けると言う事はどれだけの威力になるかは筆舌につくしがたい。

少なくとも一撃としては、とんでもない威力を予想される水龍の攻撃をあの変態ことパッションレッドは耐えるどころか受け止めたのだ。

その光景に宣夫や剣士のみならず、打った水龍自身も驚愕して一瞬固まる。

「フンッ!!」

その隙を相手も見逃す訳もなく、パッションレッドは受け止めガード体勢から打って変わり、水龍に左右のショートスマッシュから右ストレートと言うコンビネーションを叩き込む。

「ぐうっ」

最後の右ストレートは辛うじて手で受けたものの、最初の二発は見事に受けて軽く宙に浮いていた為に水龍は元の場所まで戻される。

「ハハハッ素晴らしい力だ！！　しかし、このパッションレッドには通用しない！！　諦めたまえ悪の使者」

「あんだの中で、俺がどんな扱いかわかんないが……………悪ね」

「そう、悪だ！！　その剣士は夜な夜な悪を倒しているらしいが、君達には足りないものがある！！」

「なんだそりゃ」

反射的に思わず聞き返した宣夫に、レッドは胸を張り高らかに言い返す。

「君らに足りないもの、それは絶対なる意志だ！！　人を動かす衝動！！　熱い魂が足りない！！」

もうなんか嫌だ。

見た目のおかしさと言動のウザさに、虚無感とか何か全てを投げ出したい雰囲気漂う。

「やかましい！！　貴様がどんな信念があろうが正義があろうが知らんが、俺は俺の意志で闘う！！」

そんな雰囲気破る様に、水龍は怒りを含んだ返答を返す。

「……………そうね、あなたにどんな意志があつて、どんな正義があるうとも。私は私の信念にそつて剣を振るう」

小柄な身体から、おそらくは子供か女性だと感じていた。今聞いた声は明かな女性特有のソプラノ。

『女、しかも若い』

宣夫と水龍は同じ様に気がついた。

しかし水龍だけは、どこかで聞いたような声に頭を傾げる。

「君達には私と共に戦って貰いたいんだけどね」

「出来ると思うか？」

「戦い合ったら友情が産まれるらしいが？」

「……………もういい、ダメレ」

「何を言うっ！！　こうやって語り合う事も素晴らしいだろう！！」

……………まあいいさ、戦おう。千の言葉より一の拳の方が解りあえる。
本気で行くぞ」

思ったよりマトモな返答で終わり、肩透かしを食らわされたかのようになる。

しかし次の瞬間、宣夫はともかく水龍と剣士は異様な圧迫感を感じ構える。

「私の本気、全力の情熱を受けとめろ！！　パッションブースト！！」

「何っ！！」

次の瞬間パッションレッドの背中が爆発したかの様に炎が上がり、文字通り飛ぶ様に突っ込んで来る。

「はああああっっ！！」

「うっっ」

飛び込みからの左ジャブ・右フック・左ストレート・右ストレート・左ボディブロー。

一瞬にして繰り出されるコンビネーションブローに、水龍は頭だけ

を守りつつ耐えるしかなかった。

「遅い!!」

「しかし甘い!! パッションアーマー!!」

その攻撃の隙を狙ったのか、剣士が身体を開く様に木刀を掬い上げる様に切り上げる。

しかしその攻撃もパッションレッドは、身体で安々と受け止める。

「何だありや。技自体は洗練とした攻撃なのに、防御が異常だ」

何度も言うようだが、あのパッションレッドとやらの言動や服装だけを見ればただの変態だが、ボクシングスタイルを主体とした攻撃方法と未知の能力による戦闘力は一級品と言っても差し支えない。そして何よりも、

「二人掛かりでも圧倒されているか………マズいな」

「つつ!!」

宣夫の後にいつの間にか人が立っていた。

慌てて振り向くと、そこにはミリタリージャケットを羽織る男。

胸元を開いた着こなしをし、そこから見える銀色のネックレスと口許に浮かべる笑みが軽薄さを醸し出している。

「誰だ」

「ちよつと野暮用で来ただけだよ。…つと励起法は止めてくれよ?

こちらとら普通の人間。ただの一般人なんだから」

ヘラヘラと笑いながら返してくる男に、宣夫は警戒心を拭えない。目の前の人物からは励起法や能力者からは、何らかの『力の波動』

は感じないので確かに普通の人間だろう。

しかし、この距離まで気配を消して近づき、能力者達の戦いに違和感も感じずいる男が一般人とは考えにくい。

「うん？ さっきの答えはお気に召さない？」

「当然だ」

「うーん、それは困るね。俺としてはあそこで負けそうになっている奴…龍の被り物をしてる奴を助けなきゃいけないんだが？」

「……………それを何故、俺に言うんだ？」

「……………あんたも能力者だろう？ ちょっとさ、手伝って欲しいんだ」

撤退

『何なんだコイツは！？』

水龍こと誠一は、龍の口の部分で口元を隠して歯がみしていた。

それもそうだろう、一番最初に打った中段の掌底『龍打』は、毎朝の修業の時に東哉に打ち込んだら彼が水平に吹き飛ぶと言う偉業を成し遂げた程の力はいれたのだ。

しかし結果は腹で受け止められ、挙げ句には微動だにしなかった。

更には反撃のコンビネーションは、反応は出来たが打ち返す事が出来なかったのである。

誠一は完全に圧倒されていた。

原因は誠一の実戦の経験不足などが挙げられるが、最大の問題は相性の悪さ。

『一番の問題は、攻撃速度と奴の異常なまでの防御力だ』

攻撃速度は今戦っているかぎりだと自分のスピードより二段階程上、同じ様に高速戦闘を得意とするであろう桜坂の剣士と同等か少し下ぐらいだろうと誠一は見ていた。

そしてそれが異常なまでの防御力と相まって、異常な戦闘力に昇華しているのだろうと誠一は分析する。

『戦闘スタイル的に相性が悪すぎる。しかも、一番問題なのは、あの……』

考えながらパッションレッドの攻撃を捌き、耐えていたが限界を迎えていた。

何発目かのボディが、誠一の膝をつかせた。

「ぐう！？」

「さて、良く耐えたね。ここで提案だが、私と一緒に正義を目指す
ないか？」

「言ってる事が悪者だぜレッド？ 答えはノーだ」

「残念だ。君を悪として倒さなければならぬとは。共に正義の道
を歩めるかと思ったのだけどね」

それこそ言ってるだと呟きながら誠一は、身体を動かそうと励起法
を使い最大限まで治癒能力を引き上げる。

がしかし、ユツクリと拳を振り上げるパッションレッドを見れば間
に合いそうにない。

桜坂の剣士を探すか、ついさっき木刀に合わせたアッパーカットに
吹き飛ばされて姿は見えない。

隙さえあれば何とかかなりそうだが隙がない。

万事休すかと誠一が歯がみしていた、その時。

「水龍ー！ー！！」

「何だ？」

自分が名乗った名前を呼ぶ声。

誰が発したかは解らないが、パッションレッドの目が一瞬だがそち
らを向いたのを確認するより早く、誠一は震える足を叱咤しながら
励起法で大きく声のした方へと跳んだ。

ヒュンと耳の側を猛スピードで通り過ぎる銀色のアルミ缶。

「耳塞げえ！！」

とても聞き覚えのある声に従って、誠一は耳を塞ぐ。

次の瞬間、光と轟音が袋小路を満たした。

深夜12時 桜区北川端公園内ベンチ

街路灯に照らされた五人掛けのベンチに男三人並んで座っていた。一人は肩で息をしながら俯いて、もう一人は同じく手を広げて空を仰ぎ息を切らせて、最後の一人はタバコを燻らせながらむせていた。

「あーヤバかった」

「ヤバいどころか、どーして此処に居るんだよ。普通の人間だろお前は？ それに、なんだあの爆音と閃光は」

「…………ふっふっふっ、あれは米軍の対能力者戦用スタングレネード『シャイニングフラッド』。米軍からの横流し品をパクったは良いけど使い所がなくて困ってたんだが、あんなに凄いものだなーあっはっは」

笑いごつちやないわと言いながら誠一は、そこでようやく龍の仮面をとる。

「凄い所じゃない。笑い事じゃないぞ、至近距離で破裂したら人が吹き飛ぶ威力だ…………まあ、しかし助かったよ。すまないな桂二」

「おうよ親友」

「…………おまえ、誠一っ？ 誠一か？」

誠一が出した拳に拳を当てながらだれる二人。

そんな二人に突然、煙草を吸っていた男が誠一の顔を見て驚く。

「え？ 寛さん？ 寛さんじゃないですかー！！」

「やっぱり誠一か！！ 大きくなっただなあ。前は子供っぽかったの

になあ」

「よして下さいよ、箕さんが出てからもう三年ですよ？」

「おい誠一、知り合いか？」

桂二が聞けば誠一は振り返り、ああと頷き箕を紹介する。

「この人は箕宣夫さん、俺の住んでる所を三年前に出た人だ。箕さん、こっちは桂二だ。知ってるだろ？」

「ああ、三年前にも聞いた腐れ縁の友達か。箕だ、さっきは助かったよ。疑って悪かったな」

「いや、こっちも手伝って貰って助かりました。七瀬桂二です」

何があつたかは解らないが、誠一を挟んで不敵な笑みを浮かべながら握手しあう二人。

誠一は怪訝な表情をしながら二人を眺めていた。

「しかし、箕さんは何であんなところに？」

「そりゃ俺の台詞だ。俺は最近噂の『桜坂の剣士』に追い詰められていたんだ。逆に聞くが、お前は何であんな所でいたんだ？」

「いや、あー」

どこまで話して良いのか困った誠一は言葉に詰まる。

自分の目的は自分だけの物ではない、彩との約束の延長線上の物だ。だからこそ言っているいいか、誠一は解らない。

そんな葛藤は次の一言で破られる。

「私が頼んだから」

「うわわわわっつっ！！！！！」

いきなり後から声をかけられ、三人全員がベンチから転がり落ちる

ように距離をとる。

しかし、声をかけた人間を見た誠一は肩の力を抜いた。

「彩さん。驚かせないでよ」

「アハハハ、ゴメン。でも結構前からいたのよ？　でもあまりにも男っぽい雰囲気だから入り込みにくくてね？」

そう言いながら彩は、柔らかに笑う。

そう柔らかに、彩は笑う様になった。

彩の過去を聞いた日から、彼女の表情は柔らかくなった。

今まで彼女はずっと独りで戦っていたのだ、姉と生き別れ他人の心を読める能力故に一切気の抜けない生活をしていたのだろう。

そんな彼女が出会い心情を吐露したのが誠一だ。

誠一は彼女の笑い顔を見ると幸せになる。

以前みたいな張り詰めた笑い顔も綺麗だったけど、今みたいな柔らかい笑顔が一番綺麗だと誠一は考えて。

「アイタッ」

彼女が持っていた飲んでいないコーヒー缶を全力で投げられた。

「アタタタ。彩さん、怪我しないけど痛いよ」

「あなたね……………恥ずかしい事を考えない！！」

見れば顔を真っ赤にした彩がそこにいた。

どうやら誠一の心は相変わらず読まれていたらしい。

撤退（後書き）

この話でGW進行は終わります。

顔を突き合わせて

「…………なあ誠一？」

「何です算さん？」

「何で俺ら正座させられてんの？」

「すみません」

公園の芝生の上、仁王立ちの彩を前に三人は正座で説教を喰らっていた。

桜区 北川端公園 芝生

「———という理由で、能力者と言うのは極力目立たないし正体を知られないのが原則！！　あなた達解った！？」

「ハイイ」

彩の説教の内容は桂二が使ったスタングレネードについての事で、概ね『能力者の大原則、目立たない・正体を隠す・人間社会を乱さない』と言う事だった。

今までの能力者達の歴史から考えると、さもありなんでしょう話だ。使ったのは桂二だが、誠一としては明らかに照れ隠しの逆ギレなので、宣夫にとってはいい迷惑だったので誠一は棒読みながらも素直に謝った。

と言う所で説教は終わり、彩が溜め息まじりに話を変える。

「まあ、事の次第は誠一君の心を読んだからあらかた分かってるわ」
「最近、俺のプライバシーとかないよね」

「…………誠一、苦労してんな」

「いつだって男は女に泣かされるもんだ…………誠一強く生きる」

余りの事実にも脇にいる男二人慰められる誠一は、軽く涙ぐんだ。

「もうっそんな事より、誠一君。手は大丈夫なの？」

「なぬっ？ 誠一お前、怪我してたのか？」

彩の言葉に、やっぱりバレたかと誠一は内心溜め息を吐きながら両手を彼女に見せた。

「ウオッ何だこれ！？ 手が手袋みたいに腫れてる」

それを見た桂二が目を見開き驚く。

「あの変態を攻撃したらこうなった」

「…………何かしらの能力だろうな」

誠一の手を見た宣夫は、腫れた手を見ながら呟いた。

そう、これは明らかに何らかの能力によるモノだった。

最初に加えた『龍打』に始まり、相手の攻撃を捌きカウンターをきめた攻撃すべてに誠一は違和感を感じていたのだ。

「あいつに攻撃を仕掛ける度、拳に痛みが走ってた」

「拳に痛み……………か」

どこからか取り出した包帯と湿布を彩に巻いて貰いながら誠一は語る。

それを聞き、桂二はしばらく考え込み疑問を口にした。

「なあ、誠一。お前、攻撃したら痛みがはしったって言ったな？」

「ああ」

「あの変態、もしかしたらスゲー打たれ強くなかったか？」

「ああ、でも何でわかる？」

「やっぱりか……」

また少し考え込んだ後、桂二は結論がでたのだろっ、むうと唸ると口を開いた。

「今は死んでいるんだけど、昔似たような能力者を聞いた事がある。名前は知らないが能力名は『アーマー』」

「えらく簡素ね？」

「ああ、俺もそう思う。しかし、能力は折り紙付きだぞ？ そいつは体外に出ると固まる体液を毛穴から放出して、身体に細かい糸で編んだスポンジ状の高分子ポリマーにも似た装甲を纏っていたらしい。しかし、そいつの能力の恐ろしさはそこじゃない。Explosive Reactive Armourって、お前ら知っているか？」

突然振られた言葉に誠一と彩は答えられない。

聞いた事のないその言葉に対して答えられない二人に対して、意外な人物から答えが返ってきた。

「Explosive Reactive Armourって、もしかして戦車の装甲のERAか？ たしか被弾した時に、砲弾や成形爆薬の圧力に反応し装甲が爆発して砲弾や爆薬の威力を削ぐってヤツだな。一昔前は良く実戦装備されていたらしいが、爆発に味方が巻き込まれる欠点で今はない」

「箕さん、詳しいですね……まさか、桂二？」

簡潔にサラっと言った宣夫の説明に関心しながらも、誠一はその内容に感じている事があった。

その感覚に対する言葉は彩が引き継ぐ。

「話の内容上、今言ったスポンジ状の高分子ポリマーってヤツが、ERAってのになるんでしょ？」

「正解。恐らくはあの変態も同じ能力だと思う」

誠一は桂二に言われた事は、何となく理解した。
幾度となく打ち込んだ拳。

しかしそれは総て能力による防御によって、文字通り見えない爆炎に『弾かれて』いたのだらう。

「だが、相手の能力は解ったがどうやってアイツを倒すんだ？」

「そうよねえ。このまま『桜坂の剣士』を探すつもりなら、その変態の横槍が少々邪魔ね。やり合う事も視野に入れていた方が良いでしょう」

それが一番の問題だった。

あの変態ことパッションレッドの目的は今一解らないが、言ってる事をそのまま信じるのならば彼の目的は『正義の行使』だ。

「出会ったら戦う事になるでしょうからね？」

「激突は必至か……………」

誠一にとっては頭が痛い事だった。

「……………だとすれば、どうする？ 奴の能力は少々厄介だ」
「…だな。寛さん、ERAって何か弱点ってないですか？」

詳しいであろう宣夫に聞くが、サッパリだと頭を振る。

「戦車と言う意味であればあるけど、奴の能力では浮かばないな」
「そうですか……………」

言われて見ればパッションレッドのERAは戦車の装備ではなく、
奴自身の能力だ。

自分の能力で自爆する能力者なんて有り得ないし、実際戦った所から考えると自分自身に対しては影響はないのだろう。
しかしそう考えると、

「弱点ないですね……………こうなったら、玉砕覚悟で潰すしかない」

最近名前を決めた誠一的能力『水系の理』は、体内の水分を操作して
身体強化を行う能力。

ハッキリ言って能力者にとって、ある意味反則技に近い能力である。
励起法と言う身体強化に、重ね掛けが出来ると言ったら解るだろうか？

人の枠を超える励起法で人を超えた身体に、更に強化をかける。
異常にも程がある。

しかし、そんな誠一でも、『能力者としての相性』で今回はやられて
しまった。

それを上回るのならばと考えるならば、『玉砕覚悟』と結論はそう
なってしまうだろう。

そんな覚悟を決めた誠一を彩が止める。

「私は誠一君の身体を傷付けてまで戦って欲しくないよ。……………それより、一つ提案があるの」

「提案？」

「そう。ねえ、武器使える？」

出会う世界 5月15日加筆修正

高見原学園 二年生廊下 午前10時

授業の合間の休み時間は、日本のみならず世界の学校どこだってざわついている。

教室のみならず廊下でも、人の笑い声や話し声が色んな場所で溢れていた。

そんな中、まだ授業があると言うのに、帰り支度をしてあるく男がいた。

彼は学校にもかかわらず大きなボストンバッグを背に、目当ての教室へと入って行った。

「東哉」

低い低音域の声で彼が呼ぶと、二人の女性と男性と談笑していた東哉と呼ばれた男がアレツ？ と声の主を見た。

「珍しいな、誠一がコッチのクラスに来るなんて」

「いや、朝連絡するつもりだったんだが忘れててな」

「連絡？ 何だって荷物が多いな？」

とそこまで言うと誠一と東哉は、三人の視線に気付く。

「どっとうしたんだ皆？」

今まで見たことのない視線を感じて、東哉は怯みながら聞き返す。

「いやなあ」

「東哉君が私たち以外の友達がいたんだって驚いたんだよ」

「ちよつ天音ついくら本当の事でも言っちゃだめー」

「何か最近、天子が黒い……………」

「いや、東哉？ 元気だせ？ な？ な！？」

落ち込み椅子の上で膝を抱える東哉、それをフォローする男。

傍らでは黒い雰囲気を撒き散らす笑顔の少女と、その少女を宥めるつもりでトドメをいれたクール系の少女。

ハッキリ言ってカオスだ。

その状況を打破するべく誠一は話し掛ける。

「東哉……………あー彼らは？」

誠一の言葉に東哉は気を取り直すと、彼等を紹介し始める。

「みんな紹介する。隣のクラスの水上誠一。こっちは浩二。俺の腐れ縁」

「片渚浩二だ。よろしくな」

「彼女は香住屋斎、女子剣道部の主将」

「君の噂は聞いてるよ水上。中国拳法やってるんだって？」

「ははっ。かじってるだけさ」

俺の紹介大雑把じゃねと落ち込む浩二をよそに、東哉は斎との会話に『どこが』かじった程度だと心で突っ込む。

まあ、能力者とか励起法とかの説明なんて出来るはずもなく、紹介は続く。

「んで、こっちが天子。蒼葉天子……………ん？ どうしたんだ誠一」

と天子を紹介していると、誠一の顔が強張っていた。

何事かと誠一に聞くが、『何でもない』と返される。釈然としないが、話が進まないのも東哉は続ける事にした。

「天子、友達の誠一だ」

「……………こんにちは」

「ああ、よろしく」

が、依然として雰囲気は何故か殺伐としていた。

「…ああっそうだ、誠一は東哉に何の用なんだ？」

それに堪え難たのか浩二が、話を強引に変えてきた。

「……………ああ、そうだな。東哉、話があるから少し良いか？」

そう言いながら、誠一は東哉を廊下へと連れていく。他の人間の視線を集めながら。

だからだろう、彼等は天子の呟きを聞き逃した。

『水龍』と。

「で、話って？」

「簡単な話だ。少し高見原を離れる」

廊下に出て二人は密談をするために、非常階段の踊場まで歩いてきた。

そこでさっきまで殺伐としていた雰囲気、誠一に東哉が話を切り出すと、返答はアッサリと尚且つ簡潔に返ってきた。

「突然だな。理由を聞いても？」

東哉はとある一件から誠一と出会い、彼が身近な戦闘の先達と知り、この数週間の間に朝練と称して修行している。

その修行をともにしている彼が突然町を出る、と言えば少なからず気になるのは人の常だ。

「昨晚変態が出てな」

しかし予想は斜め上に行く。

高見原を出す事と、変態が出た事があまりに繋がらない。

毎朝手合わせをして解っている誠一の実力を考えれば、変態を恐れる事はないので尚更意味が解らない。

そんな困惑の表情を浮かべてた東哉に、誠一は苦笑混じりに昨晚の説明をした。

「……………って事は、今この街にはパッションレッドと言う変態が徘徊してるって事か？」

「そう言うこった。しかも今までの俺の実力じゃ良くて相打ちだな」

「最悪だっ」

思わず叫ぶ東哉。

ただでさえ誠一相手では、毛ほどの傷一つ負わせられないほどの差があるのだ。

そんな相手と戦って勝てる訳がないので、東哉は叫び声に近い声を上げた。

そこで東哉は気づく。

「ん？ だったら何で高見原を？」

「ああ、その時居合わせた人間と話し合った結果、俺に武器をあつ
らえようってなってな」

「……………っん？ はあ？」

東哉は一瞬言葉の意味を忘れる。

「まあ、武器で戦う事になったらまた修行付き合ってくれ」

「いやいやいやいや！！ 待て早まるな！！」

そう、毎朝訓練と称したある意味イジメや虐待に近いアレに武器が
加わる。

火を見るより早く、自分の凄惨な未来を幻視した東哉は思わず誠一
を止める。

「どっとうした！？」

青だか白だが解らない顔色し錯乱する東哉を、誠一は心配する。

それを何でもないと手で制する。

今まで死と隣り合わせの戦いはあったが、一番の死神は身近だった
衝撃的事実に東哉は絶望した。

（ヤバイ早く何とかしないと死ぬ、主に俺が！！）

必死の覚悟に近い心の叫びを東哉はあげていた。

数分後

「落ち着いたか？」

「ああ」

数分経ちようやく錯乱が抜けた東哉が、腹を押さえてうずくまっていた。

話が続かないので、励起法を使ってない状態で東哉の腹を打ち付けたのだ。

「でもイテエ」

「話の腰を折るからだ、話を続けるぞ。まあ、そんな訳で一週間程留守にするから変態に気をつけろよ？ 決して戦おうとするなよ？」

「解ってるよ」

「……まあ、連絡はそれだけだ。お前の友達にも、よろしくな」

そう言うとき誠一は、東哉の肩を叩き非常階段を降りていく。

「誠一、所でどこにいくんだ？」

「あー彩さんの知り合いの鍛冶屋らしい、なんか時代錯誤だろ？」

ああ、行き先だったな」

振り返る誠一が不敵に笑う。

「サイファ学園都市さ」

サイファ学園都市

高見原駅から電車を乗り継ぐ事4時間。

緑の占める高見原ほどではないが、海に面した町並みは誠一の住む町とあまり変わらなかった。

電車のボックス席に座る誠一は窓の外を眺めながらボーッとしながら考えていた。

「町並なんてどこも一緒よ」

声の出所である向かいの席を誠一が見れば、彩が読んでいた文庫本を閉まって彼の方を見ていた。

「……………いつも言いますけどナチュラルに人の心を読まんで下さい……………。修学旅行以外で町を出たことないから」

「不安になった？」

「いいえ。楽しみですよ……………」

そう言いながら誠一は再び窓の外を見る。

町並みが段々と賑やかになってきたのが、到着を予感させる。

『間もなく学園都市中央駅に到着します。千穂線にお乗り換えは四番乗り場に……………』

サイファ学園都市商業区画 『刃物の多々良』

サイファ学園都市の一画、中央の大通りから少し外れた場所にその

店はあった。

古い店構えの店内は、薄暗い闇が静謐に漂っていた。

「もう、お爺ちゃんはまた……………」

その店の状態を見て彩は、溜め息と共に肩を落とした。

さもありなん、店のドアに『閉店』の札が掛かっていたからだ。

「休み？」

「違うわ。店主が出てるだけ……………まったく、バイト雇って店番させた方がいって言ったのに」

そう言いながら店のドアをポケットから鍵を取り出し、彩は手慣れた手つきで鍵を開けて中に入る。

「ただいまー」

「お邪魔します」

ドアをくぐれば、少しヒンヤリとした空気が誠一の頬を撫でた。

店の中を見渡せば、ガラスケースに納められた刃物の山。

右を見れば包丁、左を見れば鋏。

肉切り包丁に出刃包丁、柳刃に鯉切り、剪定挟みに理容師用の鋏、果ては爪切りにツールナイフや日本刀と。

「……………日本刀!？」

「あー触ないでね? 一応ガラスケースの鍵には儀式が使われているから大丈夫だけど、能力者でもぶった切れるらしいから」

周りの日常品に近いものから一線を描す、そのヌラツとした光を放つ鈍色の品にを覗き込んでいたら彩の注意がとんでくる。

慌てて離れる誠一。

「離れて見てるなら大丈夫よ。それより荷物をこっちに置いて、すぐ出かけるわ」

「どこに？」

誠一が見れば、店の奥から彩が顔だけをヒョコツと出していた。

店の奥は一段高い座敷になっていて、そこに荷物を置けと言っことらしい。

だが、彩はすぐに行動するらしいので誠一を急かしながら、座敷の部屋から見えた壁掛けのホワイトボードに書かれた予定表を指差す。

「お爺ちゃん、どうやら今日は実習の日らしくて、研究室にいるらしいの」

「研究室？ … お爺さんって？」

「この学園の教師。たしか鍛造化学の教授」

教授と言えば凄い人なんじゃないと言えば、彩は家じゃ何でもない普通の人よと言う。

とは言うものの教師と言う人種は学生にとって、何時でも緊張を与えるモノである。

誠一は仕方がないかと心で折り合いをつけると、出掛ける用意をした。

サイファ学園都市 工学系区画 鍛造化学研究室

彩に連れて来られた場所は見た目工場だった。

研究室と聞いて、なにか最新機器がたくさんあり、所せましと実験

器具があるのを想像していたので誠一は驚く。

「驚くのはしょうがないわ。私も見た時はとても驚いたわよ」

「まさか工場が研究室とは思わないよ」

「まあ、お爺ちゃんの研究室だけじゃないのよココ。サイファ学園都市の工業系実習室も兼ねて、元々あった工場を改造してるの。確か鍛造化学科や鑄造科、合金科とかも」

「にしても広いなあ」

見上げれば凄い存在感と共の巨大な煙突がドンツと建っている。

誠一はこの学園の規模の大きさに、感嘆の溜め息を吐いた。

「とりあえず、こつち」

「あつああ」

彩に手を引かれ歩く事しばらく、誠一の耳に怒号の様な声が届く。

「吉村ー！！ 目を離すなー集中しろ！！ 石澤ー！！ 炉の温度は一定だあー！！ 下げるなっ！！」

近付けば近付く程大きくなる声と共に、打ち鳴らされる金属音が身体を震わせ熱気が段々と強まってくる。

角を曲がると、目の前の大きなトラックが入る程の巨大な入口見えた。

おそらくそこから声や熱気が漏れているのだろう。

「むっ」

入口を入ると物凄い熱気が誠一を襲う。
それもその筈。

「なんだこれ」

「工業用の巨大電気炉。一回溶かした金属は、溶けている間に学生に配られて打たれるの。ほら」

広大な空間の真ん中に、巨大な漏斗型の炉がありそこから放射状に小さな炉に繋がっていた。

その小さな炉、一つ一つに白い神職の服を着た青年達が各々で鎚を振るっていた。

音の大元はここかと思った瞬間、換気の流れる音以外が消える。

「えつつつ！？」

全員が誠一の方、いや誠一達を驚愕の表情をしていた。

「えっ」

「あっ……………」

「彩ちゃんが彼氏連れて来たー！！！！」

男達の怒号の如き叫びが響いた。

「あー驚いた」

「グハハハッ災難だったなあ」

あれから揉みくちやにされながら色んな事を根掘り葉掘りと聞かれた誠一だったが、それを治めたのが目の前の白い髭を蓄えサングラ

スをかけたバンダナ姿の老人だった。

彼の名は『多々良^{たたら} 忠雄^{ただお}』、彩の説明通りサイファ学園都市の鑄造化学の教授である。

彼はグハハハハと豪快に笑うと彩に答える。

「仕方がなからう。今まで誰にもなびかず、浮いた話もないうら若い娘が男を連れて来たらのう」

「お爺ちゃん！！ もう、言ったでしょう！！ 彼とはまだ何でもないので！！」

ほおーと言つて楽しそうに笑う多々良に、真っ赤になって否定する彩。

そんなに否定しなくても、と誠一が教授のデスク前のソファで落ち込む。

「それよりお爺ちゃん？ 電話での用件なんだけど」

「解つとるわ、儀式装備が欲しいって事じゃらう？ 一つは出来とる。ほら」

ドスンと机が軋む重い音。

見れば白い布で包まれたモノが机の上に乗っていた。

彩が包みを解くと、そこには光消をされた黒色の金属の塊。

「これは手甲ですか？」

「弾性・剛性・粘性の三つの金属からなる合金に、儀式で極限まで強化した『ただ頑丈なだけ』の手甲じゃ」

むしろその方が良いと誠一は肯定の意味で頷く。

しかし、その答えでは納得いかないのは彩。

「お爺ちゃん、武器は？」

「出来とらん」

「なんでよ！！」

「ちよつと待つて彩さん。頼んでるのはこつちだし、訳を聞きたいんだ」

また再び口論になりそうなのを誠一は止める。

彼の言い分を聞いた彩は、渋々ながらも怒りの矛先を治めた。

「武器が欲しいと言われて作るのはいが、武器のバランスや特性を持たせるには使い手の情報がないと作りづらいわい。まあ、そんな訳でぬしらを待つとった」

「そうなんですか？」

「そうじゃよ？ まあ、後は……………」

ガシツと誠一は肩を捕まれた。

「血は繋がつとらんが、可愛い孫娘が……………世話になったみたいだしのお」

振り向くたくても誠一は振り向けない。

振りほどこうとしても、肩よ砕けると言わんがばかりの恐ろしいまでの力で掴まれて動けない。

「ちよつと、お話聞いちゃおうかのう」

「ちよつ多々良さん！？ 落ち着いて！？」

ズルズルと奥の方にある『懲罰房』と書かれたプレートが掛かったドアへと引きずられる誠一。

「やれやれ」

いつの間にかにコーヒーを用意して飲んでいた彩はソファアーに枝垂れかかりながら息をつく。

意思の源泉

サイファ学園都市 実技演習区画 室内演習場

この学園はそれはそれは色々なモノや施設が、溢れ返る程ある。

機材や物資もそうだが、他の学校の人間が一番驚くのがその施設の多さ。

前回の舞台の工学部系実習区画もそうだが、農学部系には山一つと広大な農地と牧場、商業系には商業区画が丸々一区画貸し与えられている。

そんな実習区画の一つ、要人警護・警備専門コースの実習区画の屋内研修場で誠一は戦いを強いられていた。

「そらそらそらっ、しっかりと持っておかないと大怪我するぞ!!」

そう言いながら多々良は演習場の広場の真ん中で、彼自身の身の丈を越える巨大な鎚を振り上げていた。

それに対して誠一は、片手に身体を被う程の大きな盾の様なモノを構えていた。

誠一が持つその盾の様なモノに、多々良は鎚を力一杯振り下ろした。

「そらっ数えるぞ。一つ!! 二つ!! 三つ!!」

「ぐっぐううううっ」

金属同士が当たっているとは思えない激しい音。

それを耐える為、誠一も歯を食いしばり盾の様なモノを持つ。

「四つ!! 五つ!! ……むっ、輝がはいったのう。三国は7

0点と。さあ、誠一君もう一息」

「…………… たつ多々良さんつちよつとだけ、休憩……………」
「ふう、励起法を使い、若いくせにもうバテたのかい」

誠一の持つ金属板に輝が入ると、多々良はポケットから手帳とペンを取り出し点数をつける。

多々良の猛鎚が止まった途端、誠一は手に持っていた盾の様なモノをを横に投げ出し座り込んだ。

話の流れから解るだろうが、実はテストの採点だった。

テストの仕方は簡単、鍛造した金属を合金にして盾を作り『頑丈さ』を見る。

採点方法は剛柔性などだが、今回は関係ないので割愛させていただく。

閑話休題

「若いつて言つても限界あります。これでもう三十枚目ですよ？」

「これで半分じゃわい、もう少し気張らんかい。しかし、ヌシは励起法が少々甘いのが」

「甘い……………ですか？」

励起法とは以前から何度も語られている通り、人を人以上のモノへと引き上げる『神の技術』と言つても過言ではない。

誠一の使うその技を多々良は甘いと言う。

「どんな所ですか？ 差し支えなかったら教えて貰いたいのですが」

「何簡単な事。深度を下げるんじやよ」

「深度を？」

「そうじゃ、しかもただ深度を下げるんじゃない。細かく行うんじや、解りやすく言えば限界ギリギリで止めて維持をする事じゃて」

励起法の身体強化のほとんどは能力者の演算能力に掛かっている。解りやすく言えば、能力者の量子演算並の演算能力で自分の身体を操作していると言うこと。

深度を下げると言うことは大雑把に言えば、人体レベルの操作を臓器レベルへ、臓器レベルの操作を細胞レベル・分子レベル・原子レベルと下げて行くことだ。

しかし、この励起法は万能に見えて実は欠点がある。

ある程度までの強化は出来るがある深度を超すと、それ以上強化されなくなる。

それどころか、強化から一転して自壊を始めて死に至る場合もあるくらいだ。

多々良の言い分はそこにある。

「自分の限界を見極めろって事ですか」

「解りやすく言えばの。それさえ解れば立ち回りが上手くなるわい。パワーやスピードが変わっても、人も能力者も根本は変わらんって事じゃ」

そこまで話すと多々良はニイと笑い話を変えた。

「所で又シはどんな武器を使いたいんじゃない？」

「突然ですね………実は俺自身、武器に適性がないんじゃないかと考えていたんです」

唐突な質問に誠一は真面目に返す。

「それじゃあなにかい？ 又シは武器はいらない、必要ないと考え

とるんかい？」

「ぶつちやけるとですね、自分にはこれがありますから。しかし……」

誠一は手甲を着けた手で拳をつくり誇示する。

自分の持ちうる最大の力の象徴。

「彩に聞いてるよ、力が通用しなかったんだって？」

「はい。ちよつとショックでしたね、今まで危険な戦いや格上との相手もしましたが、攻撃が通用しない相手はいませんでしたから。

……でも良い経験でした、最近自分の力に酔って忘れていた事を思い出しました」

目的、自分の意志、それは世の中の理不尽を叩き潰す。

「そのために力を求めていました。そのために師の様に成りたいと願ひ師事しました。だから、俺は迷いません。『護天八龍』は武の体現、矛を止める為ならば武器だって使います……だから」

サイファ学園都市中央区画 教務課棟

サイファ学園都市の中央には色々なモノが集中する。

例えば市役所や警察署等がそう、町として機能するための公共施設等が集まるのだ。

だが、学園都市らしくこの町らしい特色の施設もある。

ガラス張りの四階建てのビル、それが教務課棟だ。

解りやすく言えば、学園都市の職員室とも言える場所と答えれば解るだろうか。

誠一が多々良とテストの採点をしている時、その教務課棟の廊下を彩は歩いていた。

やはりこの雰囲気はどこも変わらないなと彩は、能力『モーシヨン・エモーシヨン』の力を使い目を閉じ耳を澄ました。

『笹熊、最近テストの結果が悪いが……………』

『スミマセン、今日の日誌を……………』

『明日の授業のパワーポイントを……………』

『今日は典子さんとデートだから、早く終わらせないと……………』

彩の能力『モーシヨン・エモーシヨン』は脳から出ている神経インパルスを読み、相手の心理状態や感情、果ては次の行動まで読み取る脅威の能力だ。

彼女は今目的の相手を見付けなるべく、視覚からの補正を捨て心の声を聞き探していた。

『高口先生……………素敵』

『生徒の癖にエロい身体をして……………』

『もう、こうなったら生徒と関係を』

相変わらずの人の心。

彩にとつての日常茶飯事の事だ。

彩は昔、これに悩み姉によく相談したものだ。

『人の心は醜くも美しい』とは姉の口癖。

あの頃はよく解らなかったが、色々な人に会い自分の能力を恐れず真正面から向き合ってくれた人に出会った今の自分ならわかると彩は考える。

『……………これは、能力者！？ しかも、この波動は折紙かつ……！』

見付けた。

そう呟いた後で、彩は心の声がした方へと歩む。
相手は忙しくて捕まらない上に、何かしらの情報を持っているにも関わらず会ってくれない。

だから彼女は、自分の励起法の波動をワザと放ち、自分の居場所を教えた。

その結果。

「やっと捕まえた。お久しぶりですね、重金教授」

『辰学院サイファ学園都市分室』と書かれたプレートがついたドアを開けた先には、苦虫をまとめて噛み潰した様な表情をした男『重金 浄』が座っていた。

「…………… ああ、久しぶりだ。折紙 彩」

真実に至る道は

彩の目の前にある荘厳な机に座る中年の男。

太っている訳ではないが、やや厚みのある胸板と広い肩幅が彩にはプレッシャーとして見える。

短く刈り込まれた髪に、理知的な光を湛えた鋭い瞳が目の前の相手が世界最高峰の頭脳の一人とは感じさせない。

彼の名前は『重金 浄』、極東最高の頭脳と呼ばれる男。

「なのに、分室の室長で収まった左遷された教授」

「人聞きが悪い。私は自分の意志で此处にいるんだ」

「実質上の左遷よ？ ユーラシア最高峰と名高い『辰学院』の学長候補を蹴って来るなんて」

「……………まったく、相変わらずで何よりだな」

重金教授は彩の言い分に眉一つ動かさず、やれやれと溜め息を吐いた。

彼女の挑発的な態度には意味があった。

『辰学院』とは、表には出せない知識や研究を管理し秘匿する、裏社会の最高学府の一つ。

イギリスの『ブリティッシュカレッジ』中東の『アレキサンドリアライブラリー』、中国の内陸部にある『黄学府』北アメリカの『Atlantic knowledge』に並ぶ人類の知識の粋が集められる場所。

そんな場所の学長の立場を蹴ってまで、このサイファ学園都市の分学長として来る意味が解らない。

彩は言外にそう言っているのだ。

とは言え、実はこの会話は昨日今日で始まった事ではないので、彼自身あしらいかたも慣れたもので。

「暫く居なくなつて、静かになつたと思つたんだがね」

「おあいにくさま、私は何度でも来るわ。姉さんの行方が解るまで……」

彼と彼女は睨み合い、彩は吐き捨てる様に目を逸らす。

その姿にヤレヤレと重金は竦める。

重金は彩の能力を知っていた。

彼女の能力は他人の脳波、脳神経インパルスや運動神経インパルスを読み取り『相手の行動や心』を読む能力だ。

とても危険かつ便利な能力に見えるが、実は欠点がある。

『記憶』は読めないのだ。

彼女が読むのは『今』であり、『過去』ではない。

相手に質問し関連付けで思い出した事は読めるが、それに関連していない場合読めなくなる。

その能力ゆえの会話である。

挑発紛いの言葉で相手を油断させ、ちょっとしたキーワードで相手に連想させ情報を引き出す彩の常套手段だ。

だが重金も知ってるが故に、もう一つのブロック方法『励起法』の高深度行使による読み取り阻害を行う。

それを感じた彩は読み取るのを早々に諦めた。

と言つのが先程からの一連の流れである。

「……………いい加減に諦めたらどうだ？ その件に関しては多々良老や風文はともかく我々の口からは漏れない。それよりも」

「自分の事を考えるって言うんでしょ！！ 解ってるわよ、そんな事。でも、私は何度も考えた末なのよ。何をしようとも後悔が表に出てきて、心が痛くて、自分自身が情けなくて見えない何かにがんじがらめにされて動けないのよ」

彩の声は少し泣いている様な色をしていた。
顔を逸らした彩の表情は、重金の方からは見えない。

「折紙……しかしだな、真実を知ったとしても、それが」
「桃山財閥、高見原、姉さんの仕事、『超能力が使える薬』もしくは『神に会える薬』……私も馬鹿じゃない。此処までの情報があれば、大体予想が付くわ」

そこまで言うとき彩は、もう一度重金と向き合う。
彼女の瞳は泣いてはいなかった。

真実の先にあるのが哀しみや苦悩であろうとも、突き進む意志が瞳の中にあつた。
その意志を汲み取ったのか、重金は諦めたかの様に椅子に背中を預ける。

「……ヤレヤレ、偽神薬まで行き着いたのか」

「やっぱり知ってたのね……」

「当たり前だ、あの薬は千年程前に『重金』が作り、あまりの危険性故に封印していたものだ」

「そんな物が何で？」

「解らんが、予想は立てられる。元々、あの薬は高見原の地が発祥だ、誰かが何かを見付けたんだろう」

その言葉に彩は一つ思い当たる節がある。

「もしかして、桃山財閥がああ町を開発した理由は」

「推論の段階だが、我々の見解ではそうだ。……折紙、良いのか？」

「真実の先がどうであろうと、私は知りたい」

重金が彩の瞳を覗き込む、その意志を確かめる様に。

彩は視線を受け止める、自分の意志は揺るぎないと証明するように。

「……………」

「……………」

「…………… 解った、今出来る分の情報のみ開示しよう。後は、君自身が確かめるんだ」

「確かめる？」

「…………… ああ、私達の言葉だと公平にならないからな。君は八年前、高見原の研究所で火事があったのを知ってるな？」

「ええ、姉さんが勤めていた所」

その言葉を受け重金は頭を振り、否定する。

「我々の情報に因れば、君の姉が所属していたのは火事のあった『第一研究所』ではなく、『第七研究所』だ」

エツと彩は疑問の声を上げる。

「でも、あの時……」

「君の能力は『今』その時の『心』しか聞こえない…………… その時は『第一研究所』だったんだ」

彩は勘違いをしていた。

最後に姉と会ったとき、彼女は『第一研究所』に行くと言った。心で聞いていた。

だから火事で焼け落ち更地になった場所を探しても、行方不明となった姉は見付からないし手掛かりもないと考えていたのだ。

「それじゃあ……………」

「第七研究所を調べてみると良い……………そこに彼女が残した何かがあるはずだ」

ずっと探していた姉の行方。

ようやく見付け、得られた手掛かりに彩は力が満ちるを感じる。

「……………一つ聞いて良いかい？」

早く何らかしかの行動に移すべく、扉へと踵を反した彩の背に声がかけられる。

「何ですか？」

「君がそこまで決意した理由はなんだい？」

歩みを止めて背中を向けたまま、彩は耳を少し朱く染めながら答える。

「私が『読心系の能力者』って事を知ってる上で、心を隠さず居てくれた人が怖れず言ってくれたんです『君の力になる』って」

そこまで言い、彩は扉の向こうへと消える。

「ふふっ若いねえ」

重金の楽しそうな声は誰に聞かれる事もなく虚空に消えた。

幕間

数日後。

サイファ学園都市 商業区画 『刃物の多々良』 2階客間

誠一は畳の上で仰向けに転がり顔を引き攣らせながら、書類片手にウンウン唸っていた。

書類の内容は此処に転がり込んだ次の日に、精密検査をされた結果とそれによる誠一的能力についてのレポートだった。

多々良に学園都市付属大学病院に連れていかれ、流れて検査をさせられ。

その結果だと渡されたのだが正直な話、誠一は何が書いてあるか全然解らない。

しかしながら解らないと言って放り出すのも悪い気がするので、誠一は何とか理解する為に書類と睨めっこしているのだ。

とその時、客間の衾が叩かれる。

「誠一君？」

「はい、どうぞ」

ボスボスと気の抜けたノックに、促した誠一の言葉。
開けて入って来たのは予想通り彩だった。

「誠一君って、どうしたの？」

明らかに顔色が悪い誠一に彩は驚き声をかける。

それに対して返事もしないまま誠一は彩に、持っていた書類を無言で手渡す。

「『検査結果』？ よくわからないけど、参考標準値内だから健康そのもの……ん、違う？ 三ページ目？」

話すのが億劫なのか、誠一が頭を指差し心を読めとジェスチャーしたので、彩が心を読むと三ページと聞こえたのでページをめくる。

「ゲッ」

女性らしからぬ声を上げる彩の口元も引き攣った。
さもありなん、その書類の内容は……。

「ナノサイズ以下のコロイド分子を中心に水分子操作する、その有効最小濃度は $c \cdot m \cdot c$ に依存……」

「………彩さん解る？」

「………専門外、解る訳無いわ」

だよねーと言いながら誠一は、突っ返された書類を旅行鞆に突っ込むと諦める。

「私達能力者は基本的に本能で制御してるものね。何となくは解るけど、専門用語で言われるとちよつとね」

確かにと頷く誠一も納得顔だ。

能力者の処理能力は元々サヴァン症候群（別名賢人病）、と呼ばれる脳の変異からきている病に似た脳神経の異常からなる。

サヴァン症候群とは自閉症等の精神疾患がありながらも、特別な能力を持つ。

そう、人並み外れた特別な超高々度の演算能力はそこからきている。その為に、能力者の力は本能に近い物から根付くのだ。

「でも、一応勉強はしていた方が良いわよ？ 受け売りだけど、自分自身の能力を知っていると知らないとは戦術の幅が違うから」
「解ってるんだけど、今は勘弁して彩さん」

完全に脳をショートさせ、やる気が無くなっている誠一。

彩は仕方がないなあと思を吐くと、寝転がる誠一の横に座る。

「それはともかく、今後の行動を決めましょう？」

「それは良いけど………やっぱりやるの？」

「もちろんよ」

数日前に聞いていた手掛かり、彩の姉が勤めていたと言う『第七研究所』に潜入を仕掛ける事。

彩は数年かけてやっと見付けた明確な手掛かりに息巻いていたが、誠一としてはやる気がなかった。

なぜなら誠一と彩とは能力として差がありすぎるからだ。

いや、能力と言うより持ちうるスキルと言えば良いだろう。

「やる気なさそうね」

「………解ってると思うけど、俺が隠密行動とれると思う？ この間から無理っぽいと思い出してさ」

そんな考えに至ったのは高見原タワーの一件からだった。

一応気を使いながら監視や尾行をしていたのだが、ちょっとした騒ぎで結果的だが見付かってしまった。

あんな初歩的な事で見付かってしまったのが、誠一には不安要素だ。

「それは大丈夫、それについては私に考えがある」
「考え？」

自信満々に胸をはり頷く彼女を見て、誠一はやや訝しげにみながらも了解の意を返す。

「……………となれば、後の問題は」

「あの変態ね」

以前の話の通り、あの変態パッションレッドは邪魔でしかない。桜坂の剣士だろうが、第七研究所であろうが横槍を入れられたら困る。

「どちらにしろ、奴を倒してからになる」

「でしょうね、奴を倒してから第七研究所に行くしかない……………ところで、武器の方はどうなの？」

「……………今日中って聞いたんだけど、あっ」

その時、充電器に繋いでいた誠一の携帯が着信で震える。着信名は『多々良』と標示されていた。

高見原市 高見原中央区 サイファ総合警備保障

桂二は普段の胸元が開いた軽薄な服装とは違い、何故か背広姿でそこにいた。

何故か同様に、背広姿の宣夫も隣にいた。

「おい桂二、何で俺が此処にいるんだ？ しかも、こんな堅苦しい

服」

「はははっ！！ 実はですね…………俺の趣味と実益を兼ねたバイト先の上司にですね、先日の変態の一件を報告したら宣夫さんを『是非連れて来い』と…………頼みますよ』上司、目茶苦茶怖いんですよ」

軽く涙目で頼んで来る桂二に、宣夫は胡散臭げに見つめる。

明らかに嘘臭い涙はともかく、趣味と実益を兼ねたなんて、どうせ口クナ物ではない。

それに彼の『上司に』『変態の一件を報告』と言う言葉は、宣夫に何等かしらの第三者の意図を感じさせた。

「……………解ったよ」

「いやいや、すみません。こっちです」

しかしながら、桂二は胡散臭いながらも一つだけ信じられる所がある。

それは誠一の親友で、憎まれ口をたたき合いながらも相手と協力していく彼等の話を聞いていて、何となく信じられる。

自分の前を先導してあるく桂二を信じたのは、そんなたわいの無いちょっとした事。

「あつフレイアさん！！」

そんな事を考えながらビルの中を歩いていると、目の前に二人の女性が進んで来ていた。

一人は金髪の美女、長く綺麗な金髪をシニヨンに纏め眼鏡をかけた如何にも出来るビジネスウーマン。

もう一人は、少し幼さの残った顔付きの黒髪の美少女だ。

「フレイアさん、お疲れ様です。えっと隊長います？」

「いま自室にいらつしやいます……………彼が、報告に上がった？」
「はい、寛さんです。寛さん、こちら秘書のフレイア・デイルさんと…」

「えつと篠崎です。初めまして」

そこで一緒にいた女性の名前を知らず言い淀んだ桂二に対し、彼女は慌てて名乗った。

「えっ！？ 篠…崎？」

「はい、篠崎莉奈です。どこかで会いましたか！？」

「……………いや、何でもない多分勘違い……………」

何かに気付いた桂二が、唸る様に頭を抱えるがフレイアが肩を叩いたところで何かと折り合いをつけたのだろう直ぐに立ち直る。

「桂二君、こんな所で道草を喰っている場合じゃないわ。隊長がお待ちよ」

「げっマズイ、約束の時間だっ失礼しますっフレイアさん！！」

腕時計を確認して顔色を変える桂二に、苦笑するフレイアと不憫そうに見る莉奈。

急ぎ足で行く桂二についていく為に、女性二人の横を通り過ぎるその時、宣夫はフレイアの目をまともに見てしまう。

「つつ！！」

宣夫を映す銀色の瞳、表情は笑顔だが瞳は感情もない無表情。違和感ありまくりのアンバランスさに、宣夫は此处に来るまでに考えていた事についての仮定が現実になりそうだと感じた。

（やっぱり、ここは能力者の溜まり場かつ！！ 来るんじゃないか）

心の中で叫ぶが、もう遅い。

宣夫のその身は本拠地の中心部、此処で逃げるのは逆にマズイ。何か良い手はないかと宣夫は思索するが、何も思い付かない。そうこうしている内に。

「失礼します」

扉が開かれる。

宣夫はこの時の扉を忘れない。

「ようこそ、寛宣夫君？ 君を歓迎するよ」

扉の先に彼は、悪魔の様な優しい笑顔を見たのだから。

幕間（後書き）

今回は少々拙い文章です。
書き直すかもしれません。

励起法

「ブフウツ!!」

本の集まる静かな場所、いわゆる図書館で抑え切れない笑い声が響く。

図書館利用者達の視線が集まる先は、閲覧ブースで机に震えながら突っ伏す女性だ。

「ちょっと、どうしたの!! いきなり突っ伏して!?!」

周りの非難の視線に怯えた隣の女性が、何かと慌てて突っ伏した女性に小声で問い掛ける。

突っ伏した女性は起き上がることなく、腕だけを動かしてトントンとさっきまで読んでいた新聞紙を指差した。

「ん? 読んでってこと?」

意図が解らず聞き返すと、彼女は突っ伏しながら震えつつ頷く。
言われた通りに指差した場所を読む。

「……………えっと、新聞の投稿記事……………はあっ?」

思わず素っ頓狂な声をあげ彼女は、再び視線が集まり縮み上がり口をふさぐ。

ナニコレと小声で呟きながら新聞を読む。

「『情熱の赤に告げる、望月が中天に浮かぶ時、朽ちし始まりの地

にて待つ。』って……………」

呟いた瞬間、隣の突っ伏した女性が再び震え出す。

ああ、彼女はこう言う厨二っぽい台詞がツボだったと思い出す。

「朽ちし始まりの地……………ね、どこなんだろう?」

高見原市 海原区 某所

海原区の海岸沿いには、広大な敷地がある。

そこは高見原都市開発の前線基地があつた場所。

広い敷地のほとんどは資材置場で、今でも朽ちた資材が残っており子供の背丈程の雑草が生えている。

近隣の人間には『草の森』と呼ばれ、深夜にもなれば誰も近寄らない場所。

そんな草の森の奥には、資材管理や労働者が寝泊まりしていた鉄筋コンクリートのビルがある。

今では誰も住んでいない『朽ちた廃墟』。

そう此処が、朽ちた始まりの地だ。

実はあの新聞に載っていた投稿記事は誠一が桂二に頼み、変態ことパッションレッドをおびき出す為に載せた物だ。

高見原に帰ってきた誠一達がまず考えた事は、あの変態をどうやって見付けるかだった。

桂二の情報網でも奴の出現場所が絞れない、まさに神出鬼没の相手。そこで桂二が一計を案じ、奴の性格や意外と高いであろう知能を見取り、ヒーローオタクが好きそうな厨二っぽい台詞を新聞に載せて

奴をおびき出す事にしたのだ。

その作戦は見事に的中、草の森におびき出す事は成功していた。しかし、

「これは予想しなかった」

「そうね」

ビルの一階は壁が崩れ落ち広々としている。

その中の崩れ落ちた壁の一つから覗き込んでいた誠一と彩は、目の前の事態にどうしようかと考えていた。

目の前ではおびき出した赤い変態パッションレッドと、漆黒のレインコートを羽織った桜坂の剣士が争っていた。

剣士の得物はレインコートと同じ黒塗りの木刀、対する変態は拳一つ。

普通の武道と言う意味ならば『剣道三倍段』、しかし二人の見た光景は拳士が剣士を圧倒すると言う武道の定石を打ち崩す物だった。

「イアアアア!!」

「ハアアアア!!」

お互いの裂帛の気合いで空間をビリビリと振るわせ、高速で移動しながら何度も交差していく。

「彩さん……………あれは？」

一歩間違えれば大怪我どころではない、恐ろしいまでのスピードで交差する二人に誠一は気付き彩に聞く。

「気付いた？ あれこそが霧島一族に伝わる儀式織により編まれた『霧衣』。あらゆる衝撃、熱や冷気を吸収する霧島一族を頂点へ

とのし上げた神器」

彩の説明にある通り、パッションレッドの攻撃は桜坂の剣士には届いていなかった。

パッションレッドのコンビネーションブローが剣士の身体に届く瞬間、何かに受け止められたかの様に止まるのだ。

しかしながら、パッションレッドも似たような装甲、ERA（Explosive Reactive Armour）を持っている。攻撃が通らない装甲を持った二人の戦い、どう考えても千日手にしかならない状況。

しかし、二人が見ている内に戦況はパッションレッドに傾いていく。

「やっぱり……」

「やっぱり？」

「以前戦った感触と誠一君から聞いた前回の話から核心に変わったわ……多分、あの娘は剣士として日が浅い」

「浅い？」

そうよと頷く彩、その視線は戦いから外れない。

「ねえ誠一君、あなたは励起法を使えるまでどれくらいかった？」

「えっ？ ああ、修練してからって意味なら……7・8年ってところかな？」

「でしようね、私も5・6年かった。でも知ってる？ 励起法を使うだけなら一ヶ月かからないのよ？」

「へっ？」

「時間をかけて修練させて、励起法を習得させるのは理由があるの。解る？ 一つは術者の心を鍛える為、励起法をいきなり使える様になって、無思慮に犯罪に使われたらどうなると思う？」

それは困ると誠一は考える。

励起法の恐ろしさは誠一は良く解る。

軽く本気で打った龍打で修練仲間の東哉が地面と平行に吹き飛んだり、実験でコンクリートの壁を発泡スチロールの様に砕いたり、軽の自動車の端を持ち片手で苦もなく掲げた事が誠一にはあるからだ。そこまで考え誠一は、とある事を思い出す。

「この間、身体検査の検査結果のレポートにかいてあったんだけど、励起法の欄に複雑な数式が書いてあったんだけど、もしかして？」

「そうよ、あの数式が励起法による強化定数の判定式。基となる身体から、どれだけの深度に強化定数による乗数強化が行われてるかを判定するの」

「じつ乗数って」

乗数強化、数値化した基の身体のスペックに励起法の深度を乗数する。

倍数ではなく乗数と言うところに、誠一は顔を引き攣らせながらも納得する。

「と言う事は、励起法の効果は基の身体のスペックに左右されるって事か」

「そう言う事。基の身体が弱ければ励起法は弱い身体を乗数する。基の身体が強ければ強い身体を乗数する。乗数による強化だから、励起法を使った結果は、かなり大きな変化になるわ。だから励起法を習得させるまで時間をかけるの。励起法を使っている身体は成長しないから」

そこまで聞いて、誠一もやっと納得がいく。

何故、桜坂の剣士が圧倒されているか。

それは基の身体のスペックの差。

今見ている中で、戦う二人の励起法特有の波動から見れば二人の深度は、ほとんど同じくらいだろう。

しかし、スピードは若干パッションレッドが早い。

その理由を考えれば、先程の彩が言った『剣士として日が浅い』と言う事だろう。

誠一がその考えに至ったのは東哉だ。

誠一が彼と修練を始めて不思議に思ったのが、彼の力の弱さだった。拳を交じ合わせれば打ち負ける、スピードも遅くこんなんで大丈夫かと誠一が思ったのは何度もある。

しかし、その理由が今解る。

桜坂の剣士も東哉も、基の身体を鍛え上げていないのだ。

「剣士としての経験や才能は高いのかも知れないわ。でも同等のレベルの相手が出て来た時にはああなるのよ」

戦いに目を戻すと、戦いは一方的だった。

先程の激しい戦いはなりをひそめ、パッションレッドの拳を防戦一方で受けていた。

「……………マズイわ。霧衣の耐久度が限界値を超える」

彩の呟いた瞬間、パッションレッドが猛烈なダッシュで剣士の懐に入り『サンライズアッパー』と言う掛け声と共に膝のバネを使った拳をが突き上げる。

「つつつ!!」

今まで身体を守っていたレインコートが吹き飛び、桜坂の剣士の顔が曝される。

「やっぱり、蒼羽天子」

「知り合い？」

「ちよっとした、ね」

レインコートのフードのしたから現れたのは、サイファ学園都市に行く前に東哉のクラスで会った彼の友達。

誠一の、あの時の予感は的中。

剣士が知り合いだった、誠一にとってはそれだけで理由は十分。

「助けに行くの？」

「ああ、そうだね」

少し拗ねた様な顔をした彩の顔を見ず、誠一は『水龍』の面を被る。

「彼女の目的は知らない。けれど今までやってきた結果は、悪を駆逐する行為。……ならば、理不尽に打倒する俺が助けない理由にはならない。だから……」

交わる拳

海原区にある始まりの地の近くには、高見原タワーがある。
高さ250m、高見原の開発初期に建てられた電波塔である。

今では高見原の森海（誠一が見た高見原の森を上から見た物を指す）
を眺める観光スポットになっている。

その森海を眺める地上155mの展望台の上に彼、七瀬桂二はいた。
高さから来る強風を避けるためか、彼はうつぶせで遠くにある廃墟
を双眼鏡で覗いている。

そんな彼の背後に浮き出る様に影が現れた。

思いの外に強い海風、しかし影は揺らぎもせず桂二にユックリと近
づく。

「桂二」

強風の中でも良く響く声で呟く影に、桂二は腰に手を当て慌てて振
り返るが、影を見た瞬間に肩を落とす。

「脅かさないでくださいよ隊長」

月は中天、されど雲に包まれていた。

雲が風に流れ薄闇がはれ、月明かりが影に降り注ぐと金色の髪が夜
に浮かぶ。

月明かりに浮かぶ顔、十人いれば十人とも親しみ易いと言う容貌を
男はしていた。

口元は胡散臭さげに愉しそうに笑っている人の悪そうな雰囲気を持
ちながら疑いを持たせない。

そんな相反した雰囲気をした男を桂二は一人しか知らない。

それが彼が隊長と呼ぶ男だった。

「そんなに驚くな」

「驚きますよ、一応侵入者防止にトラップを張ってあったんですから。しかし……………見物ですか？」

モチロンとニカツと笑うと、隊長は桂二の隣に座る。

「で？ 状況は？」

「今、桜坂の剣士が敗れて顔を曝した所です」

「……………ふん、天子の奴が敗れたか」

「知ってらっしゃったのですか？」

「ああ、アイツの師は友達だからな。聞いた事ないか？ ファントム・ミストと呼ばれる剣士の名を」

名を聞いた桂二が息を飲む。

聞いた事も何も、世界最強の一人と数えられるトップクラスの能力者のなかでも最高ランクの危険人物。

白銀のレインコートを羽織り、テロリストや裏稼業の人物や拠点を『単身』で潰す化け物。

「……………どおりで桜坂の剣士が異常に強いはずですよ」

「だが、今回の相手には負けたな……………さて、今度の対戦カードは？」

「正義の変態VS水龍です」

皮肉げな喋りで言うと桂二は、再び双眼鏡を覗いた。

高見原市 海原区 某所 始まりの地 廃墟

霧衣は爆ぜて身体を護る物はない。

相手のスピードは天子のスピードを上回っていて、彼女はそれに対抗するべく無理をして身体を酷使してしまった。

そのせいで天子の足は震え出し、高速戦闘に耐える事が出来ない。彼女の目の前で構える変態は戦いを決定づけるため、ユツクリと近づいて来いた。

こうなったら近づいて来たところで禁じ手を使うしかないかと、天子が間合いを計りながら考えていたその時。

「すまないな、本当は俺が先約だ」

「えっ！！ ウヒャー！！」

天子は襟首を掴まれ、後ろにおもいつきり投げられる。

放物線を大きく描き10m近く投げ飛ばされた天子が見たのは、袖が大きく膨らんだ黒のウインドブレーカーの背中。

頭には角が生えている鱗柄のマスク、前回乱入してきた『水龍』。

「ちよつと、あなたっ」

学校では上げない様な怒声を出す瞬間、天子の口を後ろから塞がれる。

目だけを動かすと後ろには、逃げられない様に天子組み付く彩がいた。

「ようやく捕まえた。あなたには聞きたい事がいっぱいあるの」

捕まってしまったと諦めながら天子は、木刀をコンクリートに突き立てるとその場に座る。

「あらっ？ 素直ね」

「顔も見られた上に、逃げられそうにないからね。それに、」

二人とも水龍の背に目を向ける。

中肉中背と、そこまでは大きくはない身体。

しかし纏う雰囲気は、伝説上の龍を思わせる圧倒的なプレッシャーを含んでいる。

「決着も見たいわね」

天子はいつもの口調で呟いた。

「さて、パッションレッド。果たし合いに来てもらって、一応感謝しよう。一つ、聞いても良いか、正義の味方？」

「なんだ？」

「この間の続きだ、お前の正義は破綻しているのは気付いているか？」

水龍の言葉に、何を今更と言わんがばかりにマスクに隠された口を歪ませるパッションレッド。

「正義なんてモノは人それぞれ、人は立ち位置次第で悪にも正義にもなれる。君の言いたいのはそれだろう？」

「解ってるならばなぜだ？」

「それは、ぼ……私の疑問でもある。君は何故『戦う』？」

「俺は俺の目的がある、目的の為ならば総てを打ち崩す。それが悪と呼ばれてしまっても、俺は覚悟がある」

「ふう、君はもつと正義感のある人間だと思っていたが？」

「それは趣味で正義の味方をやってる貴様と一緒にするな……俺は、世の全ての理不尽を総て打ち崩す事を目的だ」

「ある意味で正義を貫いている訳だ。成る程、ますます仲間になってほしいね」

「ふざける、貴様の正義は秩序なき混沌の正義だ」

二人はそれきり黙り睨み合い、そして構える。

水龍は半身となり、軽く腰を落とす。

拳は中心線、目線より少し下。

対してパッションレッドはボクシングスタイル、右の拳を顔の前に左の拳を脇を締めて構える。

ドッシリと構えた水龍は、足首を使いジリジリと間合いを詰め。

パッションレッドはアウトボクサーの様に軽快なステップを踏む様に跳んで待ち構えていた。

「今回は最初からフルスロットルだ!!」

「っ!!!!!!!!!!」

ワンステップからの大きなバックステップ、それに反応した水龍はたたらを踏む。

彼の作戦の主軸をカウンターと感じたパッションレッドは、相手の攻撃のタイミングを外す為に一歩だけ踏み込むと同時にバックステップを踏んだのだ。

思惑は的中、水龍はバランスを崩して体制を整えようとしている。パッションレッドは好機とばかりに腰に付けているポーチから小瓶を取り出し、右手に叩き付け割った。

「パッションストライクパワー!!」

どういう仕掛けか解らないが、割れた小瓶からこぼれた紅い液体がパッションレッドの腕に纏わり付き形を形成していく。

「パッション！！ スラッシュ！！ ストライク！！」

踏み込みと同時に背中が爆発し、一気に加速するとパッションレッドは水龍へと飛び込み『短剣』状に変化した右拳を打ち付け。

「つつ水龍！！」

打ち付けつけた拳が轟音と共に炸裂した。

水系の理

激しい炸裂音と閃光。

爆風により舞い上がった埃がモウモウと立ち込め、水龍とパッションレッドを包んだ。

「……………水龍」

「まだっ！！」

パッションレッドの隠し玉、単純なフェイントほど実戦ではかかりやすい。

解つてはいたが、自分の仲間がやられるのは違う。

彩は呆然と呟くが、座り込む天子がまだ終わってないと声を上げる。それと同時に、煙からパッションレッドが現れる。

身体をくの字に折り曲げ、吹っ飛びながら。

「えっ！？」

「げっ！？」

地面とほぼ平行に吹き飛ぶパッションレッドに彩は驚き、天子は吹き飛び方に女性らしくない驚き方をする。

舞った埃が落ち着く、現れたのは左腕でガードし右腕を突き出した水龍。

「……………あれはトンファー？」

「パッションレッドに対抗するために製作された、水龍専用儀式法具『氷龍・雷龍』よ」

突き出した水龍の右腕には龍の鱗をあしらった手甲、手には龍の頭を模したトンファーが握られていた。

それでパッションレッドを、力一杯突き込んだのだろう。

しかし、それでは疑問が残る。

パッションレッドのE R Aが破れない筈だ。

E R Aは圧力に反応して爆発し、その爆発力で相手の攻撃ベクトルを『逸らす』事で相手の攻撃力を減殺する事にある。

その対象は総ての物理的攻撃にある筈なのだ。

「何て力技!!」

絡繰りに天子は気付き、そのあまりの単純さと実行出来る水龍に驚愕と感嘆を送った。

原理は簡単、励起法で最大深度まで身体能力を上げた上で、彼自身の能力『水系の理』で身体能力を更に上げトンファーで突き込んだだけである。

ただ突き込んだだけだと思われるが、実の所そうではない。

考えて見てほしい、1t近い車を片手で軽々と持ち上げる程の能力を得られる励起法に、身体能力を（特に耐久性と筋力）を飛躍的に上げられる能力で力一杯トンファーで突かれるという事を。

正確に計ってはないが、最低10tトラックのフルスピードで衝突したエネルギー位はある筈なのだ。

そんなエネルギーをトンファーの先に込めて突き込んだのだ。

それはE R Aの減殺能力を大幅に削り、パッションレッドに到達。

結果は地面と平行に飛び、コンクリートの壁に亀裂めり込むんだ。

「うつうつ……」

うめき声と共に瓦礫から現れるパッションレッド。

その身体には土埃だらけで真っ白に染まってはいたが、目立った怪

我はない。

しかしダメージは甚大だったのだろう、立ち上がるのに少し時間がかかった。

「何故、私の『水煙』が……」

「単純な話、純粹な力で突き込んだ。お前の防御を打ち崩す程のな」

ふらつきながら立つパッションレッドは、身体に走る痛みを感じながら拳を握る。

水龍と言う人物は、恐ろしいまでの強さだった。

パッションレッドのERAは自身の励起法と防御を組合せる事により、ボーリングの機械すら無効化する。

それを打ち崩す程の化け物。

桜坂の剣士と連戦で、勝負を急いでもったのも失策だった。

仕留めたと感じた心の隙と、大技の後の隙を狙われとんでもない力ウンターを喰らってしまった。

「だが、私は負けられない!!」

「正義の為かパッションレッド!! ならば俺は我が師の教えの太道の話をしてやろう。人と言うのはそれぞれに生きる道がある、人はその道の真ん中を歩くのが真つ当な生き方だ。人は真つ直ぐには生きられない、外れれば外道となる様にな」

「それがどうした!？」

パッションレッドは痛む身体に鞭を打つ、前傾姿勢でジリジリと間合いを詰める。

狙いは電光石火のカウンター。

足で攪乱出来ない以上、それしかない。

「人はそれを正す人がいる。道を外れた人を正す人がな。貴様は俺

に教えてくれた思い出させてくれた、最初の想いを、理不尽を駆逐し身近な人を守る想いを！！ 貴様の正義は混沌に通じる！！ 貴様の太道を修正してやる！！ 沈め！！」

怒りにもた水龍の言葉。

それと共に爆発したかと思える程の震脚で踏み込む、トンファーを持った左腕を突き出した状態での遠距離からの突き（他流派では箭疾歩と呼ばれる歩法からの突き）『駆龍』。

しかしパッションレッドは、それを待っていた。

突き込んでくる左腕の肘の内側に肘を滑り込ませる『クリス・クロス』で攻撃をそらし左腕のアップパーカットと言う一連の流れでカウンターを仕掛ける。

「甘い！！ 腰が入ってない拳は俺の『水系の理』の敵じゃあない！！」

拳は右腕のトンファーで受け止められた。

だがしかし、パッションレッドの攻撃は終わっていない。
右のアップパーカットが残っている。

「あああああっ！！！！」

「だから甘いと言った！！ その身に受けるっ！！」

返す刀の右のアップパーカットを打つ瞬間、パッションレッドは見た。水龍の最初の左トンファーが、身体にそっと添えられている事に。その左トンファーの石突きに重なる様に水龍は、右トンファーを当てていた。

「『吠龍』！！」

それは足、腰、肩、腕を同時に連動させて打ち込む暗勁と言う技法。普通の武道家が打つても威力がある技だが、それを身体能力が異常とも言える水龍が打つたらどうなるか。

「……………」

「……………」

喧騒に包まれていた二人だけの戦場は、静寂に支配される。

「……………透った」

「ガフッ」

パッションレッドのマスク越しに吹き出る血煙。

彼は膝から崩れ落ちる。

「やった？」

「殺ってないよ。『吠龍』は浸透性のある打撃の上に、トンファー越しだから励起法を使っても数日は動けないはず」

崩れ落ちるパッションレッドを確認して、彩が天子を連れてやって来た。

「さて、倒したは良いけど、どうしよう？　こんな時はどうするの剣士さん？」

「私に聞かないでよ。私は倒すだけ倒したら、ほったらかすよ？」

「それ酷くね？」

倒したパッションレッドの始末に困る三人。

ここだけの話だが、能力者は簡単には死なない。

能力自体は意識を失った時点で停止するが、大怪我など負った場合、

励起法は最低限で維持し生命を繋ぐからだ。

それを能力者は無意識に解っているので、血ヘドを吐いていても放って置ける。

しかし血ヘドを吐いている人間を放って去る何て出来ないの、困っているのだ。

変態は触りたくないや、放って帰ろうや、埋めて帰ろうと言い合う三人。

その時、

「ちよっつと良いかしら？」

艶のある『野太い』声が響くと同時に、三人は散り散りに跳び退く。次の瞬間、倒れたパッションレッドの下に寄り添う巨大な影。

「げっ」

「増えた」

「頭痛い」

その姿を見て三者三様に顔を引き攣らせ、口を歪ませる。

身体全体を覆うのは黒一色の合成革のボンテージ、大柄な筋肉質の身体に幅広い肩、発達した大胸筋とVの字に開かれた場所からは立派な胸毛が存在感を誇示していた。

そして顔は、身体と同じく黒革のマスクに覆われている。

それを見た三人の内心は一緒、『変態が増えた』だった。

「ごめんなさい、この人をどうかさせる訳にはいかないの」

何故にオネエ言葉と心で突っ込みながら、水龍は再び構える。

彩といつの間にか霧布を再展開させていた天子も、同じ様に構えていた。

「皆、せっかちなえ。この人は私達、パッションジャーのリーダーだから連れて帰るだけ」

「語呂悪っ！！ てか、戦隊かよっっ！？」

「まっそう言う事、またねえ」

突然の暴露、あまりの事実と目の前にいる濃い『変態』に思考を止めた三人の隙を付いた新たな変態はパッションレッドを抱えて連れ去った。

激闘の後に残る、どう対応して良いのか解らない何とも微妙な雰囲気。

「…………五人まで増えるのか？」

水龍の呟きだけが空しく響いた。

外話 岩長姫（前書き）

この話は現在連載中の『カモメは遙か水平線を見る』のある一部分につながる外伝です。

変わる世界には今の所関係ないのでなんら影響のないものです。

外話 岩長姫

高見原。

古くは高天原より天降りしニニギ命がクジフル岳より大地を見渡し、
た時に目を止めた場所と言われる土地の一つだ。

ニニギ命が高き場所より見し原、を縮めて高見原。

安直というか何と言うかは、人それぞれ。

それ故に、この町にはニニギ命の縁のモノが多いとも言える。

例えば町の中心部にはニニギ命の一夜婚の相手であるコノハナサク
ヤ姫を奉る神社が桜町繁華街の中央にデンと構えてある。

その反対側の大きな岩山を切り開いた桜区唯一の住宅街の真ん中に
は、同じくニニギ命に醜悪だから妻には出来ないと言われ実家に帰
されたイワナガ姫が奉られている神社が荘厳に建っている。

この話は、その醜悪と呼ばれ家に帰されたイワナガ姫を奉る神社で
の噂。

桜区石上町 石上神社。

「だからさ、チョットだけだつてさ」

深夜遅く、繁華街の中心にあるコノハナサクヤを奉る咲夜神社とは
違い、住宅街の中心しかも深い森に囲まれたこの神社には人の姿は
おろか気配すらも無かった、林の中でいちゃつく二人を除いて。

「駄目よ。こんな場所で出来ないってば」

「こんな場所って？」

「ここ神社の境内よ、解ってる？ こういう神聖な場所で、そーい

う淫らな行いはしちやいけないの。お婆ちゃんが昔から言ってたんだから」

「はあ？」

のしかかりながらも呆れ返る男を、やんわりと押し退けつつ語る女の顔は真面目だった。

確かに、境内は神聖な気に満ちていた、それ以前に誰かが興味津々で誰かが見ていると言う感覚もある。

女は少なからずとも、それを感じ嫌がっているのもあつたのだろう。祖母の名前を出して男を拒否する。

「お前16にもなつて、まだそういうの信じてる訳？」

「何よ、信じちゃ可かしい？」

「いや、そういう訳じゃなくてよ。そういう事信じてるお前も、可愛いな」と。クリスマスの方にサンタさんを信じている子供みたい」

「口が上手いわね…。隣のクラスの吉村英子にも同じ事口説いたんじゃないでしょうね？」

女の剣幕に取り繕う様な言葉をいったのが火に油、いや藪蛇だった。

「なつ何で、そこに吉村の名前が出るんだよ」

「その胸に聞いて見れば？ 特に三日前の夕方位？」

「グッ。」

その時の事は何も言えないし弁明も出来ないのか男は、はだけた服をそのままに固まる。

そんな男を横目に身体をするりと抜け出し服を整えつつ手を洗う場所まで行く、ふと横にある神様の説明がされている立て札に自然に目が行った。

暗い中でも読めるように蛍光灯が付けられているのでよく読める。

「イワナガ姫。コノハナサクヤ姫と共に二ニギ命に嫁いたが顔が醜悪と言われ山の神に帰された神様。しかし、繁栄と短命を司るコノハナサクヤ姫と対象的で不変と長命を司る・・・か。酷い話よね。」

「何が？」

「これよ、これ。二ニギ命って酷いよね。顔ぐらい何だって言うのさ。」

「あ？ でも普通そうじゃねえ？ 顔の酷い女じゃ勃ちも悪いって俺の友達なんてヤル時はバツクからか、枕被せてやってるらしいぜ」

「ほんつと馬鹿じゃない」

一言で切り捨てる。

女に取って、その系統の話は過去の古傷を掘り返す様な辛い話だった。

イワナガヒメの話ではないが彼女自身も『顔が気にいらない。』と言う理由で、昔好きだった先輩に振られている。

だからと言う訳だけでは無いが、きっと彼女は苛立っていたのだろう、いや昔の本当に好きだった先輩を思い出したのかもしれない。思わず、一緒に居る男の先日的一件に腹が立ち、脅かす様に言ってしまった。

「神様お願いします。今一緒にいる浮気者に天罰を！！」

「おい！！ ちょっと待てよ、誰が浮気者だよ」

ザワッ

風が吹く、境内の木々を大きく揺らす程の強い風が。その風に後押しされたのか、関を切ったように怒り出す。

「はっ！！ この間見たんだから、隣のクラスの吉村と仲よさ気にファーストフードに入る所を！！」

「ばっ違うよ、アレは。」

「アレは何よアレは、いつだってアンタはそう他の女の子とヤル事はっかり！！ 神様お願い！！ この馬鹿に天罰を。」

「オッオイ！！」

彼女は、言ってしまった後に後悔した。心にも無い事を言ったから、そして誰も居ない筈の境内に声が聞こえたからだ。

『叶えて遣わす』

「へ？」

「うっうわわわ！！？！？！」

男は指差しながら狼狽交じりの叫び声を上げる、その指の先には・・。

「嘘」

黒い漆黒のザンバラ髪、白い白い抜けるように白い肌をした少女が神殿の前に慄然と居た。

一瞬、幽霊かと思ったがそれは間違いだと女は思った。

昔、祖母から聞いた話を思い出したのだ。

『神社とは神域、神のおわそう場所、悪いモノは一切入れん場所なんじゃ』

とすれば目の前に居る少女は神様なんだろうか？

だがそれは違うだろうと女は思った、この神社の立て札に書いてある。

『コノハナサクヤ姫と共にニギ命に嫁いだが顔が醜悪と言われ山の神に帰された神様。』と、目の前の少女は醜くは無い、寧ろ顔立ちが整い過ぎて怖いぐらいだ。

「え？ わっわっわっ！！？？」

突然、後に居た男の叫び声が上がリ一瞬で掻き消える。

「え！？」

振り返ると、そこには誰も居なかった。

影も形も無い、逃げる足音も無い、男は一瞬で消えた。言葉どおり、煙の様に。

『願いは叶えた、敬うが良い』

再度響く声、神殿の方を見ても誰も居ない。

「えっ何！？」

周りを見るが誰も居ない。身体が一瞬で冷える、背中に流れる汗をジトリとシャツが吸った。

「ねえ、ふざけていないで出て来てよ！！ 居るんでしょう、ねえ！！」

男の意趣返しの悪ふざけかと一瞬思ったが、誰も居ない本当に居ない。

ゴウッ

風が吹き木々が怪しく揺れる、汗でにじんだ頬をなでる風が纏わり付く。余りの状況思考が付いて行けない、女はその場を逃げようと思った。しかし、時はすでに遅かった周囲の様子が変わっている。

後に誰か居る、女は戦慄した。

背後の神殿ではなく彼女自身の真後ろに、息遣いは感じない、しかし確実に誰かが居る。

何故気付かなかったのだろう、この気配はズット居た、私たち二人がこの神社に来た時からズット見ていた。

「その対価、如何なるものか」

後ろを振り返る事も出来ずに固まっていると耳元に声がかかった。

境内に響いていた声とは違う声、耳元に囁く様な声。

女の意識はそこで途絶えた。

過去への扉

彼にとって数日ぶりの学校。

今日の授業は五教科全部受ける事ができたが、授業の内容は休んでいたせいかわからない事だらけでとても疲れたのか動きが少し鈍い。数日分、完全に授業に遅れてしまった取り戻すのに時間がかかる、と誠一は溜め息を吐きながら教科書を鞆に入れていると、突然名前を呼ばれた気がして周りをみた。

悪友の桂二^{みなかみ}辺りが呼んだかと思ったが、それは違うと頭を振る。

何しろ『水上君』と可愛らしく桂二^{みなかみ}が言う訳がないし、そんな言われ方されたら誠一は本気で抹殺するかもしれない主に『後の貞操』的な意味で。

まあそれ以前に悪友共は、みなかみと言いつらい苗字より名前で呼ぶので違うと考えながら誠一は、呼んだであろう教室の入口にたつ少女へと目をやる。

女子高生にしては標準的な体型よりやや細め、シャギイの入った黒髪にやや垂れ目がちの優しそうな顔付きをした少女が誠一の方を見ていた。

それを確認した誠一は、ようやくかと呟きながら前回の一件に関わる人物の一人『蒼羽^{あおは} 天子^{あまね}』に手を挙げて解つたと返事する。

「オイッ誠一!!」

それを見ていたクラスメイトの黒門君が、突然誠一の肩を掴み迫ってきた。

「おつ、ちょっと待てどうした!？」

「誠一、お前あのリアルギャルゲー野郎と最近仲が良いと思ったが………そう言う事か!! 総ては奴の牙城を崩す為だったか!!!」

「はあ？」

目を血走らせながら熱く語る黒門君に軽くヒきながら、誠一は思わず聞き返す。

「奴は最近目に余る！！ 身の回りに集まった『幼なじみ』『クル系眼鏡っ子』『癒し系の天然娘』とリアルギャルゲーどころか、見ていない所でリアルエロゲーをやっていると噂されている奴、船津の野郎に我々『モテる野郎に鉄槌会』は活動をする所だったのだ！！！！」

何だそりや何処の部活動だ、てか何故に俺？ とやや現実逃避気味に誠一聞く。

「そんな時、誠一！！ 君がやってくれたのだ！！ 我々、誰もが出来なかった偉業を君が！！ 略奪だ！！ NTRだ！！ 流石『学内一のストイック男』だ！！ そこに痺れる憧れるう！！ さあ同士達よ彼の門出を祝おう！！」

顔を引き攣らせながら誠一は、訳の解らない応援と拍手を背に教室を出る。

そこには天子と、入口の壁に背を預けた桂二がニヤニヤしながら待っていた。

「災難だな」

「ああ」

「実は今お前の方がリアルギャルゲーっぽくなっていると奴ら知ったら大変だな」

「そっなの？」

「……………それを言っな」

誠一は授業で疲れ落とした肩を更に落とし、二人を連れ立って廊下を歩きだした。

桜区上川端 喫茶店『トラスト』

木で出来た焦げ茶色のテーブルと椅子を、暖色系のライトが照らし温かい雰囲気醸し出していた。

煉瓦造りのパーティションと観葉植物、所々歴史を感じさせる店内。夕方はいつもどおり昼の喫茶店から夜のBarへと変わる時間帯なので、人がいない。

誠一が最後に此处に来たのは半年前、車に轢かれそうになった彩を庇い代わりに轢かれて駆け込んだあの日以来。

久々に訪れたトラストに誠一は、妙な懐かしさを沸き上がらせていた。

カウンターに目をやれば、そこには長い髪の毛をバレッタで一つ纏めにし格好よく制服を着こなした女性がコーヒーを煎れていた。

細い眼鏡を掛けた切れ長の眼をした女性が、目線はサイフォンと同じ高さでしゃがみ込みミリ単位でコーヒーを煎れる。

バックに三角フラスコや試験管などが見え隠れするのが、シユールな光景を更に助長していた。

「あかり灯さん」

「ん？ 誠一か、久しぶりだな。半年ぶりか？ ……また、珍しい面子だな」

誠一が声をかけると、変わらない鋭い視線だけを彼女は向けた。
しかし、彼女が向けた視界の中に厳しい顔をした天子を入れた途端、
表情を歪めた。

「天子……………」

「この間の話した水龍、覚えてます？」

「まさか、君か誠一」

表の顔は癒し系天然娘と言われる学生、しかし裏の顔は高見原の悪
を尽く打ち倒す『桜坂の剣士』。

彼女の戦いに横槍をいれて、裏の世界の戦いに身を投じた誠一を灯
は水龍と呼んだ。

その会話だけで誠一は二人の関係と、灯がどちら側の人間かが解つ
てしまった。

「……………灯さん？」

「ああ、知っていた。君が半年前に車に轢かれて慌てて駆け込む前
からだ。……………あの日、事実と状況から判断して君が励起法を使っ
ていると知ってはいたが、私にも事情があつて話す事が出来なかつ
た。すまない」

「いや、灯さん。謝らないでください。何も知らない時の俺だつた
ら不満に思つてましたけど、今なら解ります。だから」

そう、あの時のまま。

何も知らずに巻き込まれ、自分か誰かが傷付いた時に聞けば誠一と
て怒っていたかもしれない。

しかし彼は自分の持つ技術の危険性と、変わってしまった自分の世
界（日常）を考えれば怒る気持ちは毛ほども沸き上がらなかった。
最低限の励起法で普通の人間ならば軽い一撃で葬れる程の力、それ
に派生するバイオレンスな裏の世界。

本来ならば知らない方が幸せなのだ。

だからこそ灯は口をつぐんだ、と理解すると誠一は氣遣いに感謝こそあるが文句などあろう事はなかった。

「いや、それでもだよ誠一。私には謝罪を、償いをする義務があるんだ」

「え？ それってどう言う事……………」

「それは私も聞きたいわ」

第三者の声が割り込む。

見れば店の入口に、彩が険しい顔で立っていた。

「何十にも張られた儀式結界。隠蔽に認識阻害、能力者に対する能力削減の儀式の重ね掛けされた店。その店での待ち合わせ……………意味を聞きたくなるわよね」

待ち合わせに遅れていた彩。

それは、この店の違和感を感じて調べていたためらしい。

調べた結果は想像以上の物で、対能力者の拠点以上の防備で彩の不信感は跳ね上がった。

天子も初めて知ったらしく、誠一が彼女を見れば驚いた顔で知らなかったと返してきた。

誠一も長く此処に通っているが、初めて知った。

どういう事かと灯を見れば、彼女は幽霊を見たような顔で彩を見て呟いた。

「奈緒美？」

境遇

トラストの一番奥のボックス席は、沈黙に包まれていた。

相対するのは折紙彩と蒼羽天子。

あの後、灯さんは『君に話さなければならぬ事がある』と言って、店の奥へと消えて行った。

その間に天子が彩の『折紙』と言う珍しい苗字に反応し触発された、ポツリポツリと彼女の昔話を語りはじめた。

それからだった、彼女達の間には微妙な空気が流れはじめたのは。

カウンター席から聞いていたがとても悲しい話で、それは仕方がないとも誠一は思った。

何しろ片や『家族を亡くした遺族』で、片や『家族を喪わせた原因の一端』を担う妹なのだ。

(同作者の『カモメは遙か水平線を見る』を参照)

天子としては『責める相手ではない』と頭で理解しているのであるうが、感情としてはついていけない。

そして彩は彩で身内のした事、その結果が目の中の悲しい事実に関がってシヨックを受けていた。

能力的にも本人の性格的にも敏感な彼女は、違うと叫び出したいでも言っている事が嘘でもない知っている。

だからこそ、その胸にあるモノはとても大きく苦しいのに吐き出せないでいた。

「何て言うか、ままならないな」

「あん？ 珍しいな誠一、お前が弱音を吐くなんて」

「桂二、俺だつて悩む事だつてあるさ。闘いや力技なら多分この拳だけで突き進める、と俺は思うよ。だがな、こんな時役に立たない自分が少し恨めしいよ」

誠一は考える。

強くなるうと、拳を何千回何万回と振るってきた。
来る日も来る日もだ。

お陰で力がついた、能力者としての力も得て世に蔓延る理不尽を打ち倒せる迄にもなった。

しかし、それに反して持たないモノもある。
人に対する人生経験と言うものだろう。

拳を振るっているだけでは得ることはないモノが誠一にはない、そう考えるにはまだ早いと彼自身は考えるが同世代から言えばそのスキルは低いと思っていた。

「正直こんな時、俺は無力だ」

そう誠一が呟くと、桂二は顔を背けて肩を震わせ笑っていた。

「何だよ」

「ククツ、いやスマンスマン。お前の弱音を吐くに笑っていた訳じゃないんだ。いつも色々な事を仏頂面で無難にこなし、学校じゃストイックの代名詞と呼ばれているお前が俺ら見たいな悩みを持っているなんてなと」

「俺だつて悩みぐらいある」

「解ってるって。俺は自分自身と別の事に笑ってるのさ」

桂二は誠一に対して嫉妬があった。

大抵の事は無難にこなし、能力者という力もある。

自分が同じ力があれば、能力者であればもつと自分の欲を叶える事が出来る、と願望があつた彼は誠一に嫉妬を覚えていた。

しかし、蓋を開けてみれば誠一も同じだった。

自分と同じ様に悩みながら、足掻いていた。

能力者だから力や存在の質は桁違いだが、それ以外は一緒。

彼は彼、自分は自分。

そう気付いてから、桂二の胸にあったわだかまりはストーンと落ち何故だか可笑しくなったのだ。

桂二は以前、『擬神薬』に手を出しそうになった時に上司に言われた事を思い出す。

『お前はお前しか出来ない事がある。薬なんぞ積み重ねのない物に頼らず、それを見付けろ』

桂二は笑いながら思いだす、あの臍曲がりの陰険ドS上司は予想、いや確信していたのだろう。

性格悪い癖に優しくお節介だ、と考えていたら笑いが止まらなくなっていた。

「目下お前の悩みはどうする事も出来ない、今の問題は尚更。あればかりは当人同士で話し合い、自身の心と決着をつけないとな」
「……………だよな」

溜め息混じりに肩の力を抜くと、誠一は彼女達を見る。
そこには沈痛な空気が……………

「私としては、ストイックならもうちょっと女性にスマートな迫り方で来て欲しいなと思う訳よ」

「あゝ解る解る。素っ気ないように見えて、眼を見たら真剣通り越して情熱的って?」

「そうそう。だけどさ、私の能力って読心じゃない? 見た目と中身が違って見えるから冷めちゃう」

「そうなんだ。でも、私だったらギャップにやられちゃうかも」

「あら、それってこの間の?」

「うつつ心読んだでしょ」

「読まなくても解るわ、助けられて芽生える想い。ありがちのパターンよ」

「単細胞みたいに言わないでよ」

流れていなかった。

むしろガールズトークに花咲かせている。

「……………なあ桂二」

「なんだ？」

「女って強いな」

「気付くの遅いよ。能力者の女性は、頭の切り替え目茶苦茶早いんだ。覚えておけよ……………あと誠一？ リア充は爆発しろ！！ てか、死ね！！」

「ちよつ桂二！？ いきなり何だよ！！」

女性陣は花が咲く程の話、男性陣は今にも一方的な（桂二が誠一を一方的に）殴り合いに発展しそうなその時、住居スペースに続くドアが開いた。

そこからは大量の書類を持った灯が現れる。

「灯さん？」

「桂二、ちよつと手伝ってくれ。誠一は奥の部屋から細長い鉄の箱を壁沿いに立て掛けているから、それを持って来てくれ」

二人はそれを聞くと口喧嘩していたのを忘れ、お互いに頼まれた事をするべくカウンター席から立ち上がる。

誠一は初めて入る扉の奥に、変な高揚感を感じながらたち入るが一瞬にして冷めた。

白を基調とした壁紙の廊下、狭いせいかはたまた色のせいか妙な圧迫感があり身体が自然と励起法を行っていた。

「何だ……ここは」

気持ち悪くなる程の空間の違和感を感じながら、誠一は奥へと進む。一番奥の『従業員控室』と書かれた扉の前に来たときには、精神的に疲れるほどで後で灯さんに聞こうと思いつながら誠一は中へ入る。中はシンプルな作りで鉄製のロッカーとテーブルとパイプ椅子。

テーブルの上には女性誌や漫画雑誌があり、身体に感じる圧迫感がなければありきたりの光景。

こんな所は早く用事を済ませて出ようと考え、誠一は目的の物を見付けるべく周りを見回し扉側の鉄製の箱を見付ける。

「あつた」

手を伸ばしそれを取ろうとした時、誠一は違和感の正体に気付く。

「これが圧迫感の正体？」

遺品

「誠一！？」

「誠一君！？ どうしたの！！」

「誠一、お前顔が真っ青だぞ……………何があった？」

奥の部屋から帰ってきた誠一の顔色は、真っ青だった。

表情はいつもどおりだから本人の自覚は無いのだろうが、他人から見れば何があつたかと思う位の色。

三人は思い思いの言葉を掛けて心配するが、天子はある事に気付く。

「神域結界！？ ううん、何か違う……………これってまさか、共鳴している！！」

天子は木刀の入っている布袋の口を緩めると、中から木刀を取り出す。

「……………それは？」

「神器『荒霸吐』^{アラハバキ}。先生から頂いたオリジナルの神器。さつきからこの剣がずつと鳴っているから妙だと思っていたら、多分これと共に鳴っていたと思う」

「多分？」

「この剣はとても貴重で危険だから、身体から離したことはないの。この店には何度も来ているのに……………こんなの初めて」

神器はその重要度と性質上、あまり身から離す事が出来ない。

紛失や盗まれた事を考えれば、余りの危険性に変な事になるのは火を見るより明らか。

だからこそ天子はその説明を聞いた時から、四六時中持ち歩く様になったのだ。

しかし疑問が残る、何故今反応したのだろうか？

「灯さん、誠一君が持つて来たのは前からあったんですか？」

「ああ、開店当初からあるものだ。……そうだったな、君の持つ荒覇吐も神器だったな」

「それじゃあやっぱり、コレは！！」

「ああそうだ」

そう言うとき灯は制服の胸ポケットから、一枚の金属の板を取り出す。それは奇妙な紋様が描かれた、カード状の板。彼女はその板を箱の上部にあった凹みに嵌め込むと、呪を唱える様に呟いた。

「割符に従い開け、コード9A7K8L」

するとどうだろう細長い金属の箱の中央が、手が入る位の小さな口が開いた。

「彩……だったな。手を入れて中の物を取り出してくれ」

「私？」

「そうだ。外側の封印は私が作った物だが、中にある物は……私が君の姉、奈緒美から預かった物だ」

「姉さんの……」

彩は姉の名前を聞き目を見開く。

最初から姉と彩を見間違えた時点で、見た目の歳から考えても知り合いか顔見知り程度だと思っていた。

しかし、こうやって物を預かると言うならば、もっと親しい関係な

のかも知れない。

だけど、持って来た誠一の顔色を変える物をそう簡単に手を入れて良いものかと考える。

そう考えて手の中に入れるのを戸惑っていると、誠一が彩に声を掛ける。

「彩さん、多分大丈夫」

「そんなに顔色を真っ青にして、大丈夫なんて説得力ないわ」

「大丈夫だよ。顔色悪いのは多分、励起法を削られているから。この中に何が入っているか解らないけどさ、この中のモノが強力な神域結界を使つて君を呼んでいるのが解るんだ」

「私を呼んでる？」

そうと頷く誠一の目を見れば、能力を使わなくても解る真っ直ぐな意志。

彩は負けるわと呟き、テーブル越しに誠一を見詰める天子に牽制をかけながら意を決して穴に手をいれた。

「っ！?!?!?!」

「空間を歪めて、実体積以上の空間を作り出す儀式法具だ」

手を入れると、箱の大きさ以上に腕が入ってしまい彩は思わず驚いた。

聞いた事がある儀式に、灯の説明にどこか納得した彩は更に腕を入れる。

「あつた」

「むっ」

「共鳴が治まった」

何かを掴んだのか、彩が行動した途端に誠一と天子、能力者二人が反応した。

誠一は圧迫感がなくなった事で、天子は自身が持つ神器の共鳴が治まってからだ。

同時に彩は腕を箱から引き抜く。

これが能力者と儀式法術の事で知っていなければ、見た目どころのマジシャンのショーだなと、桂二は今更ながら自分の入った世界の荒唐無稽さに自嘲する。

スルスルと出て来たのは一本の棒。

「これは、杖？」

それは俗に乳切木と呼ばれる、杖術に使う杖だ。

丁度中央辺りに何か銘が書かれてあった。

「ことしろぬし
事代主？」

「そうだ遙か神代に存在した『託宣』を司る神の名。そしてそれが彼女、奈緒美から……遺品として渡されたものだ」

「どういう事……！」

灯の言葉が終わるよりも早く、彩は『遺品』の一言で彼女に詰め寄る。

「何であんたが、どうしてあんたが遺品を、姉さんはいったい何処……！」

「彩さん落ち着いて、励起法はマズイって……手っ離して……！
灯さんが死んじゃう……！」

「それじゃ灯さん喋れないって……早く離しなさい……！」

我を忘れて励起法で掴み掛かる彩を、誠一と天子は励起法で無理矢

理引きはがす。

正直洒落にならない、我を忘れた熊が女性につかみ掛かる様なモノだからだ。

その証拠に、灯は床に座り込み咳込んでいた。

「大丈夫ですか、灯さん」

「グッゴホッ、大丈夫、すまないな桂二……………」

桂二に手を借りながらテーブルに着く灯が彩を見れば、二人に腕を掴まれ両サイドから捕まっている姿が見えた。

「話を聞いて貰えないだろうか……………」

顔色を変えた沈痛な面持ちの灯。

彼女の姿に少し落ち着いたのか、彩は励起法を絞り効力を落とした。それに気付いた誠一と天子は、ユックリと掴んでいた手を離す。

「とりあえず座ってくれ」

灯は全員に椅子を勧め、全員が椅子に座ったのを確認すると決意した様に口を開いた。

「話は10年前に遡る」

大戦

君達はノストラダムスの大予言って知っているかな？

多分知らないと思う、だからそこから説明しよう。

ノストラダムスの大予言とは日本において、1990年代に流行り1999年にピーク迎えて収束して終りを迎えたオカルトを指す。

この予言の内容は面白くてな彼は、「1999年の7の月に空から恐怖の大王が降ってくる」なんて言う滑稽な終末予言を残した。

何故滑稽かって？ 簡単な事だ、今我々は生きている。

この予言は結構、信心深い日本人に受け入れられて

終末予言は日本で流行って、外れたんだよ。

そう表向きには外れた、しかし裏の世界においては『外された』と言うのが一般的だったんだ。

一説によれば辰学院の重金教授曰く、『古い文献からノストラダムスは、未来予知系の能力者であり、的中率の悪さが逆にそれを裏付ける』らしい。

とまあ本題からかなりずれたが、実はそのノストラダムスが予知したある出来事が問題だった。

そう、奈緒美と出会う4年前……14年前にあった『大戦』。

これが総ての発端だった。

「『大戦』ですか？」

「またそれは大きな話ですね」

桂二と天子は初めて聞いたのか、訝しげな表情で言葉をつむぐ。

「妄言を吐く馬鹿を見るような疑いの眼差しでみるな、この話は能

力者にとってかなり密接な話なんだ」

「密接………ですか？」

「ああ、そうだ。君達は知らないだろうが、今いる能力者には若い人間ばかりなのを気付いているか？」

そう言われてみればと誠一達が今まで会ってきた能力者を思い出せば、年若い人間ばかりだ。

天子の先生や誠一の師匠も明らかに二十代、出会いが限定的だから確かにとは言えないが見るかぎりはそうだった。

「若い人しかいないって、もしかして死んだって事ですか？」

「そうだ。君達は国には能力者を雇用する専門機関があるのをしているか？ 日本においての内閣調査室の分室『六花機関』やイギリスの『墓掘り』、ローマの『十三人機関』が有名だ。」

「………思ったよりすくないですね？」

「当然だ。『大戦』により有名処はほとんど『消えた』んだ………物理的にな」

「物理的って………殺し合いですか」

そうだと言って頷く灯に、周りはシンと静かになった。

『大戦』とは1990年の湾岸戦争から始まる、裏の世界の戦争だった。

湾岸戦争とはイラクがクウェートに進攻した時、国際連合が多国籍軍を派遣し始まった戦争をいう。

ここで湾岸戦争の詳細をするべきだろうが、本編に関係ないので割愛させていただく。

問題はその裏で起こっていた事。

実の所、クウェート進攻から湾岸戦争に入るまで、半年近くある。その間の事いや正確に言えばクウェート進攻の約二週間後、イラクが国際発表した事が発端だった。

「『人間の盾』ですか」

「そうだ、自国に滞在している外国人を盾とする………解りやすく言えば人質をとったと言う事だ。それに慌てたのはとられた国だった。そこでとられた方法は………」

秘密裏にスパイや特殊部隊を投入し、人質の安全確保を行ったのだ。

「歴戦の能力者による救助ならば、誰もが早期解決すると考えていた。しかし、現実とは違った」

湾岸戦争で儲けようと企てていた、武器商人たちが横槍を入れて来たのだ。

「あの類は儲けるためならば何でもやるのさ。しかし、その武器商人も誤算があった。あの当時の裏の世界での能力者組織の軋轢は、誰もが思っていたより酷く、苛烈だった。最初は小競り合いの様な戦いから、段々とエスカレートしていき」

「大戦となったと？」

「そうだ。組織のプライドを守ったり、仲間の仇討ち、勢力拡大や陰謀阻止。記録によると、あの頃の戦闘回数は湾岸戦争が始まるまで約半年の間で五千にも届く程だったらしい」

そして人質が全員解放され、湾岸戦争が始まり裏の戦いが終わる筈だった。

「だが終わらなかった。戦いは続いたんだ。血を血で洗い、屍が積み重なる様に増えた。それが9年続いたある日、フランスのブランケット家がとんでもない計画を立ち上げた。終末予言を実行しようとする馬鹿げた計画だ」

所謂『狂信者』と呼ばれる集団だった。
召喚系の儀式を使い、異界の魔物や魔神を呼び寄せて世界を滅亡させようとしたのだ。

「なるほど、それが『大戦』ですか」

「違う。桂二」

「へっ？」

したり顔で頷く桂二を灯は簡単に切り捨てた。

それもその筈、彼は能力者ではないからだ。

ここで能力者の特徴を挙げてみよう。

一つ、空間になんらかしかの影響を与える能力をもつ。

二つ、生物としての枠を超えさせる励起法。

三つ、上記二つを為すための神の領域たる『神域結界』。

そこまで聞いた時、彩が気付く。

「『神域結界』……だね。あれはある種の自分だけの空間を作り出すから、多分異界からの魔物どもはそれが突破できない。能力者にとつては魔物はモノともしなかったんじゃないかな？」

「正解だ。以前見たレポートにも同じ事が書かれていたよ。流石は奈緒美の妹だ」

褒められた彩は、少し頬を染めながらも何でもないように振る舞う。それを見ながら灯は話を続けた。

「要するにノストラダムスが見た光景はこれだったんじゃないかと言われている。まあ魔族とか恐怖の対象になるからな。結局、大戦の終始は能力者の戦いに尽きたと言う事となる。最終的にはブランケット家の壊滅で終了。ブランケット家での交配実験により生まれ

た能力者と、能力者組織の連合軍との戦いで更に死人が出たせいで、九年間の戦いで能力者の数は約一割強まで減った……と此処までがさわりだ」

言われて一同は驚いた。

「一時間近く喋って触りなんですか？」

「そうだ誠一。これから話す事に重要な話だからな」

「てっ、まさか？」

「君が思っている、その通りだ。折紙家は六花機関の工作員であり、奈緒美と彩のご両親は大戦で亡くなっているんだ」

姉の真実（前書き）

少々グロっばい事を書いています。
苦手な方は気をつけてください。

姉の真実

「作業員……ですか？」

「ああ、今は様変わりしているが昔は能力者と言えば、裏の世界でスパイや特殊部隊の人間と言う方が当たり前だった。君の姉から聞いた話だが、今でも思い出すよ。研究所の時の話を」

「研究所って、まさか貴女は……！」

「そうだ。桃山財閥の傘下の一つ、雉元化学の第二研究所の所長。それが私の肩書だ」

第一研究所の名前を聞いて、様子がおかしくなったのは天子だった。いや正確には雉元化学と言う企業名。

天子の父親に『擬神薬』を渡していたメーカー『雉元製薬』は、雉元化学の一部門だからだ。

椅子を倒し茫然と立ち上がる天子の手は、いつの間にか神器の柄に添えられていた。

誠一が気付いた時にはもう遅かった、全身のバネを使い抜刀の直前だった。

しかし、それを先読みし柄に手を置き、封じた人間が一人。

「彩さん、助かったよ」

「私でも危なかった。モーション・エモーションを起動してなかったら気づかないまま、スイカの輪切りを見るところよ」

見れば彩の額に汗が流れていた。

どうやら彼女は話が妙な方向に行って、煙に巻かれて話がなくなるのを危惧し自分の能力を発動させていたらしい。

実際のところ話には嘘はなく、急激に膨れ上がった励起法のエネルギー波に気付きギリギリの所で止められたらしい。

「さつき取り乱した私が言うのも何だけど………落ち着いて、話を最後まで聞いてから剣を振るべきよ？」

見つめ合う二人に沈黙が流れ、どちらが先とも言えず力を抜くと天子は唇を噛みながら頷いた。

「すまないな」

「気にしないで、貴女にはまだ聞きたい事があるからよ」

「それでもだ。罪人として発言しなければ、正当な裁きを受けられない」

殺伐とした雰囲気と突き放した様な言葉、だけでも含む言葉にはどこか優しさがあった。

そんな中で誠一は『素直じゃないなあ』と呟いて、彩と天子に殴られた。

桜区上川端 喫茶店『トラスト』従業員控室 午後9時

その後トラストが夜の部になると言う事で、四人は店の奥へと場所を移す事に。

全員が思い思いの場所に移動すると、灯は部屋の真ん中のパイプ椅子に座る。

その姿は裁判にかけられる被告人の様だった。

「私と奈緒美の出会い、サイファ学園都市にある辰学院の研究室からだった。当時の彼女は、14才と言う若さで裏の世界の最高学

部に鳴り物入りで入った才媛だったよ」

「頭が良かったんですね」

「ああ、当時大学院の私を大幅に追い抜いていたからな。あの頃は『能力者ってズルイ』なんて嫉妬してたよ……でもな、やっぱり子供だったよアイツは」

そう言いながら灯は、書類の束を見せる。

「……これって」

「……マジかよ」

天子と桂二は、読み進める毎に顔色と言葉をなくす。
誠一と彩は今まで聞いてきた事から大体予想していたが、それでもその内容に顔をしかめる。

「人体実験のデータ……しかも、一人二人じゃあない。千人単位、なんてことを……」

「死亡、処理、処理、死亡……なんだよコレ。人がモノ見たいだ」

擬神薬の適合実験、用量実験、投与による発現実験、実験実験実験
実験。

あらゆる実験を人を使い、データを出し処理したと書かれた書類。

「奈緒美は夢を追いかけたんだ。何がきっかけかは解らないが、基点は恐らく両親が私と同じく『桃山財閥』と関わっていた事だろう。それで学校を辞めた私達がこちらにツテで引き抜かれた。その時、奈緒美は言っていた。自分が能力者を辞める事が出来ないのならば、人を能力者にしてしまえばいいと」

「姉さん、何て事を……」

それは総て、妹のみならず——人間と能力者——人類総ての救済になる。

奈緒美の考えはそう行き着いた、と灯は言う。

彩は否定したかった、姉はこんな酷い事はしていないと叫びたかった。

しかし、今までの予想、今までの聞いた事や知った事が彩の否定する心を押さえ付ける。

そして思い出す、姉の奈緒美がいつの日にか言った言葉。

『いつか皆、隠す事なく笑って暮らせる世界がくるわ』

あの日の言葉が、残酷な現実を肯定した。

「泣き疲れて寝てしまったよ。恐らく、奈緒美が居なくなってから
の八年近く、ずっと悩んでいて。知りたくなかった現実をみてから
限界だったのかもしれない。もう少し時期を気をつけるべきだった、
すまないな皆」

彩を居住スペースにある灯のベッドに横たわらせた後、彼女は深々と謝った。

「そんな……いつかは知る事かも知れない。俺達が側にいる時で
良かったかもしれない」

「誠……もうちょっと女性の扱いを知ろうな？」

「そうだよ誠一君、今のは微妙だよ」

「誠一、まだまだだな」

「って何で俺責められてる！？ てか、桂二。学校で修羅場やらかしたお前に言われたくないわー！」

一気に空気が変わってしまった。

いつの間にか『女の子の扱いが下手』と言う烙印を付けられた誠一は心の底から叫ぶが、周りはそれがなかったかの様に振る舞う。

「………… お前ら後で覚えてろ」

「………… ハイハイ。まあ誠一の事はともかく、この資料にザツと目を通したんですが、コレは奈緒美さんって人のレポートですよ。不思議な事にコレらのレポート読んでいたら気付いたんですが、第一研究所の名義になってます。灯さんは第二研究所の元所長と言いましたけど？」

「目ざといな。そうだ奈緒美は第一『臨床試験』研究所の主任研究員で、私は第二『薬剤開発』研究所の所長だったんだ」

「薬剤開発、擬神薬はもしかして灯さんが？」

薬剤の名前に誠一が聞くと、残念ながら違つと彼女は頭をふつた。

「一応所長と言う肩書だから、開発の陣頭指揮をとってはいたが、擬神薬は私が作った訳じゃない」

「それは私も知ってる。彩ちゃんのお姉さんのレポートを、私も読んだから。確か古くから存在する能力者選別の為の薬だったはず」

「その通りだ、擬神薬とは遥か昔から存在する、通過儀礼イニシエーションの為の薬だった。しかし、近代においては暴走体等の発生の危険性から撲滅した、いやされた筈だったんだ」

元々の使い方は能力者選別の為。

しかし、その危険性故に能力者自身が撲滅していた。

この中で戦った事がある身では、確かに危険過ぎると天子はそれに共感しながら唇を噛む。

「君達は何故この町で研究が行われていると思う？」

「何故って？ 立地条件とかやりやすいとかじゃ？」

「誠一、それじゃ大都市の近くに研究所を建てた方が安上がりだ。今まで俺が集めた情報から考えると。やつら、この研究の為にこの町を作った節がある」

「なんだそれ？」

「やつら桃山財閥が主に着手したのが、研究所以外には道路や地下鉄だ。いくら国からの支援を受けていると言っても、規模も使う金も明らかにおかしい」

「そのとおりだ。金のかかり方が確かに異常だ。答えは30年前に見付かったある古文書にあった地図にある文章が原因だ」

「文章……………」

「この地の中心部に、黄泉比良坂の一つがあると言う文章だ」

黄泉比良坂

昔々、ある所にイザナギと言う男神とイザナミと言う女神がいました。

その二柱の神様は子供達に囲まれて幸せな生活を送って居ました。ある時、子供がイザナミのお腹から産まれる直前の事です。

イザナミは苦しんで死んでしまいました。

原因はお腹の中の子供が『火の神様』で、イザナミのお腹で火を出して焼殺してしまったのです。

怒り悲しんだイザナギは持っていた『十拳剣』で母を殺した子供を斬ると、彼は死んだイザナミを黄泉返えらせる為に黄泉の国へと旅立ちました。

「黄泉の国の入口。それを黄泉比良坂と言う」

灯の童話にも似た昔話に、三人は顔をしかめる。

「子供、殺しちゃうんだ……………」

「嫁さんをとつたにしても、ひど過ぎる」

「蘇れるんだ……………子供も生き返らせないのかよ」

三者三様でブルーになっていた。

立て続けに重い話を聞いて、気分が落ち込んだのもあるが一番の原因は別にあつたりする。

「なんだ君達、元気がないぞ？」

「立て続けにヘビィな話をされた上に、所々に専門用語の解説を延

々とされれば精神的に疲れますって!!」

「あーははは、深夜3時過ぎ。朝方になるねー」

「……………授業の千倍辛い」

要するに30分もせずに終わる話を、4時間まで引き延ばした挙げ句、講義のさながらの口調で喋り倒したのだ。

体力と持久力が売りの能力者と言えども、これは大分堪えたらしい。意外な弱点である。

「てか、灯さんは何で元気なんですか……………」

「ふふふ、辰学院の重金教授の講義はもつとキツイゾ、アノヒト人間ノ脳ノキャパラ……………」

「ちよつ灯さん!? 目のハイライトが消えてるって、戻って来て下さい!!」

一体何を思い出したのか、灯の目から正気の光が消える。

彩がいれば『重金教授は相変わらず』と納得してくれたのだろうが、いかんせん彼女は寝ていた。

慌てて三人は、彼女を揺さ振り正気に戻した。

「失礼。見苦しい所をみせたな、話を戻そう。黄泉比良坂とはそう言う場所なのだ。そしてこの高見原の地下遺跡にそれがあつたのだ」
「地下遺跡ですか?」

「君達は地下鉄を不思議に思わないか? これだけの森林があるのに、しっかりとした地下鉄がある。それは元々地下にあつた広大な空間を利用して造られていたからだ」

「そんなに広いんですか?」

「ああ。30年前に行った桃山の遺跡探索チームによれば、外周はちょうど地下鉄と鉄道を囲まれた範囲らしい。その中心から地下100メートル程、蟻の巣の様にカタコンベがあり一番最下層に、あ

れがあつたらしい」

「……………あれ」

「イザナミの遺骸さ」

30年前。

とある遺跡探索チームが見付かった古文書を元に、高見原の地下へと入った。

地下は不思議な空間で、人の手が入っているようでありながら、蟻の巣のような洞窟の連なりでもあった。

その途中は死体の横たわったカタコンベ（地下墓地）や探索チームには良く解らない葬具や儀式具の数々。

何度か潜り続ける事一ヶ月、最深部にそれはあった。

黒い鳥居に朽ち果てた社、腐り切った供え物の五穀の向こうに遺骸。

「それがイザナミと？」

「社に残されていた葬具等からの判断だがな？　ただ、それ以外の物が見付かったのがこの一連の話の始まりだ。埋葬品の中に擬神薬があつたんだ」

と、ここで話は終わったと灯が黙り込む。

暫くの沈黙の後、誠一が口を開く。

「一つ疑問に思いました。灯さんはさつきから自分の事を『罪人』と言っていました。話を聞くかぎり何をしたと言う感じじゃないんですか？」

「違うよ誠一、罪の大きさが問題じゃあないんだ。関わってしまった、知って恐れて何も出来なかった時点で罪なんだ」

灯はこの一件を知った時、実験内容の非人道的なおぞましさと凄惨さに狂いそうになった。

だが、狂えなかった。

いっそ狂ってしまった方が楽だったのに、辰学院で培った強靱な思考力が狂うのを許さなかったのだ。

「それに償いと言っても私が出来たのは奈緒美の手伝いと、いなくなつた彼女が作つた組織を引き継いだだけだ」

「組織？」

「八年前、奈緒美が実験台になつていた少年少女達を先導し、組織を作り反乱を起こしたんだ。海原区の火災を知らないか？ あれがそうさ。彼女が居なくなる直前、彼女は私に相談しにきたんだ、私の苦しみを能力でしつた上で」

それは灯が実験の真実を知り悩んでいたある日。

相談があるとフラリとやって来た奈緒美が、灯にこう言つたのだ。

『反乱に手を貸して下さい』と。

「細かい事を聞いて驚いたよ、実験台の子供達を能力別にして組織を作つてるとまで聞いたんだ」

悩みに悩んでいた灯にとっては、その案は渡りに船だった。

幸いにも灯は『雉元』、桃山財閥を構成する三大企業の一つを支配する一族の人間だったので、情報や抜け道をするのにはうつつけ。それも狙っていたのであろう奈緒美は灯に協力を取り付けると、きつちり一ヶ月反乱を起こした。

「ハッキリ言つて、一番能力者を恐れたのはあの時だよ。研究所内とは言え一ヶ月で反乱とかな、確実におかしい」

計画の発覚を恐れて急いだのだろう、と灯は言うがそれを境に居な

くなった彼女の事を考えると、急ぎすぎた感も否めなかった。

「それじゃあ彩さんのお姉さんは、八年前の第一研究所以来？」

「ああ。私に実験体にされていた子供達を託した後、やり残しがあつたと言いながらどこかに走って行つたのが最後だ。それから彼女は見ていないよ」

後を追っていれば助けられたのかもしれない、と灯は言う。

「それから私はまだ若かつた円達を……」

「えっ……」

「ええっ！！」

「どうした誠一、桂二。そんなに驚いて」

「まっ円さん能力者なんですか！？」

「あのいつもカウターの奥で二ートさながら寝て過ごして、軽く女性捨てたスタイル抜群の円さんが能力者！？」

「桂二君、けなしてるのか褒めてるのかどっち？」

軽く収集がつかなくなった。

境界線

「んっ」

彩が目を醒ませば、そこは知らない部屋。

見渡せば、落ち着いた感じの色調の部屋が目に入る。

淡いクリーム色の壁紙に、額縁に入った赤い花の絵。

量販店で見た事がある机と椅子、花柄の布をかけた本棚。

部屋の隅におかれた大きなパソコンデスクの上にある明らかに専門的なゴツいパソコンはあるが、暖色系のカーテンから漏れる光がここが女性の部屋だと言っていた。

「ここは、そうか昨日……………」

段々と彩は目を醒まし、頭がハッキリとしてきた。

昨日（正確には今朝）は、姉の本当の話を聞き泣いてしまったと彩は思い出す。

灯に抱き着いて泣いて、そのまま寝てしまったのまで思い出すと、

恥ずかしいなあと彩は頬を紅く染める。

しかし彼女は昨日、色々な事を知った。

姉の奈緒美の事や姉の考え、そして過去。

考えると少し涙が滲み出る、姉は自分の為に罪に手を染め死んだのかもしれない。

そう考えると胸が裂ける様に苦しいと、彩が腕を抱いてうずくまっている扉を叩く音が聞こえた。

「……………誠一？」

何故か誠一なのかとも思い返事を返したが、入ってきた人物は意外な人だった。

「あなた……」

「誠一君じゃなくて残念だったね、彼なら桂二君と一緒に学校行きたわよ」

扉の前には紺のジーンズパンツ、白のインナーの上に少し大きめの草木染めした緑色の薄手の服を着た天子が立っていた。

「貴女は行かないの学校？」

「誠一君達と違って私、出席率の良いのよ？　一応、真面目で通っているし」

私服を着た彼女の印象は少々違う、学校で制服姿しか見ていない者であれば柔らかい印象と打って変わり、少し快活さをもった可愛い少女に見えるだろう。

「猫かぶり……」

「ん？　何か言った？」

「タヌキでもいいわよ」

天子の能力は大分解ってきた彩は悪態をつく。

彼女の戦い方を見ていて彩は、違和感を感じたのだ。

それは目を余り使わず戦っていると言う事。

フードを目深に被って戦う時点で視角にあまり頼らない戦いをするとは思ってはいたが、流石に死角からくるパッションレッドの鋭角なフック等を未来予知じみた動きで回避していたら彩はおのずと理解した。

あれは多分、音波に関係する識者だと彩はそう断定する。

そう断定するとさっきの、彩の呟きを聞いていない筈がない。
腹芸も出来るあたり、タヌキと言った方が良い。

「タヌキって酷いな。そう、つんけんしないでよ」

「貴女とは、まだあの時の決着がついていないから」

「ああーもう、話が進まない。少しは信用してよ」

「貴女が今展開している、神域結界を解除するならね」

「貴女ね」

天子としては話をしにきただけだった。

しかし、彩は今でも泣きそうな顔で頑な態度。

彼女の境遇や能力を考えれば、今朝まで続いた話はとてつもないストレスで警戒心があがっているのは確かだ。

でも野生生物じゃないんだから少し位は心を開いて欲しいな、と考
えながら天子は神域結界を解く。

「っ!!」

「神域結界を解けて言ったのはそつちよ？ わざわざ誠一君に頼
んで、貴女と話す機会を設けたんだから」

「私と？」

「そうよ、私としては貴女達と共闘したい。だから話すのよ」

「大丈夫かな彩さん」

「まーだ言ってるのか、天子ちゃんも言ってるうつ？ 『女同士じ

やないと無理』な部分もあるんだろからって、お前もそれで納得したろうだろが」

学校帰りの校庭で、誠一と桂二の二人は連れ立って歩きながら喋っていた。

「そうだけどさ、何かザワザワと嫌な予感しかないんだよ」

「能力者の予感か？」

「なんだそりゃ？」

能力者の絶対条件に『計算能力』の異常な高さがある。

自分の得意な計算のみであるが、それは最低条件で。

今までの能力者を例にとれば、パッションレッドの体内分子操作による圧力感知炸薬製造、フランベルジェの領域（神域結界）内の震動操作、東哉の領域内の細分化等、総て能力者の高い計算能力によって行っているのである。

「要するにだ。その計算能力がたまに未来予測にシフトすると、未来予知並の予感になるって事さ、解ったか？」

「む、なんとか。俺の能力がナノ単位のコロイド分子操作による身体強化だから、その膨大な計算を一瞬で行う処理能力が未来予測に移ると未来予知並の力を得るって事……桂二、なんだその顔は……」

ふと誠一が横を見れば、桂二がいない。

後ろを見れば、目を見開き桂二が驚いて誠一を見ていた。

「せつ誠一が難しい事をつ」

「ばっ馬鹿にするな、それくらい解るわ……」

ツカツカと歩き桂二に近付くと、ガツンと誠一が殴り付ける。

「つてめ、やりやがったな!!」

「やるか!？」

そして始まる殴り合い。

周りの下校中の同級生達は、『ヤレヤレ、またか』と一瞥して通過していく。

「イツツ、本気で殴るなよ」

「誰が本気だ。本気で殴ったらお前、死ぬぞ」

実際、誠一が励起法を使って本気で殴ったら頭が吹っ飛ぶ所ではない。

二人は取っ組み合いで汚れた制服を叩きながら、再び歩きだす。

「多分、彩ちゃんのお姉さんって追い詰められてたんだろうな」

「多分な。彩さんと同じく『読心』系の能力者って聞いている。彩さん以上に追い詰められてたんじゃないかと俺も思う」

多分彼女は独りだったんだろう。

能力者故に独りになりやすい上に、彼女は妹の彩と同じく『読心』能力を持つ能力者。

彩の様に能力のオンオフは出来たのであろうが、彩曰く人の心とは麻薬の様なモノで、一度知ってしまったえば知らないと逆に恐怖してしまうらしい。

能力者として誠一は彼女達の苦しみを知り、味方・仲間のなさに歯を噛み締める。

「桂二」

「あん？」

「ありがとう」

それは紛れも無い誠一の本心。

あの時の桂二の『お前がいるなら』と言う一言が、孤児として不安定な自分の心の足場になり誠一を支えてきたのは間違いない。だからこそその言葉であるが……

「……………で？ 桂二なんだその顔は？」

「臭い台詞吐くんじゃねえ！！」

「同じネタを二回も使うなあ！！」

互いに顔を朱くしながら、二人は喧嘩しながら歩いていった。

辻占

夕方の『トラスト』。

その一番奥のボックス席で四人、誠一・桂二・彩・天子は顔を付き合わせて話し合っていた。

「まあ、ほとんど振り出しに戻ったわよね」

「だよな。彩さんのお姉さんの事は灯さんの方が知ってて、蒼羽さんに聞いても解らないし」

「悪かったわね。でもどうする？ 解った事にしても話聞いていたら手詰まりっポイし、あと仲間に入るから私の事は天子でいいよ」

天子が誠一に名前と呼んできると、彩が微妙な顔で彼女を見る。

誠一達が学校から帰って見れば、二人はこんな感じだった。

友達のような、ライバルのような競い合う様な。

誠一は二人が戦ったのを知っているの、恐らくはその関係だろうと高をくくる。

「それについては私から方針を変えたいと思うの、今まで姉さんの消息を追ってたけど………少しやめたい」

「どうして!？」

「………姉さん、今どこに居るか生きているかも解らない。でも、話を聞いていて思った事があったの。姉さんは何がしたかったのかって。そう思うと、姉さんと会うためにあえて別の事をしようと思う」

「別の事？」

「桃山に敵対する」

その場の全員に緊張が走る。

無理もない事だ。

相手にしようと言うのが日本全国、特に高見原に影響力の強い大企業の上に、裏でも私設の軍隊じみたモノを持つてる組織に敵対しようと言うのだから。

しかし、それも一瞬の事でだった。

「お姉さんの事は諦めるのかい」

「違うわよ。ちゃんと聞いてた？ 『会うため』 私は敵対するの。」

姉さんは人を実験動物の様に扱う桃山に対して、解放するために反乱を起こしたって」

「なるほど、同じ様に行動した方が出会う確率が上がるって事か」

最後まで聞かずに理解した桂二に、彩は頷く。

桂二が言った通り、奈緒美が最後にやったのは実験台になっていた子供達を組織して、桃山に対し反逆した事だ。

彩はそれに目を付けた。

姉が今でも桃山と戦っているならば、同じ様に桃山相手に戦っていれば出会える可能性が高い。

「それと、あいつらのやってる事が許せない」

滲み出る様な彩の静かな怒り。

握った拳が真っ白くなるほど、彩の手は握りしめられている。

「私の個人的な怒りだけど、ただどあいつらだけはっ！！」
「彩さん」

深い怒りで俯いていた彩の顔が跳ね上がる。

気付けば声をかけた誠一だけではなく、天子や桂二も怒りの感情を湛えた目をしていた。

その想いは彩だけではないと、語りかける様に。

「皆、同じだよ。だから、一緒に戦おう。最初の約束だ」

「ああ、そうさ。彩さんの想いは解ってるさ。俺の情報は必要だろ？」

「この町で戦っていたのは私が先なんだよ？　むしろ私が手伝って欲しいんだからね」

周りの励ます眼差しに彩は少し涙ぐむと、小さな声で「ありがとう」と返した。

「とーこーろーでー」

「うわっ！？」

「まっ円さん！？」

シンミリしていた空気をぶち壊すが如く、どこか緩みきった尚且つ寝起きの様な声が響く。

驚いた誠一と桂二が振り返れば、寝癖まじりの長い髪に黒ぶち眼鏡の奥の寝ぼけ眼を不敵に光らした女性——金崎円——が猫背気味に立っていた。

「円さんいつの間に！？」

「ふふーん、最初からよ！！　貴方達が集まる前からそこに寝ていたのよ！！」

「あー何と言うか、果てしなくダメっぷりが出てますが？」

桂二が驚き聞けば、返ってきた答えは飲食店的にはどうなんだろうと頭を捻る返答だった。

見れば近くのボックス席の椅子の上に、タオルケットが丸まっている。

恐らくそこで寝ていたのだろう、注意深く見ればペットボトルやノートパソコンもあり生活臭も漂っている。

「えーっと、何かが終わる前に何とかした方が良いですよ？」

「誠一君に哀れみの目を向けられたーってか何故に疑問形ー！？
せつかく私の能力で今後の指針を占ってあげようと思ったのにこの仕打ちは何故にー！？」

生活空間から目を反らしながら誠一が言うと、傷付いたと円が騒ぎだす。

この喫茶店では何時もの光景ではあるが、今の状況としては些か看過できない上に発言に問題があった。

「ちょっと円さん？ 占うって」

「誠一君ちょっと。あのね、円さんの能力はレアなんだよ？ 『ドラゴンフライ』って常時発動型の能力で、限局的な未来予測能力らしいの」

桂二が円を宥めていると、天子が誠一の近くに寄ってきて制服の袖をチヨイチヨイと引っ張ると、耳打ちをしてくる。

「未来予測？」

「そうそう、何でも『過去から伝わる量子の確率を基に、未来予測する能力』らしいんだけど……私達の能力とは完全に畑違いだから理解しづらくって良く解らないのよ」

その話はいきなり桂二とやったばかりだ、と誠一は偶然に驚く。円の能力『ドラゴンフライ』は空間内の構成要素から現在の情報を読み取り、そこから未来像を予測演算し微分していく能力である。能力の対象が自分自身の身体や、空間内の波や飛散している脳波を読み取る能力とは一線を画しているので、普通の能力者と比べレア度が特に高い。

「でも、問題があるって聞いている。確か『神がサイコロふりすぎて、確定に負担が大きい』って」

「どういう事だ？」

「次の瞬間に起こる確率が無限大に近いからよ」

「ちよつ、彩さん何で怒ってるの!？」

突然彩が会話に、形の良い柳眉を逆立てて入ってくる。

何故怒られるか解らない誠一は、目を白黒させて慌てる。

それに、「近すぎ」と一言吐き捨てる話を続ける。

「私も読心系未来像予測の能力を持ってるから解るわ。世界って馬鹿みたいに曖昧で『偶然』の産物なのよ。未来は不確定にして曖昧、私達は無限大にまで広がる確率を一つつつ手繰り寄せているだけ」

「彩ちゃん、何言ってるか解らないよ」

「解りやすく言えば、例えば机の上に水滴があるでしょ？」

見れば机の上には水滴がある。

彩はそれを指差していた。

「さて問題です。この水滴は次の瞬間にはどうなるでしょう？」

「それは……………」

答えようとして、誠一は口ごもる。

次の瞬間何が起こると言われても、解らないと言っしかないのだ。
選択肢が多過ぎて。

「答えられないでしょう。そう言う事なのよ、私達が見えてる世界は。次の瞬間に水滴はどうなるか？ 右に動くかも知れない、左に動くかも知れない。もしかして上や下かも？ それとも潰れて広がったり、蒸発して小さくなるかも？ はたまた」

彩は持っていた紙のナプキンで、水滴をさつと拭き取った。

「私に拭き取られるかも知れないし、放って置かれるかも？ そう考えるとほら、事象を細分化すると無限大に近くなる」

「それって、大変じゃない？」

「大変よ？ 私達の目に映る世界は、無限大近くまで可能性を提示しそれを確率の高いモノに微分するんだから。私は対人だし未来予測はあまりしないから負担は少ないけど、未来予測が主の能力者は負担は予測出来ない」

だから負担を軽減するために何時も寝ているのかもねと、彩はそこで締める。

誠一は何時もちやらんぼらんでだらし無い円に、そんな理由があったのかと今までの彼女にだらし無いと思っていたので心で謝罪した。それが解ったのか、桂二と漫才の様に話していた円が慌てて誠一の方をみた。

「ちょっと誠一君、そんな目をしないで、べつ別にそうじゃなくて！？」

「誠一、多分この人のだらし無いのは素だ。負担があるのは確かだろうが、一日中寝てるのと身嗜みは関係ない」

慌てる円と断言する桂二。

言われて見れば、ボサボサの髪や誰かのヨレヨレのワイシャツにジーンズと言う姿だが、肌の艶や血色や目の色はとても健康的だった。

「要するに性格だ」

呆れた桂二の声に、円は恥ずかしそうに身を縮める。

なんか色々と台なしだった。

誰が為の試練

高見原の西には深い森がある。

高見原市内とは違い、森林保護した都市開発はされておらず極普通の森を保っている。

その森の入口付近にその建物はあった。

高見原郊外 公務員保養所

「なあ桂二」

「なんだ誠一？」

保養所の一室で誠一は、以前学園都市で作って貰った龍鱗を模した手甲と脚甲を装備する。

「本気でやるのか？」

「当然だ。あれだけ話し合って今更だろ？」

渋い顔で黙り込む誠一に、対する桂二も服を着ていた。

いつものチャライ格好ではなく淡い灰色を基調とした戦闘服。

彼の手には点検中の黒い鉄の塊、拳銃がありいつもの彼の雰囲気を一変させている。

「誠一、頼むぞ。本気でやってくれよ？」

「本気なんだな？」

「ああ、隊長は『試金石』と言われた。これからやるのは、これが

らの『人』の未来の為」

二人とも着替え終わり、部屋を出る直前。
桂二の返答に誠一は驚き笑い出す。

「何だよ」

「チャラチャラとして何だかんだ言っても、お前も男だなんて思ったら笑いが込み上げてきた」

「悪いいかよ」

「いいや、悪くない。誰しも譲れないモノだつてある」

人のいない閑散とした保養所、実はこの保養所は一度壊して新しく建て直す為に職員がいないのだ。

いるのは桂二と同じ、戦闘服を着た20数人ばかりの集団。

その集団の一部が集まる玄関ホールに二人は向かい合わせに立つ。

「俺には俺の譲れないモノがある、身を焦がす程の知りたい事がある。だから俺は、今の戦いに身を投じた。お前にとつての戦いの始まりが今なのかも知れないな」

「かもな」

玄関ホールの端にあるソファーに、集団に囲まれる様に座っていた金髪の青年が、質の悪そうな笑顔で踏ん返り返つて座っていた。

拘束しているわけではなく、スーツ姿にも拘わらず着崩れするのにも気にせずリラックスして座っている。

いわゆる彼は見学であり、ジャッジでもあった。

「だから、来い！！ 共に戦うために、この水龍が試練になろう！！」

誠一が龍の頭を模したマスクを被る、それが合図だったのか同時に金髪の青年が右手をあげ指を鳴らすと……………二人の戦いが始まった。

発端は三日前にやった円の未来予測だった。

「やめた方が良いわ。あんた達、死ぬわよ？」

ドタバタとコントの様な話から一転、円の能力『ドラゴンフライ』で見た誠一達の未来は果てしなく暗かった。

「死ぬって、全滅ですか？」

「ううん、そう言う訳じゃないけど。どんな行動をしても、最低一人死ぬわ」

円の能力はまさに『条件によって違う世界』が、トンボの複眼の様に目に映るのだ。

「例えばよ？ あなた達がある行動を起こすと、相手は分断を狙い孤立した彩ちゃんが倒れる。またある状況で戦うと、多人数の能力者による飽和攻撃で天子が倒れる……………別の未来では誠一君が、はたまた全滅か……………どれもこれも誰か死ぬ」

そんな未来は嫌でしょう？ と円は締める。
誠一達は今までの戦って切り抜けた経験から、これから何とかな
ると思っていた矢先だから少し衝撃が大きい。

「皆が生き残る確率はないの？」

「無い事はないけど？ でもそれって、とんでもなく低い確率の事を何度も繰り返して起こる事か、当たり障りのない活動をするかの二択よ？ それって貴方達の本意では無いんじゃない？」

それは活動をするしないかの話だ。

そんな話をする段階は既に過ぎている誠一達は、戦うと決めている以上後者の選択は受け入れなかった。

しかし、前者の話も受け入れる事は出来ない。

戦いは犠牲なくして進めない、とは頭では解っていても犠牲がでると確定しているのでは話は別だ。

「何とかなんないのかなあ？ 例えば私がその飽和攻撃？ を捌ききれる様に修業するとか？」

「ウーン、それも視野に入れて視て見たんだけど、貴方達がそれに対応した行動をとると相手もそれに応じて素早く対応を変化させるのよ」

「打つ手がないよ」

それは相手側に優秀な指揮官がいる事を示し、そしてそれを実行できる統率のとれた練度の高い部隊が多く存在している事だった。

「相手は一筋縄じゃないかわいよ？ 貴方達が頑張った位で何とかなったら私達の『組織』はとくに潰してるわ」

「円さん達はどやってるんですか？」

「情報収集を主に嫌がらせ見たいな活動」

「それって効果あります？」

「折を見て大攻勢をかけようと思っていたんだけど、八年も経っちゃうとメンバーのほとんどが今の生活があるから参加出来なくなっちゃってねー。今までの日常を壊し、人権を踏みにじってきた奴ら

に復讐するのに、命懸けて今の生活を壊してまで戦えって言えないでしょ？　今じゃ戦えるのって片手で数えるくらいよ」

確かにと誠一達、特に天子は納得する。

桃山に対して復讐する気持ちや、反抗する気持ちは確かにあるのだろう。

しかし八年も経ちそれぞれの生活を持った彼らの心は、少し復讐心が薄れ守るべき何かが出来たのかもしれない。

総てを奪った者達に対して、今あるモノを捨てて戦えなんて言えないし思えない。

何とも微妙な空気で静まった中、誠一が口を開く。

「一つ聞きますけど、何でそんな結果が出るか理由が解りますか？」

「理由？　……そうね、恐らくは相対的な確率を出す前に出た計算上、貴方達の条件数の分母に対して、相手の条件数の分子が大きく変化すると、ファクターが高いのが原因だと思う」
「なるほど」

それから暫くはいつの間にか彩と円の二人だけしか通用しない様な、専門的な言葉が飛び交う。

周りの人間は置いて行かれてしまっている。

それに気付いた円は、ゴメンゴメンと謝罪しながら説明を始める。

「解りやすく言えばね？　貴方達のバランスの悪さが原因で、相手側に天秤が傾いてるって事」

「そうですか？」

「個人で戦うなら良いけど、相手は巨大な組織よ？　力技だけじゃなく様々な手を使ってくる。戦うだけじゃなく、何か罠を使われたら？　複数の別系統の能力者に襲われたら？　搦め手や策謀を見抜ける？　そう言う事よ、オフェンスの私達よりディフェンスの相手

の方が取れる手が多いのが問題なの、貴方達の経験が少ないのも発端の一つだと思っけど……………」

誠一は言葉を無くす。

確かに戦い、殊更に個人としての戦いには自信がある。

しかし円が言う戦いには、少し苦手な所があるのは否めない。

誠一と天子はどちらかと言えば前衛タイプ、武力にモノを言わせる奴らを蹴散らすのが得意。

誠一が彩に視線で尋ねれば、余り自信がないとばかりに首を振る。

彩自身としては能力を使うので短期決戦や瞬間的な戦いとしては自信があるが、長期的な戦いや罠などの戦いは能力は関係ないので苦手としていた。

このメンバーでは無理かと誠一が思っていた、その時だった。

「オイオイオイ、誰か忘れちゃいないか？」

「桂二？」

自信満々に腕組みして笑う桂二。

その姿に円はとある人を思い出し、顔を若干青くする。

「俺がいるだろう？」

「だけど、お前」

「能力者じゃないからってんだろ？ 大丈夫だ、お前が前に立つんだから」

「そう言う問題じゃあない。今から戦いが激しくなる、お前を守り抜くのは無理だ！！」

「自信が無いのか誠一？」

「ああ、無いね」

「はっ気弱な事だ」

売り言葉に買い言葉だが、誠一は真剣な目で桂二を見る。

誠一としては円の言葉を聞いて、更に激しくなりそうな戦いに憂慮し桂二を戦力から除外していた。

しかし桂二はあるプライドから、退くわけにはいかなかった。

だから桂二は、

「…………… だったら誠一、一つ約束しろ。もし、俺がお前を納得させる事が出来るなら、ちゃんと仲間に入れて俺を連れていけ」

「…………… 桂二、お前っ!!」

立ち上がり桂二は、指を二本立てた剣指を誠一に突き付ける。

その意味に気付いたのは彩と天子。

「『剣』を突き付けた!? 桂二、貴方!!」

「ちよつと桂二くん、それは!!」

「第三大隊情報部中隊長 七瀬 桂二がお前に戦いを挑む!! 応えろ、水龍!!」

それが二人の戦いの始まりだった。

秘術

数年前。

命を助けられた桂二は、自分の情報網を使い自分を助けた人間を偶然見つけ出し、拠点突き止め乗り込むと言う暴挙に出たことがある。

そう暴挙だ。

いくら助けられたとは言っても、見逃されたのかもしれないのに危険性があるかもしれないのに近付くのは、暴挙と言っても過言ではない。

「しかし君は、それをあえて知っていて近付いた。何故だい？ 七瀬桂二君」

拠点の一つにある大接間。

桂二はそこで三人の男に組み敷きられ、地べたにはいつくばってた。目の前には顔は笑顔なのに、目の奥は全然笑っていない金髪碧眼の青年がソファーに座っていた。

「俺の名前……」

「知っているよ？ 君は有名だからね、知りたがりの子供でね？ 情報屋を気取るには君は少々派手だ、そう言う類は地味でいくべきだ……ん？」

そこで青年は、桂二がプルプルと震えている事に気が付いた。恐ろしさでとうとう泣き出したか？ これだけ怖い思いをすればこちらには関わらないだろう、と青年が考えた次の瞬間。

「師匠と呼ばせてください!!」
「はぁ？」

返答は斜め上から来た。

現在 高見原郊外

二人の戦いは牽制をしながらユツクリと始まった。

相手の手札が余り解らない上に、普通の人間相手なので水龍が嫌った為だった。

それが気に入らなかったのか、はたまた水龍を本気にさせるつもりか桂二は、ここに至るまでの話を簡単にして急速にギアを上げる。

「つてのが、俺がこの世界に入った始まりだつ!!」
「つつ!!」

ジャツと頬に抜ける音と共に、脚甲を着けた桂二の右足が通り過ぎる。

躲した後には死なない程度の一撃を、水龍は入れようとするがそれは成らない。

軸足である筈の左足が、捻りを加えながら下から跳んで来る。

「クツ!!」

さながら逆踵落としの様な蹴りが、水龍の顎を狙うがギリギリで避

ける。

しかし、体制が崩れてしまった。

「隙あり!!」

「うおっ!!」

桂二はキリキリと回転スピードを落とさず、片手で地面に手をつけ回転軸を変え、縦軸を横軸に変えながら更に捻りを加えた超低空ドロップキックを水龍の足にくわえる。

いくら人間よりも強いとは言え、能力と励起法を抑えている水龍にはこれは堪えたらしく、足に痛みを覚えながら後に押された。見れば桂二は素早く起き上がって、水龍の方を見ていた。

「どうだ俺の体術、驚いたか？」

「……………ああ、驚いたよ。しかし、いつの間になって奴だ」

「ふふん。そう簡単に種は明かせられないね……………それより、来いよ水龍!! お前の力はこんなもんじゃないだろう!? 本気で来

いやあ!!」

「つくくつ」

何時もの桂二を知る水龍としては、余りにも熱くぶつかってくる。

水龍は、それがとても可笑しくて嬉しかった。

調息に始まり、気脈を回し、身体を感じ、深く深く意識を繊細に細胞の単位分子単位へと感じ取り操作する。

「今までは様子見だよ……………本気でいくぞ」

行使できうる最大レベルまで励起法の深度を下げた水龍は、爆撃の様に左足で踏み切り右足は床を陥没させる程の踏み込み、そのエネルギーを殺す事なく右の掌打『打龍』を打つ。

普通の人間ならば吹き飛ぶ処か、胴体にに打てば貫通する程の威力。励起法による爆発的なスピードも手伝って、桂二の命を紙の様に貫くだろう。

だがしかし、桂二は動かない。

いや動けないと言っても良いかもしれない。

しかし、水龍も一度打ち出した打龍は戻せない。

水龍の掌が桂二に届く瞬間だった。

「っ！？」

水龍の目の端に映り込む影。

金髪 of 青年の周りに立っていた人影の一人が走り込み、桂二の肩を蹴り飛ばし水龍の打ち込みの範囲外へと吹き飛ばす。

「んなっ！？」

気付けば水龍は囲まれていた、金髪 of 青年を囲んでいた人影が全員、水龍へと対していた。

次の瞬間、全員が一系乱れぬ動きで各々のナイフや剣・拳・錫杖等で攻撃してきた。

「何だっこれは！？ 痛っ」

隙のない連続的な攻撃、剣を躲し拳を受け止めたと同時に脇腹に錫杖が突き刺さり、意識が反らされた瞬間に水龍の顔にハイキックが叩き込まれる。

励起法のお陰でほとんどダメージにはならないが、水龍には不可解な問題がある。

「桂二、これはタイムンじゃないのか？」

そうこれは決闘、一対一の戦いの筈だった。
だけど水龍は桂二がこのような手を使うとは、今までの言動を聞けば思えなかった。

そしてその回答は肯定。

「そうだぞ？」

「えっ？」

水龍は驚き固まる。

肯定の声は人影に手を借りて立ち上がっている桂二ではなく、水龍の後に立ち拳を握る人影から『桂二の声』であつたからだ。

「フッフッフ、これが俺の与えられた力」

「数ある儀式法呪の中で複合儀式に分類される」

「己の姿をした『式』を打ち」

「術者の分身を作り出す陰陽士の秘伝儀式だ」

周りの人影全員から、桂二の声が聞こえる。

人影の一人が戦闘服の一部のヘルメットに手をかけると、現れるのは桂二の顔。

「隊長直々に教えてくれたこの術、そうそう破れると思つなー！」

戦いは続く、始まりとは違った様相を見せながら。

師達の語らい

「があっ」

今の桂二よりまだ少し若々しい声が、サイファ学園都市にある『要人警護・警備専門コース』の実技区画の空間に薄まる様に消える。数キロある戦闘服の装備が、重力に引かれるがまま桂二は吐瀉しながら倒れた。

「いい加減理解したか？ 人はただ人のままでは能力者には勝てない、自明の理だ」

滝のような汗をかき自らの吐瀉物の上に倒れ伏す桂二の前には、テイスプーン片手に困った顔で佇む金髪碧眼の青年がいる。

ゼエゼエと整わない息、酸っぱい吐瀉物の臭いの中で桂二は自分の無力さを感じ取っていた。

半年前に助けて貰い、助けてくれた相手の強さと合理性と『情報収集能力の高さ』に弟子入りを決めた桂二だったが、にべもなく断られた。

曰く、『歳が若い』『力がない』等など。

最後に『ここにはもう近付くな』と言われて放逐される。

しかし桂二は食らい付いた、何度も何度も。

それに根負けしたのか、相手が折れた。

それから激動の一年だった、特別入隊と言う形で地獄にいた方がましの様な訓練に組み込まれたり、情報に関する勉強を詰め込まれたり。

そしてこの場所で倒れ伏していた。

自分の実力と、能力者との実力差を知るために模擬戦闘を行ったの

だ。

結果、惨敗なんて言葉なんて生温い程の負けっぷり。

何故ならば桂二は自動小銃や拳銃・ナイフ・爆薬等の完全装備で、相手は桂二を馬鹿にしたかの様な、普段着にティースプーン。

それで負けたのだ。

銃弾をスプーンで軌道を尽く反らされ、罌を張れば無傷で通過、拳げ句ナイフは肌を通らず傷一つかずに小さなスプーンに叩き切られると言う常識外の状況で、三時間近く遊ばれたのだ。

惨敗どころか、勝負にも戦いにもならない。

「とまあ、この様に上位能力者は軍隊の装備を身につけていても勝てない相手だ。やろうと思えば一国を一人で落とせる………理解したかな？ 桂二。理解してもらえた所で、もう一度一年前の質問をしよう。すべて忘れ、日常に戻る気はあるか？」

時間をかけた説得。

それが一年間桂二を鍛え上げた青年、第三大隊の長『三剣 風文』の考えだった。

確かに今のまま能力者が多数いる戦場に出れば、確実に死んでしまふと桂二は考えた。

しかし、桂二にはこの言葉には二つの意味があると、酸素が少なくボンヤリと霞がかる脳で考える。

一つは本気で心配して、今ならばまだ引き返せると言う意味。

一年間同じ隊の仲間と訓練した先輩方から聞いた風文隊長の話を聞く限り、有能かつとても性格が悪く敵に容赦なく暴虐の限りを尽くす人間だ。

しかしその反面、仲間や弱い者にはとても優しく、口では悪態はついているがとても気を使う人らしい。

桂二は情報に対してはとても有能だが、若く弱い普通の人間だった。だからこそ彼は、桂二を鍛え上げ強くした上で彼を叩きのめした。

ある種の絶望感と限界を教えるために。

それが一つの意味、桂二自身に諦めさせる事に繋がる。

もう一つは桂二の直感、一年の積み重ねでなんとなく解る。

だからこそ息切れで喋れない口を無理矢理動かし、桂二は意志を伝える。

「ハツハハツ、出来まっせんっつ。おっ俺にはやりたい事がっ、あります」

桂二は風文の言葉を拒絶し、拒絶された本人は満足げに頷いた。

「良い答えだ桂二。私を満足させる言葉を言ったのは人間では君が初めてだ。戦いの様な人生を生きる上で、人間・能力者問わず必要なのはやり遂げる意志。私は今の君の言葉にそれを感じた。合格だ。君の本気の意志に対して、私は能力者としてではなく『呪禁導士』として君に力を与えよう!!」

現在

「クツクツクツ」

ソファアに深く座った風文が、くぐもった笑い声を上げる。

何時もならば端正ながらもとても人好きする優しい笑顔を浮かべているのだが、今の彼は百人いれば百人とも『悪人だ』と言うほどの悪い顔をしていた。

「楽しそうね？」

「ああ、楽しいさ。まだ未熟な宝石の原石でもないただの路傍の石が、磨いたら輝き始めたんだ。楽しくて堪らないね」

「あんたの楽しそうな顔は相変わらず悪どいわ。持つてる能力を考慮したら、そこら辺の悪党の方が可愛いわよ」

「失敬な」

桂二の分身達がいた風文の周りよりやや後、何も無い空間が揺れる様に歪めると濃紺の色が浮かび上がる。

小さな人影、髪をポニーテールにまとめた濃紺の作務衣姿。

「帰ってたのか？ 思惟」

「あんたの依頼通り、中南米にあった二つの人身売買組織を潰して来たわ。まあ、鈍った感覚を取り戻すにしたら簡単過ぎたけど？

……むしろ、帰ってきたらビックリしたわよ。弟子があんたの所の隊員と戦ってるから」

白いノツペリとした仮面から聞こえる声が、色々な感情を含めて非難する。

それは当然で、彼女が育て上げた誠一が高見原を少し出る前には確かに戦いに巻き込まれた雰囲気ではあったが、急いで依頼を終わらせて帰ってみれば裏世界の象徴みたいな風文の下で戦っているのだから。

思惟はとても面白くない。

不機嫌さを隠さない彼女に、風文から返った答えは素直な否定だった。

「俺の意志じゃあない」

「違うつての？」

「ああ。あれはうちの桂二が友達について行く為に、自分の持つ力

を見せて認めさせる戦いさ」

「ふうん。男の子のプライドか、可愛いわね」

そうこの戦いは桂二が友達の為について行く事を認めさせる戦いであるが、彼自身を友達に認めさせる為の戦いでもある。

「まあ話を聞いていたら『確かに自分は守られる脆弱な人間です。

しかし、俺は一介の情報屋で第一線で戦っている戦闘者としてのプライドもあります』って言われてな。普段ならば許可しないんだが、許可してしまったよ」

「ふふっ」

「何がおかしい？」

「学生時代の、あんたと葵を思い出したのよ。あんたも『戦う者としてお前を越える』とか言っちゃって、よく葵と戦ってたじゃない？ あの子はあんたにソックリよ」

「青い時代の若気のいたりだっ！！ まったく……………」

珍しくやり込めた事に思惟は仮面の下で笑い、風文は苦い顔。

ふと戦いに目を移せば、二人の戦いは拮抗していた。

誠一こと水龍の攻撃を尽く連携で崩し、避けては攻撃を繰り返していく桂二と桂二の式達。

見た感じではあるが、実のところ攻めあぐねてるのは攻撃を繰り返してる桂二達だった。

攻撃は入っているがナイフを投げれば刺さらない、局所に蹴りを入れてもダンプカーのタイヤを蹴ったかの様にびくともしない、槍を突き入れたら逆に槍が折れる始末。

数年前に風文相手に戦った程の絶望感はないが、それでもダメージ所か傷一つ与えられない。

そんな状況だった。

「…………まあ、桂二の根気が先に尽きるわな。お前の所の弟子はまだ完全に本気じゃあないからなあ」

「あら、解ってるじゃない？」

「お前とも付き合い長いからな！。お前の弟子は防御に対して何のアクションを起こしていない、そろそろかな？」

風文がそう言った時だった、戦いの流れが変わる。

呪禁導士（前書き）

再テスト中なので少々遅れてお送りしています

呪禁導士

バチンと弾かれるような音と共に、桂二の分身たる式神の身体や武器が弾かれる。

それは個別かつ断続的に怒った訳ではなく、タイミングを合わせた四方からの同時攻撃に対して起こったのは、水龍の小さなただの一动不动に因るものだった。

「なっ何だ!？」

訓練の中であらゆるどんな状況でも冷静にしていると習い実践してきた桂二と言えども、今の理解できない光景は一瞬動揺した。

その一瞬を見逃さず攻撃が来ると思い式神の体勢を急ぎ整えた桂二ではあったが、水龍は掛かつては来ない。

桂二が何かの誘いかと訝しげに伺えば、水龍は式神達に包囲されている中心でユツクリと腰を落として右半身に構える。

「正直、恐れいったし感心した。こんな方法があつた事も知らなかった。俺の自分の無知さ加減を思い知ったよ。だからお返しに俺もお前に最近習得した技を掛け値なしに見せよう」

「最近習得した……!？」

「ああ、護天八極『旋龍』。防御と攻撃を同時に行う『秘技』クラスの技だ、死ぬなよ桂二?」

それを聞いて桂二は慌てる。

第三隊の特色としては、敵に合わせ変幻自在に攻撃や策を変え相手を倒すと言うものがある。

状況に合わせ戦術・戦略・策謀を変えていく。

その根底にあるのは桂二が所属する、第三大隊情報部だ。

情報収集した状況に対して行うのだから、その重大さは押して図って欲しい。

だからこそ桂二は焦った。

同じ第三大隊の桂二だからこそ、彼の戦いに対するコンセプトも変わらない。

この戦いが決まった直後から、水龍の戦い方や技や行動を調べ上げこの戦いに望んだ。

だが、ここに来て不確定要素が増えた事により、対策が脆くも崩れ去る。

こりや後で隊長から『リスクマネジメントが甘いからだ、常に最悪を意識しろ』と説教がくるなどひとりごちながら、桂二は式神の一体を威力偵察とばかりに突っ込ませる。

持たせたナイフを、単純に突き込ませる。

「ふっ!!」

それに対して見るのは四方からの目。

こう言う時には便利だと、桂二は式神から送られてくる情報を冷静に観察する。

「ガッ!!」

ナイフを突いた桂二の式神は、予想通り吹き飛ぶ。

直前に打点をずらし派手に吹き飛んだが、式神の身体に掛かった負荷の洒落にならない重さに桂二は顔を引き攣らせる。

式神のナイフが当たる直前、水龍の右手が螺旋を描き掌打を撃ち込む単純な動き。

単純な動作にも驚いたが、問題は普通の人間ならば即死レベルの威力が込められている事。

「ちょっと洒落にならないっ!? お前、俺殺す気か!」

「ハッハッハッ、言つたろうが手加減なんかしないぞ? それに式神だったか? お前の分身は本体の身体お前より身体能力が数十倍高い上に、何か能力に似た物理的防御を使ってるだろう? だってら手加減無用だろうが!」

「グッ」

水龍が式神達が行う波状攻撃を龍旋で弾きながら言うと、桂二は内心でバレーテラと呟いた。

そう確かに式神達は、作った桂二の数十倍のパワーと耐久性があり、尚且つ師より直々に教えられた『呪禁』の力で完璧ではないが『物理的ベクトル』を『禁じ』ている。

解りやすく言うと物理攻撃を通らなくして、身体能力を引き上げた自分の分身を使い数の暴力を振るつた訳だ。

しかしその目論見は崩れる。

桂二の作戦は水龍の『油断』と『躊躇』ちゅうしゆを前提として、畳み掛けるつもりだったからだ。

失敗の原因は水龍の能力『水系の理』による耐久性とパワーのブーストの恐ろしいまでの揺れ幅と、戦闘中に段々と冷静にシフトする彼を桂二が見抜けなかった事による。

作戦続行をさつさと切り上げると、桂二は舌打ちをしながら「この身体能力チートだよ」と呟きながら式神を下がらせる。

「ん? どうした?」

「なに、俺の得意なもう一つの戦いを見せようと思ってな?」

「もう一つ?」

「ん? それはな……」

桂二が二体の式神に両脇を抱えられ、後に大きく跳ぶ。

と同時に残っていた三体の式神が、腰にあるポーチから灰色の何か

を水龍との間の空間に放り投げた。

それは何時か見た銀色のアルミ缶、しかも三つ。

「つつつ桂二いいいいい！！！！」

「撤退戦だ、ついて来れるか？」

強烈な閃光と爆音を連続的に撒き散らしながら、ホールが白光に染め上がる。

そんな戦いが繰り広げられている最中、次の展開が読めていた風文は、思惟を伴ってすでに屋外に出ていた。

森を背にするように二人が振り向けばとんでもない爆音が窓ガラスを粉々に砕き、レーザービームの様に光の線が闇を切り裂いていた。

「…………『シャイニングフラッド』か。能力者にとっては殺傷力はない一番有効な手だけど…………流石に連発はキツイわよ？ 普通の人間なら心臓止まるし…………大丈夫かしらね」

「彼なら大丈夫さ。話に聞いた彼の能力『水系の理』は、我々が思っている以上に強力な能力だ」

「うちのじゃなくて、あんたの所の子よ。儀式を授けたって言うても、普通の人間でしょうが」

思惟の心配は自分の教え子ではなく、儀式は使えてもあくまでも普通の人間である桂二だった。

しかし、それは杞憂だと風文はかぶりを振る。

「心配はいらん。能力者ではないが、第三大隊の中で訓練を受けた奴は早々には死なん。それに、あの術を使ってる奴は誰にも倒せない」

「それってどういう……」

思惟が疑問を口に出した瞬間、閃いた彼女の左手を風文が押さえていた。

風文が押さえた彼女の手には、銀色の和釘が三本握られていた。

「……………待て、うちの隊員の一人だ」

「紛らわしい。私に気配を消して近づくなって教育しときなさい？」

「気配を消して近付くのがうちの隊では当たり前でな？ 気付かない方が悪い風潮さ……………まっそれはともかく、この気配は征矢か。どうした？」

次の瞬間、森の緑の一部が陽炎の様に揺らぎ、森林迷彩のポンチヨを着た一人の男が滲み出る様に姿を現す。

その姿はヘルメットと顔隠すマスクのせいで目元しか見えないが、隠行を見破られ軽く命の危険に晒されたせいで動揺していた。

「落ち込むな征矢。相手は『インビンジブル』と呼ばれた、元世界最高峰の殺し屋だ。見破られて当たり前だ、精進するがいい。それより直接報告しに来るとはどうした？」

「情報部から市街の方で相手の一部が動き出したのを最後に連絡が通じません。ここら周辺一帯にジャミングがかけた様です」

「特殊回線もか？」

「ハイ、四つ共雑音で連絡取れません。強力な電磁波か、電磁波を操るなんらかの能力者の可能性がありますけどどうしますか？」

そこまで聞くと風文は少し考え込み、思惟の方を向く。

「どうする？」

「ここにいる隊員は？」

「こちらにも忙しいから二・三人ぐらいしか連れて来てないな」

「なら決まってるじゃない」

したり顔で頷く思惟は、風文の次の言葉を読んで懷から白いのっぺりとした仮面を取り出す。

「だな、守りに入るとマズイ。俺が単独でうって出る。思惟、後詰め頼むぞ？」

「解ったわ。でも、あの子達はどうするの？」

「折り込み済みだ。征矢はあいつらの戦いが終わった後、桂二の指揮下に入れ」

「どうなさいます？」

「奇襲した後に撤退、追ってきた奴を思惟が側面から襲え。その間に桂二に連絡をして置けコードゑだ」

横槍（前書き）

今回、話の都合上で短いです。

横槍

「らあ！！」

三人の内の一人に水龍の拳が迫る。

腕を小さく回したただけのなのに有り得ない弾かれ方をして、その流
れで突き手と踏み込む足が同じ右と言う特殊な中段突き。

それは何度も見ているから読めているが、込められている力が尋常
じゃない。

式神が壁を背にし喰らいそうな突きを、躲した時の光景を桂二は忘
れない。

コンクリートの壁に水龍の腕が肘まで刺さっていた。

しかも突き刺さった周りの壁にはヒビ一つないのを考えると、どれ
だけ集束された突きかがよく解る。

ボーリングの機械やパイルバンカーでもそうはいかない事実には、桂
二は水龍の本気を見た。

だから、

「『それ則ち歩む足を禁ず、急々如律令』！！」
「又ウツ！！」

桂二は人差し指と中指だけを立てた剣指を水龍に向けると、左の式
神が桂二と同じ声で何かを唱える。

すると水龍の動き、特に足の動きが目に見える程数瞬遅くなった。
呪禁道と言つものを皆様は知っているだろうか？

古くは平安時代からあった典薬寮（今で言う所の厚生労働省）の官
位の一つで、病氣の原因となる邪気を呪術により祓う医療的な職業
だった。

しかしそれは最初だけで、後にとある呪術事件により陰陽寮に吸収される。

元々、陰陽師も呪禁師も同じ道教の思想から生まれた呪術儀式、同じ系統の術だったが為に合併は簡単だと言われている。

しかしその性質は全く違い、陰陽師は占術・呪術・祭祀を得意とし呪禁師は掛かった術や邪気を払う事に特化している。

それを踏まえ桂二のやったことを説明すると、彼は水龍の足の歩みと言う『動き』を禁じ動きを封じたたのである。

それは呪禁道においての基本にして秘技たる『呪禁』。

本来ならば刀を禁じれば切れなく矢を禁じれば貫けなくなったり、生物で言えば鳥を禁じれば飛べなくなったりする儀式。

しかしそれは過去の技術で、近代儀式によりそれは『事象』を起こさせないと言うカウンター的なモノになっていた。

その簡易版と言うものを桂二が水龍の足にかけて、踏み込みを止める筈だったのだが……。

「嘘だろおっ！！ 普通有能力者であれば暫く足が動かない筈なのに、どれだけ神域結界強いんだよ前は！！」

「そんなん知るかああああ！！」

足が動きにくくなった所の式神三体による同時攻撃を、水龍は捌き総て弾き飛ばす。

領域内にあるエネルギーを減弱させる神域結界は、儀式による呪縛も例に漏れず効果を減弱させる。

しかし他の能力者に同じ儀式をかけて足止めをしてきた桂二としては、あまりの効かなさに激しく納得いかない。

「状態異常無効って何処のボスキャラだああああ！！」

昔のRPGゲームのボスキャラにしかない様なチート性能に、桂二

は叫ぶ。

勝つつもりで戦いを挑んだ相手がチート性能で、無理ゲーに近いと知ったらさもありなんだ。

だからこそ桂二は、内心では『撤退戦』に対する事前策を用意して、致命的な損害が出る前に切り替えた自分の判断に喝采をあげていた。直接戦闘で勝てる相手じゃないならば、搦め手を取るしかない。そう考えた、その時だった。

桂二の胸元から甲高い機械音が鳴り響く。

「待て水龍！！」

「何っ！？」

戦いを続行しようとする水龍を押し止めると、桂二が胸元から携帯を取り出し着信を知らせるライトの色を見て顔色を変える。

「ライトの色が赤、緊急連絡？」

「何があった？」

桂二がメールの着信を見ると舌打ちを打ち、いつもならば見せない怒りの形相となる。

「一時中断だ。うちの動向を掴んだ敵の部隊が近付いているらしい、コードδの指令が着た」

「コードδ？　なんだそれは」

「うちの部隊内の暗号だよ」

何処の軍隊でも良くある符丁で、隊の中で決められた通りの大まかな行動を行う為聞かれた場合、相手に知られない様にする為の暗号でもある。

暗号の内容も作戦毎に変えており、毎回覚えるのを苦勞する桂二だ

が、このコードは違う。

どんな作戦でも、唯一変わる事のない符丁だからだ。

「桂二？」

水龍の声に訝しげな音が混ざる。

桂二が笑っていたからだ。

それは、とてもとても楽しそうに。

「水龍、手伝え。罫に嵌める」

副話 公務員ハウンド

濃い緑の厚い布で出来た重い戦闘服で身を包んだ男は、二十代後半位の精悍さに満ち溢れた彫りの深い顔に影を滲ませながら溜め息を吐いた。

「どうしたの？」

狭い車内だからだろう、ユツクリと吐いて気付かれないようにした筈の溜め息に気付かれた男は、顔に似合わず顔を紅く染めた。

それを指摘した銀髪の女性は、男の姿か面白かったのかコロコロと鈴が鳴る様に笑う。

それを見てまた恥ずかしくなったのか、男ははにかみながら話し始める。

「いや、少し自分の戦いに疑問が浮かんでね。戦いに飢えて、戦えるだけでいいと思って人伝てに聞いたこの会社に入ったんだが」

「戦いに疑問……ですか？」

「まあ、それに近いかな？ どっちかと言われれば不満、だろうか？」

男こと風間陣内は今言った通りの不満があった。

彼は元々、江戸時代から続く『風間流蹴術』と言う色物格闘技に分類される武門を生業としてきた一族の当主だった。

そう「だった」なのだ。

数年前、前当主だった父が亡くなって当主になったのは良いが、あまりの練習の奇抜さとハードさと会得しても軽業師にしか見えない色物さで門下生がゼロで生計が立てられなくなり潰れたのだ。

しかしながら、陣内本人としては子供の頃から習い身につけた技で

あり、代々一族が伝えたそれを誇らしく考えている。
だからこそ彼は身につけた自分が何処まで出来るかを試すための場所、戦える場所を求めた。

「いや入った当初は良かったんだけどね？ 今の仕事してたらさ、いくら欲求に沿って金払いが良いって言っても、ちゃんと考えて入るべきだったと後悔してるよ」

窓に遮光シートを窓に張った薄暗い車内で、自嘲する笑いがエンジン音に紛れて消えた。

数年前、父親の葬儀が終わった後、父親の知り合いと名乗る男と出会う。

男は厚生労働省が運営する疫病予防課に所属する役人だった。

一介の武術家だった父親が、畑違いとも言える厚生労働省の人間と何故知り合いだったのか。

その理由は聞けば簡単に知れた。

男はとある疫病に対して防疫する為に、高名な『実戦』武術を使える人間を探して父親と出会ったらしい。

防疫とは、伝染性感染症の発生や流行を予防する事なので、最初聞いた時は何を言っているのか訳が解らなかった。

しかし話を、防疫する病の症状を聞いて納得する。

風間家の様な古い家に代々伝わる口伝で、応仁の乱を最後に流行った注意するべき古い病『鬼人病』と同じ症状だからだ。

名の通り『それは鬼の如く力を振るい。人には非ず、妖術を使うものになる病なりけり』と言う、明らかに能力者へと変貌する病だ。陣内はその時、それに続く『病続けば人の形崩れ、異形の獣となりて人を喰らう妖物へと堕ちん』と言う口伝の一部を思い出し身体が総毛立った覚えがある。

「まあ『鬼人』を取り押さえる事が出来るのは、俺らの様な能力者

で戦う事になるって聞いてからと給料の良さで二つ返事したんだが」「実際は違った訳ですか？」

「まあな。捕まえるのは症状の軽い能力者モドキの餓鬼ばかりで、強い暴走体は半年に一回位。書類仕事でデスクについてる時間の方が長いと来たもんだ」

厚生省の組織だと銘打っているが、実際は民間の『桃山財閥』が主体になっている為金払いはとても良い。

だがしかし、戦いを求めている陣内としては欲求不満もいいとこだ。

「俺も街で噂になっっている『桜坂の剣士』や、隊の中で戦いたい奴No.1に選ばれた『水上誠一』と戦いたいよ。お前もそう思うだろう？」

「私にはルーチエと言う名前があります。それと私は貴方みたいな戦闘狂ではありませんので解りません」

銀髪の彼女の名前はルーチエ、イタリアにある儀式魔道を使う一族で代々『魔女』をやっている能力者の一人。

そんな彼女が何故ヨーロッパではなく日本にいるかと言うと、実は『婿探し』だったりする。

彼女の家系は女系一族で、生まれて来る子供は例外なく女性。しかし子孫を残すためには男が必要な訳で…………。

「そんな酔狂な話をするよりジン？ 二人きりなんですから、もつと建設的な話をしましょう。例えば私達の未来の話とか…………」

両手を膝の上で握り締め、軽く上気した朱い顔でルーチエは陣内を見詰めながら言う。

事は三年前、当時18だった彼女を陣内が手を出したのが原因。解りやすく言えば………… 相手が地雷女なのを知らずに、やっちゃっ

た訳で自業自得な話である。

「あなたの言い分とすれば、結婚式を挙げるのはこの仕事が一段落すればって言いましたか……その段落はいつなのか教えて下さい」

一夜を共にした相手と結ばれるしきたりがある娘と、遊びとして相手した陣内。

明らかに不利なのは陣内で、妙な迫力を持つ彼女には勝てないようだ。

やや追い詰められぎみの彼は、助けを呼ぶつもりで周りを見るが同じ戦闘服を着た同乗者は軒並み目を逸らす。

どの世界でも男女の話は厄介らしく、周りの人間は聞き耳だけを立てた傍観者に徹するつもりである。

さてどうやって話を変えるかと陣内が考えてるその時、アスファルトがタイヤを削る音と同時に車内の陣内達に激しい慣性がかかる。

「どうした！！ 何があった！！」

「奇襲です！！ 進行方向につグアアッ！！」

衝撃に近い急ブレーキに何があったと聞けば、車内スピーカーから焦った声と叫び声が響く。

連続した発砲音と続く激しい爆発音、同行していた自動車に何かあったと判断した陣内達は後部ドアから転がる様に車外へと飛び出た。

「つつ！！」

飛び出た陣内達は息を飲む。

煌々と燃える黒塗りの自動車、その光に照らされる暗闇の林道。そして燃える自動車を背に立つ人影が、彼等を見ていた。

副話 天狗と公務員

吹き上がる炎、逆光の中で立つ人影は異様の一言につけた。
と言っかなんだあれば、と陣内は心の中で呟いた。

さもありなん。

人影の格好が背広に紅い陣羽織、顔には上半分だけの赤い天狗面と
言うクレイジーさだ。

炎の光に艶めく反り立つ天狗の鼻に脱力感を感じながらも、あれは
襲撃者だと言い聞かせ陣内は意志を奮い起こす。

ふと気付けば光に煌々と照らされた同じ戦闘服を着た人影が、天狗
面を中心に放射状に取り囲んでいた。

「貴様、何者だ!？」

囲んでいる面々は、もう一台の黒塗りのライトバンから飛び出たシ
ェパード隊の人間達。

その中心に立ち声をかけたのは、くせつ毛の赤毛に厳つい顔をした
西欧人。

陣内の良く知るシェパード隊の隊長、ウィリアム・リヒターだった。
見た目は怖面の軍人でいつも貴族然としていて、いけ好かない固太
りのオッサンだが指揮に対しては定評のある奴。

なのだが、陣内は何故と疑問を抱く。

相手に答える必要性が無いはずなのに、いくら奇襲を受けたからと
言ってもこちらの数が多い筈なのに。

何故、ウィリアムは天狗面の男を攻撃せずに語りかけたのだろう。

その答えは、意外にも陣内自身の身体が教えてくれた。

「なんつだ!？」

カタカタカタと自分自身の手が震えていた、気付けば周りの人間だけではなくウィリアムやルーチェも。

全員の身体が恐怖で震えていた。

感じれば目の前の天狗面から中心に展開されている神域結界が、この場の全員を包んでいた。

通常ならば識者で直径平均2メートル、導士であれば5メートル程。しかし今、目の前の天狗面の神域結界はおおよそで10メートル近く。

それが示す事はたった一つ。

「『法師』だ」

誰かが怯えた掠れ声をあげる。

法師。

それは能力者の中でも、異質の存在。

現存する古い口伝を集めて調べても、確認されたその能力者は3000年の間に100にも満たない。

そしてそれ程の稀少な能力者であり、恐怖の対象なのは理由がある。能力者の分類で以前、『三に法師、世界の深奥を知る者、人智を超えた奇跡を作り上げる。』と以前書いたのを覚えている方がいられるだろうか？（『識る者』を参照）

奇跡を作り上げる、その一文が全てを意味する。

実のところ能力者の能力には大別すると、三種類のシステムしかない。

『認識』『演算』『発現』の三種類だ。

一番身近な例として悪い例だが『水上誠一』をあげると、彼の能力

『水系の理』はまず自分の体内の水を『認識』する。

次に身体中の水をどのように操作するかを『演算』し、そしてそれを実行するべく『発現』する。

途中の工程でかなり複雑な理論が存在するが、簡単に言えばこの三工程で簡潔する。

実際には、この工程の割合が能力者を決定するのだ。

『認識』の工程に偏りがあれば識者の能力者となり、『発現』の工程に偏があれば導士の能力者となる。

そして『法師』は『演算』に偏る事により、神域結界内の制御を絶対的なものにする。

それはどう言う事かと言えば………

「先制攻撃!!」

今まで恐怖に染まっていた空気を吹き飛ばすが如く、怒声の様な号令が払拭する。

訓練の賜物かウィリアム率いるシェパード隊の隊員達は、条件反射の様にそれぞれの武器に手をかける。

「つつつ!!!」

その時、陣内は見た。

天狗面をしていない下半分にある唇が楽しそうに歪み、右手が剣指（人差し指と中指だけを立てる）を形作っていた事を。
その光景を見た瞬間、陣内は無意識に叫んでいた。

「全員跳べっー!!!」

天狗面の手が右から左に、振り抜かれる。

シェパード隊の何人かが遅れ動けなかったのを見ると、危なげもなく着地したウィリアムの横に駆け寄りながら陣内は自分自身を責めた。

「陣内!？」

「ウィル、すまんもう少し早く思い出せばっ!!」

「どう言う事……なっ!!」

「化け物め」

ウィリアムが陣内に問い質した次の瞬間、跳び遅れた人間の頭が

牡丹の花の様に首から落ちた。

法師能力者の恐ろしい所は、物理法則を完全に無視したその能力だ。同じ技を導士能力者が行えるかと言えば、実際は出来る。

だがしかし、過程がかなり違うのだ。

恐らく先程の技は三剣神道流の剣技、衝撃波で対象を叩き切る『風刃』の派生技『烈風』を手で行ったと思われる。

もし導士能力者が行うならばどの様にするかと考えれば、まず能力による力で空間内に指向性のエネルギーを発現させ衝撃波に変換して打ち出すと言う何とも面倒臭く、戦闘時には時間が掛かって使えない技になってしまう。

しかもあの技は本来は剣を使い、励起法を高深度で行い使う技だ。先程の簡単な手の振りだけで行って、出来る様な技ではない。

恐らく何等かしらの物理法則を神域結界内限定で書き換えて、引き裂く衝撃波を作り出したのだろう。

陣内は冷静に分析する、何しろあの技を見るのは『二回目』なのだから。

「ウィル、どうする?」

「考えれば撤退だが、一人相手に普通ならば撤退なんて有り得ない
……威力偵察どころの話じゃあない」
「……………一つ、提案がある」

そう言いながら陣内は一步前に出て、ウィリアムを隠す様に立つ。

「進むにしろ撤退するにしろ、俺が此処で奴の足止めをする」

「……………お前まさか、あれがそうか!？」

「ああ、十中八九間違いない」

ウィリアムは陣内の影で「そうか」と呟くと、意を決した様に生き残りの隊員に合図をあげる。

「我々は前に進む……………陣内、死ぬなよ？」

「簡単に死にやしないさ」

それを皮切りに二人は別れる。

陣内は天狗面へ、ウィリアムは目的地へと。

副話 武人な公務員

陣内の父親が死んだ死因は、病死や事故死などではない。

数年前のある日、陣内は父親に頼まれとある場所に呼び出された。

母は十年前に他界しており、たった一人の肉親である父とは大学に進学と共に疎遠になっていた。

男親と息子の関係なんてそんなものである。

話はそれだが大学卒業したばかりの息子に、父親が頼み事をしてきた。

その内容に陣内は驚いた、時代錯誤にも程がある命を賭けた『果たし合い』があるためらしい。

数十年に一度、風間流だけではなく他の流派も参加し、己の流派の威信を賭けて闘う闇の死合に出場すると言う事だった。

何の冗談かと聞き返すと、返ってきた答えは冗談でなく本気だと言う。

聞けばそれは公に出せない、人死にが当たり前の大会。

そんな危険な大会にたった一人の肉親が出るのを最初は止めたが、陣内は同じ武に携わる人として父親の気持ちを解ってしまい止められなかった。

間接的な死因はそれで、直接的な原因は対戦相手。

陣内の父親は最終的な結果は、当たり前方も良く（対戦相手との相性が良かった）大きな怪我もせずに決勝戦まで勝ち上がる好成績だった。

しかし、最後の相手が悪かった。

その相手の姿は……………。

「リヤアアアア!!」

気合い一閃、身体の溜め無しで励起法でブーストをかけた足首だけを使う風間流独自の跳躍法で、陣内は前へと跳ぶ。

「又ウツ!？」

恐らく天狗面の男には、陣内がノーモーションで跳躍して迫って来ている様に見えただろう。

励起法を使わなくても二メートル近くを詰める移動法で、天狗の鼻先に付くかと思った瞬間。

陣内は身体を振り、その反動を利用して振り伏せんとばかりに蹴る。

「ウツラアアアツツ!!」

風間流『燕』と呼ばれる蹴り技である。

風間流とは実戦武術において多用されない跳び技（着地や空中の無防備さと言う意味で武術と言うカテゴリーでは多用しにくい）、特に蹴り技を中心に使う奇抜な武術。

修練も特殊で、数十キロにも渡る走り込みから始まり、横跳びや片足跳びから宙返りなどのサーカスかと見間違える程の、アクロバティックな技の練習を中心に行う。

門下生が少ないのはハッキリ言って練習の見た目が武術ではなく、中国雑技団レベルだからだろう。

しかしその練習も陣内の、この一撃の為にある。

ノーモーションの跳び蹴りは、天狗の虚を完全についた。

その証拠に天狗が再び打とうとしていた『烈風』の指のまま、その腕は陣内の蹴りを防いでいた。

「っ!？ 風間流か!!」

「御明答!! まだ終わらんよ!!」

蹴った腕を支点に、陣内は身体を再び振り反動を上につける。

「燕三連！？」

「そりゃ先代の技だ！！」

更に跳びあがり天狗の直上からの蹴り抜き、それを避けられると落ちながら身体の回転軸を縦から横へとかえ竜巻の如くの二連の蹴りを放つ。

着地と同時に飛び込む様に膝蹴りを放ち、その勢いを殺さない回し蹴りを天狗に叩き込む。

「どうだ、『燕』からの『燕五連』！！」

普通の人間ならば二撃目の時点で威力が半減する技だが、励起法を使う能力者が使うととんでもない威力となる。

その証拠に最後の一撃を躲し切れず、交差させた腕でガードした天狗の身体が浮き上がり、道の横に暗く存在する雑木林に突っ込む。

「やったか！？」

「まだだ！！ 奴が俺の知っている奴と同じなら、ダメージにもなっていないはずだ！！ ウイル、此処は任せて早く行けっ！！」

雑木林に消えた方向を睨みつけたまま、陣内はウィリアムを促す。

切羽詰まった陣内の声に応えたウィリアムは、目線だけで仲間に合図を送ると駆け出していく。

闇に消えていくウィリアムと仲間達を視界の端に収めながら、陣内は雑木林の闇を睨みつける。

数年前、父親の最後の戦いの空気もこんな感じだったと、陣内は独りごちる。

父親の決勝戦の相手も顔を隠していた。

その時の相手はありきたりな修験者の格好をして、黒いカラスの被り物をしていた。

解りやすく言えば『カラス天狗』の扮装をしていたのだ。

あの時とは全然違うが、雰囲気や立ち姿が陣内の中でオーバーラップする。

何よりもあの楽しそうに笑う口元と、同じ流派の技『烈風』。

此処まで一致していたら、陣内はむしろ確信した。

暗い雑木林の闇から現れる天狗面。

思った通り服が所々汚れているが、目立ったダメージは皆無だった。

「どうだ三剣神道流？」

構えは崩さず天狗面から一時も目を離さないとばかりに、陣内は睨みつけながら問い掛ける。

「…………あの武道会では流派を言ったわけではないのだが」

「親父が死に際に教えてくれた。能力者が使う古流武術の祖となる神道流。中でも捕えきれない風の様な体捌きと、衝撃波を巧みに扱う武術は一つしかないってな！！」

「ふむ。確か風間流は今はない、天川神道流のから分家した一派だったな。知っていてもおかしくはないか」

独りで納得している天狗。

一見隙だらけだが、陣内は攻めあぐねていた。

相手に感づかれないシフトウェイトを行い、いつでも跳べる様にしていたが、微細な動きから気取られ天狗面も微細な動きで対応して牽制してきていた。

いわゆる、見えない戦い。

しかし、陣内は最初の『燕五連』で、相手との技量の差をビリビリ

と感じていた。

五連撃となるあの技は、最初の四連撃は限りなくフェイントに近く、当てるつもりではなく当たったとしても牽制にしかならないモノなので躲されたのは問題ではない。

問題は最後の一撃のインパクトの瞬間、左右の蹴りからの直線的な蹴りで普通ならばクリーンヒットする筈が防御されただけではなく、天狗は力を受け流す様に自分から後ろに跳んでいた。

自然にそれを行える相手の圧倒的な武力とプレッシャー、恐怖感しか浮かばない神域結界に冷や汗をかきながら陣内は、局面を打開できる突破口を探していた。

（あの口調だと、俺が相手の事を知っている様に相手も俺の事を知ってる。あまつさえ親父と死闘をした奴なら、こっちの手の内もバレだ……どうする、どうする、どうする！！）

その時だった。

天狗面が何かを見失ったかの様に、左右を見回す。

視線が陣内を向いていない所を見ると、どうやら『目の前の』陣内を見失った様。

「夫の至らぬ所をカバーするのが、この国においての良妻と聞きます。……余計でしたか？」

「ウイルと先行しなかったのか？」

「あの人は隊長でしょう命令に従うのが当然でしょうが、私と共に歩く人は貴方です。貴方が死地に行くなら私は共に」

「まったく……打つ手が無かったから正直助かった」

陣内の後にはいつの間にかルーチェが立っていた。

黒の戦闘服の上から森に溶け込む緑のポンチョを着込み、右手には身の丈程の杖を持ち泰然と佇んでいる。

それは装いは違うが、尖んがり帽子を被せれば西欧の魔女を彷彿とさせる。

「…………『幻霧の魔女』が日本に来ていたのは話には聞いていたが、此処で出会うとはね」

天狗の顔が陣内達を向いていた。

そう彼女は幻霧の魔女と呼ばれる能力者の一族。

その能力は光を操作し、相手の視神経を通じて偽の情報を相手の脳に叩き込むと言う力だ。

いわゆる幻覚や幻聴を見せる魔女。

今回は天狗に『陣内が見えない』と言う誤情報を見せているのだから、天狗は短時間の間で能力者と能力を見抜いていた。

陣内達を見る天狗の瞳が微妙にズレている所を見ると、まだ幻術がかつていて洞察力で場所を予想しているのだろうと陣内は判断する。となれば絶好の機会。

陣内はルーチェの居場所が声ではれない様に目配せすると、大きく跳んだ。

「二対一で卑怯とは言わないよな神道流!!」

「勿論だ風間流。少し遊んでやる、来い」

二人の影が交差する。

陣内はこれなら何とかなるか？ と考える。

ルーチェは相手の強力な神域結界に抗いながら能力を行使し続ける。天狗面の『遊んでやる』と言う言葉の違和感に気付かないまま。

ムジナ（前書き）

ようやくです！！

書いた迄はよかったのですが、携帯で書いていて間違えて消して凹んでました！！

サ行と電源ボタンが近すぎる！！

と言う訳で遅れましたすみマセンでした。

ムジナ

高見原の公務員保養所には歴史があるのか？　と言われればあるにはある。

古くは明治時代のある華族の持ち家で、その頃この場所は華族の別荘として使われ、森の中に隠された紳士達の隠れ家として機能していた。

その後、日本が軍国国家へと傾くにつれ軍の特殊部隊の拠点の一つへと移り変わり、戦争が始まり敗戦すると共に国の保養所へと変わる。

とまあそんな来歴のせい、この保養所には地下室がある。

入口を巧妙に隠した地下三階まである作りで、そこで何をやっていたか解りたくない程のどす黒い染みがある部屋が、保養所の地下に隠されていた。

その地下構造の真ん中を貫く通路、シェパード隊の隊員が警戒しながら一つ一つ見て回る姿がある。

「何か気持ちが悪い雰囲気だ……… 空気が悪いと言う方が正しいか？」

「仕方がないですよ、話に寄れば此処は大日本帝国の731部隊の日本拠点の一つですからね」

ウィリアムが雰囲気悪さに、眉間に皺を寄せながら呟くと隣の細身の中年男性がフレームレス眼鏡をなおしながら返答した。

「731部隊？　それは何の部隊だ、永井」

「隊長は知りませんか？　旧日本軍の関東防疫給水部、秘匿番号731。悪名高き石井部隊ですよ」

聞いた瞬間、その名は良く知っているとばかりにウィリアムの眉間の皺が深くなる。

関東防疫給水部とは、戦地においての兵士の感染症予防や衛生的な給水体制を確立するべく編成された部隊だ。表向きは。

どんなものでも表には裏があるように、731部隊にも裏の目的があった。

それは感染症の原因たる『細菌』を研究し、それを戦争に使用する生物兵器の開発する事だった。

「たしか当時の戦争相手の捕虜を使い、人体実験を繰り返したと聞いているが……」

「あながち間違っていない、その部隊です。しかし戦時中は、どの国もやっていた事です。今更蒸し返す事じゃありませんよ。今の任務は別なんですから」

アツサリと話を切る永井。

それを横目にウィリアムは、隣の副官を努めてくれる男の人間味の無さに深く溜め息を吐きながら周りを見る。

照明はあるものの、古い電球なので少々薄暗い。

ウィリアムはこのどこかのホラー映画の様な雰囲気の原因が、何となく解った気がした。

「ルミノールをふつたら通路全体が光りそうだ」

「止めて下さい、ただでさえ充滿している古い薬品の臭いで気持ち悪いんですから」

冗談が通じないなと肩を竦めながら顔を戻すと、ウィリアムの目の前には両開きの凹んだ鉄製の扉が現れる。

一階の破壊されたエントランスを辿り、最後の破壊の場所はこの扉

だった。

戦いの音がない、戦闘はもう終わったのかとウィリアムは慎重に扉を開く。

中は壮絶な破壊の跡で散乱していた。

薄暗い照明の中、立ち尽くす龍を模したマスクを被った男と、床に両膝を立てうずくまる戦闘服姿に顔を隠すヘルメットを被った人物がいた。

先日の新聞に載った決闘——パッションレッドVS水龍の事——の監視映像から、一人は恐らく水龍を名乗る水上誠一。

そして顔を隠してる人物こそが、ウィリアム達が標的とする人物。そう考えると、ウィリアムは無言で部下を集め一気に突入させる。

「そこまでだ！！　ようやくだ、尻尾を掴んだぞ『サードフォース』」

「

突入と同時にヘルメットの男が壁際に跳び、ウィリアム達全員が自分の武器を構え包囲する。

「鬼人病の感染者達や関係者達の下に現れては、証拠を消し去る貴様ら………その奴もそうだが、洗いざらい吐いてもらっ！」

ウィリアム達が所属するのは厚生労働省の中にある、疾病予防課感染症鬼人病感染対策課と言う部署だ。

鬼人病とは感染すると、三日間の潜伏期を経て脳の炎症を引き起こし、人を死に至らしめる感染症。

致死率は4%と微妙に高いが、問題は脳炎が軽く死ななかった場合、約9割の高確率で不完全ながら普通の人間が『能力者』へと変わるのだ。

そしてこれは初期症状で、これ以上進行すると鬼如く人の形を徐々に崩し、最終的には獣化する。

これはとある薬と被るが今はその話ではないので割愛させてもらう。
（同作品の『過去への扉』から数話、もしくは『カモメは遙か水平線を見る』を参照してください）

この病は日本に古くからある感染症で、一度暴走体になれば大量の死者がでるので危険度の高い病とされている。

100年程前は東北地方の山奥の山村。

地震の影響で地下に眠っていた感染原に汚染された水源と、生活用水として使っていた水源と繋がってしまい、瞬く間に病が広がり村が全滅する惨事となった。

それから流行はなく、撲滅したかの様に見られたが、時を経て高見原の地で鬼人病の流行が始まった。

しかも今回は感染原不明の上、広がった場所が人口100万人を超える政令都市。

暴走体の発現する割合は少ないが、100万をかけると未曾有の大惨事を引き起こす可能性が見える。

彼らはそんな事を起こさない為に動いているのだが、課の発足当時から感染者を消し去り感染している可能性がある人物を連れ去る謎の集団があった。

それが、

「今まで、お前らが連れ去った人達の行方と目的を洗いざらい吐いてもらうぞ！！」

イギリスにいた時にスカウトされ発足当時から居るウィリアムとしては、十数年近い見えない宿敵の証拠をようやく掴める為かテンションが上がっていた。

そのせいか彼は見落としていた、ヘルメットを被っていた男の肩が震えていた事に。

「つつつつくくくつつ」

壁際まで跳んだ男のアクションのなさにウィリアムは怪訝な表情を浮かべたその時、くぐもった笑い声が響きウィリアムの前で銃を構える永井が珍しく激昂した。

「何がおかしい!!」

「いや何、意外と早い到着だなと」

「当たり前だ、あんな入札があるか!!」

本来ならば公共機関等の建築を、工務店等に発注する場合『入札』と言うシステムをとっている。

これは公共機関が『発注』し、幾つかの会社が『入札』し『最低金額』を出した会社が受注出来る。

「担当者に最低金額を割った値段を事前に見せ、その差額を賄賂として此処の解体を請け負う……能力者戦闘の跡を消す常套手段……解らいでか!」

どうやら理路整然を好む永井にとって粹を壊す様な手口は思つ所があるらしく、いやにテンションが高い。

その姿に溜め息を吐くウィリアム、次の瞬間に嫌な予感が彼の脳裏に走る。

「……………意外と? ……………まさかっ!??」

何かに気付いた彼は、西部のガンマンの様にホルスターの銃を抜き撃った。

励起法で加速された身体の動きで抜かれた銃、それから飛び出る一発の銃弾がヘルメットの男の眉間へと吸い込まれる。

「隊長つ何を!？」

「違う、見てみる」

何が違うかとざわめく周囲の中、永井が見てみれば。

そこには、マグナム弾で眉間を撃ち抜かれたはずの男がいた。

「つつ!！」

冷静さを売りとする永井の顔が大きく引き攣る。

撃ち抜かれたはずの男は、銃弾を最初から撃たれていないとばかりに立っていた。

いやそれどころか眉間には弾痕はなく、ヘルメットが銃弾によって剥ぎ取られ、あらわになったその顔には何一つ無かった。

目や耳、鼻や口、毛穴すらも無いツルツルとした仮面の様な顔。

のっぺらぼうが居たら、まさしくこれだと言える風貌だった。

戦術儀式（前書き）

予定より四日程遅れました。

色々調べる事が多い割には使えなかった事があった今回、マトメ
きれているかどうか……正直不安な回です。

おかしな所があれば御指摘、御感想お待ちしております。

戦術儀式

「何だあれは」

「新しい鬼人病の感染者か？」

「暴走体！？ いや、能力者か！？ にしても神域結界が感じられない……………」

「全員落ち着け！！」

動揺する隊をウィリアムは一喝して落ち着かせると、彼自身は苦い顔をしていた。

何度も言うようだが、能力者が能力を使う前提条件には『神域結界』がある。

大なり小なりと差は色々あるが、これは絶対の前提条件。

『辰学院』の重金教授のレポートによれば、励起法から発生する力場を利用し、神域結界とは波動の性質を持ったエネルギーフィールドの一種。

一定範囲内の『存在』を、支配下におく能力者共通の力だ。

しかし、隊員達の前に立つのつぺら坊には神域結界の残滓すらなく、あるのは口もなく声が響くと言う異様な現象のみ。

隊員達は全員が能力者であるがため、神域結界を感じられない不可思議な事象に動揺が走る。

だがウィリアムにはそれが何かは解っていた。

「落ち着け！！ ただの儀式だ！！」

「しかし、性能の割に儀式特有の微弱な励起法の波動を感じられませんか！？」

「それは能力者が儀式を使った場合だ！！ 相手は……………多分ただの人だ」

ウィリアムは口ごもった。

儀式には色々な形態や種類がある。

見た目は世間一般で言う所の『魔法』に近いが、内容はどちらかと言えばPCに近い。

儀式と言う仮想領域内で、自然法則の一部を同時起動し術を発現するのが通説だ。

だから儀式は知っていれば、誰でも使える技術的な術。

しかし誰もが簡単に使えない、落とし穴がある。

原因は習得の難しさと、電源である。

短期発動型の儀式はともかく持続型儀式は習得の難しさは努力すれば何とかなる（事実、桂二は学業どころか実生活が疎かになるほど隊長にしごかれた）が、問題は電源・エネルギー源だ。

人の一日の基礎代謝はどれくらいか知っているだろうか？

成人男性の基礎代謝は約1500キロカロリー、ワット毎時換算で17455ワット毎時、ジュール換算で6280200ジュールになる。

これだけでは意味が解らないので携帯電話のリチウム電池を引き合いに出すと、携帯の電池は2.9ワット毎時と比較すると人体から産生されるエネルギーはとんでもない量となるのが解りやすいだろう。（携帯の電池を見てください、計算の方はウェブ計算機使いました）

しかも能力者は励起法を使いエネルギー効率等を乗数強化をかける為に、人が発するエネルギー量とは比にならない物になる。

それが問題なのだ。

元は能力者が使う儀式は能力者が発するエネルギーを使うのを基礎となっている、それはエネルギー消費がとんでもなく高く燃費が悪いと言うことに繋がるのだ。

その結果、儀式を使うには大量のエネルギーを使うため、高度な儀式は能力者でなければ起動するのに単独の人間では起動するには無理となる。

だからこそ能力者以外では動かすのが困難な筈なのに目の前にある
事実には隊員達の戸惑いであり、小隊が混乱するのを解っていたから
こそウィリアムが口ごもる訳でもあった。
だが、そんな愚痴を言っている場合ではないと声もなく呟くと、ウ
ィリアムは再び引き金に指をかける。

「貴様……………」

「隊長!？」

永井が殺気立ったウィリアムの現状から理解出来ない突然の行動に
驚いて声を上げるが、振り返って見れば彼が拳銃を持つ逆の手が『
撤退』の合図を形作っていた。

永井はそれを見ると、素早く足を踏み鳴らし『隊長の発砲と同時に
撤退』のリズムをとる。

撤退の音を聞き自動小銃を構えた姿は変わらないが、全員の空気が
変わったのを確認するとウィリアムは不敵な笑みで口を開く。

「さて大人しく吐いてもらおうか？ 誰が本物かは解らないが、貴
様らのどちらかが本物だ？」

「はっ白々しいね。今回の出勤の速さや、判断力の高さ……………そこ
は凄いわ」

「貴様、ふざけるな」

「いやいや、これは褒めてるんだって……………だから、これは忠告だ。

『この部屋から出ない方がいい』ぜ？」

「なん……………だと？」

一瞬何の事が解らなかった、しかし次の瞬間ウィリアムは引き金を
ひいていた。

「っと危ない、式神って解って容赦無く撃つか…やるね、おっさん」

「つつ 撤退中止！！ この場で迎え撃つ！！」

『式神』と言う単語を聞くやいなや、ウィリアムは怒号で撤退中止命令をだす。

彼は十数年前に一度、ヨーロッパのとある場所で式神を使う儀式使いと戦っていた。

一体一体はそこまでは強くない、しかし相手は人の型をした紙を使い大量の兵隊を作りだし物量戦を仕掛けてきた。

当時彼は能力者の戦闘者としては駆け出しで、ベテランの能力者と六人でチームを組んでヨーロッパ方面では名うての傭兵だったが、結果は惨敗。

ウィリアム以外の五人が死傷すると言う悪夢の様な、惨憺たる結果。ウィリアムはその光景を瞬時に思い出し、此処が地下三階の袋小路と言う状況の不利を逆手にとり迎撃を選択した。

「ヒュー、流石っ。 だけど失敗さ」

「つつ、貴様っ！？」

見れば顔の無い男が、燃えていた。

隣に立つ龍のマスクを被っていた男も同様に、全身から赤い炎を噴き上げて煌々と燃えていた。

「何だそれは！？」

「刃を禁ずれば切れなくなるし、足を禁ずれば動かなくなる。……

…建物を禁ずれば、どうなるんだろうな？」

松明の様に燃える男の言葉を聞きながら、ウィリアムは自身を震わせる激しい鳴動を感じていた。

保養所から20Km程離れた場所に、鏡山と言う山がある。

標高695mの頂上部は牧場があり、草原が広がっておりバラグライダー等のスポーツが盛んな場所である。

昼間であればスポーツをやったりピクニック客で賑わっているのだが、深夜2時という時間は閑散としていた。

遠くに高見原の楼閣町の夜景が見えるので、車で行くデートスポットとしても有名だったが今夜は誰ひとり一台すら居なかった。

居るのは高見原を見下ろす斜面に作られた『護摩壇』の前に立った神官男と、その後ろに座る戦闘服姿の人物が二人。

神官服の男が護摩壇の前にある祭壇に置いていた、人形の紙を火に投げ入れたその時だった。

「……………お前、何してる？」

「何ってお前、うった式を焼いて消してるんだ」

「そう言う事を聞いているんじゃない。桂二、お前は俺と決闘するって言ってたな？」

彼等の後ろから現れたのはウィリアム達が見た龍の頭を模した仮面、言わずと知れた水龍こと誠一。

それに応えるのは、保養所と違った服（神官服）を着た桂二だった。

「してたじゃないか、途中で邪魔されたが」

「……………いや聞きたい事が違う！！　今！　此处に居る！！　お前は何時からいるんだと聞いているんだ！！！！」

「いつから？　そりゃあ最初からだか？」

さも当然とばかりの顔をする桂二に、誠一はガツクリとその場で頂垂れた。

そう、桂二は最初からこの山の上に陣取り、20Km離れた保養所

に式神を打ちずつと遠隔操作していたのだ。

「さっ最初から……騙された……」

「騙されたって人聞き悪い、こんなの戦術の一つだぜ？ 大体、能力者相手に生身でガチンコは無謀を通り越して自殺だって」

夜だと言うのに朗らかに語る神官服の桂二に対して、誠一の背中はしてやられた感満載で煤けていた。

遥か向こう、大きな建造物が煙を上げながら崩れているのが、その背中を際立たせていた。

桂二の思惑（前書き）

だいぶ遅れて申し訳ありません。
今日一日で書いたので、おかしい所が多々あるかも知れませんがご
容赦ください。

桂二の思惑

山の頂上、風が吹く夜の草原で言い争う二人の声が空に響く。

「だからと言っても、そりやないだろうが！！ 己の力量を全て出し切る決闘だぞ決闘！！」

「だーかーらー言ってるだろうが！！ 俺は一般人、お前能力者！！ 一般人相手に無茶苦茶な理想を持つな！！」

「お前の何処が一般人だ！！ 普通の人は式神なんてアニメ見たいなもん使えんわ！！」

「アニメ見たいなんて言うな阿呆！！ 陰陽術は旧くから伝わる由緒正しい儀式だ！！ この身体能力のみチートめ！！」

「チート言うな！！ 努力と修行の結果だろうが！！」

「鍛えすぎなんだよ！！ 何だあの頑丈さは！！ ステータス表示絶対バグってるぞ！！」

「んな訳あるかぁ！！」

夜長の山の上にある草原で男二人。

どちらかが女性であれば、高見原の夜景をバックに色っぽい展開だと見えるだろうが、いかんせんむさい男同士が胸倉掴み合いながら喧嘩していた。

そんな学生同士の良くある喧嘩に、笑い声がかかる。

「フフフ、桂二君？ そろそろ時間よ？」

「えっ……… ああっもうそんな時間！？」

「撤収は私達がやっておくから、話はなるだけ切り上げてね？」

声をかけたのはその場にいた戦闘服姿の人物の一人、今まで桂二の出した式神と思っていた上に、女性しかも年上っぽい声に誠一は驚

く。

「おい、彼女は？」

「あん？ ああ、同僚だ。二ヶ月前に入った新人。以前の作戦の時に拾ったって隊長が言ってた」

「なんだそりゃ、拾ったって犬や猫じゃないんだから」

「いや、うちの隊の方針なんだわ」

「方針？」

桂二が言うには彼女は数ヶ月、富士の樹海で人身売買組織に追われていた所を助けたらしい。（外話 樹海にて 参照）

何故助けた人間が、仲間になっているかと言えば、それは隊の成り立ちから始まる。

「うちの隊の通称『第三大隊』、正式名は『ミリタリー同好会・第三戦略戦術研究会』なんだが……」

「はいっ？ 同好会！？」

話の内容にそぐわない単語が飛び出て、誠一は思わず聞き返す。

「同好会って、学校のか？」

「そうそう。聞いた話じゃ始まりはサイファ学園都市大学にあった普通の同好会だったらしい」

元々はサイファ学園都市にある大学部、その学生達によるミリタリー関係が好きな同士で作った同好会。

サバイバルゲームを行ったりミリタリーグッズを集めて楽しんだり、古今東西あらゆる戦史を検証して負け戦の原因などを探して遊ぶ同好会だった。

後に部員が増えて、第一第二第三研究会となっていく。

そんな彼らに転機が起きたのは、第三戦略戦術研究会の部員の友人が彼らの所に問題事を持ってきた事から始まる。

「突然話は変わるが、お前さ、能力者狩りって何で起きるか解るか？」

「えっ？ 何でって………そっぴゃなんでだ？」

言われて見れば誠一は、何で能力者狩りが行われているか解っていないかった。

彩に言われて人をさらうと言う、明らかに悪い事していると彼は漠然としか理解していなかったのだ。

「能力者には、ほぼ全てに共通するモノがある。励起法だ」

「励起？ 俺はかなり練習して、やっとこさで覚えたんだが」

「お前の励起法は高深度励起法って言って、普通の能力者以上の身体能力を得る高等技術だ！！ 周りの能力者と比べて耐久度と筋力が少しはおかしいと思え！！」

「ぐぬう」

周りに普通の能力者が居ないのもあるが、高見原タワー前で戦った時に相手の一撃を受けた事があり、自身の能力『水系の理』のブースト能力を抜いたとしても弱かったと今さらながら誠一は思い出し呻く。

「自覚しろよな、自分の戦力把握は最優先に知ることだぜ？ まあ話がそれたが戻すとだな、難しい事を考えるのが苦手な誠一君に解りやーすく言えばな」

「くっム力つくが、言い返せない自分が一番腹が立つ」

「励起法の欠点は能力者の身体能力を人の域を簡単に抜かせる事なんだよ」

「……………？　その何処が欠点なんだ？」

「人の域を抜く。それはな、生物としては完成された方向に進化すると言う事だ。だが進化と言っても良い事ばかりじゃない、生物は進化の過程で捨てるモノだってある。魚が進化して陸に上がった時、肺呼吸を得た代わりにエラ呼吸を捨てた。猿が進化して人となった時、二足歩行を得た代わりに尻尾を失った。それじゃあ人間が、人の域を超え絶大な力を得た代わりに何を失うと思う？　……………それは、繁殖力」

どんな生物もそうだが進化はメリットだけではない、桂二が言うようにデメリットだって存在する。

能力者にとってのデメリットとは、励起法の弊害。さながら食物連鎖のピラミッドの様に、進化の頂点に近づく程に固体数は激減していく。

「それを何とかする為に能力者は二つの手を打った。一つは励起法を行わない事。励起法はそれを行った者を強化するが、強化するせいでホメオスタシスと言う身体を常に一定の状態にする力も強化してしまい繁殖が出来なくなるからだ。この話は今だ実証がされていない。問題はもう一つ、自分にあつた人間を連れて来る事だ」

「それってお前……………」

「所謂、誘拐だな」

事実、古い神代の時代ではそうやって伴侶を探していた時期があるらしい。

それが現代では誤ったまま伝わった地域が今だあったりする。

「……………まさか、問題って」

「話の流れで察しの通り。問題を持って来た男は識者の能力者で、弟がさらわれたっ助けてくれってな？」

それが始まり。

その後、同好会内で助けると決まるまで一悶着あったり、連れさらわれた閉鎖的な能力者が住む島に出撃して返り討ちにあったり、とある能力者三人による協力で無事奪還したは良いが連れ去らわれた先で恋愛していた呑気な弟に脱力したりの話はまた別の話。

「とまあ、そんなのがこの『第三大隊』こと『第三戦略戦術大隊』の沿革だ」

へえっと納得してから誠一は嫌な予感がした。

「なあ桂二………何で、俺に、そんなに詳しく喋るんだ？」

桂二の話が妙に詳しいとか、そう言う次元の話ではなく。

そういった組織は大体が秘密が多く、会話の内容に制限がかかるはずだと言う事が、今までの経験から誠一は解っていた。

だからこそ誠一は疑問に思う。

「……………そりゃあ、お前決まってる」

嫌な予感がする誠一の疑問に、桂二は師匠ゆずりの人を喰った様な素晴らしい笑顔で返した。

「うちの隊にお前を取り込むためさ。言っただろ？ 隊の方針なんだよ。この第三大隊に関わった人物には三つの選択肢を与えられる。

一つは敵として戦う事、一つは仲間として共に戦う事、そして最後に協力者になる事だ」

「……………お前な、人を嵌めるような真似はやメロ」

「スマン、だがうちの規律だ、曲げる事は出来ん。規律は隊の仲間

の命を左右する。例えお前を騙したとしても……俺はお前を敵に回したくない」

それは偽りざる桂二の本心、今まで見たことの無い程の真剣な目で誠一を見ていた。

「頼むよ、親友」

「……まったく、解ったよ相棒」

手を出された桂二の手を、誠一は力強く握る。

「そう言えば彩さんと天子もそろそろじゃないか？」

「ああ、多分な。……そういえば、あの二人は何処でやってるんだ？」

「高見区ビルディング街だよ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5308k/>

変わる世界

2011年11月21日12時32分発行